
Xenoglossia **宙とはてしない物語**

o-van

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Xenoglossia 宙とはてしない物語

【Nコード】

N5741I

【作者名】

o - v a n

【あらすじ】

復興歴一〇七年。人類史上最悪の天災ロスタアルテミスにより月が崩壊してから一世紀。人類は、地球に降り注ぐドロップ（隕石）の恐怖と戦いながら日々を過ごしていた。歴史的カリスマアイドルである姉を失ってから数年が経ったある日。謎の美女と出会った天宇宙の元に、突如、隕石除去人型重機IDOLが墜ちて来た。その瞬間から、宙はIDOLを巡る事件に巻き込まれていく。二次創作作品ですが、知識のない方でも楽しんでいただけるように書いています。どうぞご覧ください。

プロローグ（前書き）

この作品はバンダイナムコゲームスから発売中のXBOX360ソフト「THE iDOL M@STER」とそのアニメ版「アイドルマスター XENOGLOSSIA」を原型としたロボットアクション作品です。

この作品はSS検索・投稿掲示板「arcadia」にも掲載されております。その旨をご了承ください。

プロローグ

プロローグ

地球を、落下するドロップ（隕石）の脅威から救う。

月が崩壊し、ドロップと通称される隕石の落下現象が始まって、すでに百年と少し。ある程度の大きさにもなれば、落下すると街の一つくらいは地図から消えてなくなる。もう一世紀以上の間、人類はいっ落ちてくるかも分からないドロップの恐怖に怯えながら日々を過ごしている。

故に、世界最大の多国籍企業にして国連からドロップ迎撃の一切を委託されている隕石除去実働組織モンデンキントは、これらの対策に余念がない。各国に置かれた支部の内、日本でもそれは変わらない。

しかし迎撃任務を、その果てしなく重大かつ困難である任務を担っているのが、まだ十台の少女達だという秘密を知れば、世間は驚きを隠せないだろう。批判もあるだろう。なにより本人に、自分のみならず多くの命を背負う覚悟があるのか。

無論、それを承知の上で“私”はここにいるのだ。

漆黒の宇宙と散りばめられた幾千、幾億の星々輝きを眺めながら、ふと、彼女は思った。

視界いっぱい広がる黒色の中に数多の光が輝く光景は、いつ見ても神秘的で壮大だ。いや、壮大で片付けるにはスケールが大き過ぎる。

月の崩壊から一世紀の年月を越えても、宇宙にとってはほんの一瞬间に過ぎない。あの星の輝きでさえ、目に映っているのは何十年も何百年も前の光だ。光が届くまでの時間が生物の寿命を遙かに凌駕するほど、宇宙は広大かつそして無限である。

……綺麗、まるで吸い込まれそう。

幻想的な光景に息を呑み、筆舌し難い心情になんとか感想をこぼした。何度も見た光景だというのに、いつも圧倒的な情景に心奪われる。

球状の密閉空間の中に彼女はいた。彼女の座る席を中心に広がる機械の群れ。一対の操縦桿とフットペダル、大小複数のモニターにそれらを含めた様々な機器。ハイテクの粋を凝らした空間は、けれども狭苦しいとは感じない。重力から開放された中で、彼女の長い髪がゆったりと踊っている。

うつとりとした表情で、モニター越しに宇宙を眺めていた彼女の耳に、スピーカーから呼びかける声が届いた。

『そろそろ肉眼で確認できる距離よ』

「了解……。こちらでも確認したわ」

モニターは前方から飛来する巨大な異物を捉えていた。更に拡大された映像が表示され、その詳細が露わになる。

それは巨大な岩塊。凹凸の激しい、果たして球体とも立方体とも区別できないその正体こそ、ドロップである。ポップコーンイメージみたいだな、と連想する彼女だったが、視覚的情報から得られる重量感と実際のそれとは比較するに値せず。荒廃した大地を削り出し、爆破して、ボロボロになるまで砕けば、同じような物ができるかもしれない。

とはいえ、元々あれは月の破片であり、月の大地そのものなのだ。今となつては星の残した屑でしかないが。

直径六、七〇メートルを超えようかというドロップは、一直線に彼女に迫って来る。正確には彼女の背後にある青い星、地球へ。

今まさに、一つの星屑が地球へ落下しようとしていた。

……地球に向かって来なければ、ただの流れ星なのだけれど。

流れ星といえは聞こえはいいが、地球周辺のオービタルリングから地球の重力に引かれてきたそれは、落下すれば地球の大地を抉り出し、衝撃をもって猛威を振るうだろう。故に、彼女の行動はただ

一つ。

「ロケーションデータと地上観測の誤差修正受信。ライブポイント確定」

一息、

「ヌービウム、これよりスポットティングに入るわ」

重力に引かれ続けるドロップ。その先、地球を背に一体の人型が存在していた。

人型の、巨大な機械である。四〇メートル程もあるその巨体は雄々しく聳え立ち。黒く輝く装甲纏いて。その頭部、瞳の如き真紅の双眼が、地球に向かって来る標的を鋭き眼光にて捉えていた。

巨人の名は、プロメテウス3・ヌービウム。

オービタルリングを外れて地球に落下するドロップを大気圏外で破壊するため、モンデンキントJ^{ジャパン}Pが開発した隕石除去人型重機“IDOL”の一機である。

ヌービウムを繰るのは、十九歳の少女。凜として自信に満ち溢れた表情は、その歳にして達観した大人の雰囲気を漂わせていた。強い意志を宿した瞳には、標的たる岩塊。彼女は後ろで結んだ長髪を手で払い、手元の操縦桿を握り直す。細腕だ。決して頼もしいとは言えないその腕は、しかし誰よりも力強い。

目を瞑り深呼吸を二度繰り返すと、静かに目蓋を開いた。

ドロップはIDOLをしてすら、なお巨大。そんなものが眼前から近づいて来る恐怖とは、常人には想像すらできない。それでも、彼女はたった一人でドロップの前に立ち塞がる。見目麗しき彼女の表情を歪め渗むのは、やはり怯え、不安、恐怖か。果たしてそれは否だ。

笑顔だった。決意に満ち溢れ、一点の曇りもない、笑顔だった。

「いつでも、いいわよ！」

「了解、カウントスタート！ 十……、九……」
それが合図。

「ヌービウム、オンステージー！！」

気合の一声。同時、彼女は勢い良く操縦桿を引いた。それに呼応し、黒い巨人、ヌービウムは屈強な鋼鉄の腕を振り上げ、構える。

計器に表示されるドロップとの距離が見る見る内に縮まっていき、照準棒が目標をロックオン。ヌービウムを操る動作に一切の迷いはなく。巨人は応じて動作する。相対速度良し。準備、完了。次の瞬間、フットペダルを踏み込むと同時に、脚部のロケット噴射口から火が噴き、カウントに合わせてドロップへと一気に肉薄する　！

『三……、二……、一……』

「ライブ　」

極限の集中から発生する、時の停止にも似た、感覚が引き延ばされる錯覚。あらゆる拳動と現象を、彼女は瞳に焼き付け。

そして、○カウントが刻まれる。

「シユート！！」

ロケット推進で更に加速し、ヌービウムは迫る星屑に握り締めた拳を叩き込んだ。

刹那。一撃を加えられたドロップは歪み、一瞬にして広がった凄まじい衝撃は、破壊力として標的を破碎した。外と内から亀裂が入り、まるで弾けるように四散。目を覆うほどの眩い光を放ちながら粉々に碎け散り、大気圏に落ちて行く破片は、地上から見ると、まるで光の雨のように映ったことだろう。

状況確認。管制室から聞こえてくる声は、オールクリアを告げる。破片となったドロップは、大地に到達する前に大気圏摩擦で燃え尽きる。これにて、任務は完了だ。

脅威は回避された。青き地球は、何事もなくそこに在る。

『クランクアップ（作戦終了）。お疲れ様、帰還して』

「了解。ヌービウム、これより帰還行動に入るわ」

慣れた操作でいつも通りの手順を開始する。ドロップの迎撃活動はこれで幾度目か。地球は日々こうして脅威から守られてきた。そ

してこれからも守り続ける。彼女に守るべきものがある限り、何度でも。

だが、運命は時に残酷である。

異常は突如起こった。周囲の状況を監視する索敵類が、前触れもなく何かの反応を捉え、警戒アラートがけたたましく鳴り響く。

「……ッ!?」

光が奔った。突然の異常事態に対応が一拍遅れてしまう。本来の彼女なら絶対に犯さないようなミスが、彼女の運命を左右した。反応できなかった一瞬。衝撃がコックピットを襲い、咄嗟に外を映し出すモニターへ視線を向けると、そこに映った何かを確かに見た。

「これは……!」

最後まで言葉を紡げない。次の瞬間、ヌービアムの腕は脆くも爆散した。もがく暇もなく、今度は強力な引力がヌービアムを引き寄せ始めた。背部から地球へ落下して行く黒い巨人。黒い装甲が摩擦熱で紅蓮に染め上がっていく。

「!!?!?!」

耳が痛くなるほどのノイズのせいで、通信が聞き取れやしない。いや、こんな状況では通信も何もあつたものではない。コックピットを襲い続ける落下の衝撃で、そもそも身体の動きすら封じられ、まともな対応が取れないのであるから。

死んで堪るか。

彼女を突き動かしたのは、生きることへの執着だった。機体の制御を取り戻そうと、操縦桿を掴む、フットペダルに力を込める。絶対に諦めない。足掻くことを止めない。簡単にこの状況を受け入れられるほど、彼女は今に満足していなかった。

だからこそ、生きる。今ならまだ現状を打破できるはずだ。操縦桿を必死に動かし、フットペダルを踏み続ける。そしてモニターに視線を向けた時。

モニターが映し出していたのは、ヌービアムに這い寄る、不気味な巨体だった。背筋がゾクリと震える。そしてそいつは、高く掲げ

た腕を、今まさに振り下ろそうとしているではないか。

彼女はその時、何を想ったのか。ただはつきり“最後”を感じた。唇が薄く言葉を紡ぐ。

「……ごめんね」

誰への言葉か。彼女の謝罪は虚しく虚空に消えて。

復興暦一〇三年。この日、プロメテウス3・ヌービウムと呼ばれていた存在は、衝撃と共に摩擦の生み出す炎獄の中へと姿を消して行った。

第一話 アクト・オン！

第一話 アクト・オン！

復興暦一〇七年。人類史上最悪の天災ロストアルテミスから、すでに一世紀が経過した。

人々の記憶から薄れ行く“月の崩壊”という災厄。

粉々になった月の破片の落下、地殻を変動させる大規模な天変地異によつて世界人口の四分の一を葬り、一世紀の年月を経てかろうじて立ち直った人類に今なお牙を剥く。

崩壊した月の破片が形成する四つの巨大なオービタルリング。通称“コンペイトウ”から降り注ぐドロップ（隕石）は、人類にとって常に破滅をもたらす存在として恐怖された。

地球を、人類を守るために、国連は隕石除去実働組織“モンデンキント”を設立。後に世界最大の多国籍企業体と化すそれは、降り注ぐドロップの迎撃や復興途上地域への援助を中心に、様々な分野で活躍し、規模を拡大させていった。

ドロップの対策には各国に迎撃基地が配置され、核ミサイルや光学兵器が主な迎撃方法として確立する。その中で異彩を放っていたのは、条約上核兵器を所有することのできない日本の特殊な迎撃方法であった。

隕石除去人型重機。その名をアイドルIDOL。

そして、IDOLに搭乗しドロップの恐怖から世界を守る者を、こう呼ぶ。

アイドルマスター、と。

高校の卒業を間近に控えたこの季節。天川宙あまがわそらはこれから始まる新しい生活に想いを馳せていた。今まで経験したことのない一人暮らしへの膨らむ希望と仄かな不安。様々な気持ちを抱えながら、しかし一番大きいのは寂しさである。

宙が十八年間過ごしてきたのは、東京の端にある古い孤児院だった。天川孤児院と呼ばれるその場所で、自分と同様に親のいない子供達を兄弟として、また年長の兄貴分として日々を暮らしてきたのだ。警沢はできないが、血が繋がらないとはいえ多くの子供達を家族として育ってきた環境は、決して悪いものではなかった。そう自負している。

両親の記憶はない。そもそも、まだ泣くことしかできない赤ん坊の時に捨てられた身だ。親のことなど覚えておらずもない。だからこそ宙にとつての家族は、孤児院で共に育った子供達と、孤児院の経営者であり育ての親でもある天川カイエンだけだった。

三月で高校を卒業する宙は、孤児院を出る。

孤児院の規則で、高校を卒業したら自立し、孤児院を出て行かなくてはいけないのだ。それも当然。寄付金やその他の援助金から成り立つ孤児院にとって、そう多くの子供を養える資金はない。自分で働き、生活できる歳になれば、自立しなければならぬのは自然な流れといえるだろう。

そんなことを考えながら、宙は長い坂道を自転車で勢い良く下つて行く。自転車のバイトを始めたのはいつの頃だったのだろう。初めは少しでも孤児院の負担を減らせればと思った。いや、どうしても欲しいCDに手が届かなかったからかもしれない。とにかく些細なことだったと記憶している。こうして急ぎの書類を届けるのも初めてではない。

坂を下りきり、車の量が多くなってきた道路を素早く抜けて行く。書類の届け先は、

「765プロ、か」

ペダルを漕ぐ足を緩めず、小さく口にしたその会社は有名な芸能事務所だった。特にアイドルの育成に力を入れている事務所で、今まで数多くの有名アイドルを輩出している。今では特に“天海春香”が有名だろう。大ブレイク中の超有名アイドルだ。

知らず苦い顔になってしまふ。765プロには深い縁があった。そう、あった。過去形。四年前の事件さえなかったら、今でも変わらず出入りしていたかもしれない。果ては入社すら考えていたかもしれない、そんな場所。だからだろうか。膨張と縮小を繰り返す心臓の鼓動が、いつもより速く感じるのは。

そこまで考えて、不意に馬鹿らしくなった。何を今更。感傷に浸っている暇があったら足を動かせ。自転車を前に進めろ。

自分に言い聞かせ、宙の漕ぐ自転車は騒がしい街中を駆け抜けて行く。

件の765プロ本社は、新宿の中でも特に大きな部類に入る。太陽の光を反射するガラス張りの建物は眩しく、まさしく硝子の塔だ。もはや太陽の光を吸い込んでいるのではないかと疑いたくなる。太陽光発電でもすればいいのに、と硝子の塔を見上げた。

四年前までは雑居ビルの三階をオフィスにしていたあの会社が、現在は業界屈指の大手。わずか数年でここまで巨大化したのは異例中の異例だ。けれども宙はそれを認めるのがなんだか悔しくて、嫌味を存分に込めて鼻で笑う。

「書類を届けるだけ、それだけだ。別にどうってこと……ない」
さつさと仕事を終わらしてしまおう。自転車を駐車場に止めて中へと入る。ロビーの受付で問い合わせると、配達先の所在は四階であると告げられた。

エレベーターが降りて来るのを待っている間、ふと考え事に耽る。ビルの内装は立派で、バイト先の会社。自転車の郵送会社と比べるのは憚れるけれど、とは大違いだ。背広を着込んだ人々が行き交うのを眺めていると、自分の存在にひどく違和感を覚えてし

まう。昔は、違かった。

懐かしい思い出が、記憶の海から泡となって湧き上がる。

昔、煌びやかな芸能界で太陽のように輝く女性がいた。まさしく太陽の如き存在感で人々を魅了して止まなかった彼女は、天宇宙にとつての憧れであり、敬愛すべき女性だった。

だからきつと影響を受けていたのだろう。自分もこの世界で活躍したいと思うまで、そう時間はかからなかった。どうすればあの人のようになれるのか、どうすればあの人と同じモノを見られるのか。試行錯誤をしながら、夢に向かって走っていたあの頃が懐かしい。

……けれどもその夢は、今はもうどこに消えてしまったのか知らない。

挫折したわけではない。絶対夢を叶えるという気持ちに揺らぎはなかった。

ただ、宙の前から彼女がいなくなっただけ。

当時は眩しいほど輝いていた目標。いつかは自分もあの頂点へ。いつかは必ず追いついてみせる。いつかは、いつかは、いつかは。

嫌な記憶が頭の中で何度もリフレインする。異様なまでに黒く沈んだ空気。泣いて悲しむ大勢の人々。そしてそれを静かに眺めている自分。馬鹿げている。その“中”には何も入ってない。だからどうして悲しむことができるものか。こんなにたくさんの方が悲しんだって、その“中”に何も！

「君、ちよつと邪魔だよ」

「っ！ す、すいません……」

いつのまにか目の前の扉が開いていた。エレベーターから降りる人々の邪魔になっていていることに気付いて、慌てて横に退くと、冷めた視線を向けながら人の群れが吐き出されて来る。自分が異分子であることを強調されているようで、余計に息が詰まってしまふ。

宙はどうにも言い難い気持ちになって頭を掻いた。

……ホント、どうにかしてるよ。

今日はなにやらおかしい日和らしい。そういえば、朝は古くから愛用している目覚まし時計がとうとうご臨終なさったし、そのせいでバイトにも遅刻しそうになった。おまけにどうしたのか、今日はいやに感傷的だ。

頭を振って、ついでに頬も叩き、人のいなくなったエレベーターに乗り込んだ。

確か四階だったか、とボタンを押す。他には誰も乗る気配がなかったので、扉を閉めようとする、

「あ、ちょ、ちよつと待つてくださーい!!」

「え?」

唐突に叫ぶ声。続いてなにやら慌ただしい足音。首を傾けて扉の向こうを覗くと、凄まじい勢いでこちらに突貫、もとい走って来る女の子の姿が。

「エレベーター乗りまーす!」

騒がしい娘もいたものだな、と適当に思ったが周囲は微塵も気にした様子がない。見慣れた光景だと言わんばかりの雰囲気だった。

“開” ボタンを押して彼女に再び視線を戻せば、何故だか分からないが、所謂第六感的に危険の二文字が頭に。

「間に合っ、と、わわ!」

予感的中した。

「ちょ!?!」

オブラートに包んで表わすと少女が目の前で躓いた、何も無いところ。もつと直接的に表現するならば、唐突に、少女がなんら無防備な宙の腹部にヘッドダイビングで特攻した。表現の誤りではない。文字通り、特攻、だった。

それはそれは文句のつけようがない素晴らしい出来だったからして、突っ込まれた宙は綺麗にへの字に折れ曲がってそのままエレベーターの中にぶっ飛んだ。見事にストライク。

またあの娘か。可哀想に。そろそろ対策を講じないと被害は増える一方じゃないか。寸劇にも似た今の光景を傍観していた人々が気

の毒そうに、口々に宙を哀れむ言葉を発する中、エレベーターは静かに扉を閉めたのだった。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

あたふたと、少女は心底申し訳ない面持ちで尋ねてきた。狭いエレベーターの中で一人腹を抱えて悶絶している宙（誰が見ようとまさしく珍妙な光景である）は、肺から追い出された酸素を取り戻すべく口をパクパク動かして、低く呻きながら、

「この状態が大丈夫だと、ゲホッ！ 思うなら、ゲホッ！ ゴホッ！ 一度視力検査、う、受けた方がいいと思う」

「一応学校の視力検査はいつもAです」

「そういう問題で言ってるじゃねえよ！」

検査すべきは頭の中身か。酸素を暴食するついでに思わず怒声をあげる酸欠状態の男が一名。声を荒げるものだから、余計に苦しくなつて、咳き込む。こんな状態に追い込んだ少女に怒りを感じてまた怒鳴り、また咳き込む。悪循環。

「すすす、すいません！」

咳き込みながら凄まじい剣幕で怒鳴りつける宙に、少女は顔も見えないほど深々と頭を下げた。危うく胃の中身がリバーシしかねない強烈なヘッドダイビングなど誰が予想しようものか。事故なんて生易しい言葉では済まされない。災厄の域である。

「ほんと、私ドジで慌ただしくて。本当にすいません！」

「自分のドジを自覚している奴ほど面倒くさい奴はいねえって誰の受け売りだったか。頭痛いと思ったらタンコブまでできてるし。まったく、おまえなんなんだよ！」

わわわごめんなさい、と少女は再び頭を下げる。少女はそのまま頭を上げない。息を整えながら彼女を見れば、自分より小柄な身体が震えているのが分かる。己の過失とはいえ、大の男に怒鳴り散らされたらそれは怖いに決まっているだろう。宙は唇を尖らせて、溜息を吐いた。

「……まったく、今日は厄日だ」

「ごめんなさい」

シユンとして小さくなってしまった少女は、頭を下げたままもう一度、ごめんなさい、と謝った。さすがの宙もここまで謝られるとこれ以上怒る気にはなれない。それくらいの分別はあるつもりだし、あつてほしい。甘いかな、と肩を落としながら、

「ああ、まったく、もういいよ。……怒鳴つてごめん」

「いえいえ、そんな！ 私が全面的に悪いんですから怒るのは当たり前です」

と、そこで少女はやつと顔を上げた。肩まで伸ばした栗色の髪で、この時勢には珍しい明るい色のリボンを頭の両端で結んでいる。白いキャミソールの上に淡い青のGジャン、ピンクチェックのプリーツスカート。全体的に小奇麗で、やや幼さの残る顔立ちといい、頭のリボンといい、実に女の子然とした印象を受ける。

はて、どこかで見たことがあるような。と、そこまで考えて、はつとした。いや、驚いた。宙は少し言葉に詰まっただけから、もしかして、と前置き、

「もしかして天海春香？」

「あ、えつと、はい。そうです。私、天海春香です」

「うわ、芸能人。……ってここ芸能事務所だっけ」

天海春香。現在765プロが売り出し中の大人気アイドル。一年前のデビューを契機にトップアイドルの道を直走る少女。明るく親しみのある性格からか、同世代のみならず高齢世代にも人気があり、曰く、孫娘らしさがポイントであるとか。一日に三回は転ぶ。

「最近ではドラマにも出演。昨年度ベストリボンアワード受賞、だったっけ？」

「わ、すごい！もしかしてファンの方ですか？」

どうなのだろうか。一言でファンであると胸を張っては言えない。礼に漏れず、孤児院でも彼女は人気者であり、広間のテレビにはいつも映っている気がする。小さな弟分達が好んで見ているのを、傍で一緒に眺めているのも確かだし。趣味で芸能関係の記事や情報を

集めることが多いから、よく知っている。

芸能関係、詳しいんだ。そう曖昧な返事をした後で、本人を前にその言い草もないな、と思い直す。こういう時、気の利いた台詞とというのも簡単に浮かばないものだな。

「弟達が好きだから。えつと……昨日の歌番組で聴いた新曲、良かったよ」

「え、本当ですか？ あれ私のお気に入りなんです！」

今までの沈んだ表情から一転、屈託のない笑みを浮かべて、春香は宙の手を掴んでブンブンと振り回した。その表情の、なんて嬉しそうなこと。こちらの方が呆気に取られてしまうくらいの上機嫌。たった一人、熱烈なファンでもない男の褒め言葉を、感動の一言では表わせないくらい喜ぶトップアイドルの姿が、そこにはあった。

……良い子、なのだろうか？ それとも単純なのだろうか？

人の注目を集める人気者には二種類の人間がいる。周りの人間と同じ土台に立ち、等身大である人間。もう一つは、圧倒的カリスマで否応なく人々を魅了する人間。天海春香は前者の人間なのだろう。純粹で、言葉を変えるなら庶民的。それこそが彼女の人気の秘訣なのだろうと、その時は思った。

「ん？」

ふと、宙の足が何かを踏みつけた。視線を下に降ろすと、踏んでいたのは自分の財布だった。はて、落としたか。などと思ってみれば、エレベーターの床にはあらゆる荷物が散乱しているではないか。たぶん、彼女が突っ込んできた時にそうなったのだろう。

「荷物が飛散してえらいことに……」

「悲惨な状態でもありませんね」

「それ、あんま上手くねえから」

二人が荷物を拾おうと身を屈めた時、到着のアナウンスと共にドアが開いた。見れば、エレベーターに乗ろうとしていた人達が何事かと目を丸くしている。宙は引きつった笑みを浮かべると、速やかに荷物の回収にかかった。

なんとか荷物をまとめてエレベーターから降りると、まだ少し腹が痛んだ。宙が顔をしかめていると、春香はどうにも申し訳ないといった面持ちで、

「あの、すっかりとしたお詫びをしたいんですけど。私にできることはありませんか？」

「じゃあサインくれ。ウチには喜ぶ奴がたくさんいるから」

「……その程度のことでもいいんですか？ 本当に、サインだけで？」

「いや、ってか、その程度って。それ聞いたら全国の天海春香ファンが泣くと思うけどな」

「サインくらいならファンの方々全員にあげますよ！」

この娘は自分の直筆サインが一体いくらで出回っていると思っっているのか。まあ、それも無粋な話だ。せっかくの土産を、売る気はないし。

彼女は純粹というより天然だな、と頷いてみる。なんで頷くんのですか？ いや、絶滅危惧種に相当する人に出会ったから。それどういう意味ですか！ なんて、そんな会話の応酬を楽しむ自分がいる。不思議と悪い気分ではなかった。天海春香というアイドルの、輝きの一端に当てられたのかもしれない。

とはいえ、ずっとこうしているわけにもいかない。腕時計を確認するとわずかに焦る。まずい、遊び過ぎた。書類を届ける約束の時刻まで、あと少ししか残っていないではないか。そういえばサインを書いてもらえそうな物も持っていない。すまない、弟達よ、サインはお預けのようだ。春香に適当に言い訳し、踵を返したところで、「あら？ 春香ちゃん、こんなところでどうしたの？」

目の前の廊下から、緑色の事務服を着たショートカットの女性が立っていた。タイトスカートから伸びた足はすらりと長く、目元には泣きボクロ。事務員にしておくのはもったいないほどの美人である。

が、宙はその“よく知る人物”に言葉を失った。ただ胸の辺りに鉛が落ちてきたかのような息苦しさを覚えて、唇が乾いた。考えれ

ば分かることじゃないか。ここでこの人が働いているのは想像でき
たはずだ。こんなところで、だらだらと時間をかけていた自分に腹
が立った。そうすれば“会うこともなかった”のに。

会いたくなかったのに。

「ちよつと色々あつて、えへへ。小鳥さんはどうかされたんですか
？」

「ええ、書類の郵送便が来るはずなんだけど、遅いから様子を見に
来たのよ」

ふと、その女性音無小鳥が宙に目を向ける。次の瞬間、宙を映す
瞳が一瞬奇妙に揺らいで、表情が目に見えて凍りついた。まるで幽
霊でも見てしまったかのように、顔面蒼白。

「そ、ら、くん」

「……依頼の書類をお届けに参りました。サインをお願いします」
対して宙は冷静に。いや、能面を貼り付けたようにひどく無表情
で言った。感情のこもらない、低く、冷めた声。突き刺すような視
線。

小鳥は証明書にサインしたが、手が震えてうまく字が書けなかつ
た。それでも宙は乱暴に証明書を引たくり、小鳥を一瞥した。ま
ともに顔を見ることができないのか、彼女は視線を逸らしたまま、
怯えたように震えていた。

「では、失礼します」

「宙君、待って」

背を向けて立ち去ろうとしていた宙は、呼び止められて足を止め
た。宙は振り返らず、何か用ですか、とだけ淡々と返す。

「一度ちゃんと話したいの。だから、その」

「……今更」

ギシリと、砕けそうなほど歯を噛み締めた。言いようのない黒い
感情が、蓋をした心からドロリと溢れてくる。嫌な気分だ。吐き気
を催すくらい、嫌な気分だ。

「今更何も、話すことなんてないですから」

それだけ言って、宙はエレベーターに乗り込んだ。扉が閉まる直前、背中越しに小鳥がどんな顔をしていたのか宙は知らない。

宙が立ち去った後、しばらく小鳥は動けなかった。手を見るとまだ少し震えていて、四年前に見た、まったく同じあの瞳がフラッシュバックする。

「小鳥さん、あの人とお知り合いなんですか？　なんていうか、その、とっても険悪な雰囲気……」

「彼は、私の親友の弟で、宙君って言うの。私、彼に嫌われて、憎まれてるから」

「に、憎まれてる？」

信じられない、と目を見開く春香。春香の知っている小鳥は、優しく周りに気配りができて、誰でも憧れるような大人の女性だ。小鳥のように聡明な人物が他人に憎まれるなんて考えられない。しかし先程の雰囲気を見ても、二人の仲が安穏としたものではないことくらいは、はっきり感じ取れた。

春香は聞いた手前、なんと言えば良いのか判断がつかずしばらく黙っていたが、小鳥の携帯端末が鳴ったのはそんな時だった。また同時に、小鳥の表情が一瞬で険しいものになる。携帯端末の画面に映し出されていたのが、通常時は使われない非常用通知だったからだ。765プロの“本業”のための。

素早く電話に出ると、前置きを省いて用件だけが来た。

『モンデンキントAUSから迎撃支援要請です。すぐ管制室に来てください』

「了解。春香ちゃんも一緒ですから、すぐにそちらへ向かわせます」視線で促し、指で“下”を指すジェスチャーをすると、春香も察しがついたのか、頷いてエレベーターに飛び乗った。行き先は下へ。このビルの“本体”へ。

一度通話を切って、思い悩んだ末、小鳥は再度携帯端末を操作した。

「もしもし、音無です。高木社長に繋いでもらえますか？」
しばらく待って、

『やあ、小鳥君。どうかしたかね。出勤要請がかかっていた筈だが？』

「すみません、お伝えしたいことが。……ついさっき、宙君に会いました」

『天川宙君かね。彼、どうしていた？』

「立派になっていましたよ。背も高くなって、すっかり大人になっていました」

苦々しく唇を噛んだ小鳥は、

「私達は、いつまで彼を騙し続けなければいいのでしょうか……？」

君のせいではない、堪えてくれ。電話越しの声に、小鳥は静かに目を伏せた。

東京の地下深く。そこにモンデンキントジャパンJPの広大な施設があることは、実は一般レベルでよく知られている。だが知られているのは存在だけで、内部がどのような構造なのか、詳細な設備、あるいはそれらに関連する情報は、もちろん一部の関係者にしか開示されていない。

故にその入り口が、有名な大手芸能事務所のビルにあるなどが誰が予想できようか。

そこで働く職員の素性についても同じくだ。小鳥を乗せたエレベーターは、通常とは比べ物にならない速さで降下して行く。本来一番下の階である地下駐車場はとくに過ぎており、階数を表示するパネルには、代わりに赤いランプが点灯中。

やがてエレベーターが止まると、ドアの先には白い通路が延びて

いた。まるで病院のように清潔な白で統一された通路は、ビルの中とは似ても似つかない。なにより、デザインが妙に近未来的だ。通路の突き当たりを曲がると、そこには“管制室”と英字で書かれた扉があり、小鳥は自動開閉するそれをくぐった。

広がったのは、今度こそ芸能事務所のビルとはまったく縁のない場所だった。

通路とは対照的に無機質な鈍色で彩られ、それは各々に配置された機材のものだ。入り口から見て正面の壁には超大型スクリーンが備え付けられ、部屋の中央を囲むようにディスプレイやコンソールを含む管制機器が、ある種壯観なほど整然と並べられている。

そこには人もいた。皆オレンジ色を基調とした制服を着て、並べられた機器類を操作している。男が一名に女が二名。その実、宇宙工学を始め様々な分野でエリートと表される彼らは、この仕事には欠かせないオペレーターを務めている。

最初に小鳥の到着に気付いたのは、執事のような装いをした初老の男性だった。黒色が抜けて白くなってしまった髪は綺麗に整われ、彼の紳士的な雰囲気をも更に強くしており、ピンと伸びた姿勢ははつらつとした意気の良さを感じさせる。

彼の名はジョゼフ・真月。モンデンキントJP・アイドルマスター課の課長であり、この管制室において小鳥達を束ねる司令官でもある。

「遅くなって申し訳ありません」

「今、マスター達の搭乗が完了するところです。あなたも持ち場へ」
首肯し、小鳥は自分が担当している席へ座った。モニターに表示されている情報を即座に読み上げると、現状を瞬く間に把握する。

「アイドルマスター二名、“インベル”に搭乗完了」

大型モニターに映っているのは、白く巨大な人型だ。四〇メートルにも届こうかという巨体。特徴的なのは、二の腕に装備された打撃用の巨大なセカンドアームである。

アイドル
IDOL。それがこの巨大な人型の名称だ。

月が崩壊し、その破片が地球に落下する危機に見舞われて一世紀それらに対応するために設立された世界最大の多国籍企業体“モンデンキント”。その日本支部において、ドロップ（隕石）迎撃に使用されているのが、この隕石除去人型重機IDOLである。

そしてその搭乗者は、

『アイドルマスター両名、いつでもいけます！』

パツ、とスクリーンに映し出されたのはリボンが目立つ十六歳の少女。そう、先程別れた天海春香その人だ。パイロットスーツを着込み、IDOLの無機質なコックピットで握り拳を作りながら、ヤル気満々であることを誇示している。

『気合を入れすぎてミスしないでね。それでなくとも遅れてきた上に、“アイ”をどこかに落としたなんて信じられないわ。予備がなければIDOLに乗れなかつたんだから！』

『ち、千早ちゃん。それを言わないでよお』

コックピットにはもう一人、長髪の少女が座っていた。名を如月千早。普段は冷静かつ寡黙でクールな彼女だが、今日は春香が遅れてきたことに腹を立てているようだ。春香が遅れてきた理由に、一人の青年が関わっていることを彼女は知らない。

機嫌が悪い千早と、それをなんとかしようと慌てる春香を見て、管制室の誰もが嘆息した。ドロップ迎撃という重大な任務を担うにとしてはあまりにも緊張感に欠ける。

と、ふとコックピットのモニター類に映像が連続で映し出された。どれも千早と春香が一緒に笑っている映像である。それを見て、千早と春香から自然と笑みが漏れた。

『大丈夫だよ、インベル。別に喧嘩をしてるわけじゃないから』

『そうよ。だから安心して？』

応じるように計器類が点滅した。まるで了解したとでもいうように。

「インベルは二人のことを心配したのですな。仲が良いのはよろしいことです」

やり取りを微笑ましく見ていたジョゼフは爽やかに笑って見せて、「だからこそ、彼女達に任せられる」

執事のように折り目正しい紳士は、満足気に言った。

「では、彼女達を輝くステージへ。インベル、アクト・オン（発進準備）スタンバイ！」

その一言で全てが動き出した。ハンガーに吊るされていたインベルが、レールを伝ってカタパルトへ運ばれて行く。機体を固定していたフックが外れると同時に、インベルは飛行形態に変形。カタパルト上に静止。連なる誘導灯が光る先には、地上へと続く滑走路が続いている。

『行くよ、千早ちゃん！』

『いつでもいいわよ、春香』

お互い確認を取り、操縦桿を再び握り直す。そして、

『インベル、アクト・オン！』

瞬間、インベルはカタパルトの力を得て、凄まじい速度で発進した。滑走路を疾駆するインベルは瞬く間に地上へと抜け、東京の上空に舞う。

見る見る高度を上げていくインベル。その速度はロケットなど及びもしない。そんな圧倒的な推力であるにも関わらず、二人はGをまったく感じていなかった。

それはIDOLの持つ重力と慣性を制御する能力のおかげであり、構造上、無理のある巨大な人型を維持できるのもこの能力のおかげなのだ。

二人の少女を乗せた白亜の巨人は、やがて大気圏を突破して行った。

宙には血の繋がらない姉がいた。ただ捨てられた時期が一緒だった、それだけの関係。しかしそれでも、お互いそこにわずかな共通

点を見出したのか、二人は他の子供達以上に親しかった。まるで、本当の姉弟であるかのように。

彼女は、名前をマツリと言った。

天川マツリ。後に日本の音楽史に残る偉業を成し遂げ、日本中を魅了した稀代のカリスマアイドル、その人である。芸能界に燦然と輝く太陽。その活躍は筆舌に尽くし難く、未だに根強い人気を誇っている。人々の注目を集める二種類の人間でいうならば、天川マツリは完全に後者に該当する人物だっただろう。

宙の知っているマツリは、勝気な性格で負けず嫌いだっただが面倒見も良く、子供達がケンカをするといつも仲裁に入った。孤児という自らの生い立ちを恥じることなく、むしろ天川孤児院で暮らすことを誇りに思っていた彼女は、故に誰からも慕われて、どこに行っても人気者だったのが印象に残っている。

圧倒的存在感。完全無欠の偶像。そして宙にとってのヒーローであり、憧れだった。

そんな彼女の成せる業か。マツリが高校を卒業する一年前、彼女は芸能事務所にスカウトされた。小さな事務所からのデビューではあったが、アイドルとして芸能界に飛び入ることをマツリは喜んで、姉の嬉しそうな姿が宙には誇らしかった。まるで自分のことのように喜び、幸せだった。

マツリと、当時からの親友だった音無小鳥の二人で結成されたデュオユニットは瞬く間に人気を博し。売り出した楽曲はデビューから一年で二度のミリオンヒットを達成。活動は国内だけに止まらず、海外へのデビューも控えていた。

もちろん仕事は多忙を極め、高校を卒業した後、孤児院を出たこともあって、宙とマツリの会う機会は日に日に少なくなっていた。それでも宙は寂しいとは思わない。むしろテレビの向こうで歌う姉の姿に、幸せな充足感が湧き出てくるのだ。

あれは俺の姉さんなんだ、と。彼女と姉弟であることがなにより
の自慢で、いつだってマツリは宙の目標だった。気高く、優しく、

姉であり、母でもあった彼女の存在は今も心に刻まれている。彼女のように在りたいと、後姿を追いかけて続けたのだ。あの人に認められたいと、ただその一心で。

ある時、マツリが忙しい仕事の合間をぬって孤児院に遊びに来たことがある。その夜、マツリと宙は孤児院の屋根の上で、寝転びながら会話を交わした。

「最近ね、よく星を見る機会があるの」
「星を？」

「そう、星。視界いっぱい広がる星の輝き。それはとてもとても綺麗で、いつも心を奪われるの。いつか、宙にも見せてあげたいわ」
「見られるといいな。姉さんの目に映るもの、全部知りたい。……」

だから、孤児院を出たら765プロで働きたいと思ってるんだ。高木さんも小鳥さんも良い人だし。そうしたら、姉さんと同じところにいられる。同じものを見られると思う。できるかな？」

「きつと、大丈夫。宙ならきつとできるわ。だって、私の弟だもの」
まだ幼さの残る顔で、宙は満面の笑みを浮かべた。マツリも同じく笑って、二人ですつと宇宙に瞬く星を眺めていた。

ずつと、この瞬間が続けばいいのにと、思っていたのに。
それが最後の会話になるだなんて、その時は考えもしなかった。

天川マツリは死んだ。撮影中の事故、だった“らしい”。
宙は自転車を押しながら、延々と四年前を思い出していた。マツリの死は何故か詳しいことも分からぬままあやふやに終わった。宙の知っている事実は、彼女の遺体が帰って来なかったこと、それだけである。

そうして宙は夢を失った。今はこうしてただ現実を生きている。
不意に突風が吹き抜けた。空を見上げれば、そこには天高く飛翔する白い鉄^{くろがね}。IDOLがドロップの迎撃に向かったのだろう。

「今月でもう三回目か。最近は物騒になってきたな」
ドロップの落下頻度が最近多くなってきた、というニュースを思

い出す。月の破片から生み出された地球を囲むオービタルリング。そこから飛来する隕石、通称ドロップの落下は世界規模の問題として定着している。

頭上に数百メートル単位の岩塊が星の数ほどあるのを考えると身震いもするが、とはいえその危機感は薄い。

「そりゃ、地元にドロップが落ちてきたことなんて一度もないし」
独り言を呟いて、宙はバイト先の事務所へ向かった。今日の仕事はこれで終わりである。事務所に着くと、早々に荷物をまとめた。あまり良い気分ではなかったので、気分転換を兼ねて散歩しながら帰ることにしたのだ。

「ん……？」

荷物をまとめている時である。鞆の中から、見知らぬ楕円状の物体が出てきた。銀色で、手に取ってみると軽く、中央には茜色に輝く細長い結晶体が収まっている。身に覚えのない物に首を傾げた時、ハツとした。

「これもしかして、天海春香の物じゃ？」

そういえばエレベーターで荷物がばら撒かれた時、急いでいたあまりろくに確認もしなかった。紛れ込んだのはその時か。まいったな、と額に手を当てる宙。

それを頭上に掲げて眺めると、結晶は淡く輝いている。淡い暖色系の光は不思議と心を落ち着かせてくれた。人肌の温もりのようでもあり、懐かしく楽しい記憶を思い起こさせる、忘れかけていた包みこのような暖かさ。

とりあえず、宙は事務所を出た。しばらく湾岸沿いの道を歩きながら、これからどうするか思索する。この辺りはロストアルテミス以前、月島やお台場と呼ばれていた地域で、ドロップ落下の影響で水位が上がり沈没した場所でもある。目を凝らすと、飲み込まれた建物の残骸が海の中に垣間見ることができた。

「気は進まないけど、とりあえず本社ビルに戻ってみるか。本人に会えなくても、誰か関係者に渡せば事足りるだろうし」

仕方がない。行動あるのみ、だな。さっそく踵を返した時、

「あの〜、すみません」

不意に呼び止められて、宙は声の主に振り返った。

「765プロ本社ビルに行くには、どの道を行けばいいのでしょうか？」

間延びした口調でゆっくりと問うてきた女性に、宙は一瞬言葉を失った。

長く伸びた黒髪は絹のように艶やかであり、肌は透けるように白い。やや下がった目尻も際立って、端正な顔立ちはとても優しそうに見える。先程出会った天海春香を可愛らしいと表現するならば、こちらは目のさめるような美人だ。胸が高鳴り、早鐘を打つ。自然と頬が赤く染まったことに宙自身は気付いていないだろう。

「本社ビルですか？」

なんとか上擦らないように声を出すと、女性は頬に手を当てて、「どうやら迷ってしまったらしくて……。池袋の職場を出た時はしっかりと確認したんですけど〜」

「池袋？ それってここから反対方向じゃないですか。ビルのある新宿、とつくに通り越してますよ！」

「あらあら、道理でおかしいと思いましたが。二時間近く歩いているのに一向に着かないんですもの」

それで理解した。この人は極度の方向オンチなのだ。一体どんな風に土地勘狂ったら迷うんだよ、とげっそりした表情で、とりあえず近くのバス停までの道順を教えようとしてやめた。彼女はその道順でさえも間違えるかもしれない。十中八苦、予感が当たるだろうと妙に納得できた宙は、

「よければ案内しましょうか？ ちょうど、俺もそこに行く予定だったので」

「まあ、本当ですか？ ありがとうございます〜。でもこれって、もしかしてナンパなのかしらあ？」

「違います」

なんだか浮世離れた人だなあ、などと思いながら。宙は女性を連れて歩き出した。

その時である。ズボンのポケットから暖色系の淡い光が漏れ出した。慌てて取り取り出してみると、例の結晶が先程とは比べ物にならないほど瞬いているではないか。神秘的な深みを持って発光する結晶はますます輝きを増して、どうしようもなく宙が戸惑い。

それは来た。

刹那、言いようもない激震が大地を揺さぶった。続けて耳を貫く轟音。爆発を連想させる大音響に、堪らず宙と女性は地面に倒れ込む。突如として襲ってきた異変に、宙は身の肌がよだつを感じ、逆立ち、敏感になった感覚が何かを捕捉。一瞬の出来事を、混乱する頭が理解しようとは熱を帯び、ただ唯一、言葉が去来する。

落ちて来た。

「何かが落ちて来た!？」

反射的に叫んだ宙が顔を上げると、まさに目の前で、海から壁のように立ち上がった水柱が異変を表わしていた。一拍置いて、大量の飛沫が雨のように地表を打ち付けていく。何が起こったのかと、呆然とした宙は、やがて水柱の中から現れる威容を、確かに見た。

巨人。宙は思わず呟く。紛うことなく、それは巨大な人型であった。

見上げるほどに巨大な姿は闇の如く漆黒。鋭角的なシルエットは凶悪なまでの威圧感を感じさせる。その、西洋の鎧騎士とも日本の鎧武者ともつかない、とにかく鎧然とした人型に言葉が出ない。人の形をしていながら、戦車や戦闘機のように無骨でありながら機能美を兼ね備えた姿は、まさしく機械のそれだ。

両肩に装備された巨大な盾と、腰に備えられた翼状の推進器。人とも似つかず獣染みた、あるいは二つを融合したような頭部。後方へ反れる逞しい角や、頬部から張り出した一对のフェイスガード。人型で在らんとする機体と矛盾しているそれらの部位。それだけで見る者を圧倒する異種異様な存在感。

だが対照的に、巨人の纏う雰囲気には、優しさに似た何かを感じた。

巨人の頭部から覗く緑光色の一对の瞳は、ただ真っ直ぐにこちらを向いている。巨人。いや、“巨大な人型機械”は、やがて悠然と水面から立ち上がった。

宙達に影を落とす姿を見て、

「IDOL、なのか？」

噛み締めるように呟く宙の手の中で、結晶が一際輝いていた。

第二話 男は度胸！！

第二話 男は度胸！！

繰り出された拳の一撃に星屑が砕けて散る。

宇宙へと飛び立ったインベルは、無事、ドロップの迎撃を完了した。打ち砕かれた破片が赤熱して燃え尽きながら、流れ星となって地球に降り注いでいき、それを見届けた春香と千早は安堵の息を吐いた。

『クランクアップ（作戦終了）です。二人とも、お疲れ様』

小鳥の労いに笑みを浮かびながら、千早はモニターに映る宇宙へ視線を移す。

「でも最近、迎撃回数、多いわね。今年に入ってから、特に」

「そういえばそうだよねえ。伊織なんて、夜勤が増えてお肌の調子も散々よ！ って嘆いてたし。私も人事じゃないなあ」

世界各地に点在するモンデンキント支部、つまり迎撃基地には、決められたサイクルでローテーションが割り振られている。無論、小さなトラブルからそれこそ迎撃の失敗という最悪の場合も想定し、完全に他任せということはありませんが、ある程度の出番というものには与えられている。

その中で、日本支部の出番が極端に多いわけではない。それでも今月に入ってからすでに三回。これは過去と照らし合わせても異常な数字だった。話によれば、やはり他の支部でもドロップの増加に頭を悩ませているという。

「嫌な兆候だね。世界滅亡説なんて噂も出てるみたいだし」

「ゴシップなネタよ。そんなもの、定期的に噂されるものじゃない？」

それに世界の滅亡ならば、復興暦元年に人類は経験しているでは

ないか。いや、あの天災があつたからこそ復興暦があるのだから、因果は逆か。

「それでも、まあ、何か原因はあるかもしれないわね」

「原因かあ」

それって何だろうね、と続けようとして春香は言葉を呑み込んだ。今、モニターに何かが映らなかつただろうか。

気のせいだったかもしれない。しかし、画面の隅を、わずかに横切ったかもしれないそれは春香の心を妙に揺さ振った。必要以上に気になった理由は、直感というほかない。光学カメラを操作し、黒々しい宇宙の闇を拡大。そこに何も存在しなければいいのだが、

「……春香、あれ！」

同じくモニターを見た千早が叫んだ。叫びの意味を、春香もしかと確認している。何も在るはずのない空間に、無数に蠢く巨大な物体を。

「エピメテウス！」

同時、名前の主は鋭い両目をこちらに向けた。群青色の装甲、鋭い鉤爪のある腕、やや短い脚部。その人型、構造はまさしくIDOLのものだ。インベルより一回り小型ではあるが、大きさは三〇メートル近くある。相対するには十分に驚異的だった。それが無数、群れを成すハイエナのように徒党を組んでいる。

慌ただしくなった管制室のざわめきが伝わってきた。何故、ここにエピメテウスが。疑問を払拭できないまま、しかし二人は気が引き締まる思いを得る。

あれは敵だ。春香は無意識に呟いた。

幾度か遭遇したことのある春香は自然と身体が強張った。そう、あれは“モンデンキントのIDOLではない”。モンデンキントの所有するIDOLは全部で三機。インベル、ネーブラ、テンペスタースだけ。つまり、モンデンキントとは別の。

その時、春香はエピメテウスの群れの中に、一体だけ異様なIDOLが存在していることに気付いた。緊張が助長され、目を細める。

「何、あれ。あんな機体見たことがない」

春香が目で追ったのは黒塗りのIDOL。量産型であるエピメテウスとは違い、異種異様な存在感を醸し出す謎の存在。春香の知るどのIDOLにも該当しない、未確認機体だった。モニターに映し出される情報にも、Unknownと表示されるだけである。

だが推理する時間も長くは続かない。

突如、その黒い機体が、インベルに向かって猛烈な勢いで加速したからだ。

「く、来る!？」

唐突な出来事に春香は目を見張り、対する行動は反射的だった。アイドルマスターとしての経験が、彼女をすぐさま迎撃体勢に移行させる。

一気に縮まる両者の距離。接触する緊張の一瞬。

「このっ! ……ってあれ?」

しかしあるうことが。黒いIDOLはインベルの横を“通過しただけ”だった。あまりに拍子抜け過ぎて、春香も千早もわずかに思考停止。インベルでさえ、勇ましく鳴り響いていた駆動音が、心なしか小さくなってしまっただけであった。

『ちよつと二人とも! 呆然としていないで!』

「す、すいません、思わず!」

小鳥の声に我を取り戻し、頭を振ってモニターを見直すと、エピメテウスの一機も黒いIDOLを追って移動している。その先には、「地球に向かっている!？」

「追うわよ春香。一体何をしでかすか分からない!」

千早の言葉はもつともだったが、どうやら簡単に追わせてはくれないようだ。

インベルの進路を阻み、残ったエピメテウスが群がった。小型とはいえIDOLである以上、単機でドロップの破壊が可能なることに変わりはない。ましてや、それが複数ともなれば凶悪と言わずしてなんと言おう。群れを成して襲われればこちらが不利だ。

「だからって！」

ジョイントの稼働と連動して、インベルは打撃用のセカンドアームを装備。巨大な拳状のそれを構え、雄叫びのような駆動音をあげながら、インベルの出力が上昇していく。

「そこを退いて！」

瞬時に火を噴いた脚部推進器と慣性制御によって、インベルは一秒とかならず最大速度で発進し、同時にエピメテウスも敵を止めるべく立ちほだかる。壁となるならば打ち崩すのみ。流れる彗星の如く、インベルは拳を放った。

IDOLが空から落ちて来た。

端的に言うならば、それが、目の前で起こっている出来事だ。しかし冷静に考えると、端的どころか在りのままと言って差し支えないかもしれない。とにかく自分が、偶然に、突拍子もなく、あるいは運命的に、必然として、何らかの事件に巻き込まれているということだけが、天宇宙の理解した全てだった。

海沿いの道を、地平線の向こうに消えかかった太陽が茜色に染め上げ、照らし出す。黄昏に衣装を変えた空を遮るようにして、黒いIDOLがこちらを見下ろしていた。緑光色に発光する双眼は、間違いなく宙を凝視している。

人の形を模しているながら、それより遥かに屈強な鋼の身体。胴体に組み込まれた巨大な球体を中心に構成された人型は、子供の頃に憧れた未知への羨望すら思い起こさせる。

口を開けて驚愕を顕わにしたまま、宙もIDOLを見上げた。正確にはそれしか動けなかったのだ。だって前触れもなく、いつもの帰り道で、こんな巨大な物が、ましてや落ちて来たのだから、この反応は当然ではないだろうか。

低い駆動音だけを響かせながら、互いの視線がひたすら交差する。

それだけで萎縮してしまいそんなものなのに、何故か、不安は感じない。純粹に驚きだけが宙の意識を釘付けにしていたのだった。そこで、宙は握り締めた例の結晶が異様に輝いていることに気がついた。

「見たことのないIDOLですね。もしかして、あなたのIDOLなんですか？」

「お、俺の？ まさか、そんなの、あるわけないじゃないですか。隣の、道案内をするはずだった女性が言うので、首を振った。

「でも手に持っているのは、“アイ”ではないですか。それはアイドルマスターしか持っていないはずですよ。でもマスターには女性しかねないって……あらあら？」

頭の上に疑問符が見えそうなくらい、首を傾げて唸る女性。頬に手を当てて小首を傾げる仕草が大人の色気を感じさせるも、それ以上に、少女然とした可愛らしさがある。自分の鼓動が早くなるのを感じながら、女性曰くアイという結晶に、宙は目を向けた。

アイは暖かく輝き続けている。もしかしたら、この光はIDOLに関係しているのかもしれない。そういえば、アイに変化が表れたのも、このIDOLが落ちて来る直前ではなかったか。そして、女性はその肯定するようなことを言ったはずだ。

すると、隣の女性は一体何者なのだ、という疑問が湧き出てきた。おっとりとした、迷子の子猫ならぬ迷子の美人。訝しげな視線を向ける。

その時である。黒いIDOLが背負う逆行に、チラリと影が横切った。同時に、

『見つけたあああ!!』

耳を覆いたくなる大絶叫。続けて突風が逆巻いた。それは上から、またもや巨大な水柱をぶち上げながら轟然と襲来する。頭上は綺麗な茜色の空だというのに、どこの水上アトラクションだか知らないが、水飛沫のせいで服がずぶ濡れだ。

そんなことはお構いなしに姿を現したのは、群青色のIDOLだ

った。

何度人を水浸しにすれば気が済むんだこの野郎！ 心からの叫びである。最初は黒いIDOLのせいで、後からやって来た群青色のIDOLには罪の上乗せだが、そんなことは関係ない。唐突に展開する現状に対しての文句でもあった。まったく、厄日だ、きつと違いない。吐き捨てた宙は、海上に浮かぶ群青色のIDOLを睨み付けた。

『やっと追いついた！ 勝手に動くななんて聞いてないし！ 帰ったら絶対カラスに文句言っつてやる！ もう、最悪！』

「子供？」

飛来したIDOLから聞こえてくる声は、幼い少女のものだった。何故、子供。幼い、少女。宙が疑問を胸の内に広げていると、声の主は群青色のIDOLは散々文句を喚き散らしながら、ゆっくりと近づいて来る。正確には、黒いIDOLへと。ビルほどの高さもある人型が影を落としてくる様は、背筋の凍る思いであった。

群青色のIDOLは、ふと、宙達に視線を向けた。

「あれえ？ お兄ちゃん達は何？ ああ、もしかして“いっぱんじん”？」

よく喋る上に疑問系の多い奴だ、と宙は認識した。放たれる声には、道端で猫を発見したような好奇心が滲んでいる。子供らしい、無知故の、ある種の残酷ささえ漂わせる声だ。そうだ、残酷さ。どうしてだろう、くすくすと楽しそうに笑う少女の声に、全身の毛が逆立っているのは。

……なんで、同じIDOLなのに。たかだか子供の声なのに。

本능が宙に訴えかけてくる。こいつからは、黒いIDOLから感じ取れた温もりや暖かさが一切感じられない。代わりに感じるのは、極寒の氷の中に閉じ込められたような息苦しい冷たさだ。芯まで凍るような悪寒に背筋が震える。

どうしてこうも差があるのだ。

同じIDOLで。 同じ、機械のくせに。

「これ、エピメテウス……」

不意に隣の女性が呟くのを、宙は聞いた。身の凍るような迫力に吞まれていた宙は、はっとして振り向き、IDOLを見上げる女性を目視する。

その表情には恐怖というより、不安の方が大きく表れていたと思う。見かけによらず芯が強いのか、状況をさほど危険視していないのか。もしかしたらこのIDOLについて何か知っているのでは、と勘繰りもする。先程の女性の言動を考えると、そういう考えに行き着き 安心する。自分はまだ、取り乱すほど冷静さを欠いてはいない。

「ここは逃げましょう」

視線を返した女性は宙の手を取った。流麗な五指が包み込むように手を握ってきて、苦しいくらいに心臓が暴れた。肌に伝わる綺麗な手の感触と、否応なく感じる人肌の温もり。宙にしてみれば、まさか女性に手を握られるなど思ってもみなくて、少なからず喜びを感じたのもやぶさかではなかったが。

それ以上に脅迫的なまでの嫌悪感とその身を苛んだ。

「俺に触んな！」

乱暴に女性の手を振り解く。あまりに唐突だったからだろっ、女性はいきよんとした表情になって、それから拒絶された手を胸に抱く。振り払われるとは想定外だった、と言わんばかりの表情である。文句を言うのでも、食って掛かるでもなく、単純に何故と問い質す視線に、宙はたじろいでしまう。

だって、他人に触れられるのは、怖いじゃないか。

他人が自分に触れている。言い様のない、繊細なようで、実は強引な、自分ではない誰かからの侵食。触れ合うということは他人に心を許すのと同義であり、勝手に触れられたのなら、それは自分の領域を穢されたことに等しい。女性の手は、まさに、宙の心の中に土足で踏み入って来たのだ。故に振り払った。

四年前から続く発作的なこの拒絶反応は、きっと他人を信じるこ

とができなくなつたせいだ。うわべでは人と笑い合つていても、その裏では冷めている。

心の中を土足で踏み躪られるくらいなら。

“信じた誰かに裏切られるくらいなら”。

いつそ誰も信じない方がとても楽だろう。

結局その場に踏み止まっていた宙と女性は、

『あれれ？ お兄ちゃんが持つてるそれ、アイだよねえ？ ん〜？』

相変わらず疑問系の少女の、

『もしかして、お兄ちゃんが呼んだの？』

心の臓を抉られるような殺気に身体を竦ませた。

「ひつ……！」

まるで蛇が身体を這うような。もしくは、鉄の楔を間接という間接に打ち込まれたような。強烈な金縛りが自由を奪った。可愛らしい声なのに、明らかな殺意の下、容赦なく、手加減なく、いとも簡単におまえの命を奪うことができるのだと、そんな意思が存分に込められた声だった。

人じゃない、悪魔だ。絶対に違いない。まるで虫けらを踏み潰すような圧倒的感情が、普通の人間に出せるはずがない。抱いた恐怖を口に出すこともできず、情けないことだが、宙は足を絡めて尻餅をついた。まだ立っていることができるだけ、隣の女性の方がマシだろう。もっとも、目が泳ぎ、身体を震わせているのは彼女も同じだったが。

殺される。最悪の状況を連想した。

『そつか、だから“ヴェルトール”も勝手に動いちゃったんだね。』

そうだよね、今までこんなことなかったもん。ねえねえ、お兄ちゃん。一体どうやったの？』

何もしていない。俺は関係がないんだ。残念ながら、思い描いた言葉は声にならない。あつ、とか、はつ、とか。そんな吐息の漏れしか出てこなかった。干上がってしまったように、言葉が出てこないのだ。

代わりに首を振ったが、宙の気持ちは察してもらえず、群青色の IDOL エピメテウスの主は勝手に話を進めていく。

「まあ、いいや。とりあえずまとめて持って帰ればいいよね。うん、名案！ きつとママも喜んでくれる！ もし関係なくても、後で処分できるし」

処分、という言葉の意味は、果たして本来の意味そのままなのだろうか。

エピメテウスが、鉤爪を広げて腕を伸ばして来る。部品が擦れ、関節の曲がる歪な摩擦音が耳に響いてくる。その音が、更なる不気味さを宙に感じさせ、恐怖心を煽った。巨大な人型が、視界を覆いながらだんだんと迫ってくるという、心ごと踏み潰されそうな恐ろしさ。

「や、め……」

目の前が真っ白になるといふのはこういうことだろう、と宙は思った。ただ、無意識に言葉を紡ごうとして、失敗して、失敗して、何度も失敗して、

「やめる！ 来るな！！」

刹那、アイの光度が爆発的に増大して。

そして叫びが木霊した瞬間、宙の願いに黒い巨人は答えた！ 突如、沈黙していた黒い IDOL ヴェルトールは、轟ッ！ と風を切り裂さいて腕を振り上げた。振り上げた腕は、今まさに宙を掴もうとしていたエピメテウスを殴りつけ、弾く。その衝撃はどれほどのものだったのか。放たれた豪腕は、火花を散らしながら、エピメテウスの巨体を軽々と吹き飛ばした。

「なっ！」

誰の口から漏れた驚きか。いや、おそらくこの場にいる全員のものだ。抵抗する間もなく水面に叩きつけられたエピメテウスは、一度水飛沫をあげながらバウンドし、再び水面にぶつかって海に沈んだ。今日三度目の、大樹にも似た水柱が出来上がる。

水飛沫が陽光に反射して星のような輝きを作り、その光景を見て

いた宙は愕然として度肝を抜かれた。今日は驚いてばかりの気がするから、感覚が麻痺したのだろう、何が起こったのか考えることまで頭が回らない。

ただ、考えなくても分かることは、

「おまえ、俺たちを守って　うわぁ!？」

ヴェルトールに語りかけた宙だったが、最後まで言うことはできず、情けない悲鳴が辺りに木霊することとなった。前触れもなく、足元が崩れ去るかのような錯覚に陥った瞬間、宙は地上から数十メートル離れた上空へと舞い上がっていた。

浮いている!?　と口にした自分の言葉が信じられない。ぐるりと首を回せば、三六〇度、高いビルの上から街を見下ろしているような風景が目に入る。実際高い所にいるわけだが、文字通り“浮いている”のだから、それはまた別の意味を持つてくるだろう。何も支えになる物のない、とてつもない浮遊感というものを、宙は初めて体験した。

何故、浮いている。人間は地上で生活していくために進化したのであって、身体の構造上飛べるようにはできていないのに。

そんな当たり前のことが浮かんでは泡のように弾けて消え、後は何を考えているのかすら分からなくなった。いきなり上空に放り出されたのだから、考える余裕などあるはずもなく、駄々をこねる子供のよう手足をバタつかせた。

「落ち着いてください。これは慣性制御で周囲の重力を操っているだけです。いきなり落ちこちたりしませんから、安心して大丈夫ですよ?」

と、小さな子供をあやすような口調で言ったのは、あの迷子の女性だ。半ば錯乱状態に陥っていた宙は、一緒に浮かび上がっていたことに気付かなかつた。ロングスカートをなびかせながら、舞い上がったスカートの裾から覗く綺麗な足など多少際どいことになっていることも露知らず、女性は大きく手を広げて見せた。

「まずは深呼吸しましょう。はい、吸って、吐いて。お上手で

すよ」

「ど、どうもありがとう。……じゃねえ!？」

深呼吸が本当に効いたのかはさておき、宙はやっと落ち着きを取り戻した。取り戻したのだけれど、すぐに焦りを覚えた。この状況はまったく解決されていないではないか、と。

「ってか、どうしてあんたはそんなに落ち着いていられるんだよ！」

「だって、このIDOLは私達を助けてくれたんですよ。なら、危害を加えてくることもない。安心できるじゃないですか。それに見てください、この子のこと」

言われるがままヴェルトールへ目を向けると、

「……」

一瞬、言葉が出なかった。どきり、としたのだった。感動と言い換えることができるかもしれない。初めて噛み締める、不思議な感覚であった。

宙達が浮いているのはヴェルトールのちょうど顔の高さで、否応なく目が合った。その視線の交差から伝わってくる、包み込むような暖かさ。荘厳で、神秘的で、偉大。ただ巨大だけじゃなくて、その存在そのものが、巨大。守ってくれている。ヴェルトールを見ていると、そう思わざるにはいられなかった。

「ね？」

「と言われても……」

女性と顔を見合わせて、もう一度視線を戻した時、

『ああ、もう！ 不意打ちなんて卑怯!！』

ヴェルトールの頭部越しに、またもや水飛沫の花火を炸裂させて浮かび上がって来たエピメテウスを目撃して、表情を歪めた。

「勝手に動いて勝手に攻撃するなんて反則！ もう怒った！ “きようこうしゅだん”してやるんだからね！」

なんとも可愛らしい怒った声とは裏腹に、応じるエピメテウスの装甲がスライドして腕を伸ばし、鉤爪を光らせたのは肝を冷やさざるを得ない。五指の代わりに装備された爪が、ぎらりと夕日に反射

その雰囲気は獲物を狩る肉食獣さながらである。

まだ来るのかと血の気が引いたその時、視界がぐるりと回り、宙は浮いていた身体が再び急上昇したのを知る。今度こそ女々しい悲鳴があがるのをかろうじて我慢した宙は、女性と共に弧を描いてヴェルトールの頭上を通過すると、まるで迎えるように開いた首元の装甲に、中を覗きこむ暇もなく落とされた。

荒々しい歓迎。軽くぶつけた頭が痛い。うめきを漏らしながら顔を上げると、

「コックピットの中か、ここ？」

球状の空間。モニターや操縦桿を始め、様々な機器に囲まれて操縦席が配置されている。相変わらず慣性制御とやらが働いているのか、無重力状態は継続中。自然にはない、人の造り出した機械的で鋭角的で、電子的な、ある意味未来的とも受け取れる構造物を目の当たりにして、現状も忘れて心が躍る。

これがIDOLの、モンデンキントが誇る隕石除去人型重機のコックピットなのか。

「単座……。インベルさん達のコックピットは複座なのに。やっぱりモンデンキントのIDOLではないんでしょうか？ ちよつと失礼しますね」

一緒に乗り込んでいた女性はあらかた機器を見渡すと、備えられた操縦席に腰を下ろして、ちょこちょこコンソールをいじり始めた。

へえ、大したものだなあ。手馴れた様子で操作しているのを素直に感心していた宙は、しばらくして、ん？ と首を傾げて。

「ってなんで乗り方知ってるんだ！？ まったく今日は叫んでばかりだよ！」

「あらあら、のどを痛めるといけませんね。のど飴いりますか？」

「あ、どうも。……いや、もう、違う！ 普通にもらってる場合じゃないんだよ！ そんなボケが欲しいわけじゃないんだ俺は！」

のど飴を噛み砕きながら、女性に噛み付く宙。思考が麻痺してき

ているのか、危うくまったりとした空気に身を置くところだった。現状で焦りを覚えている自分の方が正常のはずだ。なのに文句を言われた女性が、どうして怒鳴られたのだろうかと思議そうな顔をしているのは一体どういう領分なのだろうか。

溜息を吐いた宙だったが、内心の焦りはすぐに引き戻される。

刹那、激しい衝撃がコックピットを揺さ振ったのだ。

『このまま“お家”に持って帰っちゃうもんね。お兄ちゃん達もそこで大人しくしてた方がいいよ?』

原因はエピメテウスだった。エピメテウスが、ヴェルトールの背後から掴みかかって来たのだ。鉤爪を開き、伸ばされた腕部が、黒色の機体を締め上げる。

「冗談じゃない。こんなふざけた形で誘拐なんてされて堪るか!」
連れて行かれた先で何をされるかなど想像したくもない。同じ心境を抱いたのか、慌てて女性がポケットから何かを取り出した。それは、宙の持っていたものと同じ謎の発光物。彼女がアイと呼んでいたものだ。

「それは……」

「この子のシステムを起動します。いきますよ!」
モニターのすぐ下の“鍵穴”にアイを差し込むと、電源の落ちていた機器類が、命を吹き込まれたように次々と点灯していく。それまで静かだった駆動音が、さながら獅子の咆哮の如き唸りをあげ、まるで心臓の鼓動のようだった。

すごい。鳥肌が立つくらい、圧倒されて感銘を受ける。これがIDOLの鼓動。これがIDOL。力強い駆動音を耳にすると、言い表わしようのない感情に身体が震える。

「腕を振り払います、何かに掴まってください!」

言われた通りに操縦席の支柱を思いっきり握った。掴まったのを確認した女性は、エピメテウスの拘束を脱出するべく、フットペダルと操縦感を一気に押し込む

「……」

「……」

二人して沈黙。

「動いてないみたいだけど？」

「あらあら〜？」

「ちよつと!？」

「おかしいですね、しっかりと操縦しているはずなんですけど〜。こちらからのアクションを受け付けないということは、私に関心を持つてくれないからかしら」

「そんな馬鹿な。どっか壊れてるんじゃないの」

機械に関心などない。あるのは、人間の指示通りに動く忠実さだけ。当たり前のことだろう。それなのに彼女は、必死にヴェルトールに向かって動いてとお願いしている。話しかけている。

無駄なことを。機械に話しかけてもどうにもなるまい。宙からしてみればそうとしか思えない行動も、彼女にとっては違うらしい。

でもそうして機能不良を起こした機械が直ってくれるのなら、この世の修理屋は食い扶持に困ってしまう。

何度操縦桿を動かしても反応を返さないヴェルトールに、女性は俯かざるを得なかった。無力感にひしがれているのだろうか。宙はそんな女性から目を逸らしてしまった。何もできない自分が情けなかったのだ。ただ守られているだけの自分が、情けない。

自分にこの状況を打開できる術があれば。

どうすることもできない宙は、黙って重い空気に身を任せていたが、ふと女性が勢いよくこちらに振り返った。何故だろう。完全に直感だが、妙に嫌な予感が脳裏で閃いた。

打開できる術があればなんとかするんですね。

そのように、女性に言われている気がした。あくまで、しただけだったけれど。

あながち間違ってもいなかった。

「もう方法は一つしかありません」

女性は操縦席を立ち、宙に向かってそこを指差して、

「あなたが、この子を動かしてください！」

「はあ!？」

放たれた言葉の意味は今日一番の驚きを与えるには十分過ぎるものだった。ガツンツ、と後頭部を殴られたような錯覚を覚えたが、すぐに意識を復帰させると、猛烈な勢いで講義した。無理だ、動かせるはずがない、そもそも操縦の仕方すら知らないのだと。

突然落ちて来たロボットの操縦をするなんて、どこの正義のヒーローだ。確かにそんなテレビや本の中の登場人物に憧れていた時期があるのは事実だけど。少し前の自分なら進んで食い付きそうな話かもしれないが。現実には現実的なまでに現実でしかない。都合よく正義のヒーローよろしく、なんの知識もない素人が動かせる代物ではないのだ。

ほれ見ろ、そんなことを考えたら、手が震えている。足が竦む。

「大丈夫、あなたならきつとできます」

その手を、先程と同じように、女性の綺麗な手が包み込む。発作的な拒絶。その手を振り払おうとした宙だったが、今度は手に込められた力が強く、簡単には払えなかった。触るな、なんでこんな目に遭わないといけないんだ。泣きたくなって、頼むから離してと嘆願した宙は、ところが言葉を詰まらせた。

宙を見つめる女性の表情は、宙なら動かせると確信した笑み。私にはあなたを信じる。だから私を信じてください。そう伝わってくるような、満面の、一才の曇りのない、星の輝きにも負けない笑顔だった。宙の頬は、茹で上がったように上気する。

今日出会ったばかりの他人を信じるなんて馬鹿げてる。普段なら一蹴する、欺瞞に満ちた都合の良い言葉。握ってくる手の表わした信用という言葉は、嘘に決まっている。

なのに、その手を振り払うことができないことが、宙には衝撃だった。

おそらく、彼女の悪意のない笑顔に、亡き姉の向けてくれた笑顔を重ねて視てしまったのが、原因だったのだろう。

「私、思っただんです。この子が私達の前に現れた時も、守ってくれた時も、いつもあなたのアイが輝いていました。きつと、この子はあなたに会いに来たんですよ」

「でも、俺にそんなこと」

「できるはずがない。助けを求めて彷徨った宙の片手が、操縦桿に触れた。」

“ ”

「え……」

瞬間、ヴェルトールの駆動音が更なる雄叫びをあげた。大きく、高く、荘厳に。まるで宙を鼓舞するために、空気を震わす力強く優しい音だ。応援歌、と宙は呟く。これは応援歌であると。

声が耳に届いた。歌のような旋律を奏でた声。宙のもでも、女性のもでもない。

「今、聞こえた」

操縦桿に触れた瞬間、人肌の温もりと共に、宙だけに聞こえる声で、

「一緒に行こうって！」

宙の言葉に頷いた女性は、さあ、と操縦席を指し示した。空席は、そこに座るべき資格を持つ者を待っている。操縦席をしばし見つめ、己の気持ちを確認した宙は、ゆっくりと腰を下ろし、操縦桿に手を掛ける。触れた時に感じた温もりは、確かにそこにあった。

「私の言う通りに動かしてください。そこまで難しい操作ではありません」

緊張故か言葉は出ず、頷きだけで返す。言われた通りにモニターをしっかりと見据えると、だが逆に身体が岩のように硬くなってしまった。四肢に神経が行き届いていない錯覚。それが何故なのかは言うまでもない。

怖いのだ。IDOLを操る決意ができて、付随する恐怖を振り

払えるかは話が別だ。初めて乗るにも関わらず、相手にするのはあの獰猛な目で宙達を襲ったエピメテウスであり、金縛りに苛まれるほどの殺気を忘れられるはずもない。

……ちくしょう、動けよ。それでも男か天川宙！

不甲斐ない。こんな時、姉さんならどうするだろうか。ふと、そんな考えが浮かぶ。きっとあの人はどんな苦境でも逃げずに立ち向かうだろう。自分を信じ、勇気を持って。そんな姿に憧れたはずなのに、今の自分はこんな醜態を晒している。

「情けないわね、男の子でしょ」

昔はよく孤児であることを苛められた。それを助けてくれるのはいつもマツリで、助けてくれた後、必ずマツリは怒るのだ。泣きじやくる幼い宙に言うのだ。

「男の子がすぐに泣いてはダメよ。いい？ 宙、男はね」

その言葉の続きは。

顔を上げる。すっかり、今度こそ前を見据える。思い出した言葉に、手が、足が、身体全体に力が入る。そつだ、思い出した。ずっと思い出の中で眠っていた言葉を今こそ解き放て。こんな時こそ、その言葉を胸に抱け！

「男は」

腕の動きに連動する操縦桿を大きく引き、フットペダルにありつたけの力を込めて、

「男は度胸！！」

双眼に光が奔る。ヴェルトールの両腕が、宙の繰る操縦桿に連動してエピメテウスの腕部を掴み返した。まるで雑魚など相手ではないと言わんばかりのパワーが、エピメテウスの拘束を、いとも簡単に解いていく。操縦桿に伝播する振動。絶大な出力だからこそ生み出される、力の余波だ。

『パ、パワーが違い過ぎる！？ なんなのこのトルク！』

「うおおおおおおお！！」

恐怖を振り払う咆哮。ヴェルトールは確かにそれに答えたのだ。パワー勝負は明らかにヴェルトールの独壇場。掴まれたエピメテウスの腕にひびが入り、遂に圧倒的な握力が、その腕を粉々に握り潰した。黒塗りの五指が装甲の破片を粉碎しながら拳の形へと。決着のついた瞬間だった。

両腕を失ったエピメテウスは、堪らず背後へと後退する。飛び退る。

「やってくれたね。まさか、腕を握り潰すなんて。怒ったんだから！」

「いいかげん、帰れよ！短足IDOLが！」

腕を失くしてまだ向かって来る気か。再度の攻撃に構えを取るヴェルトール。ところが、

「え、この反応、インベルじゃん。エピちゃん達もうやられちゃったの！？」

うそお！ という悲鳴と同じくして、ヴェルトールの索敵類にも反応があった。大気圏外より高速で飛来する機影あり。モニターに表示される機体名はインベルとある。おそらく相手も同じ反応を捉えているのだろう。

……インベルって、モンデンキントの。

『この状態じゃ二体相手は無理かなあ』

しばしの沈黙。

『ちえ、今日はもう帰る！ また遊びに来るから、お兄ちゃん、覚えておいてね！』

「ぜってえ忘れる。二度と来んな」

『ひっどーい！ 次はぎゃふんと言わせてやるんだから！』

ぎゃふん、だなんて。いまだき古過ぎる。捨て台詞よろしく、エピメテウスは急旋回すると、慣性制御による瞬間加速によって上空へと昇って行く。宙はその姿が見えなくなるまで、延々と空を眺めていた。

「助かった、んだ」

操縦桿から手を離すと、疲れが波のように押し寄せてきた。緊張から開放されたせいもあるだろう。場所が場所なら、そのまま倒れてしまいたかった。

そんな宙の心情を汲み取ったのか、女性はハンカチを取り出して、額から流れる汗を拭き取ってくれた。

「初めての操縦であそこまで綺麗にIDOLを動かせるなんて、すごいことですよ」

「俺は腕を動かしたただけだ。褒められたものじゃない」

「普通、IDOLを動かすだけでも訓練が必要なんですよ。才能あるんじゃないですか？」

「あってもしょうがない才能だよ。もうIDOLを操縦することなんて、二度とないし、あつてほしくもないし。ホント、今日は厄日どころじゃないだろ」

「ふふふ、なにはともあれお疲れ様です。インベルがそろそろ降下して来ますね」

と、ちょうど茜色の雲を突き破って一筋の光が降って来る。紛れもない、純白の装甲を携えたIDOL、インベルである。真っ直ぐに降下して来たインベルは、凄まじい速度を発揮しながらも水面で即座に停止した。ぴたり、と。そこに最初から浮いていたように。海には波一つ、飛沫一つ飛び散りはしない。

物理法則を無視した機動や事象を可能にしているのは、例の慣性制御の力だろう。インベルとヴェルトル。二機が接近すると、モニターにアイコンが点滅する。

「えっと」

点滅の原因は通信だと思われるが、とは言えそれをどうすればいいのか、宙には残念ながら判断できなかった。こういう時はあなたの出番だろう、と女性に目を向けると、期待通り、彼女が身を乗り出して通信回線を開いてくれた。

結局、彼女が何者なのか分からないな。眉を八の字にして息を吐

く宙は、モニターに映った映像を女性の肩越しに覗く。映っているのはインベルのコックピットだろう。どことなくここに似ている。二つの操縦席が前後に配置されたそこに、二人の少女が腰を下ろしていた。その一人に、見覚えがあった。

「天海春香!？」

「え、あ、エレベーターの人! なんで?」

宙は肩を竦めた。もう今日は、これ以上なにが起ころうが驚けない。

「どついうことが説明してもらえますか?」

問うたのは、春香と共にいる凜とした長髪の少女である。容姿から察するに春香と同世代であろう彼女は、落ち着いた、大人びた雰囲気印象的だった。このまま成長すればさぞや美人になることだろう。きりつと鋭く人を射抜く目と、表情の乏しい様子が玉に瑕ではあるが。まさに春香とは対照的な少女だ。

「成り行きというかなんというか」。とりあえず問題はないので、大丈夫ですよ」

「大丈夫って。しかもそちらの方、……男性ですよね」

「男で何が悪いってんだよ」

疲れもあつてか、妙に機嫌を悪くした宙は、ついつい喧嘩腰で返してしまう。まあまあ、と諭された宙は、とにかく女性に全てを任せることにした。

とりあえず最悪の状況は脱したと見ていい。唐突に事件に巻き込まれたにしては、ケガもなく終わったのは僥倖だ。あとはこのまま、素直に家に帰れば最高なのだけれど、

……無理だろうな。

密かに嘆息する。緊急事態とはいえ、正体不明のIDOLに乗ってしまった上に、街の近くで小規模な戦闘紛いのことまでしてしまったのだ。インベルの登場を考えれば、おそらく、モンデンキントJPが事件の收拾に動くはず。そうなれば自分も無関係ではいられない。面倒くさいことになるのは、決定済みだった。

そう考えていると、さつそくそれらしいことが起きた。通信が切り替わり、初老の男性がモニターに映し出されたのだ。白髪で笑顔を携えた紳士的な風貌。

『対応が遅れて申し訳ありません。こちらも色々と立て込みましてね』

「いえ、私も居合わせたのは偶然でしたから。それに操縦してくれたのは、彼ですよ」

『彼？ ……なんとも言えませんね。過去に前例がないことだ。まさか、“男のアイドルマスターとは”。実に興味深い』

「さつきから男がどうのと……。あんた、何者なんだよ」

『おや、これは失礼。私はモンデンキントJPで課長を務めております、ジヨゼフ・真月と申します。以後、お見知りおきを』

モンデンキント。大方、予想通りの展開。つまり、ただでは帰れないということ。

『……まずは場所を移しましょうか。そのIDOLについても色々考えなくてはなりませんし、これ以上騒ぎを大きくするわけにもいきませんからね。ルートを指示しますから、そちらから地下基地へ移動してください』

頷くより他ない。結局、宙は女性に操縦を教わりながらゆっくりと機体进行操作し始めた。

全てが終わる頃には、夕日はすでに沈んだ後であった。

ガツンガツン、と。忙しく作業する音が大きく響き渡る。高さ六メートル以上にも達する空間は障害物もなく音をよく反射させた。IDOLの整備員が行き交う中、宙はキャットウォークの柵に寄りかかって、ハンガーに納められたヴェルトールを眺めている。

ここはIDOLの格納庫。つまり、東京の地下に存在するモンデンキントJPの基地である。ほぼ非公開となっている基地に滞在を

許可されたのは、あくまで成り行き上の問題だ。

「まさかあんな形であなたと再会するなんて、思いもしなかったですよ」

そう言っただけ眉を弓なりにしたのは天海春香である。宙の横で一緒に作業を眺めている。

「それはこっちの台詞だ。どうしてあなたがIDOLに乗ってるんだ、まったく……」

「一応機密事項なんで、あんまりお話はできないんです」

「あなたの口から機密事項なんて言葉を聞くとはな」

「え、私ってどういうイメージなんです？」

「お気楽な天然娘だ。あとドジも加えてやるよ」

ぷう、と頬を膨らます春香に、宙はふと思いついて、ポケットからアイを取り出して手渡した。

「これ、あなたのだろ」

「あ、私の！ よかったあ、どこに落としたのかと思って焦ってたんです。そのせいで千早ちゃんにも怒られちゃったし。インベルにも乗れなくなるところだったし」

「千早？」

「ほら、さつき一緒にインベルに乗ってた子。可愛いでしょ」

「さあてな。じゃあ、俺と一緒に乗ってた人は？」

「あずさんのことですね。あ、ちょうどいいところに」

噂をすれば何とやら。キャットウォークの端に目を向けると、ちょうど彼女が歩いて来る。その隣には二人、千早やジョゼフと名乗った男性も一緒だ。

「お待たせしていません。改めまして、ジョゼフ・真月です。このモンデンキントJP・アイドルマスター課で課長を務めている者です」

胸に手を添えて一礼する様子はまさしく執事だった。時代が時代なら、中世の貴族に仕えていてもおかしくないだろう。

「そんなことより、俺の処遇はどうなるのだろうか？」

ここに待たせられていたのも、それを話し合う時間が必要だったためだ。格納庫に止めたのは、基地内を無闇に見せないためだと思う。それほど、宙は歓迎されているわけではないらしい。ジヨゼフはわずかに悩んだ後、

「その前に少し、お聞きしたいのです。“アイドルマスター”という言葉をご存知ですか？」

そのような話の切り出し方をした。素直に首を横に振る宙。そういえば同じ単語を、彼女　　春香曰くあずさが口にしていたの思い出す。それが何を意味する言葉なのか、宙はまったく知らない。

頷いたジヨゼフは、すぐ隣で整備を受けるヴェルトールを指差し、「アイドル」

続けて春香達を示し、

「マスター。ご理解いただけましたか？」

「つまりIDOLのパイロットのことか。……ああ、合点がいった。道理で、IDOLの操縦に詳しいわけだ。あずさ、さん？」

問うと、あずさは困ったように首を傾げて、

「アイドルマスターであることは、人に言うてはいけないことになってるので。極秘事項というやつですね。状況が状況でしたし、お伝えする暇ありませんでしたから」

咳払いを一つ。あずさは宙にしっかりと向き直り、

「きちんと自己紹介させていただきますね。私は、三浦あずさと申します」

相変わらずゆったりとした雰囲気崩さず、間延びする口調であずさは言った。続けて同伴していた千早という少女を示すと、控えていた千早が一步前が出る。

「如月千早です。天川宙さん」

「ん……？ ああ、うん」

妙な違和感。如月千早の印象に食い違いが生じたせいだ。

千早に対する第一印象は“クールで大人びた人物”であり。目の前にいる、心なしか頬を赤らめている少女ではない。上目遣いの視

線には、どこか喜びと期待に満ち溢れたものがあって、まるで恋焦がれた男性に出会った姫君の様相だ。その様子はひどく、在り得ないほどに、千早の印象と噛み合わなかった。

「どうも“はじめまして”」

「あ……」

気に障ることを言ってしまっただろうか？ 瞳に宿っていた期待は沈み、一瞬俯いた彼女が顔を上げた時、想像通りの千早の顔があった。感情を表に出さない、表情に乏しい、クールな如月千早の顔が。

はじめまして、と事務的に答えて、千早はそれ以上余計なことを口にしなかった。

最初とのギャップに疑問を抱きながらも、追求はしなかった。それより大事なことは、自分の処遇が如何なるものかということ。モンデンキントをただの企業と甘く見てはいけない。国連所属の隕石除去実働組織でもあるのだから、権限は国際レベルで広く強い。しばらくの間、監視をつけられての生活もあるかもしれない。

警戒心もあり、睨みつけるような視線を向けながらも、しかしジョゼフはにやりと口端を吊り上げる。

「あなたには、会っていただきたい方がいるのです」

「俺に？ 誰と？」

予想外の言葉。怪訝な表情を隠さない宙だが、疑問の返答は別のところから返ってきた。ジョゼフ達を通ってきた通路の方だ。

「私が案内します。彼とは面識がありますから」

女性だった。緑色の事務員服。ショートカット。昔から知っている人。

「あなたはッ……」

ギリ、と歯が鳴るほど噛み締める。宙は明らかな敵意を剥き出しにして、今までの様子からは想像できないような冷たい視線を声の主に突き刺した。

「音無さん、なんであなたがこんな場所にいるんだ」

音無小鳥。四年前まで空前絶後の人気を誇ったデュオユニットの一人であり、当時マツリと共に日本中を虜にした彼女は、今や765プロの事務員として働く身であるはずだ。どうして小鳥が、モンデンキントの地下基地にいるのだろうか。

再度問う。どうしてここにいいのか、と。

「色々事情があるのよ。色々、ね」

小鳥は苦笑いを浮かべながら言った。気に食わない、曖昧な態度が癪に障る。宙は苦虫を噛み潰したような表情になって舌打ちする。

「また、誤魔化すのか!？」

「ち、違っわ。そんな意味じゃ」

「嘔吐きの言うことなんて信用できないだろ！ 違っって言うなら、あの時の言葉の意味をここで教えてくれよ!」

意味、分かるよな？ 威圧感を込めた、まるで地獄の底から湧き上がってきたように低い声を放つ。

小鳥は言葉もなく押し黙った。まただんまりか、と宙は身体が灼熱感に苛まれるのを感じる。気づいた時には、小鳥の胸倉を容赦なく掴んでいた。

「ちょ、宙さん!？」

このままキャットウォークから突き落としそうな剣幕に春香達が止めに入るが、宙はまったく無視。憤怒の滲む瞳には、苦しそうな小鳥しか映っていない、映らない。

「分かってるんだ、全部嘘だつて。本当はあんた達が姉さんを
四年間貯め続けた恨みが、爆発する。」

「マツリ姉さんを殺したんだ!!」

格納庫の空気が一瞬で凍りついた。あれほど飛び交っていた整備員達の声も消え、春香達もその意味を呑み込めないようで、ただ宙だけが強い憎しみを顕にしていた。

小鳥は、思いを馳せるかのように目を瞑り、ゆっくりと宙の手を

解いた。言葉を選んでいゝ。誰から見てもそう思える様子で、やがて彼女は、

「聞いて欲しいの。本当のこと、全部。それは宙くんの人生を左右するかもしれないほど、大事なことなの。だから、聞いて欲しいの」

四年前から続く因縁によって、別たれた二人の道が交わる。

その様子を眺めていたヴェルトールの瞳が、密かに光り輝いたのを、誰も気付くことはなかった。

第三話 憂いの沼

第三話 憂いの沼

とある屋敷の一室。暗く沈んだ部屋だ、明かりは備えられた暖炉の火のみである。窓から伺える外の風景は雨風が吹き荒れる海。時折雷の閃光が奔り、部屋を一瞬明確に照らす。照らし出されたのは二つの人影だ。

一つは、車椅子に腰掛けた老女のもの。白い修道服のような身なりで、彼女の瞳には光がない。虚空をじっと見つめるその姿は出来の良い人形のように。

もう一つは、老女の隣に控えた男のものだ。老女の白い修道服に對して、こちらは黒いコート、黒い手袋、黒いブーツと全身黒尽くめ。身体をすっぽりと覆い隠す黒一色の服装は、それこそ、男自身が影であるようにも思わせる。整った顔立ちとは裏腹に、鋭く冷淡な瞳は深淵の幽暗を連想させる闇を携えていた。

二人はただ黙って待っている。先程“リファ”が任務から帰還したとの連絡を受けた。その本人が来るのを待っているのである。どうやら、色々と面倒があったようだが。

しばらくすると、ドアをノックもせず一人の少女が入ってきた。まだ女性特有の身体のラインも目立たないほど中性的で幼い少女。フトクリームのようにとぐろを巻く、高飛車な中世の貴族を髣髴とさせる独特な髪型をしている。

彼女がリファである。リファは歳相応の無邪気な笑顔を浮かべて、黒尽くめの男 “カラス” の横を通り過ぎて、車椅子の老女の方に駆け寄った。

「ママ」、ただいま！」

だが老女は虚ろな瞳のまま何も答えない。代わりに答えたのはカラスだ。

「おかえりなさい、リファ。任務ご苦労様です。……内容は芳しくなかったようですが」

ある程度、掻い摘んだ話はすでに聞いている。とはいえ掻い摘んだ内容だけでも卒倒ものだったのだから、内心でカラスは舌打ちした。

つまり、ヴェルツールがモンデンキントに奪われたという件。

「文句があるのはリファの方だもん！ ヴェルツールが勝手に動くなんて聞いてないし」

「そのことについて詳しく聞きたいのですよ」

今回リファに与えた任務は、ヴェルツールの遠隔操作システムのテストだった。

“組織”の重要な戦力でありながら、誰の操縦も受け付けずにいた孤高のIDOLであるヴェルツール。それをどうにかしようと、強引ながらも制御するためのシステムを試行錯誤の末に開発した。試験運用及び情報の収集を目的とした今回の任務は、組織の今後の方針を左右する重要な作戦であったのだが。

「命令もなしにヴェルツールは動き出し、拳句の果てにモンデンキントに奪われてしまった、と。三十年以上前に建造された機体を技術の粋を凝らして改装したというのに、なんたることだ。由々しき事態です」

「だからリファのせいじゃないって言ってるじゃん。ヴェルツールが悪いんだってば。元々よく分からない変なIDOLだったし」

確かに、あれは他のIDOLとは特性があまりにも違い過ぎる節があった。それこそ、何が起ころしても不思議ではない程度には。だとすれば、今回の件は遠隔操作システムの不具合というよりも、ヴェルツール自体の特異性が引き起こした可能性の方が高いかもしれない。そう、特異性といえば、

「報告にもありましたが、ヴェルツールを操ることのできる人物を

発見したそうですね？」

「そう、それぞれ、そうなの！ 聞いて、ヴェルツールを動かしたのはね、なんと男だったんだよ！ 信じられる？ 男だよ！？」

「男？ 現存する全てIDOLのマスターは全員女性。いや、“女性しか受け付けない”はず」

妙だな、とカラスは目を細めた。それもヴェルツールの特異性由来するものだと考えれば納得もできるが、下手をすれば、過去考察されてきたIDOLの性質を否定する形とも成り得る。絶対的な前提。IDOLを扱う上での根幹にある条件。

“IDOLに触れることができるのは女性だけ”。これを覆すことになるのだから。

だが考え方によっては、これはチャンスだ。

「マスターが発見されたということは、ヴェルツールの本格的な運用が計画できるようになります。モンデンキントとの戦力差を埋めることもできるでしょう。……そのために、リファ、あなたには失態を取り返してもらわねばなりませんね」

「あのマスターごと、ヴェルツールを取り返して来いってことだね。いいよ、リファもあいつには仕返ししなくちゃって思ってたからね」「期待していますよ」

言葉とは裏腹に、密かに冷笑を浮かべるカラス。元々リファがヴェルツールを止めていればこのような事態は起きなかったのに、という憤りもあったからだ。しかし高い能力を持っているとはいえ、リファもまだ子供。ほんの少し優しく接すれば命令に逆らうこともない。手駒としては扱いやすくて便利だ。

損失と収穫。天秤にかければ損失の方が大きい。今後、どのように計画を修正していくかが損失を取り戻す鍵になる。現状の“組織”にさほど余裕がないことを考えれば、早急な対策が必要となってくるだろう。

と、その時。ドアをノックする音で思考は中断された。

「失礼するわ」

扉を開けて入ってきたのは、白の長髪を伸ばした女性だ。

色素の全てが抜け落ちた髪は、異常を通り越して美しいまでに目を引く。白い雲、白い雪、それらよりも更に白く、ただただ純粹に白い。無垢というよりは、あえて虚無と表現した方がイメージに近いかもしれない。緩急のはっきりとしたスタイルはモデル並みだが、顔を隠すサングラス状のバイザーが違和感と妖しさを醸し出している。

腰に手を当て、口元に綺麗な笑みを浮かべる彼女には、強い存在感があった。どこぞの女エージェントと言っても通用しそうな風貌である。

「悪いけど、立ち聞きさせてもらったわ。おもしろい話をしているじゃない」

「それは盗み聞きと言っているのではないですか、“リコリス”。心配しなくても、説明するつもりでしたよ。あなたは重要な戦力の要ですからね」

「そう思っているのなら、ヴェルトールの奪還は私に任せてくれな
いかしら？」

ほう、とカラスは口元を吊り上げた。役割を横取りされそうにな
って不満を漏らすリファを無視して、リコリスは窓際の老女に近づ
き、

「ヴェルトールは、私ですら拒絶した強情なIDOLだった。それ
を動かしたのがどんな奴なのか、とても興味があるの。男のアイド
ルマスターなんて、お目にかかれたものでもないしね。カラス、な
んだかんだ言って奪取の機会がないわけじゃないんでしょ？」

「ええ、モンデンキントは、必ずヴェルトールを戦力に加えるはず
です。それが得体の知れない謎の機体だったとしても、彼らにも余
裕がないはずですから」

「……昨今のドロップ増加のことを言っているのね。確かにデメリ
ットを無視しても、IDOLが一機増える方が魅力的かもしれない
わね」

「それに“彼”の性格を考えれば、そうしたこと躊躇するとも思えませんか」

「彼？」

首を傾げるリコリスに、カラスは適当に相づちして、

「なに、過去の実体験に基づく推測ですよ。かなり確立の高い推測でもありますかね」

そう、ならいいけれど。曖昧な言葉にも関わらず、リコリスはそれ以上追及しない。そんなことよりも、例のマスターの方が興味的なだろう。男のアイドルマスター。本来在り得ない存在に期待を含ませる気持ちは、分からないでもない。

「では、あなた達には存分に働いてもらいましょうか。」

カラスは暗く邪悪な笑みを浮かべ、言った。

「我々“トウリアビータ”の悲願。“ミシユリンク”完成のためにね」

宙が案内されたのは、765プロ本社ビルでも特に豪華な部屋だった。扉の上にあるプレートには、社長室と書かれている。

地下に存在するモンデンキント基地からエレベーターで上がったきたはずが、そこはなんと、765プロ本社ビルと繋がっていたのだ。まさか本社ビルの地下に噂の秘密基地があるとは思いつきもなかった。心の許容範囲はとつくに振り切れているので、いい加減驚くことにすら疲れてくる。さすがにこれは末期だろう。

ビルの最上階付近に位置するこの部屋。ガラス張りの壁から覗く夜景は地上の星の如く。百万ドルの夜景を背後に、社長室の主たる男は堂々と座っていた。手を組み顎を寄せ、威風堂々の面構えだった。

高木順一郎。765プロの社長であり、弱小事務所だった765プロをわずか数年で業界屈指の大手に育て上げた稀代の手腕を持つ

人物。すでに還暦を過ぎてはいるはずの顔には、しわこそ寄っているが少年染みた明るさが滲んでいる。快活で悪戯好きの子供がそのまま成長したら、彼のようになるのではないだろうか。

四年前から何一つ変わっているようには見えなかった。時を飛び越えて来たかのように、外見も、雰囲気も、全てが過去の記憶にあるその通りの姿だ。それだけで、息を呑む。何故この人は、こうも変われずにいられるのだろうか。

初めて出会ったあの時と。

天川マツリをアイドルとしてスカウトした、あの時と。

渦巻いた感情を隠すために宙は、フンツ、とおどけて見せた。

「ふむ、なかなか肝が据わっている。四年前は内気な少年だったというのに」

顔を合わせて第一に、高木は宙をそう表した。如何にも満足そうな表情で。

「あんたは何にも変わらないな。相変わらず黒い服ばかり着やがって」

高木の外見は、昔と変わらず、黒で纏めたコーディネートのままだ。舞台裏で働く黒子を現代風にアレンジしたら、まさしく高木と同じ姿になるだろう。二人のやり取りを、小鳥が懐かしむように見ているので、宙はむっとして思考を切り替えた。

小鳥が会わせたかった人物が高木なら、つまり彼もモンデンキントの関係者だということ、間違いないだろう。加えて重役であることも様子から伺える。高木と小鳥の知られざる素顔を見せ付けられている今、ひどく情感を掻きまられる思いがある。

……嘘だらけじゃないか。昔も、今も。

四年前、彼らは宙を裏切った。少なくとも、宙はそう確信している。

「疲れているところをすまない。どうしても、君に話したいことがあってね」

「なんで今更なんだよ。あんた達なんか、姉さんを殺したあんた達

なんか……！」

宙の強い視線が高木を見据え、射抜く。黒々とした憎しみの色は強い。

あの時。

マツリが死んだ時、それは事故だったと報道された。撮影中の事故で、遺体も見つからないような悲惨な状況だったらしい。当時はマツリの身に不幸が降りかかったことの方が強過ぎて、詳しい状況を飲み込むことができなかったのを覚えている。目の前が真っ白になって、音すら遠ざかっていく。あの感覚を忘れることはできない。

結局遺体が帰ってくることはなく、葬式は遺体のない状態で執り行われた。多くのファンが詰め掛ける中、マツリの知名度とは裏腹に孤児院で慎ましく執り行われた葬式は、多くの人が涙し、彼女の冥福を祈った。

当然小鳥と高木もその場にいた。孤児院は子供がほとんどだから、それでは大変だろうと色々と手伝ってくれていたのだ。小鳥は泣きながら。高木は神妙な顔付きで。ただ皆、宙に対しては気遣いを見せていた。姉を失って魂が抜けてしまったかのような宙を、放つては置けなかったのだろう。

けれど、励ましの言葉はまったく耳に入らなかった。届くはずもなかった。心の拠りどころ失った宙に、言葉など、受け入れる余裕などなかったのだから。

ただ一言、あの言葉を除いて。

ごめんなさい、ごめんなさい。小鳥は異常なまでに泣いて宙に詫びる。私がしっかりしていれば、と。そして、

「私がしっかりしていれば、マツリが襲われることなんてなかったのに……！」

感情的になるあまり、口が滑ってしまったのは言うまでもなかった。だが小鳥が口を押さえた時にはもう遅い。ただ一言、言葉の違和を敏感に拾い上げた宙は、深く思考した。襲われた。この言葉の意味はなんだ。

事故だったんだろう？

襲われるって、何に？

何を、隠しているんだ？

……こいつらは嘘を吐いている

生まれた猜疑心は、ぼつかりと空いた心の穴を埋めるように広がっていった。猜疑心はやがて憎しみや怒りに変わり、その矛先を向ける相手は、当然のように高木達であった。彼らは何かを隠しているんだ。事実無根ではあったが、抛りどころを失った宙を突き動かすには、十分過ぎる起爆剤には間違いなかった。

宙は高木達を悪だと思い込むことで、壊れそうな自分を保ったのである。

事件の詳細に違和感があったのも事実で、警察も早過ぎる段階で捜査から手を引いた。メディアもそうだ、事件の話題性にはあまりにも早いネタの風化。流れの早い世の中とはいえ、おかしいほどに、マツリの死は流されていった。

まるで何かを隠そうとしているかのように、だ。

それも今となっては納得できる。

765プロにモンデンキントと関わりがあるのなら、その権力で情報を揉み消すことなど容易い。民間企業であるにも関わらず、国連にも強い発言権を有する一大組織にとってそれくらいは造作もないことだろう。それが本当なら、煮えくり返った宙のはらわたは、いつそ爆発してもおかしくない。

「あんだ達は、一体何を隠しているんだ！」

張り詰めた空気が部屋を包んだ。高木はじつと宙を見つめ、やがて、

「実は君に、折り入って頼みがあるのだ」

「頼み？ あんたが？」

鼻で笑って、ほとんど挑発に近い返答。

「もう分かっていると思うが、我々765プロとモンデンキントには密接な関わりがある。正確に言うと、765プロダクションとい

う芸能事務所はモンデンキントJP、つまり日本支部があるとある理由で進めているプロジェクトの一環なのだよ」

それはあまりにも突拍子もないことだ。業界屈指の芸能事務所とドロップ迎撃の全てを担う世界最大の多国籍企業。この二つに関連性があるとはとても考えられない。とはいえ、天海春香がアイドルマスターであるという、それを裏付けるような証拠があるので、一概に馬鹿馬鹿しいと批判もできない。

765プロとモンデンキントJP。関連性の薄い二つの事柄を結びつける要因とは。

「……IDOLか」

天海春香の件から連想すれば当然そこに行き着くのだが、それでも解せない。

アイドルとIDOL。それこそ関連性の欠片もないではないか。余計に頭が混乱してくる。

「モンデンキントJPは、ドロップの破壊にIDOLを使用している。これは日本が、核兵器など強力な兵器を、条約上所有できないのが理由だ。隕石除去人型“重機”。IDOLは兵器ではないからね」

「そんなの知ってるよ。一般的な常識レベルだ」

「では、IDOLに大きな特徴があるのは知っているかね？」

そこで高木は座っているデスクに置かれた電子端末を操作する。すると部屋の明かりが消え、天井から巨大なモニターが降りてきて、ガラス張りの壁を遮った。そこに映し出されたのは、先程までいた格納庫の映像である。

「この映像を見て、気付くことはないかね？」

言葉の真意を理解できぬまま、とりあえずおかしい所がないか探してみる。モンデンキントが所有している三体のIDOLと、ヴェルトール。無数に行き交う整備員。端には天海春香の姿があった。インベルに向かって、なにやら話しかけている様子だ。三浦あずさもそうだったが、マスターとはIDOLに話しかける癖でもあるの

だろうか。

なんてことはない、ただの整備風景だった。特に変わったところは見当たらない。

強いて言えば、作業をしている人間が全員女性であることくらいか。

「その通りだ。IDOLは女性しか触れさせない。まるで選り好みするかのようにね」

「馬鹿言うなよ。たかが機械だろ。機械は性別なんて選ばない」

「事実だ。実際、IDOLに関わる職員のほぼ全てが女性だ。君がここに来てから、私とジョゼフ君以外に、男性を見かけたことがあったかい」

「む……」

ない。これでもかというくらい女性しかいなかった。自分の存在が浮いているような違和感があつたのは、なるほど、周りが女性だらけだったからかもしれない。そういえば事件の直後、如月千早も、IDOLに乗っている自分を見て驚いていたのを思い出す。

宙は視線を下に、親指の爪を噛んで、考え込む姿勢で沈黙した。

本当にIDOLの意思なんてものが存在するのだろうか、と。

……あるわけがない。所詮機械だぞ。でも。

IDOLに話しかけていた三浦あずさや天海春香のこともある。

それに。

“信じろと訴えかけてきたあの声”は、否定することができない。宙の操縦だけに反応したことや、エピメテウスに襲われた宙を救ったヴェルトールの行動は、ただの機械的な反射に位置付けてもいいものなのだろうか。ただの機械と、本当に断じてもいいのだろうか。

「特にアイドルマスターは特殊だ。IDOL自身が気に入った女性しか搭乗を許さず、気紛れで動かないことすらある。だからマスター達は、日々女性としての魅力を磨く必要があつたのだ。芸能活動というのは、その手段だよ」

それこそが765プロダクション。アイドルマスターの候補生発見と育成という一大プロジェクト。そして高木達の正体であった。高木は責任者として、小鳥は補佐として、モンデンキントJPに所属しているという。

出鱈目ではあるが、一概に全てを否定するには、今日一日で、宙は色んなものを目撃し過ぎていた。小鳥は真剣な表情を崩さないし、高木は相変わらず不敵な表情だが、それ故に心の内が読めない。宙自身も錯乱に近い状態で、何が本当で嘘なのか、判断するにはいまいち信憑性が薄く。

「待て、待て待て！ その話が本当だとしてだ。あんたは、俺に何を求めるって言うんだ」

混乱から抜け出そうと、一度考察は捨て置く。代わりに、明確に答えが帰ってくるであろう疑問を提示。例え全てが真実だと前提に置いたとして、自分に何の力もないことに変わりはない。天川宙が無力であることは、同じように前提にあることなのだ。

「いや、君にしかできないことがある」

ここからが本題だ、と高木は前置きして、

「今回君が乗った黒いIDOL。先程調べてみたのだが、少々他とは毛色の違うIDOLのようだ。男性の君が操縦できるのだから、尚更だね」

つまり前提が崩れる。IDOLは女性しか受け付けられない。その大前提が。

「加えてここ数ヶ月、ドロップの落下頻度が急激な勢いで上昇している。原因は目下解明中だが、その間にもドロップは地球に落下し続けている。我々モンデンキントはその対策のため、一機でも多くのIDOLを必要としている」

「……先が読めたぞ」

「これ以上言葉を重ねるのは意味がないな。単刀直入に言おう」
是非に、と。願いの強さを強調した後言葉が来た。

「アイドルマスターとなり、我々と共にドロップの脅威と戦ってくれないか」

それは。その言葉は。何の変哲もない生活を送っていた少年を、ある日突然、夢にも思わない、想定外の、奇想天外な、めくるめく冒険活劇の待つ魔法の本の世界に誘う古本屋を経営する老人の言葉くらいに、衝撃的な意味合いを含んでいた。いや、現実に起こっている分、それより遥かに強力な意味を含んで、天川宙を貫いたのだった。

だから成り行きを見守っていた小鳥が慌てるのも、当たり前のことだったのだろう。

「社長、しかし彼は……！」

「正体不明のあのIDOLを解析するには、マスターの存在が必要不可欠だ。この状況下、迎撃の頭数に加えるにしてもね。すでにマスターと成り得る人物がいる以上、彼に委ねてみたいと思うのだ。どうかね宙君」

「……」

「我々と共に、世界を救ってくれないだろうか」

世界を救う。まるで正義のヒーローになれと言われているようで確かに、良い響きではあった。誰にできることでもない。おまえは選ばれたのだ。そういうものに、かつては憧れたのではなかったのか。姉さんのような正義のヒーローに。特別な存在に。

けれど。

「お断りだ。冗談じゃない」

真っ向から容赦なく躊躇いなく、宙は高木の言葉を切り捨てた。

右の人差し指を、びつと高木に向ける。形容できない混沌とした感情で。

「それだ」

高木は表情を崩さない。

「その態度だ！」

体内を黒い感情が駆け巡る。怒りのあまり、歯をぎしりと噛み鳴らす。力を込め過ぎるあまり手が震えて、息が荒くなる。大人しく話を聞いていた余波と言わんばかりに、心の奥から沸いて出てくる感情を抑える術が分からない。

「あんたは何も分かつちやいない！俺がここに来たのは姉さんのことを聞くためだ、あんたのお願いを聞くためじゃない。世界を救う？ ああ、あんた達はそうやって大きなことを成し遂げている気になっているのかもしれないが、勘違いするな。あんた達は人殺しなんだよ！！」

こんな奴らに守られなければならぬ世界なら、滅んでしまえばいい。究極的に言ってしまうえば、世界の命運よりも、天川マツリという姉の存在の方が、宙にとっては大切であるということだった。

お前は度が過ぎる。それは姉弟愛というより崇拜だ。誰かがそう言ったのを思い出す。上等だ。マツリは宙にとって太陽。つまり、神にも等しい存在だったのだから。神がない世界の存在意義などたかが知れている。

荒く息を吐き出し言葉を切った宙は、抜き身の刀の如き鋭さで二人を睨みつけた。文句があるなら言ってみればいい。その口から、まだくだらない言葉が出てくるようならば、殴り殺してやる。嘘じゃない。それくらい、自分は自分の制御を失っているのだと宙は分かっているつもりだった。

胸の動悸を抑えながら、宙は待つ。

「……その通りだ」

高木は言つて、椅子から立ち上がった。

君が正しい、と。宙を肯定した彼は、デスクを回り込んで宙の前まで移動し、まず、膝を着く。両膝だ。立ち膝の状態から、今度は両手について四つん這いの格好になり、L時になっている膝を更に折り曲げれば。

それは土下座だ。

己の非を身体全体で表わす日本で最大級の、謝罪だ。

「……ッ！」

「まず私がしなくてはならないのは、君に謝罪することだった。罪のない君が苦しみ続けてきたのは、間違いなく私のせいだ。私が愚かだったからだ。宙君、今更何を言っても、取り返しがつかないのは重々承知だ。許してもらおうなどとは思わない」

だがしかし、言わせてほしい。

「すまなかった……!!」

宙は正直戸惑った。あの高木順一郎が、頭を垂れている。天川宙に。恥も外聞もなく。たかだか二十歳にも満たない子供に、強大な権力すら持つ大人が。心なしか、その背中小さく見えてしかたがなくて、こんな高木の姿を、宙は初めて目の当たりにしたのだった。「な、何を素直に謝ってるんだよ……。そんなんで許してもらえると、思ってたのかよ！」

憤りも、憎しみも、ある種落胆さえ覚えてしまう。一時期は憧憬の念すら抱いた男が小さく縮こまって謝っている姿など、思いとは反して、決して見たいものではなかった。

「どうしてそこまで、こんなガキに頭下げてまで。俺に期待するほどの価値なんてない！」

「君じゃないといけない」

「どうして……!!」

「君がマツリ君の弟だからだ。継いでくれないか。君に、マツリ君の意思を継いでほしい」

「姉さんの、意思？」

高木の言わんとしていることが分からない。高木が自分に要求しているのはアイドルマスターになることで、姉さんの意思とそれの間になんの関係があるというのだ。あるわけがない。あるのだとしたら、それは高木達とマツリの、765プロとしての関係だけだろう。IDOLとの関係なんて、そんなもの。

分からない。今日は分からないことだらけだ。自分が分からなくなるくらい。

「君の言う通り、私達は君に嘘を吐いてきた。話せない事情があったのだ。いつかは全てを話さなければと思い、伝えられない悔しさが私達にもあった。しかし、それ以上に、マツリ君を失った君の苦しみに比べれば、それは些細な悔しさだ」

そう言った高木の姿は、宙が知る四年前の彼と変わりはなかった。マツリをアイドルの道へ導いた高木順一郎。マツリに歌う幸せを授けた、かつての優しいその人であった。

ふと過ぎった感情に宙は首を振った。そんな思い出、とっくの昔に捨て去ったものだと思っていたのに。

「宙君、ヌービアムのこととは知っているわよね」

高木の言葉を引き継いで小鳥がモニターに表示したのは、黒い装甲に紫のラインの入ったIDOLだった。知っている。数年前“事故”によって大破し、解体処分になったと報道されたプロメテウス3・ヌービアムである。黒く逞しい威容を見かけなくなって、すでに久しい。当時その報道を聞いたのは、確か。

天川マツリが死んだ時期と、ちょうど同じ。

「……ちよつと待てよ」

宙の頭の中に、パズルのピースが浮き出てくる。

「一般には解体処分ということになっているけれど、それは偽りの情報なの」

本当は、強奪されたのよ。

小鳥が言葉を紡ぐたびに、パズルのピースが頭の中で一つ、また一つと現れて組み合わさっていく。

「……待てよ」

「私達と敵対している組織があるの。“トウリアビータ”というわ。四年前、私達はドロップ迎撃任務の際、彼らから攻撃を受けて、ヌービアムはほとんど撃墜される形で奪われてしまった。……搭乗していたアイドルマスターと共に」

「待てつて言ってるだろ！」

765プロとモンデンキント。そうだ、最初からこの二つの関係

性は提示されていたではないか。だとしたら、あるかもしれない。予測できたかもしれない。天川マツリとIDOLの関係性を。あるはずがないと思いついて二つの、どうしようもなく繋がって、断ち切れないくらい強い関係性を。

マツリとIDOL。マツリの死と同じくして強奪されたヌービーム。765プロがアイドルマスターを発見育成するためのプロジェクトだということ。マスターには女性しかねないということ。

最近ね、よく星を見る機会があるの。

四年前の真実の断片が、宙の頭の中で組み合わさっていく。だがその全体が現れてくるほど、宙は何度も首を振った。まさか、と。

それはとても綺麗で、いつも心を奪われるの。

あの時、マツリが宙に言っていた言葉の真意は、つまり。

呆然と佇む宙に、高木が最後の一言を、

「彼女は、天川マツリ君は」

いつか、あなたにも見せてあげたいわね。

「ヌービームの、アイドルマスターだったのだ」

隠された真実を、言い放ったのだった。

IDOL操縦の天才。完全無欠のエース。それが天川マツリの肩書きだった。

らしい。

ドロップ撃墜率一〇〇パーセント。如何なる巨大ドロップでさえ、彼女の腕を持ってすればいとも容易く。どんなに困難なミッションも成功させて、笑顔で戻ってくる。天川マツリは完璧だった。アイドルとしても、アイドルマスターとしても、非の打ち所がないほどに。誰もが認めるほどに。

だからこそ、彼女を襲ったあの事件は、圧倒的実力を持つ彼女ですら、回避することのできないものだったのだらう。

知らなかった。自分の姉がIDOLに乗って、人類を守っていたなんて、天川宙はまったく知らなかった。知る由も、なかったのだった。姉さんのことはなんでも知っている、なんて思い上がりも甚だしい。大事なことは何一つ知らないではないか。宙は、胸を締め付けてくる事実を持って余したまま、ロビーの椅子に腰を下ろしていた。

考える時間がほしい。結局、考え抜いた末に、掠れた声で宙は答えた。高木達の視線から逃げるように社長室を出て、帰路につく気力もなく、こうしてロビーの椅子に身を預けているのである。夜も遅いための、人の行き交いは昼よりも少ない。この状況ではそれがありがたかった。

「俺が、姉さんの意思を継ぐ……」

死んだマツリ of 意思を継ぎ、アイドルマスターとして地球を守る。高木はそれを望んでいた。その力があるのだと言っていたけれど。

「なに考えてるんだ。これじゃまるで」

高木の誘いを受け入れるつもりみたいではないか。

さも、アイドルマスターになるのが自然な流れみたいに、考えている。それは違う。

宙にはIDOLに乗る理由など欠片もない。天川マツリは死んだのだ、遺言もないまま。そんな彼女の意思を継げと言うのが、おかしい話だ。マツリは自分の意志を託してなどいないのだから。高木達が勝手にのたまっているに過ぎない。彼女の気持ちなど、今となっては誰にも分からないことである。

だからこそ考えてしまう。

あの人ならなんて言うのか、と。

考えれば考えるほど、迷宮に迷い込んでいくようだった。突きつけられた事実は信じられないほど出鱈目なことばかりで、反してそれらを裏付ける体験もしてしまった。高木達の言っていることは本当なのかもしれない。だとすれば、誰も悪くない。天川マツリが死

んでしまったことに関して、責任はどうあれ、誰にも罪はないのではないか。

高木達も苦しんでいたのではだろうか。そう、感じてしまう。しまうけれど。

それでも天川宙は、彼らを許すことができない。

例え、彼らが自分と同じように悲しみ、苦しみ、良心の呵責に押し潰されそうになりながら生きてきたのだとしても。本心と立場のせめぎ合いの中で痛みへのたうちながら泣き叫んでいたとしても。どれだけ懸命であろうとも、彼らを許すわけにはいかない。許しては、いけないのだ。

そんな簡単に決着をつけてしまえるほど、両者の間に横たわった溝は、容易いものではないのだから。

故に宙は、高木の誘いを受けることが憚れているのだった。

「元氣、ないですね」

声は背後からだった。振り向くと、如何にも心配そうな様子の女性が立っている。三浦あずさだ。その隣には二人、中学生くらいの少女達が一緒だった。

前髪を上げて大きく額を見せる長髪の少女が一人。タートルネックのカットソーの上に、紺色のハイウエストワンピース。ピンクのレザーブーツが、彼女によく似合っている。外見だけ見れば実に女の子らしい、可愛い様子だが、不機嫌さを隠しもしない辺り、よほど強気な性格と見受けられた。

見た目に気を使っています。言葉にせずとも伝わってくる少女とは対照的に、少々古びた格好の少女がもう一人。

笑顔が眩しい少女だった。大きく咲いた向日葵のような笑顔が似合う子で、天然のウェーブのかかった髪を結い上げツインテールにし、活発的で明るい印象を受ける。長い間着ている服なのか、トレーナーの首元はダブダブに伸びていた。古びた、と表現したのはそこからだ。その首から、カエルのポシエットをぶら下げている。

見覚えのある二人だった。

「水瀬伊織と高槻やよい、か？」

最近テレビに出るようになった売り出し中の二人である。オールバック娘が水瀬伊織で、ダブダブ娘が高槻やよいだ。

「へえ、この水瀬伊織ちゃんのことをちゃんと知っているみたいね。褒めてあげる」

「……別に」

芸能関係の記事を調べるのは、悪いことに、半ば癖のようなものだった。元々はアイドルとして活躍するマツリを追っている内に、段々と詳しくなっていたのが始まりだけれど、マツリのいない今では、意味のない行為に過ぎない。

「なに、その態度。それにパツとしない顔ねえ。こんな奴がIDOLを動かしたなんて、信じられない。ただの誤作動とかじゃなくて？」

物を見定めるように下から上にジロジロ見てくる伊織の態度こそ、初対面の人間に対するものではないだろう。なんて慇懃無礼だ。確か彼女は、テレビでは愛想の良いキャラクターで通っていた気がする。なるほど、猫被りだったというわけだな。

「あんた本当にアイドルマスターになるの？　悪いこと言わないからやめときなさい。あんたみたいな暗い奴が身内にいたら、こっちの気分も悪くなるもの」

「余計なお世話だよ……！」

初対面でここまで女王様でいられると、もはや不快を通り越してある意味清々しくすら思えてくる。が、頭にくるかどうかは話が別。傲慢不遜な態度を崩さない伊織との一触即発の雰囲気は、

「い、伊織ちゃん、失礼だよ……。あの、初めまして。高槻やよいって言います！　男の人なのにIDOLを動かしたんですよね？　すごいですう！」

対してやよいは、底抜けに明るい笑顔を宙に向けた。こちらは前評判通りの性格らしく、人懐っこい感じのする、動物で例えるならばハムスターのような子だった。家が貧しくて趣味が節約という、

なんともサバイバルな情報を耳にしていたのだが、服装を見たところ、あながち冗談ではないのかもしれない。

……そうか、二人もアイドルマスターなのか。

会話から察す。765プロのアイドルは全員マスター候補。そう考えると、別段驚くべきことでもない。非常識な話だと溜息を吐きながらも納得してしまうあたり、順応してしまったのだなと諦めもする。もしくは頭が働いていないのかのどちらかだ。

「二人がどうしても会ってみたいと言うので」。伊織ちゃんは恥ずかしがってるだけですから、気にしないでください」

抗議の声があがるものの無視。あずさは隣に腰掛けると、宙と視線を合わせて、

「音無さんに話を聞きました。アイドルマスターになるんですか？」

「……俺はならない。なる理由がない」

「そう、ですか……」

言葉にしてようやく、宙はこれが意地だということに気付いた。高木達の思惑通りになるものかという、子供染みた意地の強さを、ここにきて初めて感じ取ったのだった。それでいい。乗る理由もなければ誘いを受ける道理もない。ないない尽くしで、そこに意地まで加わったのなら、もう悩み必要なんてないさ。俺は、マスターになんかならない。

ただ、わずかに脳裏を過ぎるのはあの声のこと。

「せっかく、あの子もあなたを気に入っていたのに」

「俺は巻き込まれただけなんだ。姉さんのことだつてどこまで本当なんだか」

「だったら早く帰りなさいよ。そんなに嫌なら、なんでここでウジウジ悩んの？ 口では理由がないとか言ってるけど、本当は自信がないだけでしょ」

伊織からの明らかな挑発に、宙は顔をしかめた。自信がないから。伊織の言う通り、本当は自信がないだけなのではないか。心のどこかで、否定のできない自分がいた。

マツリと同じ使命を背負う。本来ならば、それこそ光栄で、諸手を挙げて喜ぶ出来事のはずだ。自分から食い付くほどには魅力的なはずだろう、憧れていた姉の後を継ぐのだから。それを意固地になつて拒否しているのは、単純に、恥を晒して高木達に笑われるのが悔しいから。そうでないと言えぬ。

他ならぬ宇宙自身でさえ否定できないというのに。

今自分を動かしている原動力だって、小さな意地だと、自分でも思つただろうに。

「ほら、何も言い返せないじゃない」

「う、うるさい！ どうせ俺は姉さんみたいにはなれないんだよ！」

「何が姉さんよ。気に食わないわ、やつぱりあんたなんかアイドルマスターは勤まらない。帰りなさい、それですつと頑固に意地を張つてればいいのよ。邪魔ね」

伊織ちゃん！ こんな奴ただの根性なしじゃない！ 言い過ぎだと主張するあずさに、対して伊織も声を荒げた。期待外れと蔑む視線を宙に向け、

「男がマスターになるつて言うからどんな奴かと思つたけど、とんだ腑抜けだわ。ただのシスコンじゃない。こんな奴が弟じゃ、“あの”天川マツリもたかが知れるわね」

「……おまえッ、今のは聞き捨てならないぞ！」

こいつは姉さんを馬鹿にしゃがった、よりにもよつて俺を材料に宙にはそれがどうしても許せなかつた。自分はいくら貶められようと我慢できる。だが、マツリまで同列に扱われることに宙は憤怒した。椅子から立ち上がり、伊織を指差して怒鳴る。姉さんの凄さも何も知らないくせに馬鹿にしたな！？

「何も知らないくせに知つたような口を叩きやがつてー！！」

「知らないわよ、知つたことじゃない」

伊織は憤る宙をそう切つて捨てた。

「私達は、アイドルマスターという仕事に誇りを持つてるわ。そんな中途半端な気持ちでマスターになられたつていい迷惑よ。誇りも

覚悟もないあんたなんか！」

言い返そうとして、しかし宙は何も言えなかった。伊織の言うとおり、今の自分には誇りも覚悟もない。あるのは下手なプライドだけだ。意固地になって、何一つ決められず前に踏み出すことの出来ない臆病者だ。

姉さんならこんな時どうしたのだろうか。そう考えてしまつ自分は、弱いのだろうか。

視線を地に落とした宙に、伊織は鼻を鳴らして踵を返す。もう用はないと言わんばかりに。歩を進める伊織を追いかけて行くやよい。二人の足音を聴きながら、宙はゴチャゴチャと入り混じつた思考の海に身を沈めていった。

「これだけ言っておくわ」

去り際、背を向けたまま伊織は、ほとんど叫んで、

「大事なのは、あんたがどうしたいかでしょ!？」

その言葉の意味は、空虚な宙の心をズンツ、と射抜いた。

思わず顔を上げた先、去っていく伊織とやよいに、しかし宙は何もできずに見送ることしかできなかった。天井を見上げて、五里霧中な己の明日に考えを巡らせる。

自分がどうしたいか。そんなこと、この四年間考えもしなかった。ただマツリが死んだ事実だけが重く押し掛かり、道の見えない明日をがむしゃらに走っていただけ。

沈黙する宙に、あずさは相変わらず“心配そうな”表情で頭を下げた。

「すいません。伊織ちゃんは、ちょっと勝気な子で……」

「やめろよ」

「え？」

「やめろよ、優しいフリなんてごめんだ！」

「そんなフリなんて、私は本当に」

「嘘だ! 皆そうだ、優しいフリをして、最後には裏切るんだ!」
慰めるつもりだったのか、肩に置かれようとした手を振り払い、

宙はついに走り出した。気持ち悪い。勝手に触らないでくれ。捨て台詞を散々残して、逃げるように、あるいは何かを振り切るようにして宙はビルを後にした。最後に、ポツンと残されたあずさの所在なさ気な姿だけを、瞳に映して。

どうしてあんなに気が立ったのか、説明はできない。今日起こった出来事に混乱したのもあっただろうし、伊織との口論に腹が立っていたのもあっただろう。でもおそらくは、あずさの優しさが怖かった。それが一番の理由なのかもと、夜の街をひたすら走りながら、宙は考えていた。

あの人は優しいんだ。まるで、姉さんのように。

不思議な優しさだった。後になってからそう思う。今日出会ったばかりの自分を、あんなに“心配”してくれたあずさの気持ちは、正直、暖か過ぎて、受け入れ難かったのだ。高木達に裏切られ、誰も信用できなくなつて、他人を避けていた宙にとつては、三浦あずさの存在は計り知れないものだったのかもしれない。とてつもなく。

宙の心に、大きくその存在を残す程度には。

この手を包んだ彼女の指先の感触が、今になって鮮明に蘇ってきたのだ。

第四話 スペースエンカウンター

第四話 スペースエンカウンター

時が経つのは早いもので、あれから一週間が経つ。

高木と小鳥は、地下の格納庫でヴェルトールについての説明を受けていた。

IDOLの中心核である“コア”と呼ばれる球体を始め、黒い装甲の各部には長く伸びたケーブルが繋がっており、それらがヴェルトールの情報を吸い上げていく。ここ一週間、整備員達はヴェルトールの解析作業に時間のほとんどを費やしていた。

「やっぱりあかんですわ。ブラックボックスの多いこと。洒落になりませんわ。バラせないとなると、解析にはまだ時間が……」

困ったように頭を掻いた大阪弁の女性は、整備班を取り仕切る整備長だ。目の下にできたくまが、連日の忙しさを物語っている。彼女は手元の資料に目を通しながら、二人に解析結果を報告した。芳しくないのは、無論、先の言葉から分かる通りだ。

「とにかくセキュリティが硬過ぎて情報が吸い出せへんで推測になります、このIDOL、そもそも通常のIDOLとは設計思想からして違うようですね」

曰く、ヴェルトールは対ドロップ用ではなく“戦闘用”IDOLだと言う。

外見的な違いからもインベル達とのコンセプトの差が汲み取れるだろう。無骨さが目立つ本来のIDOLと比べて、ヴェルトールはスリムで、そしてより人型に近い。人型である故の汎用性を更に突き詰めた形。構造的な違いも、そこかしこに見受けられるのがヴェルトールの特徴だった。

IDOLとしての“本体”に、増設されたいくつもの装備群。例

えるならばそれは、戦場に赴く兵士が完全武装するのと同じである。純粹にIDOLとしての機能も持ち合わせているとはいえ、ここまですら異端ならば、もはやIDOLとは違うものと定義できるかもしれない。

多段構造で折り重なった腰のスラスタ。両肩に装備された、全長に匹敵する巨大な盾。厳密に言えば複数の装甲が繋ぎ合わされたバインダーだ。加えて背中に二つ並ぶ“鞘”。まさしく、騎士甲冑を纏う兵士のそれだ。脚部も従来のロケットノズルとは異なりスラスタ方式で、本来の末端肥大気味のデザインより直線的かつ鋭利である。

これらは全て、隕石除去人型重機としては“余計”なものだ。特に、ヴェルトールは重量の観点からして、設計思想に問題がある。

IDOLが巨大な人型を維持できているのは、ひとえに慣性制御のおかげである。慣性制御。文字通り、慣性を操り、発揮される効果は重力を御する。そんなオーバーテクノロジーのおかげで人型を構成するに至っているわけだが、もちろん制御できる限界も存在し、機体を形作るフレームや装甲にかかる負担をゼロにできるわけではない。

つまり軽ければ軽いほど良い。のだが、ヴェルトールはモンデンキントの有するIDOLの平均重量を、軽く二倍以上はオーバーしている。これだけ重い機体ともなれば、慣性制御の大半を機体の維持に回さざるを得ず、その他の精密な制御がおろそかになってしまう。どう考えても、ドロップを破壊するには不向きなのだ。

そういう観点から見ても、ヴェルトールは戦うために建造されたIDOL。とどのつまり、戦闘用であることは、疑いようがないのである。ましてや“盾”と“鞘に納められている物”など、戦うための道具そのものなのだから。

とはいえ、いかんせん分解することのできない、所謂ブラックボックスのせいで作業は難航している。トゥリアビータが建造したで

あろう謎のIDOLヴェルツール。これ以上の解析には、やはりマスターの存在が必要不可欠だ。

「とりあえず再度のシンクロテストと、引き続き解析作業を続けま
すさかい。まあ、状態はええですし、一応、作戦には対応できると思
います」

動かさなくては意味がない、と整備長は締めくくった。

そう、ヴェルツールはあれから一度も動いたことがない。

現在モンデンキントに所属するマスターは全部で十一人。その全
員がシンクロテストを行った結果、誰一人として、ヴェルツールを
起動するには至らなかつたのだ。

IDOLには個々人による相性があるとはいえ、ヴェルツールの
場合、むしろ誰かを待っていて、他は眼中にない印象すら受けた。
全員が拒否されたとなると、後はヴェルツールの待つその誰かに頼
る他手段はない。

やはりヴェルツールを動かすには、宙の存在が鍵だった。

彼からの連絡は一向にない。高木としては、あれだけの話をして
心の整理がつかないのも当然の話であることも理解しているが、一
日でも早くヴェルツールを迎撃戦力として加えたいのもまた事実で
ある。ドロップの落下率が、今週になってまた増大したのも、焦り
の一因だった。それでも。

その気持ちは、良くはない。悪いとさえ言える。

自分は彼の苦しみを理解していながら、なおこちら側に引き込も
うとしているのだから。

「社長？」

「小鳥君、私は……。一人の人間として最低の行いをしている」

本来ならば宙がアイドルマスターになる理由など、欠片もない。
マツリのことにしたって、それは別の話だ。だがその別と割り切っ
た話を引き合いにして、交渉材料としたのはまったくもって卑怯だ
った。彼の気持ちを逆手に取るような真似だった。

「それでも私は、彼がアイドルマスターとなることを切望している

のだ。この機体が彼にしか動かせない以上、彼がマスターになる以外に方法はないだろう。我々には余裕がない。使えるものは使わなければ、為り行かんのだ」

罪深いものだがな、と。高木は視線を落とした。

客観的、利益主義で計算的な思考。モンデンキントJP最高責任者としての立場からしてみれば至極当然の判断であるはずのそれも、高木順一郎としての感情とは相反する。宙が真実を知ったことは嬉しくもあり、同時に自分達の罪を軽くしたいだけの自己満足ではないのかと、高木はずっと考えていた。

本当ならば宙は何も知らず、心に傷を残したままでも、平和に暮らしていったはずなのに。二つの立場の齟齬に、高木は胸が締め付けられる思いだった。この歳になってもまだ、感情とは切り離せないものだと思いい知らされるとは思わなんだ。

「彼も、分かってくれると思います」

小鳥の言葉だって、それこそ、こちら側の勝手な思い込みに過ぎないのだから。

しかし、何をどう考えようとも、結局宙に協力を乞う以外道はない。

八方塞りだった。

「どう転ぶかは彼次第か。……が、ただ手を拱いているわけにもいくまい」

どちらに転ぶかは彼次第でも、指先で突くくらいは、しなくてはならないだろう。それが高木の立場であり。高木順一郎の、決めた道だ。

「小鳥君、ジュネーブの本部へ掛け合ってもらえるかね？ 急ぎだね」

「……また何か、無茶なことをするつもりですね」

何を思いついたんです？ 小鳥は呆れ顔で嘆息する。対照的に高木は、ふふふ、と不敵に笑みを浮かべた。

今日までの一週間とプラスして一日。あつという間の早さで時間は過ぎた。あつという間どころか、あつという間もなく。これ以上ない早さで駆け抜けた八日間の末、天川宙は再び765プロ本社ビルの前にいた。

高木からかかってきた電話がそもそもの原因で、あるうことが、例の返答を洩る宙に対して二の句も次がせずこう言い放ったのだ。た。

「宇宙に行ってみたくはないかね？」

冗談ではなく本気で言っているのだから手に負えない。よくあることだ気にするなそれじゃあ待っているよ。句読点くらい入れるよと言いたくなるくらい早口で捲くし立てて電話を切ったのが昨日のこと。何がよくあること、だ。往々にしてそんな言葉がまかり通るならば、人類はとつくに宇宙へ進出している。

現実問題。ドロップが大量に散乱する地球の周りは、今や人工衛星ですら数を限られるほど人類の進出を拒んでいる。話によれば、向こう二、三〇〇年はスペースシャトルも飛ばすことができない惨状らしい。IDOLが如何に特殊な存在であるかが分かるだろう。

さて、話を戻そう。宙はちょうど一週間とプラスして一日前に飛び出したビルを見上げてから、意を決して中に足を踏み入れた。

相変わらず携帯電話を片手に忙しく行き交う人々の群れ。その群れの中に唯一見知った顔を見つけて、宙は彼女に歩み寄った。高木が電話で告げた道案内とは、どうやら彼女のことのようにだ。腰まで届く長髪に凜とした瞳。まるで感情の読めない無表情。

如月千早。格納庫での自己紹介の時、彼女はそう名前を告げている。

「お待ちしていました。こちらです」

挨拶もなしに千早は背を向けて歩き始めた、早足で。驚くほど冷めている。クールと言えば聞こえはいいけれど、要するにただ冷血

漢に過ぎない。宙は無言で千早に続きながら、どこか、自分の似たような空気を感取ってそのように分析した。

案内は別段特殊な扉を潜るわけでもなく、普通のエレベーターに乗り込んで、扉を閉めただけだった。ただし二人だけで。他の介入を許さず、中に入るや否やすぐに扉を閉めて、千早は自分のIDカードをエレベーターのスロットに通す。地下基地へは、所属者のIDカードを利用することでしかできないのだという。

階数を示す扉上のランプが赤に変わり、下に降り始める重力を感じる。

「なあ、如月千早」

「なんでしょうか」

基地に着くまでの短い間、宙は千早に質問した。

「トウリアビータってのは、一体どんな組織なんだ？」

トウリアビータ。モンデンキントと同じくIDOLを所有し。そして天川マツリを死に追いやったという組織。詳しい話は聞けていないが、つまりその集団こそ宙から姉を奪い取った張本人であるならば、天川宙にとって、仇に他ならない。

高木と小鳥に代わる、恨みつらみの対象。

代わるとはいえ。それで高木達を許そうなどは、死んでも思えないけれど。

「まだ部外者であるあなたに、詳細をお話することはできません」

と、千早は切り捨てた。外見と行動を裏切ることなく、随分と突き放した言い方である。基本的に、如月千早は一見の人間に信用など欠片も置かないというのがよく分かった。そういうところも、親近感を持つくらい、宙と似通っている。似た者同士、同族嫌悪とはよく言ったものだが、そういう感情は沸き上がらない。

むしろ好意すら抱く。

「ですが」

千早は宙と視線を合わせて、わずかに黙ってから、

「それがあなたの決断の材料となるなら、少しだけお話ししよう」

アイドルマスターになるか否かの材料。そういう意味で言っているのだろう。果たして如月千早はどのように自分のことを聞いているのだろうか。

「トウリアビータは、私達と同じくIDOLを持つ組織。しかし行動はまったく異なるもので、複数の量産機を使って、私達からIDOLを奪取しようと企んでいる連中です」

「量産機……。モンデンキントにはないのか、量産機」

「彼らは些か特殊過ぎます。どういう経緯から知りませんが、擁する科学技術は現代技術の一世紀は先を行くとまで言われています。事実、“IDOLのコアを量産するなんて”モンデンキントには夢のまた夢みたいな話ですから」

「謎の科学技術を持った組織、か。そいつはなんともまあ……」
悪役に相応しい相手なのだろうか。姉の仇には、是非もないくらい。

そうこう話を聞いている間にエレベーターは地下基地へと着いた。白い、潔白なまでの通路を千早の先導で行くと、しばらくして彼女は歩を止めた。応じて宙も足を止める。まだ通路は先に続いているが、わずかに明かりが小さく、奥に行くにつれ鈍色が目立っている。格納庫へはここを真っ直ぐです、これ以上の案内は不要ですね。

千早はそれだけ言うと、一礼して踵を返した。本当に、ストイックな少女だ。

「礼を言うよ、如月」

「その呼び方……。いえ、なんでもありません」

振り向くこともなく立ち去った千早の声色は、何故か、怒っているようにも聞こえた。何に怒っているのか、検討もつかないが。そういえば最初に会った時どこかおかしな奴だったけれども。

とにかく。

如月なんて普通の呼び方に、まさか怒ったわけでも、ないだろう。

「じゃ、IDOLの操作方法はこんな感じな。心配あらへん、途中で分からんなつても、後は気合と根性とその他諸々でなんとかなるさかい」

「待て、待て待て！ 話がいきなり飛び過ぎな上に、こんな一昔前のゲームの説明書みたいな薄っぺらいマニュアル読ませたくらいで心配も何もあるか！」

『今日であなたもアイドルマスター！ 簡単、お手軽、IDOL操作説明書』とタイトルに書かれたわずか数ページの紙束を地面に叩きつけながら、宙は渾身の思いで怒鳴り込んだ。先の展開から脈絡もない会話でいきなり話を始めないでほしい。肝っ玉の小さい男やなあ、と呆れる関西弁の女性は、一体何様のつもりなのだろう。

そもそも案内された格納庫に出向くや否や、マニュアルを投げるように渡されて（実際投げられた）、それで何をするのかを問うてみれば、あるうことか、実際にドロップ迎撃の現場を職業体験だなんて言い出したのだから、脈絡どころか起伏も何もあったものじゃない。目が飛び出そうになった。もちろん、目は飛び出していないが。比喩だ。

一段、二段、過程を置いてきぼりにしないでほしい。

「だから大丈夫やて。IDOLの慣性制御のおかげで、対G訓練なんかの面倒なことも省けるし、素人でも安心設計やから。別にあなた一人で行かせるわけでもあらへんよ」

サポートが一人にもう一体IDOLが同行するとは言っても、半ば強引に呼び出しておいてこの有様では安心などできるはずもない。詐欺だと訴訟を起こしても通用しそうな強行軍だ。日本の法律はどこへ行った。

まあまあ、と背中を押されて。宙はヴェルトールの背中にあるハッチにほとんど突き落とされた。尻からコックピットに落ちて、呻きながら顔を上げると、中がずいぶん様変わりしていることに気付く。以前は単座だったものが複座になり、上下に座席が二つ用意さ

れている。一段下のサブパイロット席には、すでに人が座っていた。「お久しぶりです」。お尻、大丈夫ですか？」

「サポート役つて、あんただったのか。……あずささん」

間延びした口調が印象的の、虫も殺せないような超が付くほどの温厚な性格が、見ただけでわかるようなお人好しこと三浦あずさ。

彼女がサブパイロット席に座っているということは、尻餅をつく自分の隣にあるメインパイロット席が、用意されたプラチナチケットの正体というわけか。宙は立ち上がりながら思った。

「細かい操作はこちらで行いますから。基本操作、教わりましたか？」

「あんな適当なマニュアル一つで教わったことになるかは甚だ疑問だけど、まあ、覚えた。四肢を動かす程度ならなんとかなる」

と、思っけれど。言っつて、しかし宙は思い出したように顔を顰めた。

八日前のことである。ビルを飛び出した時、頭が混乱していたとはいえ、宙はあずさに酷い物言いをして逃げ帰ったのだ。それなのに、彼女はまるで何もなかったかのように親しげに接してくる。不気味で、裏があるのではないかと勘繰ってしまう。

「あの時はしょうがないですよ。心の整理がつかない時は、人間誰しもあなつて当然ですから」。私は気にしていませんよ」

この方は聖人君子様だろうか。八つ当たり同然の行為をあつさり受け入れるなんて。少なくとも宙には真似できなかった。真似できるはずもない。

なるほど、三浦あずさとは、こういう人なのだ。

大抵のことを許容できる並大抵ではない懐の広さ。まさしく偉大なる母性の塊というわけだ。それでもあずさのそれは異常に感じるほどで、ある種、危険だ。

「もう一度乗る気になつたんですね」

あずさの言葉を否定すれば嘘になる。電話の内容を考えれば、I DOLに乗ることになるのは予想できていた。もっとも、現状より

穏便かつ丁寧に事は進むと思っていたけれど。早足にも程がある。そういうことを踏まえた上で誘いに乗ったのは、考えなしにということではない。正直気は引けたが、しっかり、IDOLに乗る覚悟を決めてきた。

天川宙はまだ結論を出していない。選択肢を提示された上でどちらかを決めなくてはならないのなら、判断材料が欲しいと思ったのだ。だからこれは整備長の言う通り、職業体験で間違いないのだろ。う。そう、後は。

姉の見ていた星空の世界というのを、この目で見ておきたかった。『もう一度乗る気になったってことは、一ミリくらいは度胸があったのね。見直したわ』

と、待機状態で外を映し出していたモニターに顔を出したのは、伊織とやよいだ。

宙を補佐するもう一体のIDOLとは、二人の駆るプロメテウスシリーズ二番機こと、オレンジ色の眩しいネーブラである。構造的にはインベルとほぼ同じではあるが、頭部から伸びるブレード状の本角が逞しい。

『あなたのお守りなんて真っ平ごめんだけど、任務だから仕方なく付き合っただけなのよ。ありがたく思いなさい！』

「ぐっ、この野郎、言いたい放題……！」

それにしても、とやよいは首を傾げ、

『ドロップもないのに、よくIDOLの出撃が許可されたよね？』

『ヴェルトールのテスト訓練ってことで上層部に捻じ込んだらしいわよ、社長が』

突拍子がないと言うか何と言うか。珍しくあずさも呆れた様子で宙以外の全員が盛大な溜息を吐いた。高木の性格を理解している宙としては、毎度振り回されているのだな、と気の毒にすら思う。

ハマしないように操縦方法でも復習しておきなさい、と伊織の言葉が最後に通信が切れ、

「あいつ、俺に恨みでもあるのか？」

ぼやいた宙。テレビや雑誌で見る水瀬伊織は完全に猫被りだったわけで、実際の性格がああまで女王様なのも納得したが、あそこまで突っかかれる謂れはない。

腕を組んで考える宙に答えたのは、あずさだった。

「実は伊織ちゃん、マツリさんのファンだったんですよ」

「姉さんの？」

「伊織ちゃんがアイドルを目指したのは、マツリさんの影響があったみたいですよ。今でも熱狂的なファンがいるくらいの人ですから、別に不思議ではないでしょう？」

「……ああ」

そういうことが、と。無意識に口から出た言葉が宙の内心を表わしている。

天川マツリと音無小鳥は、日本の音楽史に残ると言われたほどのカリスマだった。加えてIDOL操縦の天才にして大先輩。ともすれば、水瀬伊織にとつて、尊敬していた亡き人物の弟がアイドルマスターの素質ありと聞いた時、当然にして関心が沸くはずだ。それがあの夜、やよいを引き連れて宙の前に現れた理由だったわけだ。

会って、期待外れだったわけだ。腑抜けた宙を見て失望した、と。ああ、確かにそれは怒鳴りたくもなるだろう、あの醜態では。

“あの”天川マツリも大したことないわね。

ともすれば、あの言葉も本気ではなかったのだろう。ただ宙を奮い立たせるための言葉で。ぐじぐじと悩んでいる宙に気合を入れるだけの、行為だった。おまえの姉はもつと強かったぞ、というお叱り。

……ちくしょう、これじゃあ、まるで格好悪いじゃないか。

宙は頬を叩き、やってやると言葉を紡いで、操縦席に腰を下ろした。メインパイロット席。IDOLの直接的な操縦をする場所。ここに座ったからには、頭を悩ませている事柄は後回しだ。宇宙を見て、高木や伊織が笑えないくらい完璧にこなして、それから決断すればいい。これ以上、馬鹿にされてたまるものか。宙とて男、意地

も張りたくなる。

宙が支給されたアイを起動スロットに差し込むと、心地良い駆動音がコックピットを満たした。ヴェルツールが喜んでいるかのような、そんな音だった。

「……まあ、よろしく頼むよ、ヴェルツール」

あずさの指示に従いながら調整を行う。発進は司令室からのバツクアップで、そう難しいものではないという。あの薄っぺらいマニュアルに何度も目を通してしていると、司令室から、担当管制官の声が聞こえてきた。

『宙くん……』

「音無、さん」

ヴェルツールの管制を担当するのは小鳥だった。モニターに映る彼女の表情は暗く、目も、合わせることもできないようだった。マツリの真相を知ったとはいえ、宙は小鳥に何も言うべきことが見つからず。睨むことしかできなかった。

それでも彼女はありったけの勇気を振り絞って、

『何も心配しなくていいから。私がしっかり、宇宙までサポートするからね』

言って、笑顔を見せた。無理をしている笑顔だ。だがこれが彼女の精一杯なのだろう。小鳥も罪を感じて四年間を過ごしてきたことに思い至り、

「……了解」

ただ、それだけ答えた。それ以上は “まだ” 言えない。

全ての調整を終えると、ジョセフが最後の確認をしてきた。

『よろしいですか？』

「ああ。一つ盛大に打ち上げてくれ」

花火ではありませんよ、と苦笑するジョセフ。

『それでは。IDOL、アクトオン・スタンバイ！』

ガクンッ、という振動と共に、ヴェルツールはカタパルトへと移動する。

不思議と緊張感はない。それどころか、安らぎすらしている。操縦桿から伝わってくる暖かさが、きつとその原因なのだろう。宙は不敵な笑みを浮かべた。

「ヴェルトール、アクトオン！」

瞬間、ヴェルトールは滑走路を疾駆する。空高く舞い上がり、一筋の光となって、宙は星屑の大海へと飛び立った。

オゾンの天蓋を突き抜けて軌道上へ辿り着いた宙は、思わず感嘆の吐息を漏らした。

暗く、黒く、人間の存在を許さない世界。それなのに、どうしてこつも心を奪うのか。煌く星々はまるで宝石のようで、吸い込まれそうな広大さは、今まで見たこともない未知だ。言葉で表すのも陳腐。

これが宇宙。しばらくの間、宙は呆然とモニターを眺めていた。

『ちよつと、しっかり制御しなさいよ。まだ引力圏内なんだからね』

「わ、分かっているさ、それくらい」

せつかくの気分が台無しだ。けれども伊織の言うことはもつともで、素人の宙をして、IDOLの操縦は何一つ予断を許さない難しいものだった。以前の操縦はやはりまぐれだったのか、一つの動作に集中しなければ、足一つ動かすこともままならない。

簡単、お手軽なんて詐欺もいいところである。重要な基本スキルすら説明書に載っていないゲームみたいに、不誠実極まりない。

「これが姉さんの見ていた世界、か」

マツリが心奪われた光景。納得だ、これほど神秘的な世界はそうないだろう。

重力から開放されたコックピットで、さながら海に身を漂わせるかの如く、宙は静かに気持ちで宇宙を視界に収める。人々の抱える悩みなどあまりに小さい、そう思わせる深淵の闇を見つめながら、

自分の気持ちを振り返った。小さな小さな悩みを、振り返る。理由がほしい。結論的に言えば、そういうことなのだろう。マツリの後を継いでアイドルマスターになるのは悪くない。でも、高木達との関係性が決断を邪魔している。ならば、それをプラスマイナスゼロにするような理由が欲しいのだ。IDOLに乗る、理由を。

そう考えた時。

“それ”は圧倒的な存在感と共に現れた。

突如、うるさいほどの警報が鳴り響く。何かと目を見張った。

『高熱源体、高速で接近中！ ドロップ？ いえ、これは……！？』

小鳥の悲鳴にも似た叫び。同時、モニターの映す宇宙の暗闇から這い出るように現れたそれは、決してドロップなどではなかった。

ヴェルツールと同じ黒く染められた人型。IDOL。宙は背筋に電流が奔る錯覚を覚えた。あのIDOLの纏う雰囲気は、先日のエピメテウスの比ではない。圧倒的なプレッシャーこそが、電流の正体だ。

「あれは……ヌービウム！？」

あずさが機体の名を呼ぶ。宙も知っている。過去に事故が原因で解体処理とされ、その実、強奪されて姿を消したプロメテウス3・ヌービウム。そうだ、あれは強奪された機体のはず。それが現れたということとは、つまり。

「あれが、トウリアビータ……！」

IDOLを有するモンデンキントの敵対組織。そして。マツリの仇だ。

凄まじい速度で接近するヌービウム。だが宙に対応できるだけの技量はなく、あずさもヴェルツールを満足に動かせない。焦る宙に、すぐに小鳥から指示が出た。

『宙くん、下がって！ あなたじゃどうにもならない。ここはネー

ブラに任せるのよ!」

『そういうこと。ここは伊織ちゃんに任せなさい。行くわよ、やよい!』

『うん! 宙さん、任せてください!』

次の瞬間、ネーブラはヌービウムとの距離を詰めるべく、ロケットノズルを噴射させて前進する。停止状態から一瞬で最高速度へとIDOLの慣性制御なくしては実現できない、力業の超加速だ。

『先手必勝!』

ネーブラの動きに無駄はなかった。加速姿勢から、右肘が後ろに回り、掌を握って拳とする。一つ一つの動作が歯車のように噛み合わさって流麗な動きを形作る。そのまま突撃姿勢。全体重を拳に乗せられる形だ。到底、宙には真似できない操縦技術。あれが本物のアイドルマスターが駆るIDOLの動き。

あれが本当のIDOL!

申し分ない加速力を前に、しかしヌービウムは回避行動を見せようとしない。愚直なまでに直線的に突き進んでくる。ネーブラの一撃は、ドロップを迎撃する時のそれと同じ威力を有しているにも関わらず、だ。何故と疑問を抱いた次の瞬間、宙はヌービウムの行動を疑った。

ヌービウムはあろうことか、加速したのだ。

加速。回避でも防御でもなく、加速。明らかに自殺行為だろうに、ヌービウムは迷いもなく速度を上げた。結果、ネーブラの攻撃がヒットするタイミングが早まる。

果たして。

突き出された拳に対し、ヌービウムが変形したのは、直後だった。

四肢を折り曲げ、IDOLが弾丸飛行をする際に行う形態変化。

正面から見て縦の面積を極限に減らした長方形のそれは、ネーブラの攻撃軌道上から機体を逸らすのに一役買った。確実に当たると踏んでいた攻撃は空を切り、嘲笑うかのように、ヌービウムはネーブラの胴体に強烈な体当たりをブチかました。

『そんな！？』

ヌービームの行動はそれで終わりではない。瞬時に人型に戻ると、弾かれるネーブラの腕部を素早く掴み、引き寄せて片方の拳を叩き込む。それでもまだまだ。相手が完全に姿勢を崩したにも関わらず、トドメとばかりに足蹴りを放ったではないか。

非情な追い討ちに、成す術もなく、大気摩擦で装甲を赤く染めながら、ネーブラは地球に落下していく。

「水瀬、高槻！……おい、やべえだろ、これ！」

「宙さん、一旦退きましよう！」

あずさに頷きを返し、ヴェルトールを後退させようとする宙。

だが“戦場”において、戦う意思もなくただ逃げるということは、狩る者と狩られる者の役割分担を明確化する。今のヴェルトールは、相手にとつてただの獲物である。

逃げ出す暇もなかった。息を吸って、吐く。それだけで、ヌービームはもう目の前に迫ってきた。ゼロ距離。

モニターがヌービームの頭部を大写しにした途端、コックピットに衝撃が走った。

「こ、こいつ……！」

『その程度なの？ ヴェルトールのマスター君』

「っ、通信！？」

スピーカーから流れてくる、女の声。

再確認する間もなく、次の一撃が胴体に食い込む。装甲の負荷がストレス急激に跳ね上がり、サブモニターが警告で赤く埋まっていく。そちらに気を取られれば更に躊躇ない攻撃が連打され、もはやサンドバツク状態だ。

「装甲強度が……。このままじゃ！」

あずさの読み上げたステータスに、舌打ち一つ、宙は思うように動かせない操縦に文句を吐きながら、なんとか腕部を正面で交差させる。けれど、それも気休めだ。

防御姿勢をとつてもなお突き刺さる衝撃。機体同士が接触する度

に、機体を保護する球状の重力殻^{レイヤー}、つまるところの防御フィールドが波紋を浮かばせながら歪む。

殺人的な威圧を持って襲い来るヌービウムに、初めて宙は現状を理解した。

これは戦闘である、と。

「ッ！ この野郎、姉さんの機体でよくも！」

「姉さん？ そう、まさか。まさか天川マツリの弟がヴェルトールのマスターだなんて、因果ね。これは運命だわ！」

「おまえ、姉さんのことを……！？」

ましてやその口振り、アイドルマスターとしての天川マツリと、何か因縁があるような意味を含んでいる。何者なのかという疑問をヌービウムは考えさせない。そんな暇は与えないと言わんばかりに、暴風の如き連打が、装甲を強く打ち付けていく。

物理攻撃の一切を遮断し、光学兵器すら無力化するIDOLの慣性制御^{II}重力殻だが、同じIDOLであるヌービウムには意味がない。同じ能力を有するが故に、全て緩和されてしまうのだ。重力殻が弱体化されている以上、重力殻にほとんどの防御力を依存しているIDOLにとって、装甲は紙切れにも等しい。

繰り返される一撃ごとにコックピットは上下左右に揺さ振られ、身体には痣が刻まれて、モニターの端に強打した額から赤い血が一筋流れた。

「くそつ、おまえらのせいで姉さんは……」

「逆恨みしないでちょうだい。天川マツリが、簡単にやられるお間抜けさんだっただけの話でしょうに」

「よくも言っただな……」

『短気で直情的。気の短い男は女に好かれないわよ。まあ、それも関係ない話ね。ヴェルトール、返してもらっわ』

また拳が深く突き刺さった。宙は反応すらできない。圧倒的過ぎる。レベルが違つどころか、もはや住んでいる次元が違つ。その差は決して埋められるものではなく、押し迫るヌービウムの姿は、宙

の心を恐怖で塗り潰していく。

息が、苦しい。酸素が、足りない。空気を、冷たい新鮮な空気を取り込まなければ、この加熱した心臓が爆発してしまう。

「宙さん、大丈夫ですか!?　しっかりしてください!」

「ふざけんな……!」

姉さんはこんな奴らに。そう思うと、身体が怒りで爆発してしまいそうだった。

奪われた命。帰らぬ思い出。それら全てが走馬灯のように駆け抜け、握り潰すように操縦桿を握る。矛先を見失った怒りが、ついに現れた仇の存在に鎌首を上げるのを、苦悶に喘ぐ意識の中で宙は感じた。

IDOLに乗る理由を探してここまで来た。そして、求めた理由が、目の前にいる。

「ヴェルツール、力を貸せ!」

宙は叫んだ。あずさ達と同じように、IDOLに語りかける。

「俺はトウリアビータを許さない。絶対に許さない!」

だから決めた。

「俺が姉さんの仇を取る。トウリアビータをぶっ潰して姉さんの無念を晴らす。そのために　俺はおまへのアイドルマスターになつてやる!」

決意し、操縦桿を握る手に力を入れる。身体を起こして、目の前の“敵”を凝視する。痛みの奔る腕だって、どんなに傷ついていたって無視して上げてみせる。呼吸を繰り返して、血液に、脳に、心臓に酸素を送れ。この一瞬だけならば、破裂したって構わないから。だから頼む、ヴェルツール。

「俺に力を寄越せえええええええええええ!!」

刹那、ヴェルツールの瞳が緑光色に輝き。

振り上げた拳が、当たるはずのない一撃が、ヌービラムの胸部を

打ち据えた。

各部は悲鳴をあげ、動く度に機体を歪めているというのに、だ。

『当たった？ ……面白いわ。そうでなくちゃ面白くない！』

「面白ついでに教えてやる。おまえらは今日、この場で、悪に大認定だ！」

故に、

「トウリアビータは、俺がブツ壊す！！」

言葉を切っ先として、ヴェルツールは握り締めた拳をヌービアムの顔面に見舞った。二度目の直撃。攻撃が二度も当たれば、もう偶然では在り得ない。手も足も出なかつた状況から一変して、“狩り”は互いの攻撃が交差する“戦い”へと段階を移したのだった。

その劇的な変化の原因は、声である。

“ ”

声がする。次はこう動けと。幻聴が鼓膜に刻まれ、宙はその通りに操縦桿を叩き込んだ。応じて繰り出される一撃に、危険と判断したのか、無敵を具現化したようなあのヌービアムが回避行動をとる。ロケットノズルが瞬き後方へ身を逸らしたところを、ヴェルツールの拳撃が摩過する。

声に導かれて攻撃を繰り出す宙の動きは、まるで別人だ。

「すごい……。まだ二回目の操縦で、こんなに動けるなんて」

あずさの動揺と感嘆の示す通り、宙が異常であることに疑いはない。この成長速度。ヴェルツールの力なのか、宙の素質なのか。どちらにせよ、本来は在り得ないことである。だが結果として、それが危機的状況を打破するために働いている。もしかしたら、このままヌービアムを退けることができるかもしれない。

『悪に大認定とは恐れ入るわね。この力、啖呵を切るだけのことはあるわ』

でもね、坊や。

「この程度じゃまだ、正義のヒーローごっこ止まりだわ！」

ヴェルツールが放った正拳突きは、一瞬にしてヌービアムに絡め

とられ、ガードの空いた胴体の下から抉るような蹴りが来た。その一撃の、なんと重いことか。堪らずヴェルツールは横薙ぎに吹き飛ばされた。装甲が擦れ破砕される。

圧倒的実力差は健在。

絶望的な差を埋めるにはあまりにも足りない。この程度で対等に戦えるのなら、そもそもネーブラだってやられるはずがない。そう、その差を。意識が飛びそうな極限だって乗り越えてみせて。この差を埋めることさえできれば。

……もつと力を！

そう願った瞬間だ。大量の文字の羅列がモニターを埋め尽くした。内容など読み取れるはずもなく、意味など正しくは在って無いようなものなのかもしれないが、やがて文字の濁流は一つの情報を宙に提示する。ヴェルツールの背部、そこを示しながら。

「アルツアヒール」？」

それは武器の名前だった。名前を読み上げると同時、ヴェルツールの背部に装備された“鞘” アルツアヒールの収納ラックが肩の上に迫り出し、なだらかなカーブを描くグリップを露わにする。悩むこともなく、宙は操縦桿を繰った。ヴェルツールがグリップを握り、勢い良く引き抜くと、黒い塊がスライド。

それは巨大な銃だった。

銃身が異様に大きく、獣の顎を連想させるような、暴力的なまでに重厚な拳銃。それが二挺。それこそが、ヴェルツールを戦闘用IDOLと位置付ける理由の一端。

重過ぎる機体、緻密な制御に不向きな設計思想。それら全てを背負ってもなお大きいアドバンテージ。ヴェルツールの価値とは、慣性制御によって強化されたクロスレンジにあらす。超威力兵器アルツアヒールによる、蹂躞するに等しい圧倒的火力による殲滅こそにあるのだ。

「いける！」

「か、勝手に使って大丈夫なんですか？」

「やばくても気合でカバー！ 男は度胸！」

「私、女なんですけど〜」

後先考えない人なんですネ、とあずさは苦笑いを浮かべた。だがそれ以上は何も言わない。任せる、ということだろう。あずさの優しさ。相手を許容する包容力の高さ。まったく、ここまで自分の全てを受け止めてくれる人は初めてだ。

本当に、初めてだよ。

「まさか、あれを扱えると言うの？ だけど当たらなければ意味がないのよ、坊や！」

「数撃ちや当たる！」

と、言い放つたはいいものの。モニターに表示されるアルツアヒールのステータスは、残弾数一とあり、宙は目が飛び出そうになった。もちろん比喻だが。目が飛び出してもおかしくないくらい、出鼻を挫かれたのだった。

……残弾数は本体のエネルギーに依存するということか。完全に一発勝負じゃないか。

あれだけダメージを受けていたのだから、当然の帰結かもしれない。こちらは満身創痍。ヴェルトールもあと何度攻撃に耐えられるか。加えてあの自信たっぷりな口振りを聞く限り、飛び道具とはいえ、至近距離でなければ当てるのは困難だろう。

どうする、と唇を噛む宙だったが、ヌービウムが思考する時間を与えるはずがない。瞬時に懐に潜り込むと、豪快なラッシュで襲い掛かる。

「ほらほら！ 武器があっても、マスターがそれじゃあ宝の持ち腐れね！」

隙を見つけることさえできれば、アルツアヒールを叩き込んでやることのできるのだが。声に従い、無理矢理に回避行動をとるのが精一杯ではどうすることもできない。

限界が来ていた。次の瞬間、損傷を負っていた脚部のロケットノズルが、度重なる緊急回避によってオーバーヒートし、ついに装甲

を食い破って閃光を散らす。あずさの判断によってパージされた脚部の外部装甲が投げ出され、反動でヴェルトールの動きが止まり。それをヌービウムが逃すわけがなかった。

『終わりよ！』

拳の狙いは胸部。強烈な、まさに背後のコックピットごと貫かん勢いの一撃が胸部装甲に吸い込まれ。

「まだ、終わりじゃありません！！」

宙はあずさの叫びを聞いた。すぐそこに迫る死神の魔手から身を守るべく、あずさは検索した装備を選択、緊急起動で叩き起こしたのだった。

ヴェルトールの両肩に突き出した、全長に匹敵する二つのバインダーが稼動音を響かせて正面にスライド、まさしく盾となってヴェルトールを覆い隠す。瞬間、胸部周辺の空間が猛烈に歪んだのを、誰もが見逃さなかった。

『なに！？』

多重装甲バインダーの真価がここに発揮された。

ヌービウムの攻撃を相殺している能力とは、すなわち慣性制御のブースター装置。

ヴェルトールに残されたわずかなエネルギー全てを、バインダーのブースターが増加し、一定方向に対する強力無比な重力場となつて全てを遮断しているのだ。いくらIDOL同士では重力殻が弱体化されるとはいえ、一点に集中された“盾”はそう簡単に貫けない。今です！あずさと宙の意思はほぼ同時。言われるまでもなく操縦桿を、応じて動く腕をバインダーの隙間から突き出した。拳を打ち込んだ状態のまま止まったその一瞬を狙い、アルツァヒールの銃口を、ヌービウムの頭部に押し付け、

「ブチ、かます！！」

全てを押し潰し、無に還す光の柱がヌービウムを飲み込んだ。

オーロラに見紛おう光の柱は、その実巨大な重力塊である。慣性制御によって超圧縮した重力を相手に叩きつける。現存するどの兵

器にも当て嵌らない、IDOLのみが扱える超兵器である。その威力は、ストロベリー級ドロップでさえ跡形もなく消滅させることができるほど莫大だ。

勝った。まったく疑いのない勝利を確信した。

そのはずなのに。

宙は信じられないものを目撃してしまった。

『すごいわ坊や。まさか、私に一撃“中てる”なんて』

ヌービウムは健在だった。吐き出される破壊の光を前にして、重力殻を最大にして耐えている。いや、それも長くは持つまい。強がっているだけだ、と高を括った宙だったが。ヌービウムは驚くべきことに、あえて光に身を任せることで、“光の端に重力殻を引っ掛けた”。すると、どうなる。

ヌービウムは弾丸のような速度で弾かれて、そのまま大きく距離を取った。

戦線離脱。

「そんなことができるかよ!？」

『楽しかったわ。お礼に今日のところは見逃してあげる。だから次に会う時は』

ヌービウムのアイドルマスターは、くすりと妖艶に笑い、

『また、私を楽しませてね』

そう言っつて。悪魔のような存在は、青い地球の引力に引かれて消えていった。

攻撃を、脱出の手段として使われるなんて。あんな芸当は簡単にできるものではない。素人の宙にだって分かる。余裕を持って余してなお、ヌービウムは宙達を見逃したのだった。ほんの戯れで。格下相手に慈悲を与えるが如く。

もしあのまま戦いを続けられていたら。

ぞつとする。

「あれが、俺の敵」

悔しくはあるけれど。今は生き残れたことを、噛み締めたい宙で

あった。

『二人とも、無事なの!?』

通信が耳に届く。視線を向けると、地球の方からネーブラが上昇して来るのが分かる。遅いんだよ。大きく息を吐いて座席にもたれる宙。決して勝てたとはいえない泥仕合を経て、ポロポロになったヴェルツールを、ネーブラが支えた。

『ちよつと、あんた大丈夫なの?』

「そつちこそ、大丈夫なのかよ」

『当つたり前でしよう! この伊織ちゃんがあんなことぐらいで墜なんて有り得ないわ! 油断! 油断しただけよ!』

でも落とされたくせに。うっさいわね、調子乗るんじゃないわよ! モニター越しで口喧嘩を始めた二人に、あらあらどうしましろう? 伊織ちゃん落ち着いてえ。と慌てふためくサブパイロット兩名。

ガンと意地を張り合つた二人だったが、やがて、

『頑張つたじゃない。ヌービウム相手に』

伊織は少し口籠つて、本当に小さく呟く。恥ずかしがっているのだろう。柄じゃない、という風に。フンツ、とそつぽを向いた。

「おまえからお褒めの言葉を頂戴するとはね」

『私は努力する奴や、自分から困難に立ち向かう奴は、嫌いじゃないわ。少しは見直してあげるわと、天川宙』

「……褒められるのは悪くない気分だ」

笑みを浮かべた宙を、不意に強い眩暈が襲つた。緊張から開放されたせいだろう、身体から力が抜けていく。そうだ、流血してたっけな。笑えない事実、しかし一抹の達成感と安らぎを覚えながら意識がブラックアウトしていく。

最後にあずさの声が聞こえたような気がして、宙は深い闇の中に落ちていった。

今回の事件の結末。

天川宙はモンデンキント所属のアイドルマスターとなることに合意した。

ケガも大したことはなく、額の傷が少々残る程度で済んだのは幸いだっただろう。

基地の医務室で目覚めた宙は、すぐにアイドルマスターになる旨を高木に伝えた。もちろん、和解などしていない。するはずもない。これは契約だ。宙はモンデンキントに所属する代わりに、トゥリアビータと対峙する機会を得る。お互いの利益、損得勘定で結ばれただけの、薄っぺらい契約。

それでも宙は構わない。天川宙は復讐を誓ったのだから。天川マツリのような正義のヒーローなどでは決してなく。むしろダークヒーローで。それでも、構わない。これは宙の負った責任だから。後に後悔しても、もう、後戻りできない。

天川宙の選んだ選択肢は、血生臭い道だった。

あの出来事から数日後、宙は無事、三年間の高校生活と別れを告げた。孤児院からも出て、悠悠自適とまではいかないが、なんとか一人暮らしを送っている。

後日、モンデンキントに呼び出された宙は格納庫へまた案内された。どういう件なのか知らされないのもあの時と一緒に、出向いた先、また適当なマニュアルでも渡されて突拍子もないことを言われても、目玉を飛び出させない気持ちでいた。比喻だけけれど。

格納庫は照明が全て落とされ、真っ暗だ。しかもいつの間にか、案内してくれたはずの職員まで消えている。

「なんなんだよ……」

疑問を口にした時である。暗闇に閉ざされていた格納庫が、パツと明るく照らされた。

思わず瞑った目蓋を開くと、そのタイミングを見計らって、クラッカーの音が盛大に鳴り響く。

宙は呆然と目の前の光景を凝視した。格納庫にはヴェルトールを初めとして、インベル、ネーブラ、テンペスタースの四体が集合しており。IDOL達の上には、大勢のモンデンキントの職員達が乗っているではないか。あずさや春香達、アイドルマスターも宙に手を振っている。

IDOL同士の間には垂れ幕があり、みんなは声を揃えて、それを宙に届けた。

「ようこそ！ モンデンキントJPへ！」

ワアッとあがる大歓声。拍手が響く中、ここで新しく始まるのだな、と、宙は決意を新たにした。

アイドルマスターとしての、新しい生活は 。
はてしない物語はここから始まる。

第五話 ある日の風景

第五話 ある日の風景

「嫌だ。断る。森羅万象一切合切余すところなく拒否。以上」
と、鼻で笑いながら全面的に否定の態度を表したのは、765プロ含むモンデンキントJ.P入社一ヶ月目の新入社員こと、天川宙であつた。

新入社員のくせにその態度のでかいこと。そう思う人もいるだろうが、相手が天海春香であることを述べれば問題は解消される。いや、国民的アイドルである彼女に対しこのような不遜な態度を取るとは、765プロ含むモンデンキントJ.P入社一ヶ月目の新参如きが偉そうにも程があるかもしれない。

だが立場がそれを許す。何を隠そう、765プロにおける天川宙の役職はプロデューサーであるからだ。文字通り、アイドルをプロデュースすることを生業としている仕事だけに、立場的視点から見れば宙の方が格上であらう。

まあ、それも天海春香をプロデュースするような凄腕の話であつて。

まだ右も左も分からないようなペーパーには、そもそもそんな権限などない事実にも、天川宙は気付いていないのであつた。下手をすれば宙の方のクビが飛ぶ。

「そんなこと言わないでお願い！ この通り！」

とはいえ、当の天海春香の方がまったくもって気にしていないのでそれはない。どころか、春香の方が必死に宙に頭を下げているのだから、この場合は宙の方が格上で合っている。頼まれている側だから。何を頼まれているのかといえれば、春香曰く、

「今日のライブの裏方手伝って！」

ぱんつ、と両手を叩いて拝み倒す春香。手伝い。ライブの、手伝いである。

本日、765プロ主催のミニライブが行われるのは宙も知っていた。765プロのアイドルが複数名参加する予定のイベントだ。ところが参加者の各スケジュール等の問題から、予想外の人手不足に陥ってしまったとのこと、春香は朝早くから、こうして宙の家まで頭を下げて来ているのだった。律儀な奴。

「電話一本で済むものを、何故わざわざ家にまで」

「だって電話だと、嫌だ、の一言で切られそうだもん」

たぶんそうしていただろう。勘の鋭いことである。直接来たところで、第一声は変わらなかつたわけだけれども。

「それにしても驚いた。本当に昔の事務所に間取りしてるんだね」

春香は興味津々といった様子で、部屋の中を眺めている。コンクリートのむき出しになった壁に、薄汚れた床。内と外を隔てるのは安物のアルミ扉一枚だけで、靴を脱ぐわけでもなく、果たして玄関と呼べるかも怪しい雑駁な造り。新宿の大通りから外れたやや寂れた物件。二階建ての二階部分のみ。一階は居酒屋。

そこが宙の、宙だけの城だった。

春香が言うように、ここは765プロが四年前まで間取りしていた物件でもある。まだ小さかった頃の話で、例の事件の後はトウリアビータの危険性が認知されたこともあって、規模の拡大という意図もあり現在のビルに移転したのだが、宙にとっての765プロといえは、もっぱらこちらを指す。

まだマツリが生きていた頃、よく遊びに連れて来てくれた事務所が、ここだからだ。

思い出がある。思い入れもある。そんな場所に住むようになったキツカケは、借りていた部屋と本社ビル「地下基地との交通等諸々含めた立地の都合上、別の部屋を探さなくてはいけなくなった時、高木が冗談半分で切り出した一言だった。

「この近くに昔使っていた事務所があるが、どうかね。君も知って

いるあの建物だよ。ははは、住み心地は保障できないかね」

「へえ、じゃ、そこにする。手続きよろしく」

「……本気かね」

恨み骨髓に染み入る相手とはいえ、此度の申し出は、有り難かった。思い出のある事務所跡に住むというのも、なかなか面白いではないか。

そういう理由で。かつては地下基地に繋がり、今ではその入り口を封じられた事務所跡は、天宇宙の根城となったのだった。風呂もなく台所も粗雑で、人が住むには幾分も頼りない場所ではあるが、それもまた、宙は面白いと言った。

中古家具店で購入してきた回転椅子に座ってくるくる回りながら、春香の願いを聞き流していた宙は、ふと止まって彼女を指差す。

「そもそも俺には手伝う理由がない。この後、俺は、ドロップ関連の座学を受けにやならん。更にその後は水瀬達と操縦訓練。その更に後にはなんかよく分からんけどヴェルトールの実験があるらしい。つまり、そんな暇はない」

「でもライブは夕方からだし、午後から休みもらってるんでしょ？」

「……チツ。知ってるのか」

ここ一ヶ月、本当に休む間もなく訓練等に勤しんでいた宙に対して高木が与えた半休だ。いや、むしろ宙が努力の末勝ち抜いた休みといえるだろう。この娘は、それを知ってなお休みを潰そうとするのか。悪魔か。ああ、人知れない。

「それに理由ならあるよ。今回のミニライブ、あずさんも出るの」

「なんであの人が出るから俺が手伝う理由になるのさ」

「だって宙、あずさんにお世話になってるでしょ？」

三浦あずさ。超が付くお人好し。お菓子より甘い優しさの持ち主。そして、宙のパートナーである。モンデンキントのIDOLは二人乗りを基本としているため、マスターには必ずパートナーが存在する。春香と千早、伊織とやよいのように、だ。

座学はともかくとして、操縦訓練はパートナーとの連携を高める

意味でもあずさの協力は欠かせない。特に、まるで素人の宙を助けるため、あずさはほぼ専属コーチ化している節もあるわけ。あずさには世話の恩があり、礼くらいいしなくてはと常々思っていた。

「ここでそれを引き合いに出すか……」

「ああ、宙って恩を蔑ろにするような人だったんだー」

斜め上に目線を逸らしながら棒読みの春香に苛立つも、さすがに恩を蔑ろにする人間とまで言われて無視を決め込むのは男じゃない。天川マツリの弟がすることじゃない。だがここで簡単に引き受けるのは、春香の口車に乗せられる感じで良い気はしない。眉を立て、唇を一文字に結んで肩を震わす宙に、春香は畳み掛ける。

「男としてそれはどうなんだろうねえ。格好悪いなあ」

「ぐう……」

「大きいのは態度と口だけかあ。器量は小さいのかなあ」

「ぬぐう……！」

「宙のお姉さんならなんて言うかなあ？」

「了解しました！ お手伝いさせていただきます……！」

「やた！ じゃ、細かい予定はメールで送っておくからよろしくね！」

そう言っつて、いつからか敬語からフレンドリーな言葉遣いになっていた天海春香は出て行ったのだった。テーブルの上に置いてあった、朝食のトーストを頬張って。

「ふざけんな！ 俺の朝飯返せ！」

「ねえ、これまだなのお？」

「もう少しよ、我慢なさい。ああ、そのバニラエッセンス取っつてちょうだい」

自分の身長より長い金髪をソフトクリーム状に結んだ少女リファは、並べられた調味料の中から頼まれた瓶を手渡した。受け取った

のは、バイザーを付けた白髪美女リコリスである。今回はオプシヨ
ンでエプロンが付属しているけれど、さながら女エージェントとい
う風貌の彼女には些か似合わない。奇天烈だ。

この個性的な容姿の二人が介するのは、世界的企業を相手取る反
抗組織トウリアビータの本部基地内であり、正確には食堂のキッチ
ンだった。基地内で過ごす人間はなかなか多く、食堂の需要も比例
して高いため、面積は相応に広い。そのキッチンともなれば立派な
ものだ。二人の横では調理班が黙々と働いている。

「で、呼び出されて来たわけですが何事ですか？ 私は色々と忙し
い身なのですが……」

この場にもつとも似合わない黒尽くめの男、カラスはやや引きつ
った表情で問うた。呼び出されたと思えば、二人はお気楽にもキッ
チンで和気藹々としているではないか。加えて、彼女達がやってい
ることといえば、

「あなた達は仮にも幹部級の人間でしょう？ それが揃いも揃って

「

はあ、と。呆れてものも言えないという風に、

「ケーキ作りとは……」

カラスの嘆きを知ってか知らずか、二人は楽しそうにケーキ作り
を満喫している。トッピング用のチョコを刻みながらリコリスは口
を開いた。

「リファが甘い物を食べたいという話だったから、久しぶりに料理
も悪くないと思ってね。カラス、甘い物は苦手だったかしら？」

「そういう問題で言っているではありません。他の者に対する示
しがあるでしょう」

「あら、なんだかんだ言っても、結局女の子とお菓子は切り離せな
いものよ」

「女の子という柄でもないでしょうに」

タンツ！ と鋭い音を立てて顔面すれすれに突き刺さった包丁に
嘆息し、カラスは腕を組んだ。舌打ちが聞こえた気もするが（いや、

明らかに聞こえるように舌打ちしていた)、そこまで構っているのは気疲れするだけだ。

まったく、こちらはヴェルトル奪還の件を含めて、今後の方針を打ち立てるのに苦労しているというのに。カラスはリコリスを指差し、大体ですね、と前置きした。

「この前ヴェルトルと接触した時、あなたが手を抜かなければうるさく言いません。マスターはずぶの素人、ネーブラも排除済み。あんなチャンスを棒に振るなど……」

あの時。一ヶ月前の、宇宙での出来事。

圧倒的な存在感を示したヌービアムの搭乗者は、リコリスであった。マスターはIDOLによって選別されるという法則上、組織内でヌービアムに搭乗できるのはリコリスだけだ。ヌービアムのアイドルマスターである、彼女だけ。

新しい包丁に持ち替えたリコリスは悪びれもせず言う。

「あの時は私も危なかったのよ。アルツアヒールの威力は知ってるでしょ？ あれを防いだ時点でヌービアムのエネルギーも残り少なかったし」

それに、と。チョコを刻む手を止めて、艶かしい笑みを浮かべながら、

「あの一瞬だけは、あのマスターは私の読みを越えたわ。ほんの一瞬ね。下手をすれば返り討ちに遭っていたかも。見所あるわ、あの坊や」

「ほう、自分から負けを認めるとは潔い。退却の言い訳くらいあるのでは？」

「私、言い訳は嫌いな。保身に走るなんて、みっともない。それより私は、あの坊やの成長具合が気になるわ。今度出会った時、どれくらい楽しませてくれるのか、今から期待してるの。絶対に面白いわよ」

ピピピ、という電子音でスポンジケーキが焼きあがった。オーブンから取り出すと、生地はしっかりと膨れて、ほのかに甘い香りが

漂う。リファは目を輝かせてリコリスをせつつく。早く早く。はいはい、ちよつと待ちなさいな。

「生クリーム塗るの、やってみる？」

「やったー！ やるやる！」

「はあ……、聞いていますかりコリス」

「聞いているわ。無粋な男は嫌われるわよ？ もう少し女性の気持ちも考えなさいな」

カラスは内心で失笑する。女性の気持ちなど、組織を動かしていく上で考える必要のないことだろうに。

まだ歳若いカラスが組織の実質的指導者となっているのは、類稀なる手腕によるところが大きい。的確な判断力と、大勢の人間を惹きつけるカリスマ性。様々な部分で、カラスは指導者として優れている。頂点に立つ者の冷徹さも。

……まったくこの“バスタルト”どもは。

声にはせず蔑んだカラスにリコリスは、どうかしたの？ と首を傾げてみせる。

まったくもって、リコリスの思考は読み切れない。組織の中に敵がいるとすれば、間違いなく彼女だろう。カラスにとって、自分の予想範疇を越える手駒など必要ないのだから。

「ああ、そうそう、言い訳ならあるわ」

「どうぞ、言って御覧なさい」

「“ハーモナイズ”よ。あれはウチの組織じゃできない作業でしょう？ モンデンキントがヴェルトルを迎撃戦力に加えるなら、必ずハーモナイズをするはず。どうせだからこの機会に、性能を上げてもらおうというわけ」

「なるほど、その手がありましたか」

やはりこの女だけは油断できないな、とカラスは心に刻み、席を立った。仕事を中断するのもここまで。そろそろ戻らなければならぬ。だが、リコリスはむんずと服の端を掴んで、にっこり笑った。

なんだろう、この威圧感は。

「どこへ行くの？ もう少しで完成なのだけれど。あなたの分も作ったのだから、食べていきなさい。そのために呼んだのだから。気は進まなかったけれど」

「リファのアイデアだよ！ カラス、嬉しい？」

「いえ、ですが私には仕事が」

「た・べ・る・わ・よ・ね？」

「……いただきますしよう」

笑顔が恐ろしい。あと包丁を構えないでくれなйдらうか。本当に、色んな意味で、この女だけは計り知れない。カラスとて命は惜しい。保身に走らせてもらおう。いや、走らざるを得ない。戦略的に考えた上での承諾だ。

カラスが肩を落としたと同時に、リコリスも構えた包丁を下ろしたのだった。

「あら、どこぞの天川宙さんは、無様なスコアでいらっしやるわねえ」

「くそ、覚えておけよ……！」

水瀬伊織とそういう会話があったのはつい先程の話だ。座学も終了し、続けて操縦訓練に挑んだ宙であったが、結果は散々だったと言わざるを得ない。具体的には、宙と上位陣の間には一桁もスコアの差があった。無論、そんな成績で他のマスター達にも勝てるはずはなく。遠回しに言おうが、直接的に言おうが、宙は最下位に甘んじたのだった。

ドンケツである。

覚えておけよ、なんて負け犬の台詞もいいところだった。

たかだか一ヶ月程度の訓練では技術的熟練度が劇的に上がるわけもなく、所詮、伊織達に勝てる道理はない。伊織達とはキャリアが違うのだ、負けて当然である、君は上手くやっている。なんて、慰

められると逆に腹が立つ。負けるのは悔しいことだ。

次は絶対目に物見せてやる。そう心に誓った宙は、ヴェルトーのコックピットの中で大きく溜息を吐いた。最近では慣れた、IDOLの中。いつもはあずさと共に乗っているけれど、今日は仕事の都合上、一人だ。

午前のスケジュール。最後はハーモナイズという実験を課せられていた。

とはいえ、果たして実験と言って差し支えないのか疑問である。

宙はただ、何をするでもなく、こうして操縦席に座っているだけだった。本当に、それだけ。これのどこが実験なのだろうか。相変わらず、モンデンキントは説明不足がひどい。

「おい、秋月。本当に俺は何もしなくていいのか」

「大丈夫大丈夫。ハーモナイズ自体は、マスターにとって簡単な作業だから」

宙の疑問に、モンデンキントが有する三体目のIDOLテンペスター比較的最近完成した赤色のIDOL。数々の実験装備を搭載した、ヴェルトールとは別の意味での異端機。そのマスター秋月律子は、眼鏡の位置を直しながらモニターの中で言葉を返した。

秋月律子。知的な眼鏡と二つのおさげが特徴の、整備員兼事務員からアイドルになった異例の人物。冷静沈着にして博学。真面目で気が強く、はつきりと物事を断じる姿勢は本物だと、宙は評価している。そして、どこか抜けている、または飛び抜けているモンデンキントの面々の中では数少ない常識人でもある。

何かと世話を焼いてくれている、宙曰くお節介だが、例によって今回も色々と不慣れな宙のために、実験に付き添ってくれていた。

「結局、ハーモナイズってのはIDOLの性能を強化する作業なんだから？」

「どちらかと言えば、潜在的な性能を引き出す、って表現が正しいわね。詳しく説明すると、“コア”とマスターの調整を行って、相互的なズレを少なくする作業ね」

コアと聞いて、宙はヴェルトール胴体部の中核を成す球体を思い描いた。その名の通りIDOLの本体であり、慣性制御を含むIDOLのオーバーテクノロジーは、全てコアの発揮する能力である。人型機械の部分は、あくまでコアに付随するものでしかない。

各IDOLのコアにはそれぞれ独自の出力特性があり、それと同様、マスターにも独自の癖がある。言い換えれば個性のようなものだ。その日の体調や精神状態を含めて、その癖に合わせてIDOLを調整する作業のことを、総じてハーモナイズと呼ぶらしい。

『例を挙げるなら、楽器を演奏者に合わせて調律する作業かな。実際、ハーモナイズを行うには特殊な音楽的感性が必要だし。それが可能なのは』

「あの双子姉妹だけだろ。あんなトラブルメーカーが特殊技能持ちなんて、なんだか理不尽な気がする。世の中、平等じゃないんだな、やっぱり」

『宙兄ちゃん、それどーいう意味？ 馬鹿にしてるの！？』

『ひつどーい！ 野菜を要求するー！』

「よほどベジタリアンなんだな……」

それを言うなら謝罪だ。

金切り声と同時に画面が切り替わり、頬を膨らませた声の主が姿を現した。

全く同じ顔が、二つ、並んでいる。ぴよんと短く飛び出したサイドテール。まだ未熟で成長段階の身体。快活でいて、むしろ勢いがあり余って、どこに発散しようかいつも迷っている二人。悪戯好きで有名な姉妹は、整備員に支給されているオレンジ色の作業服を着て、ぶうぶうと宙に文句を垂れている。

双海亜美と真美。律子と同じく、テンペスタースを従える最年少のアイドルマスターにして、厄介ごとを引き起こす天才にして天災の双子の姉妹である。

律子の話によると、コアの出力特性は調整機を通じて微弱な音として認識されるらしい。その音を理解できるのは、何を隠そう双海

姉妹だけであり。ハーモナイズは彼女達の協力なしでは成立しないという。

モンデンキントに来てから毎度のこと双海姉妹の悪戯の餌食になっている宙としては、得意気になって自分に指示を下す彼女達に納得いかない部分もあるのだけれど。まったく、としかめっ面を隠しもしない宙であった。

「午後はライブの手伝いなんだから、早く切り上げさせるよ」

「ああ、そういえば春香が言ってたわねえ。それにしても、よくあんたが引き受けたもんだわ。絶対断ると思ってたのに」

「俺だつて断つたさ。……天海の口先が一枚上手だった話。三浦あずさの件を引き合いに出しやがったから、仕方がなくだ。誰が好き好んで大事な休みを潰すもんか」

「へえ」

「なんだよ」

「いや、あんたはどっか壁作ってるからさ。一線引いてるって言うか。でも、そんな割にあずささんには頭上がらないみたいだから、面白くてね」

「べ、別にあの人のためじゃない！ ただ色々借りを作ってるから、返せる時に返しておきたいだけだ。勘違いするなよ」

「はいはい、ツンデレツンデレ」

「ツン……?」

「……あれ、さすがに復興暦以前の流行語は知らないか」

「なんでおまえが一世紀前の流行語を知ってるのか、そっちの方が気になるけど」

馬鹿馬鹿しい。宙は腕を組みながら言った。それに律子は誤解しているようだが、そもそも宙が壁を作っているのではなく、ただ、根本からモンデンキントに所属している理由が異なっているから、相容れないというだけの話だ。相容れないから関わる必要もない。最低限の関係。それで十分だろう。

「俺は姉さんの仇を討つためにここにいるんだ。馴れ合いがしたい

わけじゃない」

「堅気？」

「別に姉さんは極道でも何でもねえよ！」

「肩叩き？」

「“た”が多い！」

「柿？」

「今度は“た”がない！ もう原型すら留めてないし！」
いい感じに遊ばれている気がする。

「まあ、仇討ちが理由なのは知ってるけど、少しくらい、交流を深めてもいいんじゃないの？ 大体、天川はあずささんがどんな活動してるかだつて知らないでしょう。パートナーなのに、意思疎通がないのは悪いことよ」

「む……」

指摘は的を射ている。訓練の際、いつも指導を受けている宙ではあるが、三浦あずさ自身の情報は限りなく少ない。宙自身が積極的にコミュニケーションを取らない弊害だ。確かに同じIDOLを操るマスター同士、認識の低さは致命的な弱点にも成り得るだろう。そういう点において、律子の指摘は正しいかもしれない。

だが、考えてもみれば、三浦あずさというアイドルの名前は聞いたことがなかった。芸能関係、特にアイドルブームが波に乗っているこの時代、その手の情報に強い宙でさえ知らないとなると、よほど知名度の低いマイナーなのだろう。

『そりゃそうよ、だつて、今回のライブが初仕事だもの』

「ああ？ そんなの一般人と大して変わらねえじゃねえか。知るかよ、んなもん」

数多のアーティストがしのぎを削り消えていく芸能界。ましてや競争率の高いアイドルというカテゴリの中で、デビュー直後のアイドルなど、アイドルであつてアイドルではない。マツリというアイドルの姉を持つ宙にとって、そういうことには一家言ある。

『手厳しいわね。でも、実力はあるわよ、あずささんと千早のユニ

ツトは。“マリンスノウ”って名前なんだけど』

「あの人と如月か。そりゃ、まあ、なんとモ」

気になる組み合わせだ。千早の対極といえは春香だが、三浦あずさもなかなか、逆の方向性に突き抜けた人物の例ではある。そんな二人のコラボとは意外性がある。

『まあ、勉強だと思つて存分に働いて来なさいよ、新米プロデューサー。天川は身の振り方下手だけど、才能はあるんだから。プロデューサーとしても、マスターとしても、皆あんたに期待してんのがんばんなさい』

「……ふんっ」

そこで会話を打ち切つて、宙は操縦席に深く背を預けた。期待なんて、されずとも結果は出さず。それがトウリアビータと戦う機会を与えてもらう代わりの対価なら、いくらでも。誰のためでもない、自分のために。

会話がなければ、コックピットの中はとても静かだ。しん、と静まった無重力の密閉空間。演奏会前の、これから奏でられる音に耳を澄ませるような空気だった。ここは暖かいな、と宙は呟きを漏らす。居心地が良い、と。安らぎすら覚えるこの感覚は、何に起因するものなのだろうか。

もしかしたら、ヴェルトールの暖かみなのもかもしれない。

「こうしておまえと二人きりになるのは初めてか。いつもは、あずささんがいたし」

いつの間にかヴェルトールに話しかけている自分。ふとしたことに驚きもしたが、意外なことでもないかもしれない。宙はヴェルトールに感謝していた。自分を選んでくれたことに。おかげで長年望んだ真実を知り、復讐する機会と、力を得た。

IDOLには心があるとあずさ達は言っていた。最初は否定していたけれど、今となっては、信じてもいいと思う自分がいる。IDOLの心。二度も宙の叫びに答えてくれたヴェルトールには、もしかしたら本当に心があるのかもしれない。

「おまえには感謝してる。……早く、おまえの力を引き出せるようになってやるから」

だから、

「よろしくな、相棒」

応じるように、ヴェルトールの駆動音が強く響いた。

ライブの開始時間は夕方六時。

ところが、直前の一時間前になって問題が起こった。

三浦あずさが行方不明になったのだ。

リハーサルに参加していたところまでは宙も確認しているのだが、その後の消息が誰にも分からない。リハーサルと本番の間には多少休憩時間を挟むので、空いた時間を利用して外の空気でも吸いに行つたのかもしれないが、一時間前になつても戻つて来ないのは、さすがにおかしいだろう。

財布も控え室に置いたまま、姿を眩ました彼女。連絡を取ろうとも、今日はコンペイトウ（オービタルリング）の影響もあつて電話も繋がり辛い。そういえば、天気予報はここ数日をかけて通話状態に影響があると言っていたのを思い出し、宙は舌打ちした。連絡がつかない状況ではどうしようもない。

お客の入場もそろそろ始まるというのに、彼女は一体どうしたのだろうか。ただでさえ人手が少なくて慌てている小鳥含むスタッフはもちろんのこと、ライブに参加する春香や、あずさとユニットを組む千早も焦りを隠せない。右往左往である。

まさか、事故にでもあつたんじゃ。うっかり漏らした言葉に、その場の全員がぎよつとする。青い顔で、春香が卒倒しそうになつた時だ。

当の本人から千早宛に電話がかかってきた。

「あずささん、大丈夫ですか！？ 事故とか遭つてませんか！」

あの千早が信じられないくらい大声で捲くし立てている。宙は意外や意外と面喰らいながらも、電話の声に耳を凝らすと、

『大丈夫よ、千早ちゃん。心配しないで』

「そうですか、よかったです……。で、今どこにいるんですか？」

『それが、その……。千早ちゃん、ここどこだか分かる？』

「って迷子かよー!」

宙の反射的な叫びを聞いた全員が、ああ、という安堵と落胆と呆れに満ちた形容し辛い声を出した。いや、その更に半分には憤りと焦燥が混じっているはず。あずさの究極的な方向オンチが認知されていないければ、怒り狂って電話を破壊しようとする人間が出てきたかもしれない。とんだトラブルメーカーだ。

居場所を聞き出している最中に、千早があつと声を出した。どうしたどうした。どよめきがスタッツの口から漏れて、宙は嫌な予感に肩を竦める。

「電話、切れちゃいました」

「だよなあ、電波悪いもんなあ……」

さて、どうする。

短い意見交換の末、車を出して搜索する方向に纏まった。とはいえ、あずさが自分の居場所を理解できていない以上、大体の見当をつけて探す他ない。ライブ開始まで残り一時間を切った。それまでに彼女をここに連れて来なければ、色々と厄介事が増えることになるだろう。

その場合どうなるのか、小鳥に尋ねてみると、

「最悪、春香ちゃんと他の子達だけでライブをすることになるわね。今回の客層は、ほとんど春香ちゃん目当てだし、あずさんと千早ちゃんの参加はサプライズ企画みたいなものだから、大した影響はないと思う。ただ……」

「ただ、なんだよ」

「今日のライブには、765プロを鼻肩してくれている番組プロデューサーなり何なり、色々と“ゲスト”が見に来ているの。このラ

イブ自体、毎年の恒例みたいなものだから。でも、そんな中で仕事をドタキャンしたりしたら、信用はガタ落ち。今後の活動に支障が出るでしょうね。最悪、デビューすら白紙に戻されるかも」

確かに、初仕事をいきなりすっぱかすような真似をしたら、仕事なんて当然もらえなくなるだろう。アイドル生命は風前の灯どころか御役御免間違いない。そこから這い上げられる人間は、本当に天才的な才能の持ち主くらいだ。

似たような状況に陥った人物を宙は知っている。

胸が締め付けられる錯覚を覚えた。昔の記憶を、思い出したからだった。

「まったく、借りを返すには打ってつけじゃないか」

「宙君？」

「おい、如月！」

おろおろとする千早が宙に振り返る。いつもの冷静さはどこに行ったのか。あずさのことも気懸かりだろうし、デビューへの心配も強いだろう。春香が言っていた。千早は誰よりも、歌に関して思いが強いのだと。彼女の不安はそこから来るものに違いない。

「俺も探してくる。人手は多い方がいい」

宙は千早からあずさの大体の居場所を聞くと、走り出した。その背中を、千早が呼び止める。千早らしかぬ、初めて出会った時の、少女らしい表情。

「宙、どうかお願い」

だから何度も言ってるだろ、これは自分のためだって。誰のためでもない。

でも少しくらいなら。あずさを連れて戻って来ることくらいなら。約束くらい、してやろう。

三浦あずさは途方に暮れていた。

財布もなければ携帯端末の電池もあとわずか。どうしてこんな大事な日に、不注意を重ねてしまったのだろう。自己嫌悪で泣きたくもなるが、泣いてしまったら、とてもライブに出られる顔ではなくなってしまう。だから潤んだ瞳をなんとか堪えた。

初仕事の緊張に耐え切れず、気分転換に散歩でも思ったのが運の尽きだったのだろう。この辺りにはあまり来る機会がないから、土地勘もなし、見知らぬ世界に一人取り残されたような寂しさが去来する。千早は怒っているだろう。スタッフも慌てているはず。手伝いに来てくれた宙にも悪いことをした。

溜息を吐くと、やはり涙が込み上げてくる。

「……宙さん」

ふと呟いた彼の名前。子供の頃は、困った時に白馬の王子様が助けに来てくれるのだと信じていたけれど、今はなんとなく彼のことを思い出した。最近によく彼と行動を共にしているからだろうか。もしかしたら、彼が迎えてに来てくれるかもしれない。そんな風に楽観的な希望を思い浮かべた時。

本当に白馬の王子様のお迎えが、あずさの目の前に現れたのだった。

白馬は煤けたママチャリで。王子は汗まみれの青年だったけれど。

「こんなところで何してんだよ、あんたは……」

「宙さん」

「探したぞ。ホント、どうしたらこんなに遠くまで迷い込むかねえ」
方向オンチもここまできたら天才的だ。自転車のハンドルに両腕を置いて荒く息をする宙は、あずさを睨みつけた。あまりに据わった目だったので、怖くて背筋を震わせる。怒っているのがありありと分かる様子だった。

それでも、あずさは恐々としながらも、宙に問う。

「探しに来てくれたんですか？」

頬を伝い服に染み込んだ汗や、荒く繰り返される呼吸が、どれだけ懸命に自転車を漕いでいたのか物語っていた。正直、彼が自分の

ために一生懸命になつてくれるなんて考えもしなかった。いつだって他人と距離を置いていた宙だ。ライブの手伝いに応じてくれたこと自体奇跡と呼んでいい。それなのに何故。

「勘違いすんな。あんたには世話になつてるから、その借りを返すためだ」

そう言つて宙は自転車の後ろを指差した。それ以上は何も言わない。

少しは、心を開いてくれたのだろうか。

「……ありがとうございます」

「いいから早く乗れ！ 時間がないんだよ！」

「は、はいッ」

怒鳴つた宙に急かされる形で、あずさは自転車の後ろに横座りした。何のクツションもないのでお尻が痛かったが、この場合文句を言える状況ではない。彼の後ろから両手を回して身体を寄せると、宙は赤い顔で素っ頓狂な声を上げた。そうだ、宙は人と触れることに抵抗があつたのではなかったか。

だが宙はわずかに黙り込んだ後、本当にしょうがないといった様子で、

「……今回だけだからな」

無愛想な表情。少し前なら意地でも拒絶してだろう彼の心境の変化を、少々感慨深く思いながら、あずさは改めて宙に身を寄せた。

「あの、私重いかもかもしれませんが、大丈夫ですか」

「元自転車便バイトの脚を舐めないでほしいな。それにこの街は俺の庭みたいなものだ。IDOLじゃまだ勝てないかもしれないけど、自転車なら俺は無敵だ」

決め台詞良好。宙はペダルに片足を置くと、力の限り、踏み壊さん勢いで漕ぎ始めた。その加速のなんと速いこと。あずさを乗せているというのに、信じられないくらい速度で風を切り、すぐに最高速度に到達。景色が、凄まじいスピードで後ろへ消えていく。二人乗りは犯罪だけれど、これでは警察が声をかける間もなかった。

流れる髪を押さえながら宙を見やると、夕日を背景に、真剣な表情が瞳に映る。復讐のためにアイドルマスターになった彼。いつもどこかに影を帯びている彼。そして寂しそうな彼。段差で跳ね上がった瞬間、更に強く背中にしがみつく。宙は何も言わない。

近道だ、と。華麗なターンで路地に入った宙はぽつりと呟いた。

「昔の、姉さんのことを思い出したんだ」

「……」

「天川マツリは初仕事をすっぱかしたことがある」

ちょうど今のあずさと同じように。マツリは仕事に遅れた。

ファンの間では有名な話だが、他でもない、それは宙のせいなのだ。

マツリの初仕事の日。宙は同級生と喧嘩をしてケガを負った。原因は昔と変わらず、孤児であることを揶揄されてのものだったが、さすがに中学生ともなれば、マツリに頼る気などさらさらなかった。堂々と反発して立ち向かって、まあ、相手が複数だったのが悪かったと言うべきだろうか。返り討ちになった。

本当に運が悪かったのは、ポロポロになった姿をマツリに見つけたことだろう。ちょうど仕事に出かける直前に、マツリはケガをした宙の姿を見て顔色を変えた。驚いて、そこから段々と険しくなっていく形相の怖いこと。

それ以上は語るまでもないだろう。結局マツリは初仕事に遅れに遅れて、信用を失った。

そこから巻き返した彼女の能力は特筆に値するが、本当に小さい仕事しか受けられず、厳しい下積み時代を過ごすマツリ達の様子は居た堪れなかった。デビューしては消えていく無名のアイドル達だつて、もう少しマシだったかもしれない。

そういうものを見てきた宙だからこそ、この状況に、言い表せない色々な感情が湧き上がってきたのだろう。芸能界の厳しさを知っているからこそ、ここであずさ達の背負うペナルティの大きさを理解できる。だから、

「始まつてもいねえのに、最初の最初で、無駄足踏んでんじゃねえ！」

叫んで、最後のスパートを、宙はかける。

タイムリミットまであとわずか。喘ぐように酸素を暴食して、加速の限りを尽くして、ついに視界がライブ会場を捉えた。滑り込むようにして突撃すると同時、古くなっていた自転車のチェーンが歪な音を鳴らして千切れて飛んだ。悪態を吐いて、ブレーキに加えて足を蹴り込み自転車を止めた宙は、痛みに俯いて呻き声を漏らす。

「~~~~ッ！ このボロ自転車！」

「足、大丈夫ですか！？」

「人の心配してる暇があったら自分の心配しろ！ 早く行けよ、馬鹿！」

「ありがとうございます！」

「何度も言わせるな、行けよ！」

自転車から降りると、一礼をして、あずさはライブ会場に駆け出した。千早と小鳥が手を振っているのが見える。まずは謝らなくては。そして、初めての仕事に全力を尽くすのだ。“自分のため”に探しに来てくれた宙のためにも。それが恩返しだ。

あずさが見えなくなってから、ボロボロになつた自転車に視線を落として、宙は言った。

「この自転車借り物なんだけどな……」

ライブが終わった頃には、夕日は月に変わっていた。

ライブの余韻を残しながら、外の空気を吸うために会場を出た千早とあずさ。春の夜風はまだ少し肌寒い。お互い顔を合わせれば、すぐにライブのことが頭に浮かんでくる。さすがに春香の存在感は大きかったけれど、自分達の歌は大勢の心に届いたであろう、手応えを感じることができたのだった。

最初の一步としては、これ以上ない成果だ。

とはいえ、まだまだ努力が必要だ。千早は、へとへとになった自分の身体を省みて、思う。春香など、あれだけ活躍したにも関わらず、更にテレビ番組の撮影があると行って仕事に出かけてしまった。さすがはトップアイドルである。

……“あの子の夢”は叶えた。今度は自分の夢を叶える番だから。この程度でへこたれていては、何も成すことなんてできないだろう。

「千早ちゃん、がんばりましょうね」

「ええ、目指すはトップですね」

相変わらずゆったりした口調のあずさに、千早はくすりと笑みを漏らす。

「あんだ、笑うんだな」

不意に投げかけられた言葉は先客のものだった。月を見上げていたのは、天川宙だ。相変わらず慇懃無礼な人ね。そりゃ失礼、性分なんどね。素っ気なく答えた宙はしばらく黙って、ふと妙な言葉の切り出し方をした。頭を搔いて、言葉を選びながら、

「なかなかだ」

「え？」

あずさが聞き返すと、だからあ、と唇を尖らせてぶつきらぼうに、

「歌、良かったって言ってんだよ」

「……あ、ライブの」

「勉強のつもりで働いて来いって秋月にも言われたけど。……姉さんの影響で、これでも耳は肥えてるんでね。歌の良し悪しには自信があるつもりだ。確かに良い勉強になった」

恥ずかしがっているのか頬が赤い。そんな宙の様子に 正直二人は呆気にとられた。呆然とした。愕然とした。そこまで驚くことはないだろうに。きよとんとして、そこでようやく、彼が褒めてくれたらしいという事実に行き当たって。

破顔する。

「まさか宙さんに褒めてもらえるなんて」

「不満か」

「いえ、嬉しいんですよ。本当に、とっても嬉しいです」

「ま、まあ姉さんには全然及ばないけど。実力は認めてやるよ、うん。　　っておい、なんで如月は涙目なんだ」

いつの間にか千早の瞳は潤んでいた。指摘されて、すぐに目を擦った千早は笑顔だった。びっくりするくらい、今までの冷血漢なイメージを完膚なきまでに破壊するほどの満面の笑みで、強がったのだった。嬉しいくせに。

「ゴミが目に入っただけ。きっとそう。そうに決まってる」

“彼”は約束を覚えていないのかもしれないけど、それでも確かに認められた。夢に一步近づいたような気がして、千早は笑う。泣き笑いがとても綺麗に見えたことは、当の本人には分からなかった。背後から三人を呼ぶ声がする。小鳥だ。そういえばこの後、打ち上げがあると言っていたのを思い出し、あずさは宙の手を引いた。もちろん行きますよね？

「宙さん、今日は、本当にありがとうございました」

「ひどい一日だった」

でもまあ、こんな日があっても悪くはない。小さく宙は呟いて。そんな、ある日の風景だった。

第六話 サマービーチサンシャイン（前編）

第六話 サマービーチサンシャイン（前編）

「なるほどね。からかい甲斐のありそうな坊や」

リコリスは一人、誰もいない資料室で笑みを零した。資料閲覧用のモニターには、とある人物の経歴が細かに表示されている。先日、諜報部が調べ上げた天川宙の情報だ。

彼の経歴はなかなか興味深い。一歳にも満たない時期に捨てられ、両親の顔すら知らず、東京の端にある小さな孤児院で育ってきた。天川マツリと絆が深かったのは、ちょうど同時期に引き取られたという理由もあるらしい。詳細に目を通すと、如何に彼が天川マツリに“依存”していたのかがよく分かる。

親に捨てられ、同じ痛みを持つ者同士で傷を舐めあっていたのか否、これでは言い方がすこぶる悪いだらう。彼らはお互いの心の傷を、家族という関係で補完し続けていたのだらう。純粋な姉弟愛。血の繋がった家族でさえ、ここまでの愛はないはずだ。言うなれば比翼の鳥。それが天川宙と天川マツリの形なのだらう。

思っ、リコリスは胸が苦しくなる錯覚を得た。

……きつと羨ましいのね。

嫉妬しているのだらう。リコリスは自分の心情をそのように分析した。親も兄弟も、リコリスには縁のない存在だ。孤独という点において、宙とリコリスはとても似通っている。ただ、家族の絆を知っているということを除いては。

あの青年に興味が湧くのはそういうことが原因なのだらう。自分と似ているモノであり、そして違うモノ。因果なものだ。二人の差を明確にする存在が、両方とも同じ人物だとは。

天川マツリ。宙にとって、そしてリコリスにとっても、忘れるこ

とのできない存在。

……恨めしい女だわ。

強く歯を噛み締めた。あの女のことを思い出しただけで、ひどく陰鬱な気分になる。リコリスは首を振って席から立ち上がると、ふと、隣の机に一冊の本が置かれていることに気付いた。あかがね色の装丁で、表紙には互いの尾をくわえた蛇の文様。このご時勢では珍しい紙を利用した記録媒体だ。

誰かの忘れ物だろうか。手に取ってみると、どうやら物語であることが見て取れた。復興歴以前に書かれた古い物語で、著者の名前はミヒヤエル・エンデ。

タイトルは。
「はてしない物語」

夏。 茹だるような暑さと涼を求めた衣服の開放が交差する季節、
夏。

衣服の開放。 それすなわち水着。 もちろん、水着と海は言うまでもなくセットである。

真夏の太陽。 白い砂浜。 どこまでも続く水平線。 そして水着姿で羽目を外す女性達。 天川宙の視界には、夏の醍醐味であるそれら全てが揃っていた。 惜しみもなく、全力で。 女性“しかない”絵に書いたような楽園がそこには存在していたのだった。

ここ“月見島”はモンデンキントJPが所有する人工島だ。 一見、常夏のハワイアンビーチを具現化したようなリゾート地ではあるが、IDOLの部品を生産する工場や装備の実験に欠かせない専用設備を兼ね備えた、最先端技術の結晶でもある。 宙達が月見島にやって来たのは、IDOLの集中的なメンテナンスを行うためだった。

とはいえ、その娯楽性の高さも相まって、アイドルマスター課の面々にとっては慰安旅行的な側面も兼ねているらしく、仕事の合間

どころか海で泳いでいる時間の方が多し有様だった。本当に連中は仕事をやる気があるのだろうか。

なんて言いながらも宙自身も海を眺めているのだが。いや、勘違いのないように説明しておく、この場合は不可抗力であるからして。

何故ならば。

宙は首から下を砂浜に埋められて身動きがとれないからだ。

「萩原、説明しろ。どうして俺は埋められている」

「わ、私、男の人が苦手だから。宙さんと近くで話すと緊張するって、春香ちゃんに相談したら……」

「なんてそそのかされた」

「だったら埋めちゃえば相手は近づいて来ないよって言われました」「っざけんな！　ここから出しゃがれ萩原あ！」

ひい、と涙目になりながら後退る少女が一名。小動物のような弱々しい雰囲気から滲み出る気弱な娘だった。栗色のショートカット。やや垂れ下がった目尻。いつも何かに怯えて不安げな表情。普段は清楚な服装を好む彼女だったが、今は露出の少ない白のワンピース水着を身に着けている。

ネーブラのアイドルマスターが一人、萩原雪歩だ。

趣味はお茶とポエムらしく、少々古臭い人間だと宙は認識している。古臭い上、何事にも弱気で泣いてばかり。そうでなければおどおどしているかのどちらかだ。宙をして、見ていると腹が立つてくる存在だった。まるで昔の自分を見ているようで。

「仲間の人もちゃんとお話できない私なんて、穴掘って埋まっちゃいますう！」

そう言っただけからともなく取り出したスコップで（どこぞに四次元ポケットを仕込んでいるに違いない）、一瞬にして穴を掘って埋まる萩原雪歩だった。恥ずかしいことがあるとどこかしこにも穴を掘って埋まるのは彼女の悪い癖である。その人間離れた掘削技術は驚嘆の一言に尽き、実はモグラの生まれ変わりではと宙は睨ん

でいる。

「あのお」

「なんだよ」

「出られなくなっちゃいました……」

小波の音が切なく感じられたある日の昼だった。砂浜から生えた生首が二つ、顔を突き合わせているのは不気味を通り越してシュールだ。

そもそもこんな状況に陥った原因というのも、出発前の社長命令にあった。

社長命令。つまり高木順一郎から任された仕事だ。765プロにおいてプロデューサーという役職を与えられている宙は、ドロップ迎撃の仕事をこなしつつ、その傍らであずさ達の手伝いをしながらプロデューサーの勉強を重ねていた。時折、こうして仕事が回ってくることもある。今回がその例だった。

仕事の内容は単純明快。月見島にいる間、萩原雪歩のサポートをすることである。

難しい仕事ではない　　と　　思っていた。ところが蓋を開けてみれば、だ。

どうやら雪歩は、俗に言うスランプに陥っているらしい。特に、初出演だと張り切っていたドラマの役作りが暗礁に乗り上げてしまった状態らしく、普段小さく縮こまっている彼女は更に小さくなって落ち込んでいる有様だった。高木の思惑は、宙にメンタル的な回復を期待してのものだったということに、ここに来てようやく気付いたというわけである。

……高木の奴め、一体どういいうつもりなんだ。

高木とのぎくしゃくとした関係は　　いまだ　　続いているものの、立場上の関係は割り切っているつもりだ。故に、命令とあらば全力を尽くす。が、今回については文句の一つ出るのも仕方がないだろう。これは明らかに人選ミスに他ならないのだから。

天川宙は人付き合いを苦手としている。人間不信と言っても過言

ではないだろう。ここ数ヶ月の間、その時間の大半を共に過ごすあずさ達にさえ、いまだ距離を測りながら接している。そんな男が、気弱な少女を立ち直らせることができるものか。

そういうわけで、天川宙はほとほと困り果てている次第である。

不意に、仏頂面で浜辺に埋まる宙の上から声が降ってきた。

「なんだ、こんなところにスイカが。誰か、長い棒持ってきて！」

「目の前で埋まっている萩原には一生もののトラウマだぞ」

と、ふらふらとやって来た菊池真に物申す。「冗談だよ。頭の後ろに手を回し、口笛を吹きながらやって来た様子は、さながら風来坊のようだ。」

菊池真は、雪歩とコンビを組むネーブラのアイドルマスターである。

彼女は他のアイドル達と違ってとても中世的な容姿で、格好が格好なら、絶世の美少年と間違えられてもおかしくないだろう。格好良く切り揃えられたショートカットとさばさばした男っぽい口調も、それに拍車をかけていた。ダメ押しとばかりにスポーツ全般なんでもござれの運動神経の持ち主なのだから、宙より男らしい。

それでも本人は自分を乙女と評し、女の子らしい女の子に憧れているのだった。雪歩と特に仲が良いのも、同期というだけでなく、か弱い少女の見本である雪歩への感心もあるのだと宙は思っている。残念ながら、たまに少女趣向の格好をして事務所に来ては皆から熱はないかと弄られているようでは、憧れへの道も程遠い。なににより中性的で男勝りな風貌故か胸もなく、

「おい、今失礼なことを考えなかったか？」

半目で宙を睨む真。道端で目が合ったら反射的に逸らしてしまいたい目付きの悪さだ。

「……そんな風だから女性ファンしか増えないんだよ」

「雪歩、このスコップ借りるよ。目は瞑っておいてね」

「悪かった！俺が悪かった！」

危つく首から上がなくなるところだった。まだ姉のところに行く

には早い。

どうにか真に砂浜から引つ張り上げてもらうと、雪歩は申し訳なさそうに膝を抱いた。この様子だと何も進展はなさそうだね。事情を知っている真は、残念そうな笑みを浮かべて雪歩を慰めにかかる。宙はどうしたものかと腕を組んだ。

「菊池、おまえ同期だろ。アドバイスとかないのかよ」

「雪歩の引つ込み思案は昔からだからなあ。そうそう簡単にはいかないだろうね」

「犬と男にびびってるくらいだしな」

「犬に至ってはチワワですら地獄の番犬に見えてくるらしいよ」

「チワワがケルベロスなら、大型犬は世界を滅ぼす魔王か何かか」

そこかしこでリード付きの魔王が散歩している世の中では、雪歩にとつて日常と地獄は紙一重だろう。

この調子では埒が明かない。万事休すか。そう思われた時である。遠くから呼びかける声に振り向くと、そこにはなんと神々しい谷間が。……否、三浦あずさが手を振っていた。

あずさの姿は言うまでもなく水着である。白のラインが入った紺のビキニで、椰子の葉のレリーフが描かれた透けたパレオの清楚なイメージがあずさによく似合っている。かつ大胆な露出が彼女の絶対無敵スタイルに拍車をかけており、ワンポイントにハイビスカスの髪飾りが映えていた。

まったくもって、目に毒だ。近づいて来たあずさを見やると、どうしても視線は顔よりも下に行く。宙も男ということだった。

「あの〜、何かついてますか？」

「ついてるついてる、たっぷりと」

宙と真の声が綺麗にシンクロした。小首を傾げるあずさは、雪歩の調子はどうかと問うた。どうやら心配して来てくれたようだ。手の平を上にも、首を振って、さっぱりだめだとポーズを取ると、あずさは残念そうに眉根を下げた。

「何かキツカケがほしいですねえ」

「キツカケ、ね。なにか良い方法が」
宙の言葉は途中で途切れた。いや、邪魔をされた。腹に響く大音量が轟いたからだ。

ビーチの木々を挟んだ先から、巨大な火柱が天に向かって伸びている。次の瞬間には一際大きい爆音が周囲を震わせて、火柱が更に噴出した。思わず耳を押さえる宙。

「うわ、やってるなあ。IDOL用に開発した新しい推進機関の燃焼実験。全開噴射なんて、ここでしか出来ないと言ってもさ。すごい音だよな」

真の吹いた口笛も、火柱が発する噴出音に呑み込まれていく。皆が遊び呆けているとはいえ、ここにはIDOLを整備するために来たのだと今更ながら思い出させられる。

「……少し休憩入れるか。雪歩と真は、気分転換に泳いできたらどうだ？」

火柱が小さくなっていくのを見届けて、宙は腰に手を当てて言った。

「え、でも……」

「これ以上根を詰めても収穫はない。これ、プロデューサー命令だから」

あ、職権乱用。いいからさっさと行け、しっしっ。からかう真にあっち行けと手を振る。雪歩はわずかに躊躇いを見せたが、真が問答無用で手を引いて海へと駆けて行く。あいつら、仲良いな。呟いた宙は大きく伸びをして、今度は、取り残されて手持ち無沙汰になった自分のこれからを思索した。

「宙さん、せつかくですから、IDOLさん達の整備でも見学に行きませんか？」

あずさの提案に、それも悪くないかなと了承の意を答える。ところが、歩き出そうとしたところで、妙に嬉しそうにしているあずさに気付いた。機嫌の良くなるようなことを言った覚えはないが。訝しげにあずさを見やると、彼女はくすりと上品な笑みを浮かべて、

「だって、一緒に行こうなんて提案、断られると思っていたので。少しは私、宙さんに信用してもらえたってことですか？」

「ば、馬鹿言うな！俺は単に、ヴェルトールの様子が気にかかっただけだ！」

「でも最近、色々付き合ってくれるようになりましたよね。この前も水着選び、手伝ってくれたじゃないですか」

彼女の言う通り、あずさの水着は宙が選んだ物だ。ライブの時、色々勉強させてもらった礼に、何か役に立てそうなのではないかと気まぐれで聞いたら、何故か水着選びに付き合い合われる羽目になった（提案役としてあの馬鹿リボンが一枚噛んでいたらしい）。そうして選り抜かれた一着を、あずさが身に着けているわけなのだけだ。

……まさかここまで似合うとは思わなんだ。

少し腰を屈めて、上目遣いで覗き込んで来るあずさに、宙は顔を真っ赤にして後退った。その体勢だと胸が強調されて直視することができない。わざとやっているのか、と問い質したかったが、無自覚なのが透けて見えるので何も言えず。自分の着ている薄手のパーカーを手渡すことで自己完結することにした。ちよつと、これ、着てて。

火柱が上がっていた方へしばらく歩くと、ビーチに併設された整備棟に辿り着いた。先の燃烧実験で生じた煙が漂う中、その奥から聞こえてくるのは、仕事に勤しむ整備班の声である。中に入ると、三機のIDOLが膝を着いた状態で並んでいた。

インベル達には情報収集用のケーブルが接続されており、細かな整備作業が行われている。月見島では東京の基地でできないような精密検査が可能であるため、こうして通常の検査では分からない極小の傷からシステムのバグまで全て洗い出しているらしい。

ほう、と感心しながら作業を眺めていると、整備服姿の律子に声をかけられた。

「あら、天川とあずささんじゃない。こんなところで何してるの？」

「おまえこそ、マスターのくせに整備班に混ざって何やってるんだ。それに、あっちにいるのは如月じゃないか？」

忙しなく働く整備班の中に千早を見つけると、あちらも気付いて会釈を返すが、すぐに自分の作業に戻ってしまった。相変わらずである。

「私は元々整備班出身なの、前にも言ったでしょ。こっちに来てい
る時は、こうして整備に混ぜてもらっているのよ。千早の場合はイ
ンベル専門だけど、あの子は真面目だから、自分のIDOLくらい
しっかり面倒見ておきたいんでしょ」

説明に納得した宙は、ふと違和感に気付く。ヴェルトールがどこ
にもいないのだ。

「ああ、ヴェルトールなら別の場所よ」

「どうしてだ？ ……もしかして、問題でもあったのか」

「違うわよ。ヴェルトールのブラックボックス絡み。基地じゃ解析
できない部分があるからね、ここで徹底的に“丸裸”にするつもり
なんでしょ」

丸裸、ね。ぽつりと呟く心の中に密かに案じる気持ちがあること
を、宙は嘆息した。戦うために必要な相棒だとしても、いくらなん
でも過保護だろう。……いや、過保護？ 誰一人信用できない自分
が、そんな気持ちを抱くものか。苦虫を噛み潰したような表情で己
の心情を分析していると、

「律子さん、ヴェルトールさんの整備場所ってどこですか？」

やっぱり心配になりますよね、私もです。はにかみながらあずさ
が言った。誤解だと反論するのを遮る形で律子が奥にある階段を指
差すと、あずさはお構いなしに先に進んでしまうので、渋々と宙も
後に続く。背後から、

「なんだかんだで良いコンビじゃない」

と、聞こえたのは無視することにした。

階段を下りた先にあった鈍重なドアを開けると、そこに広がって
いたのは地下実験場だ。巨大な円柱状の施設で、漂った蒸気のせい

で靄の中に迷い込んだような錯覚を受ける。だがこの悪い視界の中でも、巨大な全容はなんとか確認することができた。

施設の中心に確認できる人型の何か。

「丸裸って、本当にそういう意味かよ……」

宙はヴェルトールの巨体を見上げながら、驚きを顕わにする。

装甲を全て外され、内部のフレームを露出した愛機の姿。上半身のみがハンガーで吊るされ、部分単位で分解された四肢と無数の神経ケーブルで繋がっているだけという有様だ。これにはあずさも目を丸くして言葉もない。彼女の手が宙のシャツの裾を小さく握ったことに、宙は気付いていなかった。

「びつくりしましたか？」

「ジョゼフ課長　ってその格好はなんだ!？」

振り向くと、ピンクのブーメラン水着に普段着ているコートを羽織るという奇天烈な格好のジョゼフがにこやかに立っていた。変態が、立っていた。露出狂に見えなくもない。歳を感じさせない引き締まった肉体だけに、本能的な嫌悪感は凄まじいものである。

「ここまで徹底的な作業は、ここでなければできませんからね」

おかげで色々分かりましたよ。ジョゼフの言葉に、引き攣らせていた口元を引き締め、耳を傾けた。ブラックボックスの塊であるヴェルトールについて、宙にも知っておきたいことが山ほどある。気持ちは真剣なものへと切り替わった。

解明されたのは、ヴェルトールの内部フレームには自己修復能力が付加されていること。

そして、ヴェルトールのコアは、元々モンデンキントが所有していたというのだ。

「ちょっと待て。こいつは元々トゥリアビータのIDOLだろうが」
「どうやら事情は複雑らしい。まったく」と。宙は両手を腰に当てて相棒を横目で窺った。おまえは謎の多い奴だな。

「詳しく、聞かせてくれないか」

「ライブラリの五番まで確認完了。えっと、次はこっちな」

如月千早はコックピットの操縦席に背を預け、手元のパネルを操作しながら、早々と仕事を片付けていく。システムのバグチェックは地味な作業だが、千早は文句一つ口に漏らさない。相変わらず、寡黙が人の形をして歩いているような人間であった。

真面目そのもの。それは“自分のIDOLの面倒は自分で見る”という意思からも汲み取れるだろう。千早にとっては、真夏の海もくだらない娯楽にしか映らなかった。むしろ、皆は仕事を怠けて何故遊んでいるのかと、疑問に思っているくらいだ。

黙々と作業を続ける千早だったが、ふと影が見えた瞬間、背中に軽い衝撃が来た。

「ちゅはゅやゅちゃん！」

「は、春香！ 驚かさないでちょうだい」

へへ、と舌を出してお茶目に笑う春香。彼女は水着姿でビーチサンダルという軽装だ。その手には、水着がもう一着握られていた。

「これ、内緒で千早ちゃんの分も持ってきたの！ 一緒に泳ごうよ」
確かに泳ぐつもりもなかったのに、水着を持ってきてはいなかったが、

「悪いけど、私は泳ぐ気ないから。自分のIDOLくらい、整備を手伝わなくては。春香も少しは手伝ったらどう？」

「うっ……。そう言われると何も言い分がないよ」

隅で“の”の字を書き始める春香を無視して作業に戻ろうとする
と、

「どうして千早ちゃんはそう固いのかなあ。……宙とのデートだった、断っちゃったし」

「あれは春香が勝手に話を進めただけでしょ！」

思わぬ反撃で入力ミス。エラー表示を処理する千早の頬は赤く染まっている。反撃の糸口にニヤリと口元を歪める春香は、

「結局、宙とあずささんの二人で行っちゃったけど。最近よく宙と話してるみたいだし、気を使っただけだなあ。千早ちゃんも、年頃の女の子だもんね」

「宙とは、単に彼が音楽知識に詳しいから、意見の交換をしているだけよ！」

あれはデートだなんて大それたものじゃない。ただ水着を買いに行こうと誘われた際に、春香が宙を連れて行こうとしていただけのことだ。男女のあれこれは一切ない。断ったのも、はなから海なんて眼中にないからである。

もう一つ言わせてもらえば、それは千早なりの気遣いでもあった。宙とあずさの関係がアイドルマスター課で噂になってるのは知っていたし、二人の間に割って入るのも悪い気がしたのだ。お邪魔にはなりたくない。

……それなのに。

千早は服の内側に隠した、首から提げる指輪に意識を向けた。シンプルなデザインで、露天に売っているような安い品だ。

なんの気まぐれか、宙が千早に買ってきたものだった。水着選びに付き合わなかった代わりに、勉強代として購入してきたらしい。何故指輪かと問えば、千早は飾りつけがないからその手のものが良いと春香に吹き込まれたと言っていた（裏で働きかける春香の行動力は戦慄せざるを得ない）。

せつかくあずさと二人きりにしたのに、他の女性への贈り物なんて選んでいたら本末転倒ではないか。まあ、当のあずさは積極的に選ぶのを手伝ってくれていたようだけれど。気を利かせたこちらが馬鹿みたいだ。

送られた指輪を大事に持ち歩く自分を思うと、過去の、“あの時”の出来事が蘇ってきて胸が苦しくなった。締め付けるような胸の痛みを忘れようと、水着片手に迫る春香の相手に徹する。

その時、ふと、作業中のモニターが切り替わった。

映し出されたのは春香の水着姿だ。先程まで泳いでいた時の、映

像だった。

「もう、インベルまたなの？」

インベルに限らず、IDOLには悪い癖がある。いつの間にかマスター達を撮っては、ライブラリに保存しているのだ。起動キーの役割を果たすアイは、IDOLの目としても機能するので、それを利用していろいろだろう。

太陽が燦々と降り注ぐ海を背景に映る春香の姿は、実に健康的。少女から脱皮しつつある体は丸みを帯び、均整の取れたバランスの良いプロポーションをしている。他にも、あずさだったり、伊織だったり、雪歩だったり、ブーメランパンツのジョゼフだったり、

「え！？ ちょっと、今のおかしいよねインベル！」

「いいから！ 今のは保存しなくていいから！」

まさかそっちの道に！？ 本気で焦るマスター兩名であった。二人の気持ちを知ってか知らずか。インベルは最後に、コックピット内の春香と千早を映し出す。ズームされているのは、春香が持っている水着だ。その意味するところを千早は悟った。

「私の水着姿が見たいの？」

応じるように、モニターがちかちかと点灯する。困ったものだ。まさかインベルから要求があるとは。隣で春香が嬉しそうにしているのは、味方が増えたからだろう。案の定、春香はずいっと水着を押し付けてきた。

こうなったら逃げ場はもうなかった。インベルの機嫌を損ねて、後で拗ねられても困りものだし。諦めて嘆息した千早は水着を受け取る。

「もう、インベルのエッチ……」

さっそく水着に着替えるべく、二人はコックピットを後にした。

月見島にも管制室がある。宙とあずさは、ジョゼフの案内で管制

室に招かれていた。設置された複数のモニターにはIDOLの解析情報がまとめられ、表示されている。ヴェルトールの姿もいくつか確認できた。

さて、と前置きして、ジョゼフはIDOLについて説明することから始めた。

「月の崩壊については、説明するまでもありませんね？」

「世界人口の四分の一を死滅させた大惨事。まあでも、歴史上の出来事って感じだけだな」

「それも当然でしょう。今から一〇七年も昔の出来事です。……その未曾有の危機の代償として、人間は、落下したドロップの内部から謎の構造体を発見しました」

ジョゼフがモニターを操作すると、IDOLのコアが3Dモデルで表示される。

「発見されたコアの原型は、地球には存在しない複雑なシリコン構造体で、無限にも思えるエネルギーを内包していました。そして我々モンデンキントは研究を重ね、ある“二人の天才”が構造体の解析に成功したのです。」

その結果生み出されたのが、IDOLの根幹を成す存在であるコア。そして人型インターフェース、現在の隕石除去人型重機。

「IDOLなのですよ」

「それじゃあ、俺達の乗っているIDOLってのは……」

「ええ、正確に言えばIDOLは人類が一から作り出したわけではないのです」

言い換えてしまえば、人智を超えた超常的存在ということになる。肺に溜まっていた空気を大きく吐き出し、自分の思考が働いているかを確認する。

一昔前の漫画みたいな話だ。けれど、納得できる部分も多々ある。IDOLの持つ“意思”や慣性制御というオーバーテクノロジー。それはつまり、人類の及ばない超越的な“何か”の力を借りていると説明するなら、全てが解決する。オカルティックな話だが、そも

そもIDOLの存在自体、考えてみれば不思議なことの方が多い。

「とはいえ、現在の科学技術を持ってしても、コアの有するエネルギーを全て抽出することはできていません。IDOLにも活動限界が存在しますが、開発当初の計画では、コアは永久機関として無限のエネルギーを供給するという話だったようです」

それでもコアは莫大なエネルギーを内包しているのには変わりない。IDOLが重機というカテゴリにあるにも関わらず、既存の兵器を悉く凌駕する性能を持っているのも頷ける。

「……待てよ。じゃあトウリアビータは、そんなものを量産してるのか」

エピメテウス。量産型IDOLとされるあの青いIDOLのことが頭を過ぎった。

いや、とジョゼフは首を振った。エピメテウスはあくまでコピーに過ぎず、慣性制御の能力しか持たない、兵器として追求されたIDOLらしい。その能力はオリジナルと比べて幾分も落ちており、インベル達には遠く及ばない。

「コアの解析で得られた情報によれば、オリジナルは全部で五つしか存在しません。インベル、ネーブラ、ヌービラム、テンペスター、そして“ヒエムス”の五つ。最後の一つははまだ搜索中ですが」「五体……？　じゃあヴェルツールは人工IDOLなのか？」

だとすれば、何故インベル達と同等の力を有しているのか。なにより、何故ヴェルツールに意思があるのか、説明がつかない。宙は腕を組んで考察する。そういえば、ヴェルツールは元々モンデンキントのIDOLだと意味深なことをジョゼフは言っていたな。

「まだなんとも……。確かなことは、ヴェルツールがインベル達と極めて同質のコアであること。自己修復能力という、新たなオーバーテクノロジーを有していること。そして、その存在はモンデンキントの古い資料に記載されていたということですよ」

ジョゼフは再びモニターの映像を切り替えた。どうやら今度は写真のようだ。背景を見る限り、ここの整備施設とよく似ている。そ

して写真の中心に写っているのは、おそらく建造中のIDOLである。見たことのない機体だ。

下端にある日付は四十年近く前のものとなっている。

「古いデータライブラリの破損したものを、最近サルベージしたものです。写っているのはIDOLの雛形、いわゆるプロトタイプですな。付随する資料にはこのIDOLの名前が記載されておりました。ヴェルツールと、呼称されていたようです」

「……これが本当に俺達の知っているヴェルツールだとして。問題は、ヴェルツールがトゥリアビータに渡った理由だ」

「ここからは憶測になりますが、おそらく、“夜明けの紫月事件”のせいでしょう」

この機会に説明しておきましょう。ジョゼフが話を仕切り直す。

ちらりと横目であずさを伺うと、真剣に聞き入っている横顔を確認した。宙も再び話に聞き入る。

「かつてモンデンキントJPで起こった内部分裂事件。それが、夜明けの柴月ドです。モンデンキント本部管轄下のIDOL研究機関が、IDOLを独占し、それを自分達の目的達成のために使おうとしたのです」

組織から離反するために行われたテロ行為のせいで多くの人間が犠牲になった。IDOLを奪われる最悪の事態は避けられたものの、研究に関わる資料はそのほとんどが葬り去られ、IDOLの研究成果は謀反を起こした研究機関が独占することとなった。その研究機関との戦いは、今もなお激化の一步を辿っている。

「まさか、その研究機関ってというのは」
「そう、トゥリアビータです。元々彼らは、モンデンキントの研究機関だったのです」

ジョゼフの憶測では、事件の混乱の折にヴェルツールは奪われたのではないかという。事件当時の情報がほとんど失われ、研究員の大半がトゥリアビータとして組織から離反していることを考えれば、秘密裏に研究されていたプロトタイプの存在は、自然と闇に消える

可能性が高い。有り得る話だ。

存在が抹消されたプロトタイプIDOLヴェルトル。

誰からも忘れられて。誰も自分のことを覚えていない。

それは一体どんな気持ちなのだろうか、と。

宙は一抹の寂しさを胸に抱いて、拳を握り締めた。

「奴らはヴェルトルを奪って、俺達と敵対してまで成し遂げようとしている目的ってのは、一体何なんだ」

「おそらくはミシユリンクの完成、でしょうな。彼らは以前から、それについて研究を重ねていましたからね」

「ミシユリンク？」

疑問はあずさのものだ。宙もその言葉に聞き覚えはない。

「来るべき未来に備えて人類全てを平等に救うもの。それがミシユリンクだそうです。彼らの存在意義は、現状では世界平和のためとは思えませんがね」

詳しいことは分かりませんが、とジヨゼフは首を振った。

“どんなに悪い事柄とされても、それが始められたそもそもその動機は善意によるものである”。古い人物の言葉だそうだ。孤児院の園長の受け売りだが。

宙は大きく吐息して、知らされた事実に想いを馳せる。IDOLを中心とした大きな奔流が、茫漠とした時間の流れと共に世界を廻っている。何十年という昔から続く対立のうねりに、マツリは巻き込まれて命を落とした。そして宙も、あずさ達も、その流れに飲み込まれた。

再び、己が決意を振り返る。自分が何のためにここにいるのか、何を成さなければならぬのか。今一度思い返し、宙は言った。

「汝の欲することを成せ」

朗々と言葉を放った宙に、隣のアずさはきよとんと目を丸くする。

“はてしない物語”の一節だ。孤児院の院長が、子供の頃に読み聞かせてくれた物語。その中で、グラオーグラマーンと呼ばれる獅子はこう語る。“それは、あなたさまが真に欲することをすべきだ

ということですよ。あなたさまの真の意思を持ってということですよ。これ以上にむずかしいことはありません”、と。

折れない意思を持つ。難しいことかもしれない。それでも復讐を果たすためなら、それまでは絶対に、天川宙は何事にも屈するつもりはない。

「俺は、姉さんの仇を取るためにここにいます。トゥリアビータにどんな理由があろうと、確執があろうと、関係ない。俺は自分のやるうと思ふことを成す」

復讐の炎を改めて心に宿した宙は、自分に言い聞かせて誓った。

隣で、悲しげに瞳を揺らしたあずさに、気付かないまま。

第七話 サマービーチサンシャイン（後編）

第七話 サマービーチサンシャイン（後編）

「宙さん、泳ぎましょう！ 色々忘れて、楽しく！」

ジョゼフと別れて管制室を後にすると、突然、あずさが物凄い勢いで提案してきた。如何に海で泳ぐのが素晴らしいかを熱弁する彼女の様子は、まるで別人のよう。勢いに押し切られて、宙は無理矢理頷かされる形で、あずさに付き合うハメになった。

何があつたのだ、と首を捻りつつも仕方なく更衣室に向かう。

実のところ、天川宙は泳ぎが得意ではない。水瀬なんぞに知られたら馬鹿にされるに決まっているぞ、と。意気消沈しながら更衣室に入った宙は、適当なロッカーを探して辺りを見回す。内装は清潔感があり、なかなか広い。直立する兵隊の如く並べられた背の高いロッカーを横切り、角を曲がった時である。

すると、宙はそこで石像のようにぴたっと動きを止めた。固まってしまった。

そこに、“裸”の如月千早がいたからだ。

「……何故！」

当然の疑問だった。全力の疑問を、両目を見開き、言語では説明できない凄まじき形相で表現。宙は思考を超高速で回転させ、この状況を自問自答する。何故、如月千早がここにいる。ここは男性用更衣室のはずだ。どっちが間違えた。自分が間違えたのか、如月千早が間違えたのか、どっちだろうか。自分が間違えたという可能性は、否、有り得ない。

天川宙は、女性用の更衣室と間違えないように、しっかり確認してから入ったのだから。何度も何度も確認してから入ったはずだ。

三浦あずさから教えられた場所に、更衣室は一つしかなかったは

ずだ !

かつてない緊張感が宙を苛んでいた。もし、宙が冷静な思考を保っていたのであれば、謎はすぐに解明されていたはずだろう。

月見島に訪れる人間は、アイドルマスター課の人間がほとんどである。その構成員の大半が女性であることは言うまでもない。結果、月見島では男性用更衣室の需要がなくなってしまうわけ。よく探せば見つかったであろう、物置と化している男性用更衣室に、宙は気付かなかったというわけだった。

つまり、間違えているのは宙の方。

千早も目が合った瞬間に硬直してしまっていた。手に水着が握られていることから、おそらく着替える途中であったのだろう。千早の身体は細く、白磁のような肌は若々しさに漲っていた。触れれば砕けてしまいそうな、どこか現実離れた感覚を持つてしまうのは、女性の身体というものを見慣れていないからだろうか。

などと分析している内に、やがて千早の思考が状況に追いついたのか、顔をりんごのように真っ赤にして小刻みに震え始めた。まずい、ここで叫ばれたら色々な意味でお仕舞いだ。咄嗟に宙は取り繕おうと声を出した。

「そんな平坦な身体を見ても俺はなんとも思わないから、気にするな！」

顔を赤くしている羞恥の色が怒りに変わった。殺意の漂う黒く禍々しい何かを千早の周りに幻視して、思わず悲鳴をあげそうになった瞬間、

「千早ちゃん、着替え終わった……って？」

角からひよっこり顔を出した天海春香の来襲により、ぴしりと空気にヒビが入ったのを感じた。口をあんぐり開けて青ざめる宙と、一秒先には核爆発を引き起こしそうな真っ赤な千早と、それを交互に見る春香。

なるほど、と両手を叩いたりボン娘一名。すう、と大きく息を吸い、

「宙が千早ちゃんを襲ったー!!」

待て、誤解だ！ 月並みな言い訳をしてもすでに遅し。どうしてそんなに耳が良いのか疑いたくなる素早さで、ドタドタと無数の足音が聞こえてくる。四面楚歌という言葉が脳裏を過ぎり、生まれたての子鹿顔負けの足の震えを披露する宙であった。

「宙、少しお話ししようか。千早ちゃんに何しようとしたの？」

天海、顔、怖いよ。あとなんか黒いよ。更衣室から大人数が流れ込んで来て、そこから先は苦痛以外思い出すことができなかった。

整備島の夜は騒がしいほど賑やかだ。整備班お手製の花火が咲き、砂浜ではキャンプファイヤーを囲み、バーベキューに大勢が群がる。熱狂的なお祭り騒ぎは、きつと、普段の激務から開放された反動なのだろう。各々が思い思いの夜を過ごしていた。

そんな中、昼間の出来事で顔を赤く腫らした宙だけは、一人別行動をとっていた。

雪歩と真がないことに気付いたのだ。面倒ではあったが、雪歩のことを頼まれている以上放つてはおけず、こうして探しに歩いているのだった。

しばらく歩いていると、少し離れた砂浜で、また泣きべそをかいている雪歩と、それを慰めている真を発見した。また泣いているのか。見つけたことへの安堵より、ふつふつと湧き上がる苛立ちを強く感じる。舌打ち一つ、無精と思いつつも、仕方なく二人に近づいて行った。宙に気付いて、雪歩が顔を上げる。泣き腫らした目だった。

何をしているのか問うと、練習です、と小さな声が返ってきた。

「ドラマの役作りだよ。ずっと練習してるんだけどさ、うまくいかないんだ」

言葉を引き継いだ真は、至極残念そうに溜息を吐く。ごめんなさ

い、と。ほとんど反射的に謝ってしまった雪歩の弱気な態度に、とうとう宙の堪忍袋の緒が切れた。

「……おまえ、そろそろいい加減にしろよ。その態度、すごく、腹が立つ」

「おい、そんな言い方ないだろ！」

怒鳴った真が掴みかかってくる。その目を睨み返ししながら、宙は続ける。

「まるで昔の自分を見ているようで、自分を殴りたくなってくるんだよ……！」

真の手を払い除けながら、しゃがみこんだ雪歩の手を掴み、立ち上がらせた。それだけで怖がる素振りを見せられては、宙の苛立ちは募るばかりである。

「萩原、おまえはなんで泣いてばかりなんだ」

「だって、私、自分が嫌いだから。何をしても失敗しちゃう。皆に迷惑ばかりかけちゃう。そんな自分が大嫌い、だから……」

「俺も同じなんだよ。同じだから、腹が立つんだ」

雪歩の弱々しい態度は、自信のなさの表れだ。何事にも自信がない。だから、世の中の全てが怖いものに見えてしまう。それはかつての天川宙そのものだった。否、かつて、だなんて過去形ではない。今だってそうかもしれない。

幼い頃は、弱虫で、臆病で、虐められてばかりいた自分が嫌いだった。いつもマツリに助けてもらえばかりの自分が大嫌いで、憎くて、恥じていた。雪歩と同じだ。だから、まるで自分を回顧しているように感じてしまうのだろう。故に、宙は許せなかった。

泣き虫だった自分を知っているからこそ。雪歩の気持ち理解できるからこそ。

目の前で泣いている雪歩にも。それをどうすることもできない自分にも。

抑えられない怒りが込み上げてくるのだ。

「泣いていたって何も変わらないって、どうして分からないのさ！」

激情に駆られて雪歩の肩を掴むと、彼女の目尻にまた涙が浮かぶ。ああ、こいつはどうして、こつも自分の感情を逆撫でするのが上手いのだろうか。宙は齒を噛み締めた。

「もうやめろよ。気持ちには分かったけど」

真は二人の間に割って入り、

「雪歩は宙じゃないよ。誰でも宙のように強くない。そうだろ？」

「……俺だつて強くなかないさ」

宙は肩を落とし、踵を返した。本人がこの調子では何を言っても意味はない。高木の命令がなければ、元々雪歩に義理立てする理由もないのだ。加えて自分は感情的になつているし、なにより、萩原雪歩という人物に失望を覚えてしまった。失望。そう、失望だ。胸の奥で冷めてしまった自分がいる。

宙の目に、萩原雪歩は大変な努力家に映っていた。訓練室に遅くまで残っている、同じように残っている彼女をよく目撃する。ドロップ関連の知識を頭に叩き込もうと、疲れた身体に鞭打って休憩室の机を占領すると、必ず先客の雪歩がいて、台本を読み耽っている。誰よりも、雪歩が努力しているのを宙は知っていた。

雨垂れ石を穿つ。そんな奴だと思っていたのに。

自分で勝手に諦めてしまうから、何もできないままなのだ。

ふと、青菜に塩だった雪歩がぼつりと呟いた。

「……どうせ、私はダメダメな子なんです」

「また、そんな……！ 大概にしろ！」

だから評価はしていても、おまえのことは嫌いなんだ。

怯える雪歩に捨て台詞を吐いて、宙は大股で砂浜を戻った。遠く、楽しく騒ぐ声が弾けては薄れていく。まるでこの場の明るさが吸い取られているような、そんな気さえした。

突然の警報にアイドルマスター達が叩き起こされたのは、明け方

の話だ。

陽も昇らぬ早朝、ドロップの接近を確認したモンデキント本部の要請により、アイドルマスター課の面々はIDOLを出撃させた。出撃したのはインベルとネーブラ。そのネーブラに搭乗したのは、昨晩の一件で意気消沈とした雪歩と、パートナーの真だった。

最大速度からゆるやかに減速した二機は、地球を背後に迎撃準備を開始。

相手にするチェリー級ドロップは、最大サイズであるストロベリィに次ぐ大きさである。このサイズともなると、精度の高い迎撃は難しくなってくる。そのため実力で勝る春香達のインベルがメインで、ネーブラはバックアップに回る手筈になっていた。

しかし、雪歩の心中は不安一色であった。チェリー級の迎撃は、今回が初めてだったからだ。雪歩達が迎撃を担当することになったのは、経験を積ませようとするジョゼフの算段もあったのだろうが、臆病な彼女は、今にも心臓が破裂しそうな勢いだった。

一方、インベルのコックピットでは春香と千早が細かい調整を行っていた。何度経験してもドロップに相対する緊張は拭えない。春香は気分を紛らわすそうと、

「でも意外だったなあ。まさか千早ちゃんが、宙のことグーパンチなんてさ。しかも顔面」

「その話を持ち出さないで。あれは反射的なもので、どうしようもなかったの」

顔を赤らめて反論する千早に苦笑する。確かにあの状況では冷静でいられるはずもないか。とはいえ、後からやって来た春香としては、状況を生み出した原因が甚だ疑問ではあるが。

「まったく、あの人はデリカシーがないのよ！」

「……千早ちゃん、なんか嬉しそう。宙の話をしている時はいつもそう。やっぱりね、もっと積極的に攻めないとダメだと思う！ほら、あずささん強敵だし」

「何の話！？ 私は別に、宙とあずささんがどうしよう関係ない

し……」

「千早ちゃん素直じゃない！ もっと気持ちを素直に純粹に！」

「春香、あなたねえ……」

いい加減にしない！ 軽く怒られて凹む春香。でも、宙に対して千早の態度がおかしいのは本当だと思う。乙女の勘フルドライブだから間違いないはずなのだけど。

おっといけない。続く思考を中断する。今はドロップが先決だ。良い具合に緊張が解け、肉眼で確認したチェリー級を見据える。千早も同じく操縦桿を握り、互いが確認を取ると、ドロップを玉砕すべくフットペダルを踏み込む。

しかし、

「あれ？ う、動かない!？」

操縦桿を押し込んでも、インベルは指一本動かなかった。故障か。このタイミングでのトラブルはまずい。様々な原因が頭を過ぎり、春香はナイフを喉元に突きつけられたようなひどい慄きを得て、血の気が引いた。

咄嗟に、春香はインベルに呼びかける。インベル、どうしちゃったの!？」

「どうしよう小鳥さん、インベルが動かないの!」

『春香ちゃん落ち着いて！ でも、異常は確認されてないのに……』
管制の小鳥の声にも焦りが混じる。ドロップは目前まで迫っているのだから。

……まさか。

春香は直感的にその理由を悟った。女の勘とも言っだろう。何か分かったのか、と千早は必死にコンソールを操作しながら問う。もし自分の考えが当たりなら、千早の行為は逆効果だ。春香は苦笑いしながら、

「もしかしたら、嫉妬しているのかも」

千早と宙の関係について、見ていたのは春香だけではない。インベルだって気にかけていたはずだ。その理由を肯定するように、モ

ニターに昨夜の花火祭りの映像が流される。全て宙と千早を写しているのが何よりの証拠である。

「そ、そんなことを!? インベル、今はそんな場合じゃないでしょ!」

千早の叫びも虚しく、ドロップはただ一直線に地球へと向かってくる。

『ネーブラはインベルの代わりにドロップを。急いで迎撃位置に!』

「そんな、私達がチエリー級のドロップを破壊するなんて……!?」
雪歩の悲鳴のような声が響く。今の言葉で身体の震えが止まらない。実際にチエリー級を迎撃したことはないし、バックアップという立場で、半ば安心して切っていたところに不意打ちだ。それこそ、全身に稲妻が奔ったかのような衝撃だった。

無理だ、できっこない。思考を支配するのは、どうしようもなくネガティブな言葉の群れ。こんな震える手で、迫り来る巨大な悪魔をどうしようと。

「雪歩、僕達がやらなきゃならない!」

怯える雪歩にサブパイロット席で真が叫んだ。でも、どうにかしようにも、雪歩の意思には関係なく身体が動かないのだ。竦んで動けない。青い顔で背を震わせていた雪歩だったが、とうとう重圧に耐え切れず、ぽろぽろと涙を流して俯いてしまった。

昔から気の弱い自分が情けなくて、それを克服するためにアイドルになった。だが、それがどうだ。少しでも成長しなければと挑戦した結果がこの有様だ。いざ自分の出番になれば臆病な自分が尻尾を出す。胸の内では覚悟したつもりでも。臆病は理屈ではない。

唇を噛んだ、その瞬間だ。

『萩原雪歩!』

力強い声が雪歩の名を呼んだ。はっとして顔を上げると、宙の姿

がモニターに映っているではないか。宙は雪歩の泣き顔を見て、至極残念そうに眉根を下げた。

『おまえはそうして、また逃げるのか』

「私にはできません、無理です」

『勝手に決め付けるな!』

怒声が飛んだ。思わず身体を抱く雪歩。殴られそうになった子供のような仕草だ。構わず、宙は言葉が続けた。誰が無理だと決め付けた。そんなことを言う奴は誰もいない。おまえが、できないと思っ込んでいるだけだ! 情けないと思わないか!

「だ、だって。怖くて、身体が動かなくて、一体どうしろって言うんですか!？」

吐き出した不安。ああ、なんて嫌な子だろう。私はただ八つ当たりしているだけだ。癪癪を起こした子供のそれと同義だ。雪歩はぼろぼろと涙を流し続ける。自分にはそれしかできないと言わんばかりに。

だが、宙はそんな雪歩に冷たく言い放った。そんなもの決まっている、と。

『立ち向かえ、萩原』

事実、そうしなければドロップは地球に落下する。アイドルマスタ―となった以上、地球を救うという使命を背負わなければならぬ。その意味は、何よりも重い。

「できない、できません!」

『おまえは、おまえを信じる人間を裏切るつもりか!』

えっ、と声が漏れる。裏切るなんて。

そんなこと、考えてもいなかった。

『萩原は、自分でIDOLに乗る道を選んだはずだ。その気持ちを認めて、今、皆はおまえにドロップを任せた。おまえは責任を背負ってるんだよ。IDOLに乗るっていうのはすべからくそういうことだ。それを放棄するのは、おまえを信じた人間への裏切りに他ならない』

どうなんだ萩原。おまえはその期待を裏切るのか。

「……私、裏切りたくない！」

「なら、どうするか分かっているな？」

そこで一拍間があった。宙は覚悟を決めるかのように真剣な面持ちで目を瞑り、一度しか言わないぞ、と前置きした上で、

『大丈夫だ、おまえならできる。おまえにできないはずがない！』

宙ならぬ言葉だ。顔を真っ赤にして叫んだ激励にさすがの雪歩も面食らって。だが、震えがぴたつと止まった。宙さんも、私を信じてくださいの？

『前を見てみる』

その時になつてようやく気づいた。ずっと笑みを浮かべている真の存在を。操縦桿から伝わってくるネーブラの暖かさを。雪歩なら必ずできると、信じて疑わない想いを。すると、涙がすつとひいた。もう怖くはなかった。

……ああ、そうか。

自分には一緒に苦しさを背負ってくれる仲間がいるのだ。それが雪歩自身の強さになる。なんと心強いことなのか。雪歩は零れ出す涙を拭った。こんな自分でも、想ってくれる人達がいるのだ。捨てたものではない。想いが雪歩を奮い立たせる。

「ネーブラ！」

呼びかけに、ネーブラは全力で応えた。雄叫びのような駆動音を合図に、出力が急激に上昇。各種パラメーターの具合に、雪歩と真は舌を巻く。ありがとうネーブラ。万感の想いを込めて、優しく告げた。

『雪歩ちゃん、真ちゃん、いけるわね？』

「はい、大丈夫です！」

「行こう、雪歩！」

小鳥の問いに、間髪入れず頷く。立ち向かうは、いまだ相手にしたことのない巨大ドロップ。けれどいつかはぶつかる壁だ。超えるなら、今しかあるまい。

スポットティング。慣性制御による姿勢制御安定。接近するドロップとの距離算出。ロックオン確認。カウントスタート。タイミングを計り、数字がカウントされていく度に動作を加えていく。腕部関節を限界まで引き絞った様子は、撓る強弓か、砲丸を込めた大砲か。構え、瞬間の一撃に全神経を集中する。

放つのは、慣性制御を操るIDOLのみが可能な破碎技法“トリークハイト・ブレッツヒヤー”。雪歩はそれを、正面より迫り来る巨塊に叩きつけるべく、操縦感を引いた。

……きつと、できる！

確信する。雪歩にとって大きな一步となる自信をもって、操縦桿を一気に前に押し出し、カウントゼロ。瞬間的な摩擦熱間接が唸りを上げながら慣性制御を纏う拳をドロップへ解き放った。衝撃波が円状に広がりを見せる。

刹那、衝撃が突き抜け、

『ドロップ、破碎を確認！』

雪歩がネーブラと一体感を感じた瞬間、ドロップは中心から砕け散った。トリークハイト・ブレッツヒヤーをぶつけることで、慣性に従って進もうとする部分と強制的に静止させられた部分に不均一が生じ、内部から自壊したのだ。

やった！ 自然と飛び出した大声が自分のものだと気づくまで、時間がかった。

だが、月の大地の破片は、簡単に全てを終わらせてはくれない。

「……っ！ やばい、ドロップの破片が！」

焦燥する叫びの理由を、雪歩は即座に理解した。破壊したドロップに、規定より大きな破片があったのだ。大抵の破片は大気圏で燃え尽きるのだが、定められた規定より巨大な破片はその限りではない。

燃え尽きなかったドロップは、地球に辿り着き被害を生む。

瞬間的に、自らの失敗を呪う気持ちに苦痛を得た。

『また泣き出すつもりじゃないだろうな』

はっ、と顔を上げる。その苦痛から醒めたのは、叱咤するような、慰めるような一声が飛んだからだ。

よくやった。褒め言葉に、胸が暖かくなるのが分かった。

『安心しろ、大口叩いて気合入れると言ったのは俺だ。後は任せてもらおうか』

「対象を捉えました。軌道上の衛星より送られてきた詳細を回します」

「確認した。アルツアヒール、スタンバイ。エネルギーチャージ開始！」

地上、月見島滑走路中央。水平線上に顔を出した太陽の光に色を染めながら、ヴェルトールは天へ向かってアルツアヒールを掲げていた。

長距離狙撃に対応して砲身を可変展開させているため、本来の形状より大型化したそれを、薄く青色のかかった夜明けの空へ向けて片膝を着いている。まるで淑女に求婚する貴族か紳士のよう。とはいえ、差し出す薔薇の花束は、地上から大気圏外のドロップを一撃で狙撃、破壊することが可能な超兵器ではあるが。

発射方向の軸線上に障害なし。落下する破片の追尾も問題ない。

チャージ完了まで残り二十秒。

「それにしても」

ふと、あずさが吐息を吐き出しながら小さく言った。

「雪歩ちゃんにあんなことを言うなんて、思ってもみませんでした」「こんな時に、その話か」

汗ばむ手で操縦桿のトリガーを握り直しながら思い返してみると、まったく柄ではない上に、我ながら臭い台詞だった。正直、宙自身、己の言動に驚きを隠せないのだ。何故、あんな言葉を口にしてしまったのか。カウントが一桁を刻み始めたのを確認しながら、自嘲気

味に口元を曲げた。

ドロップを前に泣き出した雪歩に対して抱いた感情は、憤りももちろんあったが、なにより後悔だった。雪歩と過去の自分を照らし合わせてしまったのだ。過去の自分を、後悔しなかったことはない。今の雪歩は、過去の自分。そんな光景を見せられたら、一喝入れないわけにはいかないだろう。

ここで雪歩が怯えに屈してしまえば、必ず後悔する。

仲間の信頼を裏切ってしまったことに。

自分の意思を自分で裏切ってしまったことに。

「何かを裏切るっていうのは、きつと、とても辛いことだから」
それに、

「萩原なら一步を踏み出せると本当に思った。……なあ、そんな風に感じる俺は」

変わったのだろうか。戸惑いの表情を浮かべた宙。あずさは喜ばしいとばかりに、きつと良い傾向です、と頷いたのだった。

エネルギーチャージ完了。重力殻変換集束。最終安全装置解除。

「ヴェルトール、オンステージ。ブレイク！」

次の瞬間、無色の閃光が一直線に空へ伸び、雲を引き裂いてドロップに直撃した。圧倒的な破壊力の前にドロップは成す術もなく塵へ消え、大気圏の摩擦に燃え上がりながら、空の中へと消えていったのだった。

「さて、と」

その日の夜。明日は東京に帰る日だというのに、春香と千早は格納庫を訪れた。ひどく真剣な面持ちで、見上げる視線の先にはインベルが佇んでいる。意外な来訪に気づいたのか、インベルは嬉しそうにカメラアイを点滅させた。

すると春香と千早は、どこから用意してきたのかパイプ椅子に腰

を下ろす。わけが分からない、と首を傾げそんな雰囲気のインベルに、

「さあ、インベル。今日はとことんお話ししましょうか」

今まで見たことないくらい、強い圧力を感じさせる笑顔で春香は言った。千早も、顔は笑っているのに心は全然笑っていない。インベルは本能的に危機を感じ取った。

逃げようにも、起動キーであるアイを抜かれた状態では碌に動くこともできない。

「今日の件、雪歩達がんばってくれなかったら、ドロップは地球に落ちてたんだよ？」

そこら辺は分かっているかなあ？ と春香はインベルの装甲に手を添えた。ああ、何故だろう。それだけでこんなにも空気が凍る。

インベルは機械だが、人間らしい思考というものを持っている。故に、確かにあれは大人気なかつたかなあ、などと思っているわけだが。伝える術が今はない。いや、伝えることができても、春香と千早は受け入れてくれないだろう。

音声装置を所望するインベルであったが、そんなことはガン無視で春香と千早説教を続ける。そういえばあの男（態度のどかい新入り）も物理的制裁を受けていたことに思い至り、まさか自分もと戦々恐々とするインベルであった。

いつまで続くかなあ、と。インベルはとても人間染みた感想を漏らした。

第八話 我が家

第八話 我が家

宇宙で、激突があった。

一つは漆黒の弾丸。一つは白き豪腕。一つは闇色の悪魔。

それは三機のIDOLであった。高速機動をとるヴェルトールと、巨大なセカンドアームを振るうインベル。そして最後の一体は、

「ヌービアムッ！」

宙は相対する敵の名を叫び、それに応えてヴェルトールは渾身の右ストレートを繰り出す。不動の山々さえ決り貫く一撃を、しかしヌービアムは集る羽虫でも払うかのように弾いた。返礼は同じ右ストレートで。

重力殻ごと、ヴェルトールは後方へと吹き飛ばされる。

『ふふふ、お触りは厳禁よ、坊や』

ヌービアムから聞こえてくる挑発的な女の声。名前も知らない相手だが、その実力は初見ですでに思い知っている。だから正体など構ってはいられない。気を抜けば、

『もう一発！』

カメラの死角から放たれた攻撃。それは蹴りだった。下から上へ弧を描いた蹴撃は体勢を崩したヴェルトールに容赦なく突き刺さり、まるで防御など無意味と言わんばかりに装甲が歪み、血飛沫の如く火花が散る。

「装甲負担率四十パーセントを越えています。ここは一旦下がりますよー！」

深刻な被害にあずさが叫んだ。機体の状況から考えればそれが妥当だ。このまま食いが下がっても、更に深手を負う結果は目に見えている。

けれど宙は、その提案を真っ向から否定した。

「だめだ、ここまでされて黙って退けるか！ 姉さんの仇相手に、こんな屈辱！」

「でも」

言葉を遮る更なる一蹴。レッドアラートのけたたましいエラー報告に表情を歪ませながらフットペダルを踏み込み、追撃をなんとか回避する。

『こつちを忘れないで！』

猛追を受けるヴェルトールを救わんと、インベルが割って入った。実力的にはモンデンキント最強を誇る春香と千早のインベルは、ヌービームに勇ましく挑みかかる。

二機は一度交差しては離れ、離れては交差して、その度に余波の残光が迸った。一瞬でベクトルを変更する物理法則を無視した超機動は、慣性の枷に縛られないIDOLだからこそ行える荒業だ。白と黒の拳が正面からぶつかり合い、激突点を中心に空間が悲鳴をあげた。

『なるほど、坊やよりかは楽しめそうね』

『舐めないで！』

妖艶な声で放たれる挑発に、千早は怒声と共に攻撃で応える。両者の戦闘は互角だった。

……いや。

圧されている。宙は戦闘を食い入るように凝視しながら呟いた。モンデンキント最強を誇るインベルが、ヌービームという絶対的な存在に削られていくのを、ヴェルトールの目を通して漠然と悟ったのだ。

宙は戦慄した。インベルが苦戦を強いられているという事実ではなく。ヌービームの底知れぬ実力を前に、何もできない自分自身にである。脆弱な己に絶望した瞬間、宙は胸の底から得体の知れない悪寒に襲われ、それから逃れるように、反射的に、フットペダルを蹴った。恐怖を振り払いたい一心で、喉から絶叫が漏れる。

あずさの驚きを他所に、ヴェルツールは交錯する二機の間突っ込み、そして。

「……ッ!?」

操縦桿から伝わってくる振動で我に返った。自分は今、どれほどの時間を手放していたのだろう。数秒? それとも一秒にも満たない刹那か。とにかく宙は、ステータスを示すモニターに視線を移し、現状を即座に理解。

ターゲット位置、機体背後。

やられたッ! と判断した時にはもう遅い。次に身体が感じたのはコックピットを貫いた衝撃、続けて目が認識したのは、モニターに表示される敗北の二文字だった。

「あらら、やられちゃいましたね……」

言葉とは裏腹に明るい口調で言ったのは、三浦あずさだ。球状の擬似コックピット前部、サブパイロット席に座る彼女は宙に振り向いて、惜しかったですね、とにこやかに告げた。惜しさはあっても苦々しさは感じ取れない。

『また私の勝ちね! この伊織ちゃんに勝とうなんて十年早いわ!』
『うっうー、やりました! 勝っちゃいました!』

ぱつと映し出された通信画面には、勝ち誇った笑みを浮かべる伊織の姿。サブコックピットで小さくガッツポーズを取っているのはやよいである。二人が和気藹々と話を弾ませているのを余所に、宙は力なく操縦桿から手を放した。

今日はアイドルマスター全員を召集して行われた合同訓練の日であった。特に、対IDOL戦闘を想定した訓練が主軸に置かれたのは、最近激化するトゥリアビータとの抗争に理由がある。IDOLはドロップから地球を守るもので、戦うためのものではないと、終始難しい顔をした者も多々いたが。

……負けたのか、また。

シートに身体を預ける宙は、ぼんやりと思った。伊織とやよいのコンビにも敗北を喫した。その前も他のコンビに負けを重ねている。経験で差のある宙が、他のマスターに負けてしまうことは、相変わらずのことではあった。だが、本人すら気づかぬ内に噛み締められた奥歯が、分かりやすいほど心情を表わしていた。

『まったく、宙はまだまだね。いきなり反応鈍って後ろ取られる程度じゃ』

「……うっさい！ 分かってるさ、そんなこと！」

『ちょ、ちよつと何よその』

ぶつりと通信を切った行動は荒々しい。分かってるさ、と再度自分に言い聞かせ、片腕で視界を塞いだ。訓練中、わずかとはいえ、意識が別のことに向いてしまったのは、何にせよ自分のミスだ。そんなことは百も承知している。だからこそその苛立ちだった。

最近はいつもそうだ。茫漠とした何かに苛立って、ひどく気分が陰鬱で、やるせない気持ちを拭うためにひたすら訓練に没頭する毎日。まるで何かに憑かれたような自分の様子に疑問を感じる暇すらなかった。

そのおかげか迎撃を任される回数も増えてきたし、宙の成長具合に舌を巻くスタッフも少なくない。つい数ヶ月前まで素人だった人間が、期待以上の成果を挙げていることに驚きを感じているようだった。だが褒め称えられても、結果はこの様だ。

苛立ちを消し去ることができない毎日。曰く、これは焦燥なのではないだろうか。

焦りがこの身に浸透しつつあった。

「大丈夫ですか？」

塞いだ視界の外、柔らかな声で思考が戻ってくる。暗い海の底からゆっくりと引き上げられるような感覚。目蓋を開くと、こちらを覗き込むあずさが視界に入った。心配そうな面持ちで宙を見ている。眉が八の字になっていた。

「とりあえず外に出ましよう？ 次の模擬戦も始まりますし〜」
首肯だけで言葉も返さず、宙はコックピットを出た。

そこで待ち受けていたのは、腕を組んで仁王立ちした伊織だった。後ろで不安げな様子を見せるやよいも無視して、伊織は苛立ちを剥き出しにして、口を開いた。

「あなた、もしかしてヌービアムの件を引き摺ってるわけ？」

一切の容赦ない指摘に、宙は仏頂面を強くする。凶星だった。

あれは、数週間前の出来事だ。ドロップの迎撃任務直後、ヌービアムの襲撃を受けたのだった。ヴェルトールの奪還を目的としてのことだろう。

襲撃の際、宙はヌービアムに完膚なきまでにしてやられてしまった。インベルという味方がいたにも関わらずである。二対一という状況ですら、ヌービアムは互角以上の戦闘力で宙達を翻弄し、そして、宙は闇雲にヴェルトールを特攻させて。

現在、ヴェルトールは格納庫で大掛かりな修理作業中だ。外部装甲を全て取り替える、と整備班長が言っていたのを思い出す。

引き摺っていないわけがない。手も足も出ず、おもしろいように弄ばれて、敗北したのだから。ただの相手にではない。姉の仇、復讐の相手に、だ。これ以上の屈辱があつてなるものか。復讐を誓った心ごと、プライドというプライドがミキサーで粉微塵に粉碎された気分だ。冷静でいられるわけがない。

ずばり心中を見抜かれた宙は、視線を鋭くして伊織を睨みつけた。ケンカはダメです！ とやよいが二人の間に入るが、伊織は微動だにせず宙を睨み返す。

「ヌービアムは強いわ」

伊織は顔に苦渋を滲ませた。

「認めるのは癪だけど、私達の誰よりも奴は強い。そんな奴を相手に、あなたみたいな素人が勝てる道理ないじゃない。気負っても無駄よ」

「そんなこと……！」

ぐつ、と言葉に詰まった。伊織の言う通り、あれだけの実力者を相手に、マスターとなって日の浅い自分に勝ち目がないのは自明の理だ。

それでも、復讐を誓った相手に辛酸を舐めさせられるのは、最低の屈辱以外の何物でもない。戦う目的自体を踏みにじられる気分は、それだけで心を強く圧迫する。

強くなりたい。誰よりも強く、何を踏み台にしても。

完全無敵だった天川マツリのようになるためには、どうしたら。

「……宙くんは少し考え過ぎだと思うの」

端から様子を見ていた一人が、あくび混じりにそう言った。つと目をやると、声の主は、ことごとくでもよさげに壁に寄りかかるテンペスターのマスター「星井美希であった。

飛び跳ねた癖のある長髪。色は染めた金。服の上からでも分かる豊富なバスト、しなやかなボディライン。抜群のスタイルが故に“未完のビジュアルクイーン”の二つ名で呼ばれるアイドルである。未完の由来とは、外見に反した実年齢によるものだ。これで宙より五つも年下だというのだから、大人びた外見との差を疑ってしまう。あふう、と美希はあくびをしながら続ける。

「もつと楽にやればいいと思うの。辛いことはわかりじゃ、おもしろくないでしょ？」

「おもしろい？」

びくりつ、と宙のこめかみが引き攣った。さすがの伊織も呆れた様子で溜息を吐き、あんたねえ、と額にしわを寄せた。星井美希という人物は、まったく焦りとか危機感という言葉と縁遠いことで有名で、極端な面倒くさがり屋として名を馳せている。マスターになった時も、面白そうだから、の二つ返事だったとかそうでないとか。極端なマイペース思考に頭を悩まされたことは、宙とて初めてではなかった。

でも、この時ばかりは我慢がいかなかった。

「っざけんな！ 遊び半分のおまえとは違う！」

鬼気迫る雰囲気、びくりと身を震わせる美希。訓練室に緊張が奔った。荒い息を吐き出した宙は、あずさの制止もあってなんとか怒りを堪えたが、拳を強く握り締める。

「美希、心配してあげてるだけなのに」

「……余計なお世話だ」

今度は美希が、むう、と頬を膨らませる番だった。可愛らしさを強調しているようにしか見えない仕草も、美希にとっては怒っているつもりらしい。

もっとも、その態度が宙の目にはふざけていると映ったらしく、更に気分を悪くする結果になったけれど。

「やっぱり、俺とおまえ達は、違う。だから悠長なことを言ってるんだ」

「ちよっと、ふて腐れるのもいい加減に……！」

「二人とも落ち着いてくださいー！」

宙と伊織のガンの飛ばし合いもそろそろ限界に来つつあるようだ。このままでは本当に取っ組み合いに発展してもおかしくない。諫めるやよいもとうとう涙目だ。

怒りの原因、当の張本人である美希は顎に手を当てて何かを考えており、しばらくすると、名案を思いついたとばかりに目を光らせた。

「今の宙くんに必要なのは訓練じゃなくて、もっと別のことだと思うな」

「別のこと？」

「それはねえ……。美希はぱちりとウインクして、

「気分転換、なの」

可愛らしく人差し指を立てて、そんなことを言った。気分転換が必要だって？ そうそう気分転換。首を傾げる宙に、美希は少し考えて、何かを思いついて手を打つ。頭の上で電球がぴかぴか光っていそうだ。

「こんなのはどう？」

「どんなの？ と皆が問い返す前に、美希は大仰なジェスチャー付きで、

「宙くんの育った孤児院にね、遊びに行くの！」

「あれ、社長、ご一服ですか？」

「コーヒーを飲みだね。ここのやつはうまいんだ」

765プロのビルから少し離れた場所に、“純喫茶ムツシュ”という喫茶店が、隠れるようにしてひっそりとする。音無小鳥がランチセット目当てにやって来ると、高木がカウンターでカップを口にしているところだった。高木が手招きをするので、小鳥はその隣に落ち着いた。愛想の良い店主に向かって日替わりランチを注文する。「ここにはよくいらっしやるのですか？」

「雰囲気がいいからね。物静かで、なにより、客が少ない」

視線で物申す店主に、冗談だよ、などと返すあたり、それなりに常連のようだった。

「そういえば、さつき宙君達が出かけるところを見たのだが、どうかしたのかね」

「天川孤児院の方に遊びに行くそうですよ」

「なんと、孤児院の方に。彼女達を連れ立って？」

ほほう、と目を丸くする高木はどこか嬉しそうに頬を緩めた。再びコーヒーに口をつける横顔は、目に見えて機嫌が良くなっている。まるで、可愛がっている息子が友達と仲良く遊んでいるのを目撃した父親のようだ。

「月見島の一件以来、萩原君とも仲が良さそうだし、これは喜ばしい傾向だ」

「ああ、その話なんですけどね……」

果たして、孤児院の向かうことになった一連の流れを高木に伝えていいものか、小鳥は頭を悩ませた。管制室から訓練の様子を眺め

ていた小鳥からしてみると、胃の痛くなるような重い光景ではあった。とはいえ、続きを促す高木を前にして、誤魔化すわけにもいかない。しょうがなく、小鳥は事のあらましを話し始めた。

話が進むにつれ、ほっこりとした高木の表情が段々と曇って、顛末を伝えた頃には溜息を吐いて落ち込んでしまっていた。小鳥のラUNCHセットを運んできた店主が、元気を出せと言わんばかりに、コーヒーのおかわりを差し出す。礼の代わりに溜息を吐くとは、どうやら相当シヨックらしい。夢心地から突き落とされて、だ。

小鳥は、この機会に疑問に思っていたことを質問してみることにした。

「宙君をプロデューサーの仕事に就けたのって、やっぱり、人付き合いをさせるためですか？」

宙に765プロ側の仕事を与えたのは、元来必要のないことである。例え部外者扱いでも、宙が765プロに出入りする口実など、いくらでも用意できるだろう。一般社員に怪しまれることもない。そう考えると、自然に高木の思惑は限られてくる。

宙が人付き合いを避けるようになったのは、マツリが亡くなってからであるということは、今更説明する必要もない。人間不信になり、疑心暗鬼の態度を強くした。本来はとても明るい子なのだ。高木は、アイドルとして輝かしい魅力を持つあずさ達と多く触れ合う機会を作ること、昔の自分を取り戻してほしかったのだろう。

「だが、うまくいかないものだ」

頷きながら、高木はまた溜息を吐いた。

「三浦君達との関係や萩原君の件をしてみれば、彼女達との関係を、本気で煩わしく思っているわけでもないと思うんだがね。どうにか心を開いてくれないものか」

「……ヤマアラシのジレンマ、ですかね」

ふと、そんな言葉が頭の中で浮き上がった。高木が興味深そうに顔を寄せてくる。

「シヨーペンハウアーか。確かに、言い得て妙だ」

寒空にいる二匹のヤマアラシが身を寄せ合って身体を温め合おうとしても、自分が持つ棘でお互いを傷つけてしまう故、近づくことができない。しかし寄り合わなくては寒さに凍えてしまう。人もそれと同じ。歩み寄ろうとしても、傷つくことを恐れてしまう。宙は人間関係に高木達というトラウマがあるから、余計、だめなのだろう。

「しかしヤマアラシのジレンマには、“紆余曲折の末にお互いにちょうど良い距離を見つけ出す”という意味も含まれている」

「そうですね、彼も、いつかその距離を見つけ出すはずです。人は一人では生きていけませんから。比翼の鳥のように、番を求めめるものなんです、人という生き物は」

「君も、そうだったように？」

「私にとつての番はマツリでしたから。鳥は片翼では飛べません」

小鳥はふと、影のある表情で薄く笑った。高木は何も言わずにコーヒーを啜る。

自分達の吐いてきた嘘が宙を変えてしまった。そのことに関して、少なくとも小鳥は、そしておそらく高木も、言い逃れするつもりはない。責任だなんて仰々しい言葉で表すつもりもない。ただ二人とも、昔の明るさを、宙が取り戻すことを切に願っているのだった。

小鳥は弟のように、高木は息子のように、彼を想ってきたのだから。どうか、あずさ達との関係が、彼の救いにならんことを。

「ところで、時間は大丈夫なのかね？ 食事に手をつけていないようだが」

「え？ ……ああ、もうこんな時間に!？」

そろそろ仕事に戻る時間が迫っていた。小鳥は飛び上がって、急いで食事を口の中に押し込む。デザートのムースだけはどうしても時間が足らず、せつかく楽しみにしていたのに！ と拳を握って我慢するしかなかった。高木への挨拶もそこそこに、ムースを惜しそつに一瞥して、小鳥は飛び出して行ったのだった。

「ふむ、ではこのデザートは私が頂いておこうか」

スプーンでムースを掬いながら、今頃宙達はどうしているだろうか、と高木は思いを馳せた。

「紅葉が綺麗ですねぇ」

吹く秋風に髪を押さえながら、あずさは木々から舞い落ちる赤や黄の葉に目を奪われている。その姿が何とも様になっているので、密かに、宙は頬を染めた。秋も深くなつた頃合、そういえばあれからもう半年になるのか、などと考えながら歩く並木道。

郷愁が胸に染みるこの場所は、宙が育つた孤児院への一本道である。春には桜が。秋には紅葉が。過去幾度もなく通つた懐しき並木道を、まさかあずさ達を伴つて歩くとは思ひもしなかった。

少し前で、今回の企画立案者である美希がなにやらはしゃいでいる。正直、孤児院に多くを連れ立って帰省するのはあまり乗り気ではなかったが、半ば強引に連れ出されてしまった今では、もう諦めのついた宙であった。

「だからって、いくらなんでも多過ぎなんじゃねえの!？」

怒鳴つた宙の周りには、もはや遠足気分なアイドルマスターご一行様が。まさか全員が来るとは思いもしなかったぞ。宙は疲れた様子で肩を落とした。まあ、それも今更な話だ。ただ、バスケット一杯のお菓子を持参している天海春香に関しては、気分ではなく本当に遠足か何かだと勘違いしているだろ、と一言物申したい。

「で、どうして孤児院なんだっけ？」

頭の後ろで手を組み真が言った。

「えっと、気分をリフレッシュするには実家に帰るのが一番だって、美希ちゃんが……」

雪歩は宙の顔を伺いながらこそこそと耳打ちする。宙には聞こえていたが、不機嫌面を強くしただけで黙っていた。そもそも美希のプランなんて、ただの思いつきに過ぎないのだ。リフレッシュも何

もあつたものではない。

「ほら、宙さん。あれが孤児院ではないですか？」

並木道が終わる。すると、あずさが指をさした先に、小さな建物が見えてきた。赤茶色のレンガが特徴的で、周囲に建築物が少ないことも相まって、どこか浮世離れた不思議な雰囲気を持っている。御伽噺に出てきそう、とは亜美と真美の言葉だ。

良い思い出も悪い思い出も、全てあそこに詰まっている。懐かしき育ちの家である。

……帰って来たのか。

そう思うと、じんわりと込み上げてくる気持ちがある。突然、孤児院をとて恋しく思ってしまう。ホームシックということはないだろうけど、一人暮らしの人間というのは得てしてこういうものなのかな、と宙は腕を組んだ。

天川孤児院と書かれた表札を横目に、一行は正門から中へ。敷地には小さな孤児院と、建物を囲むように緑の芝生が広がっている。質素だが、温かで優しい空気が、辺りから漂って来るような気持ちになった。ほう、と皆の吐く息が柔らかい。

「とても居心地の良い場所ね」

千早が周りを見渡していると、ふと、

「あれ、宙兄ちゃんだ！」

「ホントだ、兄ちゃんが帰ってきた！」

そんな声に振り向けば。小さな子供達が、宙を見つけて駆け出してくるところだった。

あつ、と宙は声をあげた。その子供達は、皆、親のいない孤児であり、宙がよく面倒を見ていた弟分達だったのだ。予想外の来訪者に驚きつつも、こちらに向かって嬉しそうに走って来るではないか。柄じゃない、と思いつつも感動を禁じえない。笑顔で腕を大きく広げてみせた宙。スローモーションで背景に花でも咲かせたら、お茶の間号泣の感想場面さながらである。

ところが、だった。

「うわあ、すげえ！ テレビに出てる人がいっぱいだ！」

という具合に、子供達は宙を素通りし、物凄い勢いであずさ達を取り囲んだ。はるるんだ！ やよいちゃんがいる！ テレビメデイアへの露出が多い者は特に激しい攻撃を受け、いきなりの襲撃に皆揃って困惑している。が、一番衝撃を受けたのは言うまでもなく、腕を広げた姿勢で硬直する宙に他ならなかった。

……こいつら、俺より有名人か！？

とてつもない遣る瀬無さに、どーんと暗い効果音付きで落ち込んだ宙。

「宙か？」

背後から呼びかけられたのは、肩を落としたその時であった。

聞き慣れた声に振り返れば、そこにいたのは黒髪の老人。優しい目をした日系人で、人生の苦労が滲み出たように痩せ細っている。しわがれた声も含めて、一見して弱々しく思えるかもしれないが、けれどその実、途方もなくパワフルな性格の持ち主で、同時にとても博識な人物でもある。

名を天川カイエン。この孤児院を設立した、宙とマツリの育ての親である。

宙は思わず黙り込んでしまった。久しぶりに会ったというのに、言葉が出てこないのだ。子供達に揉まれながら、あずさがその様子を心配そうに眺めていると、

「じっちゃん、あの」

「昔から言っているだろ、“帰って来たら”、まずなんて言うんだ？」

「……ただいま」

「よろしい。おかえり、よく来たな」

カイエンは、相変わらず穏やかな笑顔を向けてくれた。

積もる話もあるだろう？ とカイエンは孤児院を指した。中でゆつくり話そうということなのだろうが、後ろで攻撃を受けている彼女達はどうか。

「私達はこの子達と遊んでいるから大丈夫ですよ。ゆっくり、お話してきてください」

まるで宙の心を読んだかのように、間髪入れず、あずさは子供を抱き上げて見せた。気持ちを読まれたことに面食らったが、ここは素直に、気持ちを汲んでくれた彼女の好意に甘えるべきだろう。それでは、と。この場合は彼女達に任せることにした。

案内されたカイエンの個室は半年前と変わりない。いや、宙の一番古い記憶と違って、寸分違わない。ここだけ時間の流れが止まっているかのような気分だった。しばらく離れて、お茶を淹れてきたカイエンは開口一番、

「気の利くお嬢さんじゃないか。おまえ、あの人とお付き合いしているのか？」

「ぶっ!？」

口に含んだお茶を豪快に噴き出した。むせこんだ宙を、カイエンはしてやったり、といった様子で大笑いする。この茶目つ気は昔からで、マツリでさえカイエンの前では頭が上がらない。小さな頃の弱みをたくさん握られているからだ。もっとも、その弱みも今となつては無意味だが。

大笑いしながら、カイエンは部屋の端にある机から琥珀色の錠剤を取り出して、お茶で流し込んだ。昔からカイエンはこの時間帯になると持病の薬を飲んでいて、この時だけ、普段は見せない苦々しい顔をするのだ。よほど不味いのだろう。

「薬、まだ飲んでるんだ？」

「歳だからな。なに、心配することじゃない」

二人は向かい合ってソファに腰掛けた。すると、途端に何を話せばいいのか分からなくなった。声の出し方を忘れてしまったかのよう。しばらくして、話を切り出したのはカイエンの方からだった。「悩み事があるみたいだな」

彼の優しい瞳には、純粹に心配の色が伺える。笑みを絶やすことのない様子は、宙の心中を見透かしているような節さえあった。そ

んなはずはない。宙は765で働いていることになっていて、ID
OLに関わっていることなど、カイエンは知る由もないのだ。

けれど、である。昔からカイエンはなんでも知っていた。宙の知
らないこと、マツリの知らないこと、なんでも。知らないことは何
もない。もしかしたら自分がアイドルマスターになったことも、実
は知っているのではないか。そんな気分にはさせられる。

表面だけ取り繕っても無駄か。宙は諦めたように、ふっと吐息し
た。

「行き詰っているのかな。何をしても、失敗してる気がしてさ」

苦笑しながら頭を掻き、ぽつりと眩きを漏らすと、次の一言は自
然と連鎖した。モンデキントのことをうまく誤魔化しつつ、心の底
から這い出る焦燥を、自分の努力は全て無駄なのではないかという
不安を、吐き出していく。まるで穴の空いた桶から水が零れていく
ように、抑えが利かなかった。

「迷走しているな」

一息吐いて話を区切ると、何故か、カイエンは嬉しそうに頬杖を
ついた。反射的にむっとした表情になってしまって、つい子供染み
た反応をとってしまう。それが余計にカイエンを上機嫌にさせるの
だった。

「この半年で変わったな。ちよっと前まで、世の中の全てがどうで
もいような目をしていたのに」

そうそう変わったと言えば、あの時の話だ。

「いつだか突然、いじめっ子にやり返すようになった。苛めら
れてばかりだったおまえが、泣き虫を卒業しようとしたんだ。

原因は、おまえの初恋だった」

「あ、ちよっと待った、その話は卑怯だろ！」

うわあ！ と悲鳴をあげて言葉を遮ろうとするが、愉快に話を続
けるカイエンには無駄な抵抗だった。今更そんなことを話さなくて
も、とむくれる宙。

初恋だなんて大げさなものではない。だがその初恋“らしき”も

のがきつかけで、その頃から宙が変わったのは確かだった。

もう名前も覚えていない一人の少女。出会ったのは黄昏色に染まる夕方の一度限りで、実は顔すら曖昧なのだ。苛められて泣いていた自分を慰めてくれて、擦り剥いた傷に絆創膏をぺたぺた貼ってくれた。うん、覚えている。

その子との出会いが、どうして一人で立ち向かう気持ちを奮い立たせたのか、もう思い出せないけれど。

「今更、その話がなんなのさ」

「おまえがなんでも一人で背負い込むようになったのは、その頃だからさ。良い意味でも悪い意味でもな」

マツリのようになるうと無茶をして、認められようとして無理をして、一人でなんでもするようになったのはその日からだ。そしてマツリの死をキツカケに、遂に誰にも頼らなくなった。誰も信じなくなつた。カイエンは憂いの表情で宙を見つめる。

「おまえが」

言葉を区切り、一拍置いて、

「私のことを憎らしく思っていることは知っている」

「……そんなことは」

「マツリが死んだ時、私はあの子の死を受け入れるのが早過ぎた。事故のこと、その原因のことも、おまえは疑問を抱いていたが、私は区切りをつけて納得してしまった。それが許せなかったんだろう？」

宙は俯いて一言も言葉を発しなかった。カイエンの言う通りだったから、である。孤児院へ来ることに抵抗があつたのもそのためだ。わだかまりを残したまま孤児院を出た宙にとって、今更カイエンと何をどう話せばいいのか、悩ましかったのである。

「おまえが人間不信になつたのは私のせいでもある。そんな私に言えた義理はないかもしれないが、なあ、宙よ、もう少し周りの誰かに頼ってもいいんじゃないか？」

「誰を頼れって言うんだ」

「もちろん私でもいい。しかし、おまえの周りにはたくさん仲間がいるようじゃないか」

おまえにとつて、彼女達はどんな存在なんだ？ カイエんに問われ、宙は漠然と顧みた。

同じIDOLを駆るアイドルマスターで、765プロのアイドルそれだけだ。良くて同僚程度の認識しかないものだと思っていた。地球を守るためにマスターになった彼女達と、復讐のためにマスターになった天川宙とでは、存在が違い過ぎる。同じ一枚のコインでも、表と裏、陰と陽。決して交わらず、いつも背中合わせ。

でも。宙は胸の片隅に、静かに、小さく蹲っている気持ちに気づいた。

あずさ達の笑顔だ。

宙はがつんと打ちのめされたような衝撃を覚えた。何故、そんなものが浮かび上がってくるのか。浮かび上がってしまう自分の心境の変化はどういう意味なのか。

我知らず、窓の外で子供達と戯れる彼女達に視線を向ける。呆然とした様子。宙から内心を読み取ったカイエンは、最初はそれでもいいんだ、とまたお茶を啜る。

「誰だつて片翼では飛べないんだ。摂理であり、道理だよ。片方だけではどんなに強い翼も意味を持たない。一人で飛ぼうとしてはいけないよ」

言われて、初めて気付いた。自分の行動を振り返るとよく分かる。歩み寄ろうとするあずさ達を跳ね除けて、それでいて、助けを求めることが劣等感を逆撫でし、一人がむしやらに突っ走ってきた。又ービームと戦った時も、あずさが的確な指示をくれたはずなのに、自分は意固地になって無視して。

「でも、俺……」

無意識に胸を掴んだ宙は、心中に霧がかかって見えた。自分がどういう気持ちなのか、もう宙自身にも把握することができなくて、不安が感情を煽った。

復讐のために強くなろうと足掻いていた自分は、半年を通じて、彼女達にどんな想いを抱いているというのだろうか。

知れず迷宮を彷徨っている気分だった。

……姉さんなら、こういう時どうするのかな。

俯いて、遙か彼方の目標に想いを馳せる。あの背中を、宙の全てだったあの存在の背中を。永久に手が届かないと思えても、それでも追いかけることを諦められないあの人でも、片翼では飛べなかったのだろうか。あの人の片翼とはなんだったのだろうか。

「まあ、私の言いたいことはな」

急に右手を振り上げると、カイエンはそれを、力の限り宙の頭に見舞った。

強烈な拳骨。ぎゃあ！ と奇声を発して頭を押さえると、頭の上を星がクルクル回っていきそうな錯覚を受けながら、痛みが頭の芯まで深く浸透していく。

「な、何しやがる!？」

「あんまり深く悩むなってことだよ！ おまえは環境に恵まれているんだ、本当に大変な時は、なるようになるさ！」

豪快に笑って肩を叩いてくるカイエン。殴られたことに納得いかず唇を尖らせていると、こんこんとドアを叩く音が聞こえてきた。返事をしてドアを開けると、そこには春香と伊織が立っていた。二人ともボロボロ（外見的にも精神的にも）でひどく疲れた表情をしている。あれは子供達にこっ酷くやられたのだな。

「どうした、何かあったか？」

「あつたと言えばあつたかな……。それより、バスケットに入れて持ってきたお菓子、皆で食べようと思うんだけど、どうかな？」

春香が例のバスケットを掲げてそう言った。それは名案だ。子供達も喜ぶだろうし、何よりこの量を消費するには大勢を動員しなくてはならないだろう。

宙の受け答えを待つまでもなく、乗り気なカイエンが立ち上がって、さっそく手頃な場所を見つけようと動き出した。

派手にやられたな、水瀬。うっさい、馬鹿宙！ まあまあ、落ち着いて。賑やかな会話が廊下を遮り、窓から差し込む遮光が、その時だけ少し晴れた宙の心を表しているようだった。その後ろで、「心配するな。おまえは“シカンダ”に選ばれたのだから」
小さく呟いたカイエンの言葉に、宙が気づくことはなかった。

なんだかんだで、孤児院への滞在は長引いた。子供はあずさ達に懐いていたし、彼女達もその好意に満更でもなさそうだ。結局孤児院で夕飯をご馳走になった一同は、カイエンの話し始めた宙の昔話を興味深々に聞き入っていた。

伝説と化したマツリの話ならば良い語り草だろうが、正直、己の話となれば聞くに堪えない愚かな失敗談ばかりなので、もはやカイエンの口を止められないと悟った宙は、熱く盛り上がるその場からこっそりと抜け出した。

当てもなく懐かしい孤児院の中を見て回って、最後に辿り着いたのは屋根裏の倉庫である。天井は低く、手を伸ばせばそれだけで手がついてしまう。大きな天窓からは明かりが漏れていて、宙はその明かりに釣られて歩き出した。

天窓を開ける。隙間から流れ出てきた夜の空気が頬を撫でた。
コンベイトウスキー
「隕石光？」

見上げる先、光の虹が夜の闇を裂いていた。光の架け橋は横一直線に空を割って、キラキラとした輝きが地上を燦然と照らし出している。明かりの正体はこれだったのか。

地球を囲うオービタルリングの一部、極小単位の隕石群が大気圏と接触して光を放つ現象が、コンベイトウスキー隕石光と呼ばれていた。隕石光の起こる夜は、柔らかで幻想的な光が世界を照らすことになる。

昔は“月の光”があつたらしいが、いかんせん生まれる遙か以前のことなので、似たようなものなのかな、と宙はふと想像した。

思わず窓枠に足をかけて屋根に上ると、懐かしい既視感を覚えた。
「姉さんと最後に過ごした夜、か」

屋根に腰を下ろした宙は、ふと隣を見た。一瞬垣間見えたマツリの幻はすぐに消えて、自分の隣には誰も座っていないことが改めて認識される。それだけで、自分の心が酷く空虚に感じたのは気のせいではないだろう。

昼のことがまた思い出されて、宙は亡き姉に向けて言う。俺はどうすればいいと思う？ 膝を抱えた姿は弱々しく、以前の泣き虫な自分を連想させて、それが堪らなく悔しい。

悶々と隕石光を見上げてみると、

「宙さん、こんなところにいらっしやっただんですね」

「うわぁ、隕石光綺麗なの！」

天窓からひよっこり顔を出したのはあずさと美希だった。倉庫の扉が開いていたので、もしかしたらと思つて。微笑みながら、あずさは宙の隣に座る。優しさの伝わってくる表情に、少しだけ心が安らぎを得て、軽くなったような気がする。同時に、光に照らされた綺麗な横顔に釘付けになった。

「まゝた落ち込んでるの？」

眉を下げた宙の顔に、腰を折つて顔を近づけた美希は不満そうに頬を膨らませる。孤児院で気分転換し、宙の心も晴れたらうと踏んでいた美希からしてみれば、いまだ立ち直る気配を見せない宙の様子は大いに遺憾である。

「宙くん、難しく考え過ぎ。美希みたく、もつと楽しくやればいいと思うの。そうすればいつだって笑顔でいられるよ」

「……笑い方を忘れちゃった」

「じゃあ美希が教えあげる！」

すると、美希は頬を手の平で挟んで、唇を尖らせた。目を真ん丸に見開いて、可笑しな形相を作り出すと、どう？ どう？ 聞いてくるのだった。隣であずさが吹き出す。

馬鹿な奴だな。きつと何も考えていないから、こんな馬鹿なこと

ができるのだ。宙は胸の内に言葉を落として、真正面から美希の顔を見据えた。多くのファンを虜にしている可愛らしい顔が、自分の前で奇妙に歪んでいると思うと、とても馬鹿らしいことに思えてしまった。

「ぶっ、あははは！」

耐え切れず、眉を上げて、大きく口を開けて、宙は笑った。

「宙くんの笑った顔、初めて見た！ あずさ、写メ撮らないと！」

「あ、こら、おまえ、やめろっつて！」

笑い声は絶えず口から漏れて、その時だけは、宙にもどうしようもなかった。あずさがこちらを嬉しそうに覗きこんでいるのを察すると、急に恥ずかしくなって表情を正したが、それでも口端がにやるのを抑えられなかった。特別面白いことでもないはずなのに、とにかく可笑しくて、笑えてしまうのだ。

まったく、悩んでいる自分が馬鹿みたいだ。

「お気楽なおまえが羨ましいよ」

「その言い方馬鹿にされてる？ ねえ、されてるよね？」

「褒めてんだよ。おまえの天真爛漫なところをさ」

「え、そう？ へへえ、そんな風に褒められるのは初めてだよ。いつもは胸大きいね、とかしか褒められないからさ」

「……言つてて恥ずかしくないか、それ」

呆れたように溜息を吐いた宙は、また小さく笑うのだった。久しぶりの、純粹に笑うという行為。どこかで置き去りにされていた感情が蘇ったことに驚きを隠せないのも事実だったが、それでも、そんなことがどうでもよくなってしまっただけ、今は可笑しくてしょうがない。どうして、なのだろう。

「宙さんが笑っているのを見ると、私も嬉しくなります」

並んで隕石光を見上げたあずさに対し、不意に高鳴った胸の鼓動も、その芽生えていた気持ちの名前さえも、宙は忘れてしまったのだった。

ひどく暗い部屋がある。部屋の中心には高く伸びた円柱が並び、壁の代わりに巨大なモニターが張られている。そこに映るのは宇宙から見た地球。月の破片が構成するオービタルリングに囲こまれた鳥籠だ。

円柱の頂上には白いバスタブが鎮座しており、底から太いコードがいくつも延びていた。異様な雰囲気のある部屋とバスタブの組み合わせは、言い知れぬ違和感を醸し出す。

そこに一人、リファは幼い裸体を露にして立っていた。彼女が見つめているのは、バスタブに満ちた紫色の液体だ。

「さあ、楽しいお遊戯の時間だよ」

悪戯に興奮するかのようにな无邪気な笑みを浮かべたリファ。始めよう。呟くと、その身をバスタブの中に沈める。液体は氷のように冷たく、背筋にぞくりと奔る感覚があった。けれどそれもやがて、燃え上がる恋のように熱くなるだろう。

リファは、深く深く自己の内に埋没した。

第九話 美希と美女と銃と

第九話 美希と美女と銃と（後編）

孤児院の一件から数日後、純喫茶ムツシユに宙と美希の姿があった。

ちょうど地下基地に居合わせた宙は、前触れもなく美希に呼び出されたのである。店内の端、もつとも人目の付き難い席に着いた二人の目の前には、日替わりのランチセットと季節のデザートと+でおにぎりが豪勢に並んでいた。ほくほくと顔を輝かせる美希に対し、宙は苦い表情で三度目の財布チェックを行っている。

「これ全部、俺の奢りになるのか……」

会計の時には小銭の音もしないだろう財布を見つめながら、宙は再度確認する。

「とーぜん！ 孤児院に行こうって名案は美希が出したんだから、ご飯くらい御馳走してくれるのが筋だと思っの。美希、お仕事でお昼まだだし。お腹ぺこぺこ」

「まあ、その考えを百歩譲って認めたとしてだ。二人でも食える量じゃないだろ。それになんだよ、おにぎりって」

「おにぎりは美希の好物だから。いくらでも食べられるよ！」

「この量も？」

「美希は育ち盛りだもん」

「太るぞ」

小気味のいい会話。宙の最後の一言に、美希は顔を真っ赤にして腹いせとばかりに料理をたいらげ始めた。もはや暴食と言つに相応しい食べっぷりだ。なんだか財布の中身そのものが美希の胃の中に納まっていくようで、宙は物言いたげな視線を送ったが、無論、美希は無視を決め込んだ。遂にデザートに魔の手が迫る。

痛い出費に頭を悩ませていると、ふと、美希の様子がおかしいことに気づいた。窓の外をさりげなく伺っている様子だった。疑問に思っただけで聞いてみると、

「人目が気になって。さすがに男の子と二人きりのところ撮られたりしたら、色々大変なの。悪徳記者とか案外しつこいし」

アイドル生命の問題、ということだろう。そういえば、先程まで普段はしない伊達眼鏡をかけて、顔を隠せるつばの広い帽子を被っていたのも、なるほど、変装という意味合いがあったのか。

だったら、わざわざ自分を連れ出すこともないのに。そこまで思っただけ、いや、違うな、と宙は考えを改めた。

また気を使ってくれているのかな。宙はテーブルに肘を着き、顎を手の平に乗せながら、横目で美希を見やった。孤児院を訪れたことで多少調子を取り戻した宙だったが、如何せん、まだ思い悩む日々が続いていた。美希としては、先日 の件を言い出したのが自分だけに、宙の様子を案じているのだろう。

……いつの間に、そんな気を使う仲になったんだ。

カイエンの言葉が脳裏を過ぎり、宙は溜息を吐いた。不本意だが、美希がそういう考えならば財布が空になるのもやぶさかではない。借りは返さないといけないのだ。

皿も空になり、食後の紅茶でゆっくりしていると、散歩をしないかと美希に誘われた。次の仕事まで時間があるらしい。しょうがなく、宙は席を立った。こうなったら付き合っるのが筋というものだろう。甘くなつたな。自己分析。

美希に案内されたのは、新宿で一番大きな公園だった。青い芝生の広場があり、平日にも関わらず親子連れが何組もくつろいでいて賑わいを見せている。しばらく歩くと、美希が池の前で立ち止まった。池には鴨の群れが集まっている。

「ここにね、美希の尊敬する先生がいるの」

先生？ と聞く前に、美希は池の方を指差した。よく見ると、鴨の群れの中から、こちらに向かって来る一匹の鴨が。

……まさか。

「先生、お久しぶりなの！」

「ああ、やっぱりその鴨が先生なのか」

予想通り過ぎて肩を竦めた宙だったが、美希はそれを気にする様子もなく柵越しに鴨に手を振った。ぐわっ！ と一鳴きした鴨が挨拶を返したように見えたのか気のせいだろうか。鴨を先生と慕っているあたり、年相応に美希の幼さを感じさせた。

「どうしてその鴨が先生なんだ？」

「ん〜、なんて言うのかな。いつものんびりしてて、気ままに生きてる感じが、美希の理想通りの人生だなんて思ったの。だから先生って呼んでるんだ」

なるほど、と納得できてしまうのは美希だからだろう。確かに美希のマイペースさは鴨の自由気ままな様子と重なるものがある。鴨ないし水鳥という類の生き物は、水面では必死に足を動かしているものなのだけけど。

しばらくの間、鴨と戯れる美希を眺めながらベンチに腰を下ろしていた。

再びカイエンの言葉が浮かんできて、取り留めもなく思考していると、やがて沈黙考に切り替わる。誰かに頼ってもいい。そうは言われても、心を許すという行為には恐怖心が付き纏う。また裏切られたら、と。どうせ裏切られるくらいなら、いつそ誰も信じない方が楽なことを、宙は知っていた。

辛いこと、苦しいこと、全て一人で背負っていた方がいいのだ。

「ここ、座ってもいいかしら？」

難しい顔で考え込んでいた宙は、不意の声に顔を上げた。

声の主は、変わったサングラスをかけた美女だった。

日本人のようではあるが、紙の色素は抜け落ちてどこまでも白い。それでも髪には艶があり、ふわりとなびいた髪からは良い匂いがする。特徴的なのは細いコードの延びたサングラス。黒のデニムパンツにジャケットを羽織ったラフな格好で、豊かな胸が強調されるや

や的扇情的な着こなしをしている。手には小さい手提げバッグを持つていた。

別段断る理由もなく、宙は隣を空けた。相変わらず人との距離感を気にしてベンチの端に腰を下ろしはしたものの。女性は気にする様子もなく、何をするわけでもなく座って足を組んだ。沈黙が続いて、

「元気のいい子ね。可愛らしい彼女を持ってて彼氏としては鼻が高いかしら？」

「いや、別にそういう関係じゃ……」

「あら、ガールフレンドかと思ったわ。あの子可愛いし、お似合いなのに」

「そ、そうですか」

ええ、そうよ。女性は首を縦に振る。会話は突拍子もなかったが、その後も女性は世間話のような取り留めもない話題を宙に振ってきた。暇人だな、などと内心で呟きはしたが、思いのほか二人の会話は弾んだ。通りすがりの人々から見れば、仲の良い姉弟が楽しく雑談をしているように映ったことだろう。

宙は状況に驚きを隠せなかった。人との距離感に抵抗を持つ自分が、出会ったばかりの女性と心地よく話をして、そればかりかどんどん惹きこまれていく。それだけ女性には無視できない、不可視の引力が働いているのだった。

なにより既視感を覚えた。そう、以前もどこかで、この女性と話をしたことがあるように思える。そんなはずはないはずなのに。まるで、擦り切れたビデオテープを再生しているみたいに、セピア色の感覚がぼんやりと蘇ってくるのだ。

疑問符を浮かべながら、他愛もない会話を続けていると、

「宙くん、そろそろお仕事の間時間も。ってあれ？ その人誰？」

先生もとい鴨と十分戯れたのか、満足そうに美希は戻って来た。

宙もそろそろ基地に戻らなければならぬので、頷いて立ち上がる。

「じゃあ、俺はこれで……」

「あら、そう。話し相手になつてくれてありがとね」

女性は柔らかな笑みを浮かべ、

「でももう少し付き合ってもらおうかしら、天川宙」

宙の名前を、確かに呼んだ。

ん？ と首を傾げる。名乗った覚えはないはずだが。対し、女性はバッグの中からハンカチを取り出して、それをおもむるに、目の前に立つ美希の身体に押し付ける。

ハンカチからは何故か、かちりっ、という金属的な音が聞こえた。「動かない方がいいわよ」

女性は無表情で言い放ち、ハンカチの端をちらりと捲った。

そこには黒光りする金属の塊が見えた。硬質的なそれ。実際に見たことはない。しかし、知識としては知っている。現実味がないせいで、一拍遅れて、宙は目を見開いて凍りつく。

「宙くん？」

「星井、動くな。絶対に動くなよ」

宙の震える声に事態の異常を感じたのか、美希は眉を下げて不安そうに黙った。

美希に押し付けられているのは、紛れもなく銃だった。

宙は知る由もないだろうが、女性が美希に押し付けている銃は、最近になって実用化された最新型の小型銃だった。レールガンの技術を応用した代物で、火薬は使わず、特殊な弾丸を電磁加速で撃ち出す。そのため静音性が高く、また小型ながらも威力も高い。

小型であるため持ち運びしやすく、静音性が高いため射撃音が周りに聞こえないメリットがある。今回の場合、市街地での使用を考慮するとまさに打って付けの代物だった。

だが、詳細など知らない宙にとって見れば、アクション映画の中に迷い込んでしまったかのようなこの現状の方が恐ろしい。

状況は予想外の方向に転がりつつあった。ハンカチを押し付けている当の女性は、宙に睨み付けられても平然として、それどころか笑みすら浮かべている。

「少し付き合ってもらっただけよ。余計なことをしなければ、安全を保障するわ」

「あなたは何者なんだ。なにが目的でこんなことを」

「こつちも仕事なのよ。目的はね、ヴェルトールのアイドルマスターを確保すること」

ヴェルトールのアイドルマスター。それはつまり宙のことである。IDOLについて知り、その上でこんな行動を起こす連中を、宙は一つしか知らない。

「考えていることは正解よ、“坊や”。会ったのはこれで何度目かしら？」

トウリアビータ。血液が沸騰してしまいそうな怒りが込み上げてきても、女性に掴みかかることはできない。人質同然の美希のことを考えれば、無理な行動を起こすのはナンセンスだ。それに女性は、会ったのは何度目か、と言った。いつ、どこで？ 宙は必死に冷静さを保とうとするその意識の中で、彼女の正体に思考を巡らせる。

“坊や”。

そこではっとした。神経を逆撫でし、異常な不快感を与えるこの呼び方。

「あんだ、まさか……!!」

「名乗るのは初めてかしら。私はトウリアビータ所属、プロメテウス3ヌービウム専属アイドルマスター」

最初の出会いから、戦いという名の絆で結ばれた二人は。ついに出会った。

「リコリスよ。よろしくね、坊や」

リコリスは心底嬉しそうな笑みを宙に向けた。その笑顔が何を意図しているのかは判然としなかったが、宙に出会えたことを喜んでるのは確かだった。反して宙は警戒心を高め、宿敵の姿を隅々まで観察する。

「そんなにじつと見つめて、お姉さんに惚れちゃったかしら？」
「馬鹿にするな！」

リコリスの挑発を一蹴する。とはいえ、リコリスがこの場を支配していることに変わりはない。全ては奴の手の内か。気づけば、血が滲みそうなほど強く拳を握っていた。

……落ち着け。下手には動けないんだ、考える。頭を回せ。

リコリスの狙いは自分だ。目的の意図は簡単。トウリアビータは二度ヴェルトルの奪還に失敗している。ならば、まずはマスターからということなのだろう。宙以外にヴェルトルを動かすことができないのは、リコリス達も推測できているはず。

できることは限られている。無茶な行動をして美希が撃たれるようなことがあれば、寝覚めが悪い。ここは大人しく従い、時間を稼ぐのが妥当だ。仮にも新宿はモンデンキントJ.Pのお膝元。様々な箇所に仕掛けられた無数の監視システムが、必ずや宙達の状況を基地に伝えてくれるだろう。そうすれば。

「時間を稼ごうとしても無駄よ。この街のセキュリティはもう墜ちてるもの」

宙の心を見通したように首を振って、リコリスは空いた手である方向を指し示す。

そこには隠蔽された監視カメラがあった。けれど起動中であることを示す赤いランプは消えている。カメラのレンズはまったく宙達を映し出してはいない。

「ウチには優秀なハッカーがいるの。その子が、今頃宇宙に上がっているIDOLとモンデンキントに“悪戯”をしているはずよ。その隙を狙ったわけ」

「悪戯……？ 春香達か！？ あいつらに何をしかすつもりだ」
今日この時間帯、宇宙ではインベルとネーブラが本部から依頼された仕事をこなしているはずだった。ドロップの早期警戒のために新型の小型衛星を設置するのが目的だ。

自分にはどうすることもできないのか。その事実が心に爪を立て

る。黙って様子を伺うことしかできないのが、歯痒かった。

「さあ、お喋りはここまでにしましょう。一緒に来てもらおう」
リコリスは改めて美希に銃を押し付け、宙に命令した。

作戦完了。無事、衛星の配置を完了すると、管制室の面々は緊張から解放された。

モニターにはインベルとネーブラの姿。二機のIDOLは衛星を射出するのに使用したランチャーを収納し、すでに帰還ルートに入っている。

『簡単なミッションねえ。私ほどの実力者には退屈すぎて話にならないわ』

「そう言わないの。本部から直々のお仕事なんだから」
不満げな表情で通信する伊織に、小鳥は人差し指を立てて注意した。もつとも、伊織達の実力では少々味気ないのは小鳥も同意する。だが飛ばした監視衛星によって、ドロップに対する早期警戒に少しでも役立つのであればそれに越したことはない。依然上昇するドロップ落下率への対策は多い方がいい。本部もそれを見越してのことだろう。

小鳥がそう考えていた時である。

「本部より入電、ドロップです。数二、ドロップアルファ、ベータともにステータス・レモン。出撃要請です！」

オペレーターの一人が本部からの要請を読み上げる。続いて自分のモニターに表示される情報を小鳥も確認し、すぐさま把握する。確認されたドロップは二つ。すでにIDOLは宇宙に上がっているため、迎撃は比較的余裕をもって行うことができるだろう。

「情報を各IDOLへ送信。インベルとネーブラは帰還行動を中止。そのまま迎撃行動に移ってください」

状況を確認し終えたジョゼフが迅速に対応を下し、小鳥が話を引

き継ぐ。

「仕事の連続で悪いけど、二機ともいける？」

『大丈夫です！ インベル、いけます』

『ネーブラも問題ないわ！』

管制から送られてきた情報を元に、二機は分かれて各々の目標地点を指す。ステータスはレモン。それほど大きいサイズではなく、迎撃自体はさほど難しくはないはずだ。

しかし、目標地点に辿り着いたマスター達は首を傾げた。肝心のドロップが見当たらないのだ。現在位置を確認したが、座標に間違いはない。

『小鳥さん、ドロップが見当たらないんですけど……』

春香の問いに、そんなはずはない、と返す。データ上ではとっくに視認できる距離に近づいている。けれど、当の本人達にはドロップの影すら、ちらりとも映らなかった。

真偽を確かめるべく、春香達に再度座標を確認した小鳥は、

「目標アルファ、ベータともにロスト！」

オペレーターの悲鳴染みた叫びを聞いた。自分でも信じられないような面持ちで、司令室の面々も耳を疑った。ドロップが急に消えるはずがない、と。

続けられた言葉が、管制室を更なる恐怖へと突き落とす。

「複数のドロップを確認！ 三、四、五……。いえ、六つです！」

「馬鹿な！」

ジョゼフが思わず声を張り上げる。いくらなんでも、六つものドロップが同時に落下してくることなど前例がない。しかし現実として、衛星の観測情報は複数のドロップを示し続けている。見過ごすわけにいかないのも事実。ジョゼフは即座に、新たな出現したドロップの迎撃を行うよう指示を出した。

『くっ、ドロップ確認できず！』

『こっちもですー！』

千早とやよいの声にも焦りの色が混じっていた。そこに在るはず

のドロップが、またしても見つからない。そもそも見落とすことのできるサイズではないので、本当に存在しないということになる。衛星の誤認？ 複数を、それも一斉に？ 否、有り得ない。

「これは悪夢か……」

三つ目、四つ目も確認できず、ジョゼフはわなわなと震えながら呟いた。小鳥も例外ではなく、何度も情報の間違いがないか洗い出す。結果、情報に偽りはなく。逆にそれで勘づいた。これは人為的に誤情報を流されているのでは、と。

まさか。

「ハッキング……！？」

この時期になると陽が落ちるのも早い。空は黄昏色に染まりつつある。夕空にたなびく雲はまるで黄金が流れているようだった。

連れて来られたのは、元お台場付近にある海辺の通りだ。おかしな挙動をしないように言われ、銃はハンカチで隠されていたので、誰にも不審がられることはなかった。いや、この場合は都合が悪いことこの上ないのだが。

美希の心情は恐怖一色だ。

自分に向けられているのが人殺しの道具だと分かると、心臓が爆発してもおかしくないほど脈打った。悲鳴をあげなかっただけ、自分によくやったと褒めてあげたい。もっとも、叫んでいたらどうなっていたのかは想像したくもない。

道中、リコリスは散歩をしているかのような面持ちで、宙に対しいくつも質問を投げかけていた。それは機密に関わる情報についてはなく、宙の生活や心境、日常に関するものがほとんどだった。

美希が人質に取られている手前、質問を蔑ろにするわけにはいかないからか、宙は質問に丁寧な答え、聞いたリコリスはその度に相槌を打っている。

「俺のことをいくら聞いても、機密なんぞ出てこないからな」

また質問に答えた宙は素直に疑問を口にした。利益になりもしないことを聞き出して、一体何の得があるというのか。それとも、このやり取りにも裏があるのだろうか。

リコリスの返答は単純だった。

「別に、あなたに興味があったからよ」

「俺に？ どうして？」

「天川マツリ」

宙が息を呑むが分かった。リコリスは立ち止まり、美希と宙も足を止める。サングラスの奥で光る瞳が、じつと宙を見据えている。

「天川マツリという人間によって、私達は繋がっているの。私も坊やも、あの女の呪縛に囚われたまま生きているのよ」

マツリの名前を口にした途端、リコリスの雰囲気が変わりど変貌した。敵でありながらもそれまで柔らかい物腰だった態度は、一変して強烈な怒りや憎悪を感じ取れるようになっていた。撃たれるのではないか。美希は身体を震わせる。

「あんだ、姉さんとどんな関係が……。その口振り、結構知っているように聞こえるけど？」

「……あの女の存在が私を縛る。坊やも同じ。天川マツリがこの世に存在したという事実が残る限り、私達は自由ではないの。だから私は、あの女が憎い」

「言ってる意味がわかんねえよ！」

憤慨して宙は声を荒げた。以前、訓練室で美希を怒鳴ったよりも強い口調だ。怒っている時の宙は怖い。美希は厳しい形相の宙を見ていつもそう思う。天川マツリが関わっていることには、特に。どうして、そんなに怖い顔をするのだろうか。

怯える美希に気づかず、

「姉さんが憎い？ それなら俺はお前達が憎い！ 俺から姉さんを奪ったお前達が憎い！ だから俺は戦っているんだ。姉さんの仇を取って、お前達に復讐するために！」

宙は視線でリコリスを突き刺す。まるで宙を突き動かす意思の根源が顕れているよう。

それを聞いたリコリスは、呆れたように首を振った。それだから縛られているのよ、と溜息混じりに呟いた言葉には、わずかに失望したようなニュアンスも含まれている。

思わず胸倉を掴もうとした宙に、リコリスは“ハンカチ”をかちりと鳴らせて見せた。

「少し状況を考えなさいな。この場の決定権を握っているのは、私よ？」

金属音で、冷水を浴びせられたように宙の顔から血の気がさつと引いた。同時に思考も冷静さを取り戻し、屈辱に歯噛みしながら、頭を深々と下げた。

「悪かった、許してくれ。……だから星井には手を出すな。そいつは関係ない」

「お利口さんね。物分りの良い子は好きよ。それにしても、意外ね」

リコリスは腰に手を当てて、

「他人を拒絶する節のある子だつて聞いていたけど。案外、仲間思いじゃない」

「え？」

まあ、いいわ。そう言つて再び動き出したリコリスに従い歩き出す。美希が先頭で、背中に銃を押し付けているリコリス、その左後ろに宙だ。

……まだ歩くの？

もう限界が近かった。いつ撃たれるかも知れない緊張状況が続いては発狂してしまう。どうせなら、いつそ殺してくれた方がどれだけ楽だろうか。

誰か助けて！ 声高に叫べたら。試しに小さく声を出そうとしたが、しかし驚いたことに声が出なかった。恐怖のあまり声も枯れてしまったのか。もはや助けを請うこともできない自分に、美希は深

く絶望した。

もう誰も助けてくれない。ずっと我慢してきた涙が、今にも溢れ出しそうだ。

……死にたくない、死にたくないよう……！

純粋な生への渴望に苛まれた時、

「星井、心配すんな。大丈夫だから」

陽気な声に振り返ると、肝心の宙はあろうことか笑顔だった。ぎこちない笑みで、無理矢理なのが丸分かりだ。恐怖に顔が引き攣っているのではなく、単純に、笑顔を作るのが苦手なのだろう。ひらりと手を振って、この状況を何でもないように見せた宙は、「こいつの狙いは俺。それに、抵抗しなければ危害は加えない。そうだろ？」

「ええ、そうね。街中で死体を出すのは得策ではないわ」

撃つ気があるのなら、こんな明るい場所には連れて来ないだろう。ここより人気のない場所だっていくらでもある。リコリスは宙を確実に捕らえるため、行動しているだけだ。宙が大人しく従っている内は、美希の安全は保障される。

それでも怖いものは怖いのだ。首筋に死神が手を添えているような奇妙に冷たい感覚を感じている美希にとって、言葉は気休めだ。おそらく宙も理解している。それでも、一度言葉を区切った宙は精一杯明るい様子で言った。

「いざって時は守ってやるさ。必ず、な」

柄じゃないな、という苦笑。曖昧で不確実な約束だったけれど、美希は嫌な汗がすうと引くのが分かった。心臓の高鳴る鈍い音が少し和らぐ。人はそれを安心と呼ぶのだ。

うん、宙くんは笑ってた方がいいよ。素直な感想を抱いた美希には、宙の心強い言葉が胸に染みる。守るって言ってくれた。相手は銃を持って、宙は丸腰、美希は人質。こんな状況では戯言のような約束だけど、それでも、笑顔になれた。まだがんばれると思えた。

「無駄話は控えめにね。あまり喋り過ぎると、うっかり引き金を引

いでしまつかもよ?」

妖しく微笑むリコリスに、宙は眉を吊り上げる。齒を食い縛っているのは耐えかねた怒りをそれでも殺しているからだ。リコリスへの怒りと、美希を巻き込んでしまった自分への怒り。この状況を作ったのは宙くんのせいじゃない、トゥリアビータのせいなの。声が出ていたら、すぐにそう言ってあげるのに。

「まあいいわ、そろそろ時間だしね」

リコリスは海沿いの道端を視線で示した。そこには波止場へと降りる階段があり、無数のテトラポッドが海に投げ込まれていた。下へ降りろということだろう。指示通り波止場に歩を進めた宙と美希は、地平線に沈む夕日に目を細める。

「さて、そろそろ散歩もおしまいにしましょうか」
言葉が契機となった。

少し離れた場所で、静かに波打っていた海面が突如盛り上がり、水飛沫とともに盛大に空に舞い散った。水の弾けた音は、半ば爆音にも似ている。そして、ゆっくりと起き上がった巨大な影。黒いIDOL。

「ヌービラム、こんな近くに……」

「今、この街の監視も含めた全てのシステムはひどく掻き回されているから、ヌービラムの接近にも気づかなかった。いえ、気づけなかったというわけよ」

「……これからどうするつもりだ」

「言ったでしょ? 狙いは坊やだけ。他はどうでもいいの」

「俺を捕まえたところで、おまえ達の所にヴェルトルが返ってくるわけじゃない」

「今はそれだけで都合なのよ。今は、ね」

「なんだって?」

意味深な台詞を放って、リコリスはヌービラムを呼び寄せた。このまま宙を連れ去るつもりだろう。その後、美希はどうなるのだろうか。助かる? 殺される? 不安な要素はいくらでも挙がる。し

かし、もう確定しているのは、

……宙くんが連れて行かれちゃう！

「乗りなさい。抵抗しなければ、この子は無傷で帰してあげる」

卑怯な提案だ。要求の内容を考えれば、宙は断ることなんてできないのに。

案の定、宙はヌービウムへ足を動かした。一度だけ美希へ振り向き、複雑な表情だけ残して、彼は差し出された巨人の手の平に。

「……失敗した？ 予定時間より早いんじゃない？」

ちようどその瞬間、リコリスが声をあげた。

彼女は襟元に隠したフォンマイクで誰かと話していた。口調に焦りはなかったが、聞き取れる内容はあまり良い報せではないようだ。想定外の事態を受けたからか、美希に押し付けたハンカチ「銃が、わずかに下ろされる。」

刹那の思考。決断。行動。

……ど、度胸なの！

神経を尖らせていた美希は、一瞬の油断を逃さなかった。特に手足は拘束されていないため、美希は勢い良く振り返り、銃を持った手を振り払い、力の限りリコリスを突き飛ばした。鳩が豆鉄砲を食らう、とは今のリコリスを言うのだろう。こんな子供が銃を向けられて、ここまで突発的な行動を取るのは予想外の一言。

もちろん美希だって怖かった。失敗したら撃たれるのも目に見えていた。

それでも彼女を突き動かしたのは、守ると言ってくれた宙の存在があったからだ。きっと宙が助けてくれるんだと、信じることできたから身体が動いてくれたのである。

やった、後は逃げるだけだ。美希は勝利の感情に歓喜の笑みを浮かべて、宙に視線を送る。さあ、早く逃げてな！

けれど。

宙は必死の形相で、美希の名前を叫んでいる。

気づけば、無表情のリコリスが、露わになつた銃を美希に向けて

いた。

時間が止まる。一秒が何分にも何時間にも引き伸ばされたかのよう。自分に向けられている銃口の奥の闇が、しっかりと目に焼きついていた。

殺される。直感的に美希は悟った。意外にも恐怖はない。死ぬ前に浮かび上がるといふ走馬灯もなかった。ただ意識が真っ白で、目の前の死だけを見つめていた。

……あれ？ おかしいな。美希、これで宙くんと一緒に逃げて

刹那、無情にも弾丸が迸った。

時間は少し遡る。

宇宙では無数のドロップが現れては消え、その都度、インベルとネーブラは本当に在るのかも知れない目標を粉碎するため、行き来を繰り返していた。

にも関わらず、ドロップのどれもがデータ上にしか存在しないフェイク。一つとして本物が確認されることはない。全てが偽物ではないか、という推測はもちろんあったが、もし本物が混じっていた場合その考えは致命的だ。

マスター達の体力も限界である。長時間の操縦に加え、この極限下において緊張の糸がほぐれることはない。無重力下のコックピットには文字通り玉の汗が浮き、着込んだ下着まで汗を吸い込んで重くなっている。

インベルが新たに出現したドロップの迎撃に向かう。その姿にエールを送りながら、黙々と機器を操作する女性がいた。

音無小鳥である。彼女はモニターに走る文字の羅列と格闘を続けていた。

……だめ、ここの防壁もすぐに破られる！

管制室の面々がハッキングに気づき、情報防壁を起動させてからしばらく。すでに大半の自動防御を突破していた謎のハッカーは、防御をもともしない異常な侵食速度を小鳥達に見せつけた。基地の莫大な演算システムを借りて対応しているにも関わらず、一般的なマシンの数世代先を行くモンデンキントの頭脳が、まるで赤子のよう。

ただの相手ではない。ウィザード級。それもこちらと同様、強力な演算システムをバックアップにつけた存在。だとすれば、

「トウリアビータ……！」

モンデンキントに電子戦を仕掛けてくる相手など、彼ら以外にいて堪るものか。

データハックは予想を遥かに上回る勢いで進行していく。第三、第四、第五、次々と破られていく情報防壁が小鳥達の心をも犯していった。

「せめて宙さん達と連絡が取れれば……！」

ジョゼフは厳しい口調で言い漏らす。基地のシステムを掻き回されたせい、東京一帯のセキュリティまでもがダウンさせられている。現在別部隊が復興作業に尽力しているが、ハッキングそのものを停止させないかぎり難しいだろう。

トウリアビータが噛んでいる以上、この瞬間、孤立している宙達の身に何が起こるか分からない。

過去の記憶が奥底から蘇ってくる。

四年前、叫ぶ自分、届かない声、そして。

……嫌よ、そんなの！

マツリを、親友を失った時の悲しみや虚無感。宙から向けられた憎しみ。この四年間、小鳥は様々なものを味わってきた。だから、もう誰も失いたくない。

「何か打開策は」

その時、怒涛の勢いを誇っていた侵食の勢いが突如として弱まった。先の速度から見れば、時が止まったようにすら思える速度の減

衰。小鳥は、それが基地内の回線を通して介入する存在のおかげだと、遅れて気がついた。場所はIDOLの格納庫からだ。

「まさか、IDOL達？」

修理作業中のヴェルトールと、テンペスタース。

誰かが操作している様子はない。彼らは無人で、自らの意思で起動したのだ。

……私達を助けるために？

いや、違う。彼らはあくまで、所在の分からなくなった己のマスター達の身を案じているに過ぎない。その証拠に、オペレーターの報告が耳朶を打った。

「ヴェルトールが無人で起動！ チャンネル9より外に出ようとしています！」

大方、宙達の所在が分かったのだろう。自ら迎えに行くつもりなのだ。まったく、IDOLという存在には毎度驚かされる。だが、だからこそ、自分やマツリは彼らに惹かれたのだということを出し、くすりと喉を鳴らした。

宙達のことはヴェルトールに任せておこう。今は、自分の与えられた役目を果たそう。

小鳥は表情を引き締め、ハツカーの駆除を再び開始した。

浸かった紫色の液体はそろそろ湯気を出し始め、リファは湯浴みを満喫しているような心持ちであった。実際、感覚は風呂と大差なのだがやっていることは大違いだ。

バスタブに満ちている液体は特殊な媒介で、リファはそれを介してあらゆるコンピュータに侵入、攻撃することができる。いわゆるクラッキングと呼ばれるものである。

攻撃対象はモンデンキントJP・アイドルマスター課。ドロップの観測状況をリアルタイムで書き換え、あたかも無数のドロップが

現れたように偽造しているのだ。驚愕と焦りで歪む敵の姿が目に見えるよう。

しかしそれもつい数分前の話。

「むむむ、案外手強いかも……」

ある程度セキュリティを攻略した辺りから、相手の抵抗がいきなり強くなったのだ。

トウリアビータの誇る大型電算システムをバックアップにつけているにも関わらず、問答無用で押し返してくる様子は津波の如く。強力なりファの能力を持つても持ち堪えるのが精々。ましてや、東京都の監視網と並行してでは無理がある。

「リファ、負けないんだから！」

意気込んで肩まで液状媒介に浸かったリファ。こうなれば徹底抗戦だ。

しかし、元々タイムリミットのある作戦の都合上、あまり時間を食うわけにはいかなかった。情報処理が加速すればするほど、液体の温度は急激に上昇していくからだ。リファの耐えられる温度の限界が、作戦のリミットとなる。

液状媒介を通してモンデンキントの情報防壁を食い破ろうと試みたが、こちらの演算速度を上回る勢いで遮断され、逆に侵入した領域をどんどん押し戻されていく。

いつの間にか液状媒介は熱く煮え始め、バスタブから繋がるコードは蒸気を出しながら悲鳴をあげていた。リファの身体もすでに真っ赤で、我慢もそろそろ限界だ。

もう少し、もう少し、もう。

「もう駄目えー……！」

バスタブからリファが飛び上がったと同時に、周囲の機器類からはエラーアラートがうるさく鳴り響いた。

美希の帽子が舞った。ひらひらと、不規則に揺れながら地面に落ちる。

一瞬意識が飛んで、次に視界に映ったのは美希の顔だった。宙は美希を抱き寄せる格好で地面に倒れこんでいて、腕の中の美希から荒い吐息が耳に響く。美希の身体は華奢で、腕は力を入れたら折れてしまいそう。小さな身体。唯一、反比例する豊かな胸が宙の身体に当たって、不謹慎にもどきりとした。

ああ、馬鹿なことを考えているな。宙が苦笑を漏らすと、

「宙、くん……」

美希は引き攣った声を出した。身体は小刻みに震えて、愕然とした表情を見せる彼女は、ぼろぼろと涙を流しながら宙を見ていた。何故、泣いているんだ。そう聞こうとすると、

ぼたり、と。美希の頬に赤い液体が垂れた。

痛みを感じたのはその直後だ。頬が灼熱感に苛まれ、痛みに顔の筋肉がわずかに硬直した。触れてみると、右頬が一直線に搔つ切れていた。否、正確には皮膚が破かれていた。

リコリスが美希に銃口を向けたのを見て、宙は考えるより先に走った。勢いに任せて美希を地面に押し倒したと同時に、放たれた弾丸が宙の頬を掠ったのだ。幸い傷はそこまで酷くない。しかし鋭利な切り傷ではなく、ぐちゃりと抉れた頬の裂け具合は少しグロテスクでもある。掠っただけで済んだのは幸運だった。

馬鹿野郎、泣く奴があるか。だって、だって……！ 泣きつく美希を持って余していると、後ろで再び金属音を耳にする。

リコリスは銃口を二人に向けたままだった。真っ直ぐに狙いを定めた銃口の奥は、まるで夜の森を連想させる暗がりを覗かせている。この瞬間、生と死の狭間が宙の意識を何倍にも引き伸ばし、時という概念を擬似的に捻じ曲げる。美希の吐息と、己の鼓動だけが、宙

にとつての生きている実感だった。

「王子様ごつこもそれでおしまい？」

「……」

無言。耳が痛いくらいの沈黙が辺りを支配する。

あちらには銃があつて、おまけにヌービウムが鎮座している。やるうと思えば、次の瞬間には二人を踏み潰せるはずだ。それをしないのは、それだけ宙に価値を見出しているからか。否、ヴェルトー
ルに。

相棒のことを思い出す。おまえがここにいればいいのに、と宙は願う。

凶暴な昂ぶりを込めた銃口を前に、美希を庇う様に抱いた宙は、こいつだけは助けてやらなくちゃと思つた。無事に帰してやらないと。

想いに続くように、疑問が生じる。どうして助けなくてはならない。たかが他人なのに。どうでもいいはずなのに。自分が死ぬかもしれないのに？ 他人を庇って自分は死ぬかもしれないのに？ どうして自分は、こいつを守らなくてはならないのだろう。

……難しいことじゃないんだ。

至極単純に、美希が傷つくのは嫌だったからだ。“仲間”が傷つくのは辛いと思つた。

『案外、仲間想いじゃない』

あの時、リコリスにそう言われて、不意に、この半年間の記憶が過ぎつた。

最初はマツリの無念を晴らす以外は眼中になく、あずさの優しさも煩わしかった。他の連中が付き纏ってくるのも、宙の得体の知れなさにつまらない興味本位を抱いただけだろうと高を括っていたのだ。けれど、そうではなかった。

復讐のためにアイドルマスターとなつた自分を、暖かく迎え入れ、仲間だと信頼を寄せ、こちらの反発に嫌気をさすでもなく歩み寄ってくれた人達。誰も信じられなくなつてから忘れて久しい、“楽し

い”や“嬉しい”という感情を思い出させてくれた。

だからかもしれない。美希に、守ってやる、なんて似合わない台詞を言えたのは。

だからかもしれない。弾丸を前に飛び出していったのは。

だからかもしれない。彼女達の笑顔が心の内に刻まれているのは。鳥は、片翼では飛べない。マツリの強さも、きつと誰かを想うことで生まれた力だ。宙のこと、カイエンのこと、小鳥のこと、高木のこと。彼女はそれを理解していたからこそ、強かったのだ。今なら分かる。そう信じられる。

「俺は、こいつを守る」

宙は立ち上がってリコリスの前に立ち塞がり、腕を大きく広げて美希の盾となった。どこからともなく力が沸いてきて、身体中に漲った。リコリスは訝しげな視線を宙に向ける。銃口が宙から逸れることはない。

「……駄々をこねるなら本当に撃つわよ」

「大事な奴らだから！俺が守ってやる！撃たれても絶対ここを退くもんか！！」

誰かを頼つてもいいのなら、怖いけれど、宙は彼女達を信じてみたかった。例えもう一度、裏切られる恐怖に怯えるとしても、彼女達のあずさの笑顔を知ってしまったから。

自分は、天川宙は。

“ここ”にいたい。

水のように染み渡っていく感情は、宙の決意を力強く鼓舞した。

ソラ。

「え……？」

誰かが宙の名前を呼んだのと同時、地面が小刻みに揺れ始めた。それは徐々に激しさを増し、その場にいた全員が厳しい表情で辺りを見渡たす。地震にしては揺れが長過ぎる。やがて海が沸騰したよ

うに泡立ち始め、うねり、次の瞬間、天を貫く勢いで水柱が上がったのだった。一拍置いて、波止場を砕きながら降り立ったのは、鉄のIDOL。

リコリスはかつと目を見開き、

「ヴェルトール!？」

予期せず現れたIDOLに表情を歪める。何故、と。何故ここに、と。

反して宙はヴェルトールと心を通じ合わせた。

「……助けに来てくれたんだな」

宙の眩ぎが届いたのか、ヴェルトールは双眸を輝かせた。

東京都内には、地下基地を中心にIDOLの射出ルートが多く存在する。ヴェルトールは、その一つを通ってここまで来たのだ。美希を守りたい、という宙の想いに応えて。

「これほどまでに、マスターとIDOLの心が繋がっているというの!？」

そう、繋がっているんだ。眼光の奥底から覗く決意の印。ヴェルトール、おまえが俺を信じてくれるように、俺もおまえを信じ抜く、だから、

「ヴェルトール、一緒に戦ってくれ!」

宙と美希を守って立ち塞がるヴェルトールに、リコリスは一步後退した。ここでヴェルトールごと奪取するのは、リコリスとヌービームの力を持つてすれば簡単なことなのに。何故か、得体の知れない重圧がリコリスを恐怖させていた。

……この私が気持ちで負けている!？」

自分の思考に、しかしリコリスが浮かべたのは凄絶な凶笑だった。この坊やは、どこまで私を楽しませてくれるの。嬉しさが込み上げてきてたまらない。

もつと、もつと私を楽しませて。私の存在意義を教えて! もつともつと!……

でも、今日のところは仕方がない。

「引き際、ね」

リコリスは華麗にターンすると、一直線にヌービアムの手の平に飛び乗った。そのまま、常人とは思えないほどの身体能力でヌービアムの腕を駆け上り、コックピットへと。膝立ちから立ち上がったヌービアムは、わずかな間ヴェルトルと視線を交わし、ゆっくりと浮上していく。

「逃げるのか！」

「言葉の使い方を間違えてるわね、“見逃してあげる”のよ。……さすがに三対一では分が悪いものね」

じゃあね坊や、また会いましょう。捨て台詞を残して、ヌービアムは黄昏に沈む空へと急上昇していく。壮絶な加速。瞬時の出来事だった。

空の天蓋、すでに暗くなった一点へと消えるヌービアムを見つめ続ける宙は、緊張から開放された安堵感で胸を撫で下ろす。

「……リコリス。トゥリアビータのマスター」

リコリスと名乗った美女の正体は何一つ知れなかった。けれど何故か、頭の隅に残った小さなわだかまりが、不思議な波紋だけを残していたのだった。

ヌービアムが飛び去った後、宙と美希はすぐに保護された。

どうやらリコリスが退いたのは、ハツカーを撃退し、ドロップ地獄から開放されたインベルとネーブラが戻って来るのを察したかららしい。その証拠に、ヌービアムと入れ違う形で、インベル達が基地へと戻って来た。三対一では分が悪い、とは言葉通りの意味だったようだ。

頬の傷は手当が早かったため、幸い傷は残らないらしい。美希に傷ができたら大事かもしれないが、男の宙に傷の一つや二つ残ったところで、勲章のようなものだろう。

しかし、まあ、

「馬鹿言わないでください！ 男の人でも怪我をしたら一大事です！」

と、正座であずさに説教させられているので、問題だということにしておく。

真顔で怒ったあずさを拝むのは初めてだが、それはそれは、リコリスに銃を向けられた時とは別種の畏怖を感じてしまつくらい怖いわけで。正直、情けないことに、先程から背筋が冷たいわけで。

それに周りにいる他の連中は、人の心配どころか、おもしろがつてにやにやしながら観賞しているわけだし。

「聞いてますか!？」

「は、はい！ しつかり聞いているであります！」

「私なんて、宙さんがケガをしたと聞いて視界が一瞬真つ暗に……」

仕事場からすつ飛んできたというあずさに、耳が馬鹿になるのではないかと思うほど叱られていると、そこへ、

「あずさ、あんまり怒らないでほしいの」

「あら、美希ちゃん。もう大丈夫なの？」

「うん、平気。美希は大したケガもしてないし、全部“ハニー”が助けてくれたの！」

医務室から戻って来て、両手を一杯に広げて健康をアピールする美希。よかったなあ、と宙とあずさは頷いて。言葉の端の妙な違和感に絶妙なシンク口で疑問した。

「“ハニー”？」

なにやら甘つたるい呼称に首を傾げた全員を無視して、美希は突然宙の首に手を回して、えいつ、と抱きついてきた。空間が止まつてしまったかのような錯覚に襲われて、

「……ん？ って、おまえ、どういつつもりだ！ 冗談も大概に！」

「冗談なんかじゃないよ。宙くんは美希を助けてくれたの。まるで白馬の王子様みたいにかっこよくて……」

美希はぐいつ、と顔を近づけて、

「美希、恋しちゃった!」

さらりと投下した爆弾発言に、周囲から大絶叫の嵐が乱舞した。春香を筆頭に数名は大ニユースだと騒ぎ立て、千早は何故か渋い、というか難しい顔でこちらを遠巻きに見ているし、あずさに至っては宙と美希を交互に見て、とても衝撃を受けている様子だった。

おい、どういふことだ? あずさと顔を見合わせると、二人の間に割って入った美希は、千早とあずさにVサインを送りつつ。

「千早さん、あずさ、美希負けないんだからね!」

茹でたタコの如く赤くなつたあずさと、私は関係ないと憤慨する千早、腕を掴んで離さない美希に、わけもわからず状況に困惑する宙、そして色んな意味で大スキヤンダルなカミングアウトに各々賑やかに騒ぎ回るマスター達を残して。

この日の事件は終結した。

そして歴史は動き出す時を迎え始めていた。

トゥリアビータの基地に帰還したりリコリスを待っていたのは、カラスだった。いつものように黒尽くめの男は、わざわざ格納庫まで来てリコリスを待っていたらしい。

また任務を中途半端にした小言でも言われるのかな、と少々うんざりとした雰囲気のリコリスに、カラスは開口一番、

「五番目の“ヒエムス”のコアを発見しました」

冷たい、しかし歓喜したような笑みを携えて、カラスはリコリスに告げた。

「場所はアイスランド。やっと、この舞台の役者が揃うというわけですよ」

さあ、時は満ちた。

「開演の時間です。“アウリン”を開くため、華麗に、激しく、妖艶に、踊り狂ってもらいますよ。リコリス」

人を悪と呼べるなら、きっとこの男の浮かべている表情こそ相応しい。

宇宙の底知れない闇の中、地球を囲うオービタルリングの外で、今まさに生れ堕ちようとしている生命があった。

否、それを生命と呼ぶかどうか、人間の定義では計り知れないところが大きい。

ただ“それ”は本能に従って、地球に向かおうとしていた。地球に墜ちた自らの分身を取り戻すために。分身の一部は“それ”の記憶 生れ落ちたばかりの存在に記憶はない。本体から供給されている情報というのが正しい にはない姿をしていた。

とりあえず、“それ”は分身に近い形をとることにした。

ゆつくりと、籠の外から内側へと入っていくものを、誰も気づきはしない。

第十話 嵐の前の

第十話 嵐の前の

大西洋中央海嶺の直上に位置するアイスランド共和国は、アイスランド島を主な領土に、小さな島々で形成された国家である。国土の一部は北極圏にかかっており、反面いくつもの活火山が存在し、その影響で間欠泉が確認されていることで有名だ。

ロストアルテミスの惨劇によって、島々の多くは水中に没したが、白く輝く銀世界に火山の中で燃え滾るマグマが共存する幻想的な風景は、いまだ失われずにそこにあった。

炎と氷の世界、アイスランド。

何も描かれていない無地のキャンパスのような、広々とした雪の絨毯の上に、アイドルマスター課の面々は足を踏み入れていた。

本日は晴天なり。空は青々と晴れ渡り雲一つない。

大地を覆う白銀の雪原は、眩い日差しを反射して宝石のように輝きを放っている。その奥で、こんもりと盛り上がった起伏の天辺から、燃え滾るマグマを象徴する煙がもくもくと上がっていた。それを眺めながら、

「さっ、さみい……！」

かちかちと歯を鳴らして、天川宙は白い息と一緒に言葉を吐き出す。

気温はマイナス。活火山の影響で、北極圏にかかる他の国々と比べればまだ暖かいとはいえ、アイスランドが極寒の地であることに変わりはない。冬でも滅多に雪の降らない東京育ちの宙には大いに堪えるのである。

着込んだ分厚いコートの上から身体を摩りながら、眼前で膝をつく四機のIDOL達に目を向けた。大勢の整備員の交わす忙しい声

の中で、寒冷用装備の交換を受けている。慣性制御を持つIDOL
とはいえ、この極寒の地で行動するには、関節部等が凍りつかない
ように整備が必要だ。絶大な性能を誇るIDOLも完全ではないの
だ。

「なあ、如月。おまえは寒くないのか」

「こつこつというのは気持ちの持ちようなのよ」

振り向きもせず、なんの面白みもない返答を寄越したのは、整備
服に身を包んだ如月千早だ。相変わらず、彼女は整備班に混ざって
インベルの整備をしている。今は各部の動作不良がないかチェック
の最中だった。

可愛げがないと呆れつつ、宙は遠くで煙をあげる山脈に視線を注
ぐ。

「あそこに、ヒエムスのコアがあるのか」

そう、コア。アイドルマスター課が遠方のアイスランドにわざわざ
足を運んだ目的。この物々しい雰囲気も、本作戦の重要性を物語
っていた。

五番目にして最後のコア“ヒエムス”が、この地で発見されたの
だ。

「よくあんな所にあるって分かったな」

「課長の話だと、アイスランドという土地の性質がヒントだったら
しいわ」

曰く、アイスランドはユーラシアプレートと北アメリカプレート
が浮上する線上にあり、本来ならば非常に地震が多い国らしい。し
かし実際は、ここ二十年間まったく地震が起こっていないのだそう
だ。起こるはずの地震が起こらない。この異常にモンデンキントE
Uは目をつけた。

調査の結果、高々と空に伸びたあの山、グリムス山付近に重力の
異常を検知した。プレートの動きに干渉できるほど大それた重力異
常は自然には起こり得ない。そして、それをやってのける存在とい
えば、コア以外にはないだろう。モンデンキント本部はトゥリアビ

「タとの勢力を確固たるものにするため、コアの回収を早急に決断したのだった。」

問題は、肝心のコアがグリムス山のマグマの底に眠っていることだ。地下数キロの深さ、一〇〇〇度に達する極熱に耐え、同時にコアを探索し回収するのは難しい。

結果、これらの全てに対応し得る能力を備えたIDOLが最も適任だということで、宙達はここにいるのである。コアにはコアを有するIDOLを。宙は納得と頷いた。

「それにトウリアビータのことも油断できないわ。私達がこれだけ大掛かりに動けば、あちらも黙っているはずがないもの。もしかしたら」

「ああ、最悪戦闘も有り得る。……例の事件からまだ二週間だって言うのに」

「最近、忙しくて息吐く暇もない。」

「ええ、まったくね。ところで」

千早は作業用端末から顔を上げて、訝しげな視線を宙に向けた。眼前、ではなく。千早の背後に隠れるようにして、周囲を伺っている宙に。

「また美希から隠れているの？」

「あれから懐かれてしょうがない。ことあるごとに抱き着かれちゃ堪らねえよ」

「どついう意味で“タマラナイ”のかしらね？ 満更でもなさそうだけど」

「そういう棘のある言い方やめてくれないか……」

千早はぶいっとそっぽを向いてしまった。なんで機嫌悪くなるかなあ、と面倒くさそうに溜息を吐く宙だったが、最近似たような態度が続くので段々慣れてきた。何故怒っているのかは、いまだ解明できてないが。

どうも居心地が悪くなり、用事でも済ませてくるかと立ち上がった。そろそろ美希も諦めた頃合だろうし。そうしよう、と腕を組み、

「如月、あずさんがどこにいるか知らないか？」

「……あずさんなら、さっき風景を見て回っているのを見たけど」
「そっか、ありがとう」

少し間の空いた千早の返答に首を傾げながら、宙はくるりと背を向けて歩き出す。さくさくと雪を踏み鳴らす音が珍しくて心地良い。

「ありがとう、か」

背後で宙が立ち去るのを感じながら、千早は感慨深く言った。

あの事件以来、彼の物腰が柔らかくなつたのは周知の事実だった。少し前ならば軽々しく礼など言わないし、必要以上に近づいて来ることもしなかつただろう。変わったな、と千早は思う。彼は変わった。否、“元に戻りつつ”あるのかもしれない。

だのに。どうして自分は、あんな冷たい言い方しかできないのだろう。まるで子供染みた、反発的な自分の態度がひどく気分を不快にさせる。千早は人知れず唇を噛んだ。かたかたと、作業用端末を叩く無機質な音が耳に響く。肝心の内容は半分も頭に入っていない。美希が宙にラブコールを送り始めてから、陰湿な自分が鎌首をもたげている気がしてならなかった。どうしてこんな気持ちになるのか。千早自身、知りたくも気づきたくもなかった。だって、別に誰が宙に入れ込もうが自分には関係ないのだから。

私はなんとも思っていない。

「ちよつと、千早！」

唐突に名前を呼ばれ、びくりと背筋を伸ばした千早は、しかめっ面で端末を指差す律子に振り返った。千早と同じく作業服に身を包んだ律子は、眼鏡の奥の知的な瞳に呆れを灯して、そこ間違ってるわよ、と嘆息。

「ごめんなさい、今直すわ」

「千早らしくないわね、こんなミス。作戦前に気が散っているよう

なら、休んだ方がいいんじゃない？」

「……」

無言。齒車が噛み合わないような、ぎいぎいと擦れる無様な音を頭の片隅で聞いたような気がする。自分はどうしてしまったのだろう。いつもなら冷静でいられる思考が、テレビのノイズみたいに砂嵐に塗れている。知らず内にきつく結んだ唇を見て、律子は、

「千早もやっぱり女の子よねえ」

そんな意味不明な言葉を唐突に言い出した。自分でもよく分かってないところがまた千早らしいわ、ほんと。珍しく悪戯っぽい表情をする律子は楽しそうだが、反面千早はからかわれているようではない気がする。むっ、と眉根を吊り上げる。

「別に私はどうも思っていない。本当に、私は宙のことなんて……」

「あれ？ 天川の名前なんて一言も出してないけどな、私」

「っ！？」

失敗した、と知らず知らず一歩後退さる千早は、すぐにでも逃げ出したい心境に駆り立てられた。これではまるで、自分が宙のことを考えるあまり仕事の手付かずになっているようではないか。……いや、実際そうなのかもしれないけど、こんな思考は恋する乙女のそれとしか言いようがない。

言い訳めいた考えが頭を巡って、千早は自分の想いに疑問する。だって、自分が宙に抱いている感情は。そう、そんなものではないはずだから。

「お堅い千早でも、恋愛の一つや二つしたって……」

「違うの律子。そんなじゃないの」

低いトーンの声が、絶対的な否定の意味を持って言葉を遮った。ここまで言って何を誤魔化す必要性があるのか、と次に言おうとした律子は、目の前の少女が今にも泣き出しそうになっているのに口を噤んだ。目尻に浮かぶ涙。

「白状するとね、私が彼に抱いているのは、恋みたいなの淡く優しいものじゃないの」

恋なんかじゃない。もつと自分勝手な、自身の中だけで完結する感情。それはたぶん、宙が自分の姉に抱く感情に似通っている。

人はそれを懂れと呼ぶ。それ以外の呼び方は、知らない。

千早は律子に顔を見せないように背を向けた。自分の顔は確認できないけれど、きつとみつともない、ぐしゃぐしゃな顔をしているに違いない。でもそれは誤解。

千早の唇は、自嘲気味に嘲わらっている。目元に涙がすう、と頬を濡らして雪の上に落ちた。違うの、私の気持ちは、違うの。言い聞かせるように呟いた千早の瞳は赤く。

恋じゃないから、この胸の些細な痛みは、たぶん身体のどこか悪いんだと。

痛いのに、些細だと思い込んだ痛みが、どこまでも痛い。

さくさく。さくさく。

雪の絨毯を踏み鳴らす。時たま身体を撫で上げる風に宙の頬は赤みを帯びている。吐き出す息は白く、口から魂が抜けているようなひどく怪談めいた感想を抱いてしまった。馬鹿馬鹿しいことを考えているな、と。苦笑しながら、宙は大量に止められた雪上用トレイラーの脇を抜けた。

しばらく歩くと、小さな歌声が耳に響いた。心地良いほど澄んだ声だ。その歌声に導かれるように進む。すると、高台の先に長い髪が揺れているのを発見。彼女　三浦あずさの視線の先にはグリムス山が見えた。

「こんなところで風景観賞？」

宙に振り向いたあずさは、微笑みを返して頷いた。

「ええ、アイスランドを訪れる機会なんて、滅多にありませんから」「鼻歌が漏れるくらい上機嫌というわけだ」

唐突に働いた悪戯心でからかってみると、頬を赤くして慌てるあ

ずさ。き、聴こえてたんですか？ 案の定、面白いくらい純粹なりアクシヨンに、宙はくっくつと喉を鳴らす。

「私の方が年上なんですよ！ 人生の先輩なんですからね！」

からかうのはだめなんです！ と必死になる様子を見てみると、言葉とは裏腹に、どちらが年上なのか疑問になつてくる。容姿はまさに大人という風なのに、少々幼く可愛らしい仕草があずさには似合っているような気がした。それでいて、墨を流したような黒髪が風に攫われると、絵画に収めても遜色ない姿が宙の瞳に映る。

宙はあずさの隣に並ぶと表情を引き締めた。こうしてあずさを探していたのは、彼女に用事があつたからに他ならない。

「……実は、あんたに話しておきたいことがあつて」

意を決するような面持ち。真剣な眼差し。覚悟さえ漂わせる目の前の青年に、自然とあずさも姿勢を正していた。

「はい、なんででしょう」

「お詫びとお礼を言っておきたかった」

あずさは意表をつかれたようにきよとんと目を丸くして、首を傾げる。と言うのも、あずさにはこれと言って謝られるようなこともなければ、感謝されることをした覚えもなかったのだ。なにかの間違ひではないだろうか。内心が表情に出たのか、そつちに覚えがなくてもこつちにはあるんだ、と宙は強く言った。

「突然、どうしたんです？」

「最近になつて少し理解できたことがある。あんた達のことだ」

「私達ですか？」

「うん、そうだ。俺は、あんた達に救われたんじゃないかって」

話し始めた宙の様子は独白に近かった。教会で罪人が懺悔するかのような、ひどく切実で、罪を吐き出そうと苦しげでもあった。けれどあずさには止められない。彼の紡ぐ一言一言を受け止める義務が、自分にはあるような気がしてならなかったからだ。

宙は懺悔していく。この半年間を追憶しながら。

「ずっと怖かった。姉さんが死んでから、世界中が、俺を嘲笑って

いるように思えて。優しい顔で近寄って来ては、崖から突き落とすみたいに、また裏切る。そうして楽しんでるんじゃないかって。本当に、そんな風に怯えて毎日を過ごしてた」

そんな時、あずさに出会って、ヴェルツールが降って来た。最初は頭が追いつかなくて、足が竦んでいたけれど、彼女の手の平が自分を支えてくれた。道を示してくれた。

けれど、そんなあずさの存在でさえ、宙は恐ろしく思えてならなかったのだ。いや、無条件に優しくった分、特に欺瞞に満ちているように見えたのかもしれない。誰も信じることができないから、あずさの気持ちも疑ってかかることしかできなかった。壁を作って、誰も彼も遠ざけて、殻に閉じこもって。

無様だよな。宙は吐き捨てる。無様過ぎて笑えてくるよな。

だが、それでも、宙の心を少しずつ溶かしてくれたのも同じくあずさだった。

彼女だけではない。春香とやよいの明るさは気分を陽気にさせてくれたし、千早や律子と話していると楽しかった。亜美と真美の悪戯には手を焼いたけれど、雪歩が淹れてくれるお茶を飲むと、怒るのも馬鹿馬鹿しく感じられた。伊織や真との口喧嘩も今となっては当たり前だし、美希に追いかけられるのも満更ではない。

なによりあずさと二人で過ごす時間は、まるでマツリと一緒にいた時のように、心が安らいで、落ち着くのだ。

天川宙の心にはいつの間にか彼女達の笑顔があつて、

「あんだ達を信頼している自分自身を、ようやく認めることができた。許せてやれたんだ」

過去は二度と正すことはできないけれど。今までの自分を認めてやることはできる。

だからまず、今まで酷いことばかり言って遠ざけた謝罪を。そして、それでも見捨てずに手を差し伸べてくれたことに感謝を。言わずにはいられなかったのである。否、謝罪とか感謝とかよりも、もっと端的に気持ちを言葉にするならば、

「俺の隣にいるのがあんたで、良かった」

口では伝えきれない様々な気持ち。もっと多くの気持ちを伝えられる言葉はないかと模索したが、結局、ありふれた台詞に収まったのだった。出来るかぎりの万感の想いを込めて、その一言とする。気恥ずかしさもひとしおではあった。心中を吐露するというのは、なかなかにして、緊張するものだ。そして息継ぎ。

「だからこれからも、俺とヴェルツールに乗ってくれ」

ぐっと握り締めた拳を開いて、あずさに差し出し、握手を求める。握手は信頼の証でもあった。なにせ、宙は人と触れ合うことを極端に嫌がっていたのだから。初めて出会った時、宙はあずさの手を拒んだ。でも、その手の温もりは今でも覚えている。もう一度あんなの手を握ってもいいかな？ 手の温もりを感じてもいいかな？ もう触れても怖くはないから。

「あらあら、水臭いですねえ」

そんな宙に、あずさは気さくに言っつて、

「断るわけじゃないじゃないですか。私達、パートナーでしょう？」

「……ああ、そうだな。まだまだ格好良く行かない半端者だけど」

不意に、宙は言葉を詰まらせた。

三浦あずさは泣いていた。否、花も恥らうような微笑みを浮かべながら、目尻から大粒の涙を零していたのだ。虚をつかれた気分で、宙は戸惑うことしかできなかったが、あずさはあくまで笑い続けていた。

泣かせるようなことを言ってしまっただろうか。少なくとも、彼女の涙の原因が宙であることに疑いようはなかった。あずさが泣いていると、何故か心に帳が降りたような心持になって、不安になる。宙の表情には、段々と焦りが濃く表れてきた。

ところがあずさは目元の涙を拭くと、あなたのせいではない、ときっぱり断言した。

あずさは笑う。目と頬を赤らめて、嬉しそうに破顔する。

「ごめんなさい、私、胸にぐつと来ちゃって。“隣にいるのがあんたで良かった”、なんて。まるで愛の告白みたいじゃないですか？」

愛の、告白？ 無意識に口にして、記憶をビデオテープみたいに巻き戻してスピード再生。間抜けな感じに収縮された声と映像がぐるぐると脳内を駆け巡り。……オレ、ナンツーコトヲ。さあ、と血の気が引いた表情からして一変、耳まで真っ赤に染まった宙は、白く凍りつく吐息が本当に自分の魂なのではないかと思った。

うふふ、と微笑を絶やさないあずさは嬉の感情一色。

「い、いや、俺は、そんなつもりじゃ……！」

意図した意味があるわけではない。しかし、そのような意味に取られてしまうのも事実だ。口は災いの元とはよく言ったものだが。いや、だからと言って、別に何が悪いわけでもあるまい。あずさに伝えた気持ちは本当のものであるし、そういう意味も含んで然るべきでは云々かんぬん。問題があるわけでは云々かんぬん。

と、目がくるくる螺旋を描いた自問自答の末。

「って、からかってるな！」

「さあ、なんのことでしょう？ ただちよつと、悩んだ宙さんも可愛いなあって思っただけですよ」

いつの間にか悪戯な笑みを浮かべていたあずさに、宙はしてやられた！ と頭を抱えた。くすくすと笑う彼女は、もう涙を流していない。さっきのお返しです。人差し指を口に当ててウィンクする仕草に、くらりと毒気を抜かれてしまって、それ以上追求するのをやめた。子供扱いされているみたいじゃないか、これじゃあ。

……こういうのも悪くない。

宙は胸の奥が暖かくなるのを感じた。たぶん彼女達を信用するということは、こういう他愛もない話で一喜一憂できる関係を築く、ということなのかもしれない。

「えいつ」

すると、あずさは宙の右手を握ってきた。指し伸ばされたその手を取ったのだ。

半年前、宙は掴まれた手を払ったのを思い出す。反射的に、恐怖と嫌悪の入り混じった感情で。けれど、今はその感触を確かめるため、ゆっくりと握り返した。互いを離すまいとするように掴み合った手と手。寒空の下、冷え切ってしまった肌は、段々と温もりを取り戻していく。寄り添いあったヤマアラシの如く。

しばらく、二人は無言で手を握り合っていた。風の音を聴き、青く広がる空を眺めながら。世界には二人だけしか存在しないかのような錯覚さえ、宙は覚えた。

このまま時が止まってしまえばいいのに。

宙があずさの横顔に視線を移した時。

「ハーニーー！」

どんつ。後ろから抱き着いてきた星井美希のせいで顔から雪に突っ込んだ。

「ばっか、この！ 星井！！」

「わ、ごめんハーニー。痛かった？ でもハーニーがあずさと二人きりみたいだから、むむ、これは危険だな！ って思ったの。だから走って来たの！」

「はあ、さいですか……」

雪のおかげで擦り剥きはしないが、何より冷たいので鼻が真っ赤なトナカイ状態になっていた。ぶるりと身震いして、背中に張り付く美希を引っぺがす。不満全開な表情で離れる美希は、最近行動が目立ってきた。隙あらばハーニーハーニーと懐いてくるのだ。例の事件の影響は思ったより大きいらしい。

好意を持つてくれる分には悪い気がしないのだが、美希は極端過ぎて、対象である宙は周囲の目が気になって仕方がない。特に千早の冷やかな目とか。今も隣で戸惑っているあずさの様子だとか。

「あずさもなかなか積極的だね。さすがは恋のライバルなの！」

「ああ、もう、聞いているこっちの心臓に悪いわ！ 大体」

クルヨ。

「えっ」

次の瞬間、宙の意識は遙か頭上の宇宙空間にあった。驚愕を通り越し疑問すら浮かばない、ただ漠然とした意識の中で“あいつ”は宙になにかを見せたがっている。情感的に悟ったのだろう、己の意思は、ただ虚空の闇を見つめている。

背後には青い地球。そこに。

“ なにか ”、得体の知れない輝く “ なにか ” が堕ちて来る。

あの存在は人間には毒だ。いや、この惑星の生きとし生けるものにとって猛毒を超えた死の具現。地球という生命の体内に入り込む凶悪なレトロウィルス。人間としての本能がそう告げている。

全身から否応なく嫌な汗が吹き出た。宙は生まれて初めて、究極的に純粹な恐怖に襲われた。理性の更に奥に眠る本能が悲鳴をあげている。にも関わらず、どうしてあれを美しいと感じてしまうのだろうか。不明確。不明瞭。曖昧模糊。理解不能。漠然と映像を見させられている宙にその存在を理解することは不可能だった。

しかし、もし端的に、簡潔にイメージを説明するならば、

「IDOLだ」

呟いた瞬間、宙は再び極寒の空気の中にいた。隣では美希とあずさは話している。おかしなことに、あの映像はまさしく刹那のものだったようだ。身体は汗もかいていない。ただ、震えているだけ。あれの姿だけが頭にこびりついて離れない。

自分はどうしてしまったのだろう。震える手を握り締めた時だ。

警戒用のサイレンが鳴り響いたのは。

インベルのコックピットで最終調整を行っていた千早は、サイレンの音で弾かれるように顔を上げた。一瞬の間を置いてコックピットを飛び出し、ひゅうと吹いた風に髪を押さえて周囲を見渡す。気

のせいか、穏やかだった空は嵐の前の静けさを連想させた。眼下ではアイドルマスター課のスタッフがIDOLの間を駆け抜けて行く。これは来たみたいね。率直な感想はおそらく的中だろうと予測しながら、コックピット横に接続された仮設タラップを数段飛ばしで駆け下りて走り出す。有事の際、アイドルマスターは管制室としての役割を備えたトレーラーへ集合するように指示を受けてあるのだ。とにかく状況の確認が最優先事項だと決定。

「千早ちゃん！」

行き交う職員の中で春香と並ぶ。二人とも無言で頷いて、白い息を吐きながら指定のトレーラーを見つけると、たんつと小気味のよい音ステップを踏んで乗り込んだ。

トレーラーの中は暗く、長方形の空間に所狭しと機材が並べられている。本当に簡易的なあしらえで、少々詰めてようやくマスター全員を含む職員が数名、入れる程度の広さだ。車両の中だと思えば十分広いのだろうが、やはり窮屈である。

すでにマスターの何人かは集合している。小鳥を始めとするオペレーター一同は、状況の確認のためコンソールに指を走らせていた。一息、走って荒れた呼吸を沈めるために深呼吸して、

「状況は!？」

背後、飛び込んできた宙の声に振り返った。自分達と同じように走ってきたのだろう、息を整えながらこちらに視線を向けてくる。私も今来たばかりで、と口を開いたと同時に、宙の後ろから乗り込んできたあずさと美希を見て、無意識に口を閉じた。

一緒にいたんだ。きゅつと胸が締め付けられるような幻痛。馬鹿な、宙はあずさんを探していたのだから、一緒にいたのはすごく自然なことでしょう? 自分に言い聞かせる行動が、千早にはひどく滑稽に思えてしまった。じゃあ何で美希も一緒にいるの? と思えてしまう辺り、もう病的だ。

律子の言葉を思い出す。恋の一つや二つ。これが例え恋だとしても、こんなに苦しいならば私はいらないと。千早は頭を抱え

てその場に蹲りたかった。何でこんな大変な状況で、自分はこんな
悩みに振り回されなければならぬのだらう。

葛藤が表に出ているのだらうか。トレーラーの中へと入ってきた
宙は、千早の様子がおかしいことに気づいて、何気なく言葉をかけ
た。おい、大丈夫か如月。その声が耳朶を打って、余計心の中が掻
き乱される。ああ、なんて、苦しい。

宙が千早に手を伸ばして。肩に感触として確かめた時、千早は考
えるより早く動いていた。

「いやっ！」

強かな音が部屋に木霊する。その場にいた全員が、何事かと千早
と宙の方を向いて。あれほど忙しなかった部屋の空気が凍りついた
ように静止する。

「……痛」

呆然と、搾り出すような小さな声を漏らす宙。払われた手はわず
かに赤くなっていて、叩いた本人の手にも打った感触が強く残って
いる。その行為に誰よりも驚いたのは、他ならぬ千早自身であった。
私は今何をしたの、何をしてしまったの？ 加熱した思考がよう
やく冷静さを取り戻してきて、千早は様々な感情の入り混じった何
とも言い難い表情を浮かべた。例えるならば、まるで親に叱られた
子供のような、泣きそうな表情。

「違うの宙、私……」

「どうかしたのですか？」

各部署に指示を下していたジョゼフが問い質す。千早は何も言え
ずに、腹の辺りで手を組んで俯き、時間が巻き戻ってくれるならど
んなにありがたいか、などとらしくない自分の思考に歯噛みして。

沈黙を打ち破り質問に答えたのは宙だった。叩かれた手を軽く振
って見せて、

「いや、全然何でもないさ、うん。それより状況は？」

「ええ、どうやら、あまり時間がないようです。設営したリーダー
がIDOLと思わしき未確認物体の接近を捉えています。嫌な予想

が当たりました、おそろくトウリアビータでしょう」

「……あれじゃないのか」

「……？ いや、とにかく事態は急を要します。敵もヒエムスの存在を嗅ぎつけたと見てまず間違いありません。我々はトウリアビータよりも早く、ヒエムスを回収しなくてはなりません。もし敵の手にヒエムスが渡れば、今まで築いてきたパワーバランスが壊れかねません。それだけは何としても避けねば」

事の重要性は全員が把握している。皆、一様に頷き、ジョゼフの指示を待つ。

「IDOL四機はすぐに出撃。敵IDOLを足止めしつつヒエムスの回収を行います。ヴェルトール、インベルのマスターは固定。ネーブラには水瀬さん、高槻さん。テンペスターには星井さん、秋月さんが。残りのマスターはこちらに残りバックアップ支援をよろしくお願いします。さあ、全力で行きましょう！」

その後の行動は迅速だ。マスター達の搭乗を待つIDOLの元へと駆け、胡乱としたままの千早も春香に背を押されインベルへと向かう。

「出すで、もたもたすんなや！」

整備班長の怒声を聞きながら、千早はIDOL横の仮設タラップに足を踏み出し。その脇を通って行く宙を思わず呼び止めた。

「さつきはごめんなさい」

「いや、悪いのは俺だった。……少し前までの自分を忘れていた」
人に触れられるのを極端に嫌がっていた宙。自分からそれをやってしまったら、拒否されても仕方がない。

「違う、それは違うの！」

次の言葉を紡ぐ前に宙はIDOL達の影に消えてしまった。これ以上その場に止まるわけにもいかず、コックピットへとタラップを踏み鳴らす。今は緊急事態。集中するのだ。任務に集中している間だけは、きつとこのどうしようもない悩みから開放されるに違いない。それだけが千早にとって大きな救いであった。

「今は、目の前のことだけを考えなくては……！」

サブパイロット席に腰を下ろし、全てのステータスを確認。
オールクリア。出撃準備完了。

全IDOLに向けられた小鳥からの通信を開く。

『皆、よく聞いて。私達はポイントを特定されないようにこの場を離れる。とにかく空に上がって！ 指示は追って出すわ！』

「了解！」

インベルを固定していたワイヤーが全て取り外され、整備班の退去を確認した後、素早く慣性制御を作動させる。春香とのアイコンタクトは一瞬。春香がフットペダルを踏み込み、千早は細かい制御を行って、インベルは雪の粉を撒き散らしながら浮上を開始する。

飛び上がる機体は四体。迫り来る敵に立ち向かうため、インベルは天高く蒼穹を切り裂いて発進した。

「インベル、アクトオン！！」

上空、青いペンキをぶちまけた様な空に、バーニアの轟音を響かせながらヴェルトールは舞い上がった。コックピットで操縦桿を握る宙とあずさは、同様に上昇して来たIDOL達を確認して、すぐさま送信されてくる情報を確認する。

グリムス山を中心とした周囲には高い山もなく、延々と雪原が広がっているだけだ。地上はクレバスや多少の起伏が見受けられるものの、空中で戦う分には障害物もなく見晴らしが良い。これはある意味、“奴”を相手にするには不利だと宙は思った。正面からのぶつかり合いならば実力的に分が悪い。

奴　ヌービウムリコリスは必ずやって来る。人工IDOLであるエピメテウスだけでは、四機のIDOLを相手に戦力不足なのは、相手だって重々承知しているはず。ましてやコアを巡る戦いともなれば、トゥリアビータは総力を結集して戦いを挑んでくるだろ

う。それ故に。リコリスは必ず宙の前に現れる。

言い知れぬ不安を生み出していたあの映像は、しかし空に上がって薄れてきていた。ヴェルトールの中にいることと、何よりこれから挑む戦いへの緊張が、それ以上のことを考える余裕を拭い去っているからだ。深呼吸一つ、モニターを通して前方を見据える。

『九時の方向、敵機を複数確認！……なんて数なの。四〇、いえ五〇！』

小鳥の言う通り、ヴェルトールのレーダーにも無数の赤い点が、画面を埋め尽くさんばかりに表示されていた。少なくとも、宙はここまで大規模な軍勢を見たことがない。トゥリアビータもそれだけ本気だということか。

その中から、異常な速度で突出してくる機体が一機。ああ、来ると思ってたよ！ あずさが表示された情報を読み上げて、案の定、プロメテウス3・ヌービウムだと断定。

開いた通信から、小鳥が告げる。

『よく聞いて。予想通り、トゥリアビータもかなりの戦力を投入してきたわ。事前に説明した作戦に変更はなし。数に物を言わせた強行突破が予想されるけど、この戦闘の勝利条件はあくまでヒエムスの回収。それを忘れないで』

今回は相手も相応の戦力を投入してくることを予想し、四機のI DOLを分散させる作戦が執られていた。

一機が殿を務めて敵戦力を足止めし、そこをフロントラインとして戦線を展開。他三機はグリムス山に向かいつつ、一定距離を空けて一機ずつが防衛ラインを構築。最終的に残った一機がグリムス山に突入、コアを回収する流れとなっていた。

二重三重の防衛線を張ることで時間を稼ぎ、トゥリアビータよりも先にコアを回収する。数で劣るも、勝利条件が明確になっている条件下だからこそ可能な作戦だった。相手とまともに戦う必要性はないのだ。

そういう理由から、最も多くの敵を引きつけることになる殿は、

実力的に認められた春香と千早「インベルが任されていた。つまり、先行して来るヌービウムとぶつかるのもまた、インベルということになる。」

宙はわずかに逡巡した。操縦桿を握る手に汗の感触。意を決して、口を開く。

「あずさん」

「……やっぱり宙さんも男の子なんですねえ」

ところが。あずさは宙の言葉を予測していたのか、仕方がないです、と先回りして言った。呆れたように吐息して微笑を向けてくる。全部承知しているとわんばかりだ。宙は面食らって呆然としたが、少しして、敵わないと頭を掻いた。

内心で吐露する。この人がパートナーで良かった、と。

礼は言わない。口にしなくても、もう伝わっていると信じているから。

次の瞬間、宙はヴェルトールの脚部バーニアを吹かし、インベルの前に飛び出した。そして声高らかにこう言った。

「ヌービウムの相手は“俺達”でやらせてもらう！」

正面切つての宣言。それは必然的に、最も多くを相手取る殿を務めるということに他ならない。誰もが目を白黒させて、次の瞬間小鳥が否定の言葉を発した。

『この土壇場で何を言っているの！ この配置は、作戦の成功率が最も高いと踏んで決定したものよ。そう簡単に変えられるものじゃないわ』

「分かってる。けど、俺はどうしてもヌービウムと決着をつけなくちゃならないんだ」

『この馬鹿！ ヌービウムの実力はあんたが一番思い知ってるでしょうが！ どういうつもりか説明をしなさいよ、説明を！』

伊織の怒声が飛んできて、全員が一様に頷いた。説明を求めている。

ヌービウムと戦う理由。それはケジメのためだった。

宙にとって、ヌービウムはトゥリアビータとしての象徴だ。そして復讐を誓って戦い敗れ続けてきた、越えるべき壁の具現でもある。天川宙は決意を新たにした。仲間を信じるといふ決意を。その決意を掲げた今、迫り来る宿敵に対し、背を向けたくはなかった。奴に背を向けるのは、過去の自分から逃げてるように思えたからだ。

ヌービウムに立ち向かい、過去の自分を払拭する。宙にとってその行為は、避けられない通過儀式であった。ヴェルツールに乗って戦う以上、いずれ白黒を決めなくてはいけないのなら、決意を新たにした今しかあるまい。

この戦いは、“ここ”にいるための覚悟を試す試練でもあるのだから。

なにより、ヌービウムを駆るリコリスも同じように思っているはずだ。天川マツリと何らかの接点を持っている彼女とは、奇妙な巡り合わせの下、戦う運命にあるのだから。

葛藤を全員に理解してもらおうとは思わない。それはむしのいい考えである。それでも、

「頼む。俺にチャンスをくれないか！」

すでに懇願となった宙の声に、わずかな時間の空白が生まれる。もう時間もない。

『……宙、勝算はあるの？』

沈黙を破って、千早が問うた。

『ヌービウムの存在は、この作戦の成否を左右するわ。殿を務めるということとは、確実にヌービウムを足止めする責任を持つということよ。できるの？』

「できる」

『根拠は？』

「俺は一人で戦うわけじゃない。あずさんも一緒だ。きっと勝てる」

溜息が聞こえた。千早だけではない。通信を聞いていた全員から漏れていた。さすがに根拠になっていないか。宙が苦々しい表情を

作ると同時。

千早は重々しい口調で言った。

『小鳥さん、私は、チームの和を乱すような人に後ろを任せられません。こんな心配をするくらいなら、私達がコアの回収に向かいます。構わないわよね、春香』

『私もそう思うよ。まったく、宙のわがままにも困ったものだなあ』
わざとらしい様子の春香。声は連鎖する。

『まっ、それもそうね。万年ビリで足手まといのフォローをするのも、先輩としての役目かしら。やよいもそう思わない？』

『うん、後は私達に任せてください！』

『はあ……。まったく、これだから馬鹿な奴は』

『ハニーはインベルがコアを回収できるように、しっかり時間を稼ぐんだよ？』

『おまえら……』

伊織もやよいも、律子の美希も、そう言ってくれた。ケジメをつける。因縁を叩き壊せと。彼女達の声が、後押しとなって宙の背中を押してくれる。その心地のなんと優しいことか。自分は皆に支えられて空を飛ばたい。その事実を、改めて実感した。

始終だんまりを貫いていた作戦責任者であるジョゼフは、マスター達の様子に、

『……仕方がありませんね、待機しているマスター達の意見も同じようです。ああ、音無さん、そう睨まないでください。多数決では我々の負けですよ。それに私も男ですからね、男には立ち向かわなければならぬ時があることくらい分かりますよ。ただし、その代わり。宙さん、あずささん、その任務を必ずやり遂げることが出来ますね？』

最終決断。その意思を、皆に示せ天川宙。

「ああ、必ず勝つー！」

ならば言うことはない。それは全員の総意であった。

さあ、舞台は整った。

レーダーを確認。いや、もはやモニターを通して肉眼で確認できる小さな点。見る見る近づいてくるそれは、人型のシルエットを瞳に刻みつけた。死神の如く黒い機体。トラウマを刺激し、恐怖心を駆り立てる重圧。ヌービウム。

あずさが頷き一つ、いつでも行けますと万全の状態を整える。

「皆、行ってくれ！　ヌービウムは必ず倒す！」

『当ったり前！　見せ場は譲ってあげる。雑魚は任せなさい！』

「お言葉に甘えさせてもらうさ、水瀬」

その一言を契機に、三機のIDOLはヴェルツールに背を向けて、ロケットノズルを全力点火させる。細かい指示が小鳥から伝わって、全ての事項は決定されたのだった。

『作戦開始！　皆さんの奮闘を期待します』

ジヨゼフの宣言が始まりの合図。

今ここに、ヒエムスを巡る戦いの火蓋が切って落とされた。

『信じてるわ、宙』

「その信頼に応えるさ」

インベルとヴェルツールが交差する間際、お互いを画面の向こうに認識した宙と千早は、ただ一言交わして分かれた。それ以上は、お互いにはもはや不要。インベルが過ぎ去った次の瞬間には、宙は自らのやるべきことへと意識を向けている。

そこはすでに戦場。

「ヌービウム、来ます！」

刹那、大気を裂いて白線を引きながら飛来したヌービウムは、何の躊躇もなくヴェルツールへと体当たりを慣行した。重力殻を纏ったIDOLの攻撃は、下手をすれば山の一つも抉り飛ばす。そんな一撃を躊躇いなく放ってくる相手も相手なら、それを真つ向から受け止めようと構えた宙もまた尋常ではない。

轟音を響かせ、重力殻をぶつけ合いながら、ついに二機は接触する。音速に近い速度で飛来したヌービウムは、加速の重さおも武器にヴェルツールに突撃。一瞬、互いを押し合い拮抗し、一拍置いて、

弾かれるように両者は間を開けた。

「ぐっ、初撃からいきなり重い……！」

衝撃が、慣性制御で保護されたコックピットにも十分に伝播する。凄まじい威力は、IDOLの持ち得る戦闘力を存分に物語っていた。強敵なのは最初から知れたこと。この程度で驚いては始まらない。操縦桿を握る手に力を込め、宙は眼前で滞空しているヌービームを睨みつける。

向き合う黒と黒。睨み合っただけで、「彼女」の声は届いた。

「しばらくぶりね、天川宙」

「リコリス！ 待ってたぜえ、あんたが来るのを！」

「それは良かったわ。じゃあ、もう話し合いはいらさないわよね？」

「ああ、俺達の交わすべき言葉は闘いの中だけにある刹那的なものだろうが」

「そういう男っぽい青春とは、無縁のものだと思っていたけれど。」

「やっぱり私達は、運命の赤い糸で結ばれているのかしらね」

「はっ、冗談」

そして無言。ちりちりと、まるで闘気が具現化したかのように、空気が異様に胎動を開始する。

状況を確認。宙とあずさの役目は、ここでヌービームを足止めすること。否、勝つこと。その間に他のIDOLはグリムス山に向かい、ヒエムスのコアを回収する。失敗は許されず、どちらがヒエムスを手に入れても、モンデンキントとトゥリアビータの力関係は姿を大きく変えることになる。天下分け目の戦い。

果たしてそれは、現状を強固にする無敵の盾となるか。

または、停滞した今を破壊する滅びの剣となるか。

全てはこの戦いで決まる。

『つまりここが』

「天王山……！」

瞬間、ヴェルトールとヌービウムは互いの拳を激突させた。
バトル、スタート。

第十一話 ヒエムス争奪大決戦 / t r u s t y o u

第十一話 ヒエムス争奪大決戦 / t r u s t y o u

拳の激突は、接触点を中心に重力異常を発生させた。強力な慣性制御による重力殻同士との接触だ。力の方向性を極限まで外に向けて放出する二機の攻撃は、周囲の空間に歪みを与え、無色の衝撃は空に迸り、拡散する。

ヴェルトールとヌービウム。黒い装甲を携えた二機は、退けば命はないとばかりに拳をぶつけ合う。関節部は軋み、小刻みに震える腕部を庇いもせず。

まさしく背水の陣の心構えで立ち向かう宙は、ヴェルトールのコックピットの中で、突き出した操縦桿を必死に支えていた。負けて堪るか！ 言霊を吐き出し、それを宣言として、宙は決して退かなかった。

だがしかし、ヌービウムはあろうことが、もう片方の腕でヴェルトールの拳ごと掴みにかかる。重力殻同士が侵食し合う境界に手を出せば、下手をすれば装甲が耐え切れず、千切れかねないというのに。紫電が散る中に腕を突っ込むヌービウム。よく見ると、腕部の周りは高度な慣性制御で保護されているのが分かった。

ヌービウムは、ずぶりっ、とヴェルトールの重力殻を食い破って腕部を掴む。自分の腕を掴まれたような錯覚。

宙は息を呑む。やばいっ！ と感じた瞬間にはすでに遅い。ヌービウムは、ぐいっつとヴェルトールの腕を上方へ引っ張ると、がら空きになった胸部に鋭いパンチを二、三発叩き込み、フィニッシュと言わんばかりに足蹴りを、ジェットノズルの口をヴェルトールに向けて力の限り突き込んだ。その一撃、無双を誇る槍の如く。

鋼の碎ける、拉げる音。

身体を折り曲げながら吹き飛んで行く黒の巨影。軽く舌打ちしながら、宙はなんとか体勢を制御、地面に叩きつけられる前に空中で停止する。

「装甲負担率上昇！ ですが、まだいけます」

「やっぱ一筋縄でいく相手じゃないか、初っ端からやってくれる。

……不足はないさ！」

接近戦は完全にスキル負け。いや、反射速度を初めとしてあらゆる能力で上を行かれている事実。認めないわけにはいかなかった。

天を仰ぎ見た先に、威風堂々とこちらを見下ろすヌービウム。その天地の距離が両者の実力差だと言わんばかりだ。なんて大きい差だろうか。

けれど、こうも思う。なんて小さい差だろうか。

初めて出会った時に感じた距離感すら掴めない圧倒的実力差。それが今はどうだ。こうして真正面から対峙して、冷静に戦えている。天国と地獄などという、もはや概念的な表現しかできなかったものが、同じ現実的な舞台上で向き合っている。それを考えれば、その差のなんと小さいことが。

いずれは手が届く。リコリスの実力と同等の位まで。そう確信できるほどの位置まで自分は迫っている。宙は自然と笑みが零れていた。強敵への恐怖を押し退けて顕現する、己の成長に対する確信と戦いへの高揚感。不謹慎だと分かっている、この喜びを止めることはできない。心に余裕のなかった以前ならば、こんな気持ちにはならなかっただろう。

あずさは、宙さんも男の子なんですな、と言ってヌービウムと戦うことを承諾してくれた。たぶんその通りなのだろう。自分は男だから、こんなにも熱い、緊張感に満ちた戦いが嬉しくて堪らないのだ。早くも流れた汗が頬を伝う。荒れた呼吸が酸素を求めて喘ぐ。なんとという快感。

負ける気がしない。現在の自分は、かつてのどんな局面より強いからだ。この背を押してくれる決意がある。必ず勝つという約束

もある。そして、隣で自分と一緒に戦ってくれる大事な人がいる。見てみる、この状況のどこに敗北する要因があるというのだ。そう、もう自分は一人ではない。

過去と向き合う覚悟を決めて。仲間がいて、信じる人達がいる。

……だから今の俺は、強い！

さあ、相棒。共に勝利をこの手に。

宙の想いに応え、ヴェルトールのカメラアイが力強く発光した。機械の瞳が緑光を放ち、駆動音が雄叫びをあげる。操縦桿を引き、動きとシンクロして構えを取るヴェルトール。

「……まるで別人ね。何が坊やをそこまで変えたのかしら？」

「この戦いに勝ったら教えてやるって言うのはどうだ？」

『あら残念。なら勝敗は目に見えているもの、今教えてくれても問題ないと思うけど』

「その余裕、今から焦りに変えてやる！」

リコリスとの応答はわずか。宙はモニターに表示されるステータスをざっと確認。装甲負担率はまだ問題ない。各駆動系も、寒冷用装備のおかげで良好だ。ヴェルトールはこれ以上ないほど調子が良いと言える。ならば、あとはマスターの采配で如何なるようにも変わってくれるはず。

ヌービウムは慣性制御による瞬間加速。距離を詰め、右拳を豪快に振るう敵に対し、宙はヴェルトールを屈ませそれを回避。腰部に装備されているウィングスラスタを前方に向けて噴き、後方に下がって距離を取る。

瞬時の攻防。やはり実力はリコリスの方が上手。

「近接戦闘は分が悪い……！」

「私もそう思います。春香ちゃん達くらい動ければ話も変わると思いますが。私達にはまだ無理がありますし……。あれを試してみますか？」

「出し惜しみはできないよな」

頷き一つ。あずさはコンソールを操り、武装を選択。宙も合わせ

てトリガーを引く。

がこんっ、と音をたてて。ヴェルトールの背部にあるウエポンホルダーが動作する。両肩の装甲に被さるようにして迫り出たホルダーの口が開き、出番を待っていた強大な魔銃が目を覚ます。グリッブ展開。

ヴェルトールは五指でグリッブを握り 掌部の接続部とコネクト。動力供給良好。稼動状態良好 それを引き摺り出した。黒光りする銃身は陽光を反射して。銃口は巨狼の口腔に似ている。鋭利なフォルムは、存在そのものが獣の顎あぎとを連想させた。

二挺銃アルツアヒール。ヴェルトールの切り札にして、最強の威力を誇る、世界で唯一の慣性制御を用いた射撃兵器。

掌部に接続が確認されると、あずさはステータスを調整する。

一発でドロップを破砕するアルツアヒールの威力は確かに反則級だが、それに比例してエネルギー消費もまた甚大だ。コアから供給されるエネルギー量が如何に莫大でも、そう何発も撃てるものではない。

だが、その逆の発想もある。出力を出来る限り最小に。威力は下がるが、弾数を大幅に増やすことができる。試しに一発。宙はトリガーに指を掛け、モニターに表示される十字の照準をヌービウムに合わせで。

引き金を、絞る。

発射音は雷の進む音によく似ていた。刹那、アルツアヒールの銃口から無色の閃光が奔る。閃光はヌービウムに向かって一直線に駆け抜け、重力殻に牙を立てた。

「……………っ!?!」

息を呑むリコリス。重力殻が閃光を受け止めるが、ヌービウムはわずかに後方へ押されて、球状の重力殻の縁に沿って光が拡散していく。閃光が収縮した後にヌービウムは無傷で健在していたが、防御の要である重力殻は減衰したようだった。連続で数発当てることできれば、防御を突き破って直撃させられるかもしれない。

『驚いた、そんな使い方も覚えたの？』

「その声、あまり驚いたように聞こえないな。ちょっと癩だ」

言葉とは裏腹に、宙はよしと拳を握った。この威力ならば十分使える。クロスレンジはヌービアムの独壇場。だが、遠距離兵装のないIDOLが苦手とするアウトレンジからの攻撃ならば有効だろう。ヌービアムとヴェルトルの機動力はほぼ互角。なら、上手く立ち回ってヌービアムを懐に入れなければいい。

これは戦闘用IDOLとして作られたヴェルトルにのみ許された戦法だ。

『確かに、そこまで驚くことでもないかしら。だって当たらなければいいだけでしょう？』

「舐めるなっ！」

ヴェルトルとヌービアムはほぼ同時に動いた。ヌービアムは接近すべく頭部からの垂直降下。ヴェルトルは後方へ高速スライド、低空移動で距離を取る。弾丸となって襲い掛かって来るヌービアムに銃口を向け、トリガーを続けざまに引き絞った。轟雷一閃。複数
の無色光が奔る。

『その程度では見戯と変わらない！』

無数の銃撃を、しかしヌービアムは華麗に回避する。一撃目を最小限の動きでかわし、続けて飛来する二発目は、慣性制御で保護した腕を使って叩き消す。三発目、空中で横に一回転して見せてこれも回避。最後の機動は、もはや相手に見せつけるサービスでしかない。それほどまでの、余裕。

あつという間に詰められた天と地。振り被ったヌービアムの右腕は、全力で拳撃を叩き込まんと放たれた。

振りが速い。直撃コース。

「防御壁を展開します、出力最大！」

しかしこちらもただではやられない。両肩に装備された多重装甲バインダー。その能力である絶対防御壁を展開。装甲車に砲弾が撃ち込まれたかのような鈍く高い打撃音が木霊した。突撃、衝撃、拮

抗の三段階を経て、ヌービラムの攻撃が滑るように逸れる。

チャンス。IDOLが得意とする進行方向の瞬間的変更。ベクトルを一瞬にして曲げたヴェルトールは、まるで不可視の足場を蹴り飛ばしたかのように、上方へ向かって跳躍。

目標を見失った拳撃は容赦なく雪原に突き刺さった。あまりにも大きい衝撃に、降り積もった雪が空に向かって、大爆発しながらの大音量を響かせて舞い上がる。白い雪の結晶がきらきらと陽光を反射させながら、IDOLの全長を遥かに超える大きさの壁に雪柱となったのだ。雪柱は一時的にヌービラムの視界を塞いでしまった。

そう、それこそが宙の狙い。

「……………っ！ どこへ？」

見失った相手を探して右往左往するヌービラム。コックピット内、リコリスの瞳に映ったレーダーには、ヴェルトールを示す点が表示されていた。それは相手が自分の眼前にいることを告げている。目の前には、巨大な雪柱ができたばかりだ。

誤りではない。目の前に、宙はいる。

瞬間、最大出力のアルツァヒールが咆哮を放った。

それは壁と化した雪の向こう、反対側から射撃された。宙はヌービラムが地面を吹き飛ばした瞬間、回避と同時に盛り上がるように壁となった雪で姿を隠したのだ。行動は迅速である。ヌービラムと雪柱を挟んで直線状のポジションを取った宙は、レーダーを頼りに狙いを定め、あずさもアルツァヒールの出力を最大に設定。

この間十秒と経っていない。それこそ打ち合わせたような予定調和。

巨大な極光は雪柱を問答無用で突き破ってヌービラムへと着弾した。一瞬にして蒸発した雪が、どごんっ！ と爆発音を空気に伝播させて。がりがりとなービラムの重力殻を食い破って行く光は、まるで餌を貪るライオンの如き様相。

吐く。吐かなくてはやってられない。

完全に虚を突いた一撃だったというのに。まさしく必殺の一撃だったはずなのに。ヌービウムは堂々としてそこに在る。なんて奴だと乾いた笑みを浮かべる宙。余裕を焦りに変えてやると宣言したのに、あるうことが焦りを与えられたのはこちらだった。

『本当に驚いたわ。ええ、本当にすごいわ。ヌービウムが悲鳴をあげているもの』

リコリスの言葉通り、最大出力のアルツァヒールに、さすがのヌービウムも無傷とはいかなかったようだ。重力殻は完全に消失し、装甲表面の一部は溶けて拉げている。特にアルツァヒールを受け止めた右腕部は損傷が酷く、ばちばちと火花が散っていた。

リコリスは感嘆の声を漏らす。傷ついた右腕部を眺めながら、
『なるほど、私の動きは読まれていたのか。いや、攻撃を誘われていたのね。……これ以上ないほどの行動予測、ポジショニング、絶妙なタイミング。二人乗りだからこそできる業なのかしらね、それは』

リコリスの読み通り、必殺となるはずだった今の一撃は、宙とあずさが協力して初めて成せることだった。ヌービウムの動きを予測し、拳撃を誘い込むための機動、射撃角度までを弾き出したのは他でもないあずさである。宙はあずさが弾き出した予測を信じて、ただその通りに行動したに過ぎない。

ただ何の疑いもなく信じた。IDOLを直接動かす宙自身の直感を、あずさのサポートが裏付ける。それこそがヴェルトールの強さの正体。一人で戦うことをやめ、あずさを信じた宙の進化だ。

。そうだと。あのヌービウムに深手を与えたのだ。勝機は必ず。

『じゃあ、そろそろ本気を出してもいいかしら？』

刹那、空間が息苦しい重圧に包まれたのを肌で感じ取った。肌が

ざわめく。五感の全てが告げている。逃げろ、と。さもなければ後に続くのは。

宙は一瞬、無残にも転がるヴェルトルの残骸を幻視して、息を呑んだ。今のは錯覚、忘れるんだ天川宙。自分に言い聞かせて、嫌な汗が滲む。

ふと、サブパイロット席に座るあずさを見る。彼女もヌービラムの気迫に吞まれてしまったのか、怯えた表情で肩を震わせている。それでもあずさは、泣き言の一つも言わない。気丈にも立ち向かうとしていたその姿。

それどころか、宙の視線に気づくと、にこりと微笑んで見せたではないか。宙を安心させるための笑顔。そんな余裕などないはずなのに。

……馬鹿だ、俺は。自分だけが怖いわけじゃないのに。

宙は深呼吸して臆病な気持ちを追いつくと、あずさと顔を見合わせ、大丈夫だと頷いた。彼女の笑顔の温かさは、小さくなった勇気の灯火に油を注ぐ。燃え上がる闘志。

「勝てるさ、俺達は。不安な気持ちは二人で支え合おう」

「……ええ、少し怖いですけど。宙さんが、私を支えてくださいね？」

「ああ、信じ合ってそういうことだもんな」

眼前、悪魔の如き敵の姿。凶悪な刃染みた重圧に耐え、宙は立ち向かう。ヴェルトルは二挺銃を構えて、次なる激突に備えた。負けるわけにはいかない。両者の闘気がぶつかり合い、空気が震えているような気さえする。再度、その銃口を黒き悪魔へと向けた。

その時である。

『宙君、聞こえる？ トウリアビータの本隊がそつちに』
『音無さん？』

管制からの通信……だったと思う。スピーカーから流れた声は、しかしすぐにノイズに掻き消された。ざざあ、という砂嵐のような音。通信不良か？ と首を傾げた瞬間、モニターが前方の機影を映

し出していた。

トウリアビータの本隊である。無数の蒼いIDOLエピメテウスが、まるで空の一角を覆うように編隊を組んで飛行してくる。その集まりそのものが、一体の巨大な生き物のようだ。今まで見たこともない大部隊がこちらへ向かって来る。

その中に、宙は妙な機体を発見した。モニターを拡大表示して確認すると、その姿の全容が知れた。なんだ、こいつは。宙は思わず呟いた。得体の知れない悪寒が背筋を奔って、皆に知らさなくてはいけないという思考が渦巻いて意思を支配する。急いで他の機体への通信を開くと、とにかく全員に呼びかけた。

「皆、トウリアビータ本隊に妙な機体を見つけないか？…んっ！？」

声を遮って流れたノイズに、反射的に耳を塞いだ。ただの通信不良なんかじゃない。何か、何かがおかしな方向に向かっているように、一抹の不安が宙とあずさの心を蝕んでいった。

『余所見しているのかしら？』

リコリスの声で我に返った二人は、今は目の前のことに集中しようとする。今一番崖っぷちなのは、おそらく自分達なのだから。

ただ、もう少しで頭上を飛び去って行くであろう大群を相手にする仲間達に、どうか無事でいてくれてと願わずにはいらなかった。

『皆、トウリアビータ本隊に妙な』

宙からの通信は唐突だった。しかも最後まで言い切らぬうちに、妙な通信不良が声を遮ってしまった。ネーブラのコックピットの中で、伊織とやよいは顔を見合わせて、何事だろうと疑問する。通信を返しても、返事はない。

宙達は今まさにヌービウムと戦いを繰り広げているはずだ。あの強敵を相手にして、他に気を回す余裕があるとは思えないが。それほどまでに重要かつ緊急の要件があるのだろうか。少なくとも、只

事ではないことは確かだった。

「まさか撃墜されたんじゃない？……？」

自分で口にして、伊織はすぐさま首を振った。そんな馬鹿なことがあるわけないじゃない。あいつは私達に誓ったんだから、必ず勝つて。

宙は嘘を言わない。言ったことは、最後まで死に物狂いで果たそうとする根性の持ち主だ。そうだよ！ やよいも同意する。

初めて宙に会った時、なんだろうこの半端者は、と憤りを覚えた。伊織が芸能界を夢見るきっかけとなった、あの天川マツリの弟がこんな奴だなんて信じたくなくて、つい辛辣に当たってしまったが、彼は罵倒されて泣き寝入るような男ではなかった。だからこそ伊織は宙を認めている。倒れたら死んでも立ち上がる男、それが天川宙だと思っから。

そんな奴が簡単にやられて堪えるものか。あずさだつて一緒なのだから、大丈夫。きつとヌービウム相手に奮戦していることだろう。

だから今は考えない。途切れてしまった通信も、宙達の安否も、自分の役目を終えて、この作戦の全てが終わってから。作戦が終わったら、何気ない表情で二人と苦労を労い、ああ、何も心配なんてなかったんだと軽口を叩けるに決まっているんだから。

「やよい、ここから先は私達の意地に賭けて、一機たりとも通さないわよ！ いいわね？」

「うっうー、もちろんだよ！」

蒼穹の下、煙の立ち上るグリムス山を背景に、腕を組んで仁王立ちするネーブラの存在があった。その姿、あらゆるものを拒む鉄壁の如し。決して破られることのない無敵の盾が、まだ見えぬ大勢の敵をその双眸にて射抜いていた。

しばらく無言の時間が続いて

敵は来た。

「前方！ 前からたくさん反応！ いっぱい来るよ、伊織ちゃん！」
「雑魚が寄って集って。やってやるうじゃないの！」

リーダーが複数の飛行物体の接近を捉えた。次々とリーダーの範囲に入って来る赤い点は、その総数およそ五〇。確認できる限り、三つの編隊が隊列を組んでグリムス山へ向かっている。しかし残念だろうが、その進行上にはネーブラがいる。一機残らず叩き潰してやろう。

さあ、来きなさい！ 気合一発、打ち合わせた両拳から火花が飛び、ネーブラは向かって来る軍勢の、その先頭部隊に向かつて加速した。

邂逅は刹那、ネーブラを確認したエピメテウス達は爪状の腕部を伸ばし、群れを成して襲いかかる。

たかが人形が調子に乗るんじゃないわよ！ 叫んで、周囲に展開する重力殻を攻撃に転用。普段は身を守るための防御機構を、相手の装甲を破砕させる鈍器として、エピメテウスの胴体にストリートパンチを打ち込む。

圧力。圧倒。圧壊。

パイルバンカーよろしく、ネーブラの拳はいとも容易く敵の体を貫いた。

「もういつちよ！」

伊織は操縦桿を引き、ネーブラも動きに合わせて、腕に貫かれたままのエピメテウスを豪快にフルスイング。遠心力と慣性制御によって速度を加えられた残骸を、群がる雑魚共に向かつて投擲する。風を切る音は怒涛。腕から射出されたエピメテウスは、敵機の群れに突っ込んだ瞬間、衝撃に耐え切れず爆散した。

爆発は赤い花を連想させるほどに鮮やかだ。花卉の如く広がる爆発は、群れを成した鴉さながらに密集するエピメテウスを巻き込み、灼熱の風が地獄の番犬となって牙を剥く。

炎花が収まれば、前方にぽっかりとできた空間。風の去って行く音は、大量の敵を道連れに溶けて消えたのだった。

どうだ、思い知ったか。戦闘中にも関わらず、やよいとハイタッチを交わし、伊織は勝気な微笑を浮かべた。

トウリアビータの進軍が、止まる。数で圧倒していながら、たった一機を相手に前へ進むことができないでいる。その事実がその足を止めたのか。

『新しいお友達の遊び相手にはちょうどいいね』

大群の中から、幼い少女の声が響いたのはその時だった。

「伊織ちゃん、上！」

「……………っ!？」

瞬間、伊織は弾かれるようにネーブラを後退させた。フットペダルを蹴り込んで、飛び退ったネーブラのいた場所に、間一髪、弾丸の雨が降り注ぐ。冷気を切り裂いて発射された弾丸は頭上から、針の穴に糸を通す精巧さで放たれたものだ。やよいが少しでも気づくのに遅れていたら、間違いなく直撃していただろう。

……………ううん、重力殻に守られたIDOLに通常兵器は効かない。

その事実を思い出しつつ、伊織はネーブラの目を通して狙撃手に視線を向けた。

そこにいたのは、エピメテウスとは異なる特殊な形状をしたIDOLであった。

赤褐色の装甲は、量産型であるエピメテウスと一線を画す分かりやすい要素だ。オリジナルIDOLに比べて小型であるエピメテウスとは対照的に、そのサイズはむしろこちら側に近い。

だがデザインは異質で、全体的にずんぐりとしたシルエットに、右腕にはガトリング砲を彷彿とさせる長大な砲身が装備されている。背後には巨大なドラム缶状の筒が左右に一つずつ。それらに負けじと、鋼鉄の塊からそのまま切り出したかのような分厚い装甲版がボディを構築していた。

武器。伊織もやよいも、まずそこに疑問を抱いた。

IDOLとは隕石除去人型重機。兵器ではない。故に武器も持たない。例外的にテンペスターのような、対ドロップ用の小型レーザー砲台を装備することもあるが、あくまで試作的な代物であり、あそこまで貪欲に破壊を求めてはいない。

設計思想からそもそも違つたのだから。つまり、あれはヴェルトー
ルと同種の存在なのではないだろうか。伊織は目を細めた。

戦闘用IDOL。

「ヒドルン」に任せればここは十分だよね。 ネーブラー機な
ら、大した相手じゃないし。いいよね、ヒドルン？」

舐めきつた発言。伊織は額に青筋を浮かべたが、

「了解しました、リファ」

硬質的で人間味の欠けた声に言葉を失った。人が乗っている？

人員不足により、無人の人工IDOLを主としているトゥリアビー
タに限ってそれは在り得ない。

「伊織ちゃん、あのIDOL、やっぱり人が乗ってないよ」

ライフセンサーの返す反応にやよいは眉を潜めた。おそらく、あ
の声は合成音声なのだろう。

喋る人工IDOL。抑揚のない声に鳥肌立つ不快感を覚えて、耐
えるように右腕を左手で掴んだ。嫌な感じ、それに見下された態度
も気に食わない。不快はやがて怒りに変わって、すぐにでも奴等を
痛めつけてその見解は誤りだと教えてやりたかった。

「ヒドルン、頼んだよ。エピちゃんも何体か置いて行くから！」

「待ちなさい！ あんた、この伊織ちゃんにそんな態度して、ただ
で済むと思ってるの？」

声の主はどこだ。ネーブラを駆る伊織の前に、上空からヒドルン
が立ち塞がった。

「退きなさい！」

「それは不可能です。 出力を戦闘レベルまで上昇開始」

ネーブラを無視して、エピメテウスの大群は再び進軍を開始した。
駄目だ、行かせてはいけない。そもそもこの私を無視しようなんて
腹立たしいにもほどがある。

しかし、追跡しようとしたネーブラをヒドルンの銃撃が襲った。

ガトリング砲の砲身が回転。ドドドドッ！ というくぐもった発射
音が絶え間なく連続して、伊織は舌打ちしてどう行動するべきか考

える。

重力殻で守られている以上、ヒドルンの銃撃は意味を成さない。実弾、光学兵器を無効化するIDOL相手では、重力殻に干渉できる距離ならいざ知らず、有効的な攻撃を加えることはできないだろう。ここは無視してエピメテウスの数を減らすべきだ。やよいと頷き合い、伊織はヒドルンに背を向けて、先行する敵部隊へと目標を定めた。

吐き出され乱射される凶弾。重力殻が凶弾を防ぐ度に波打つような波紋を見せて。

そして唐突に、重力殻を貫いた。

「え、嘘っ!？」

背中に弾痕を穿たれ、小規模な爆発をあげるネーブラ。

もう少し上を狙われていたら、コックピットが蜂の巣になっていた。背骨に氷を詰め込まれたようなおぞましい震えが奔り、死んでいたかもしれない事実に見界がぐらりと歪んだ。

何が起こったのか。重力殻は正常に作動しているし、だがそれならばヒドルンの射撃を無効化できるはずだ。それが、貫通した。カラクリは不明だが、事実としてネーブラはヒドルンに向き合わざるを得なかった。砲口はネーブラを完全にロックしており、動けば発砲を許すこととなる。次に撃たれば、再び重力殻を超えてくるだろうか？

トウリアビータの本隊が遠ざかっていく。鉄壁を自負していたはずの防衛線が、たった一機の正体不明機に掻き乱されてしまった。先にはテンペスターがいるとはいえ、ここで止められなかったのは大きな痛手である。

とにかく、早くこいつをなんとかして、追わなければ。思考をヒドルンに集中。周囲にはヒドルンを囲んで数体のエピメテウスが浮遊している。手の内が明らかになっていない相手に、多勢に無勢は厳しいだろうが。

結局は全滅させるのだ、同時に相手にしてやろう。

「そつよ、あんた達の遊び相手をしてる暇なんてないんだから！
『目標、行動を開始。迎撃します』」

戦闘開始。ネーブラ「全力加速。ヒドルン」不動。代わりにガトリングの砲身が高速回転し、弾丸が射出の火炎を燃やししながら、ネーブラを狙って撃ち出された。

距離を詰めるネーブラは、ボディを軸線に一回転し、ヒドルンの斜めを横切る形で交差する。間合いへの侵入を頑なに拒む敵。苛立ち。腹いせにエピメテウスの一機を狙い加速に載せて蹴撃、頭部を潰しその反動を利用して勢いを殺す。

重装備故だろうか、ヒドルンの動きは緩慢だ。縦横無尽に空間を往くネーブラと違い、一箇所に留まって武器を斉射する戦闘スタイルは、頑強な要塞を思わせる。

……だからこそ、速度で圧倒するネーブラには当たらない！

本来ならば搭乗者の首を折る殺人的Gも、慣性制御で保護されたマスターは悠然とこなしてみせる。最新鋭戦闘機でも到底真似できない高速旋回、否、瞬間旋回でヒドルンの背後へと回ったネーブラは、死角から拳を突き入れる　！

「がぎいんっ！　という音を響かせて干渉し合う重力殻。」

「うっ、硬いですう！」

「ホント、なんて強度……！」

慣性制御を攻撃に転用すれば、エピメテウス程度なら防御の上からでも強引に捻り潰すこともできるのに、この重力殻ときたら、拳ごと跳ね返さんばかりの硬さだ。

「こうなったらもう一発サービス……！」

右腕に加え、左腕にも慣性制御を集中。両腕を振り被って一点集撃を打ち鳴らす。さすがのヒドルンもこれには堪えたか、ぎぎぎつと歪な音をたてて首だけで振り返るが、この状態では体勢を立て直すこともできまい。

このまま押し切る、と操縦桿を更に強く押し込んだ伊織は、

『ターゲットロック』

その黄色い単眼が、顔の中心で怪しく点滅したのに気づいた。

巨大なドラム缶と評した背部の筒の、表面装甲が縦から割れてスライドする。中から現れたのはびっしりと並べられた発射口。まさか、と伊織の表情が引き攣ったと同時に、発射口から大量のミサイルが上方に向かって射出された。白線を引いて太陽へと伸びるミサイル群。やがて、蠟の翼を折られたイカロスのように、ネーブラへと降り注いだ。

ガトリング砲の件もある。ミサイルにも特殊加工が施されている可能性を考慮して、ネーブラは慣性制御を防御に回しながら回避行動に移った。なおも追いついてるミサイルに、空間ごと移動するような壮絶な機動。しかし何発かが重力殻に着弾する。

そこで伊織は妙なものを見た。ミサイルが爆発しないのだ。重力殻に拒まれているミサイルは、後部から火を噴きながら目標に迫ろうとして。本性を顕わにした。

ミサイルの先端部は凶暴な鳥類の嘴にも似た形状をしている。嘴の周囲が膺気楼の如く歪んだと思うと、重力殻に張り付いた無数のミサイルから先端部が射出された。勢い良く飛び出した先端部は重力殻をわずかに切り裂いて貫通。内部にほんの少し顔を覗かせた程度だったが、けれどそれだけで十分だった。

貫通した嘴は全て、内側で爆発してみせたのだから。

「細工が過ぎるわよ……！」

球状の防御膜である重力殻に守られているIDOLは、装甲そのものは情弱である。通常兵器に絶対的な優位性を持つIDOLだが、逆を言えば、重力殻がなければその防御性能は紙同然。ヒドルの装備している武器は、IDOLの優位性を打ち消すことに特化されているのだろうと、伊織は推測を立てる。

言つなれば対IDOL兵器。やはりヴェルトールと同種の機体で間違いない。

爆発がネーブラを飲み込み、駆け抜ける衝撃がコックピットを揺さぶる。地震の震源地に立っているかのような揺れに、否応なく呻

き声が漏れてしまう。レッドアラートがうるさく鳴り響き、現状が如何に危険かを告げていた。

装甲が砕け、ひび割れ、慣性制御すら失って地上に落下していくネーブラ。

「あの赤褐色の新型、私達にとって天敵同然じゃない！」

「装甲負担四〇パーセント超えます。伊織ちゃん、このままじゃ大変だよ！」

「そんなこと言われなくても！ ネーブラ、もう少しがんばって！」
落下する巨人は、伊織の激励に込めて再び重力殻を展開した。空中にて地に足を向け、ノズルを噴かせて落下から開放、尚も見舞われる銃弾の嵐の間を縫うように飛び抜ける。

状況は悪い方向へ転がり続けるばかりだ。今の攻撃で足の駆動系とノズルをやられてしまった。機動力は減少。推進力のほぼ全てを脚部に集中しているIDOLの構造上、複雑な動きも、あとどれくらい持つだろうか。

おまけに敵の数は一向に減らない。数体でゴリ押されたら、いくらネーブラとはいえひとたまりもないだろう

「本当に厄介な！」

前方、爪を振り上げたエピメテウスの顔面を力の限り殴り飛ばした伊織は、悪態を吐いてヒドルンを睨みつけた。弾丸のバーゲンセールとでも言うように惜しみない連射は、ネーブラをしつこく狙ってきている。とにかく奴に近づかなければ。ヴェルトールのように遠距離武装を持たないネーブラは、結局のところ近接戦に持ち込まなければ勝ち目がない。

もう悩んでいる暇はない。ならば、

「多少無茶してでも一撃当てる！ でしょ、伊織ちゃん？」

「ふんっ、その通りよ。ええ、こんなところで手を拱いてらんないのよ！ この伊織ちゃんを怒らせた罰、ちゃんと身体に刻んでもらうわよメタボIDOL!!！」

伊織は自分と敵の位置をレーダーで確認。手短な二体に目星を付

けると、その唇をにやりと歪ませた。その場に宙がいたらこう言うただろう。小悪魔の微笑み、と。

回数制限付きとなった全力機動を使ってエピメテウスの一機に肉薄。頭部を潰して戦闘力を奪うと、続けてもう一機エピメテウスを捕獲。捕獲した機体を両手で掲げると、ネーブラはそのまま、ヒドルンに向かってノズルを全力噴射した。ゴオッ！と巨体が風を切る。

弾丸がネーブラを仕留めんと連射されるが、放たれた攻撃は全てエピメテウスの盾に阻まれて当の目標には届かない。射撃に晒されて四肢を跳ね続けるエピメテウスが哀れに思えてくるほど、容赦なく使い捨てる伊織は、もはや小悪魔どころか悪魔の如き悪役染みた形相を浮かべてフットペダルを踏み続ける。

「伊織ちゃんやり過ぎだよー！」

「あはははははははは、この伊織ちゃんに楯突こうなんて百億年早いのよー！」

ハイなマスターはさておき、伊織の取った行動は、実はかなり有効な手段であった。

ヒドルンの有する対IDOL兵器は、重力殻を無効化するという点において絶大な効果を発揮しているが、それ以外は通常兵器となんら変わりはない。ガトリング砲から吐き出される弾丸の威力では、エピメテウスを貫いてネーブラにダメージを与えるほどには至らないのである。

片方、もうズタボロで使い物にならないエピメテウスを、ポイ捨てよろしく投げ捨てたネーブラ相手に、ヒドルンは背部のミサイルを発射した。

ミサイルの破壊力ならばエピメテウス諸共粉々にできると踏んだのだ。重力殻に頼れないネーブラはともかく、ヒドルンは己の重力殻により無傷で済む。その時点で、ヒドルンはそう判断していた。

距離が近い。その不安要素だけを残して。

ミサイル、ネーブラの眼前に迫る。

「これだけ近ければ十分よ！」

惚れ惚れするほど綺麗な投球フォーム。片手に残ったエピメテウスを、ミサイルが集中する地点に向かって大きく振り被って投げた。本日二度目のエピメテウス投擲の記録は、複数のミサイルを空中で爆発させることに成功した。爆発は連鎖的に繋がり、巨大な火の大輪を咲かせてネーブラとヒドルンの間を赤く染め上げる。

これで良い。この至近距離の爆発は、しかしヒドルンを倒すには至らないだろう。だが爆発させた目的は直接的なダメージにあらず。ネーブラのリーダーは、爆炎の影響で一時的に使用不可になっている。視界は塞がれ、熱源探知も炎熱で誤魔化されている。

条件は相手も同じはずだ。例えばヒドルンが無人機であろうと、両機はわずかの間相手の位置を知る術を失った。

ここからは賭けだ。伊織はヒドルンの正面　だと思わしき方向に向かつてネーブラを進行させた。爆炎の中を突っ切り、ヒドルンに奇襲を仕掛けることができればこちらの勝ち。もし失敗したら、盾を失ったネーブラは蜂の巣だ。

運命も未来も天のみぞ知ると言うが、伊織はそれが大嫌いだった。神様とやらは知っていて自分は知らない明日なんて、そんなものは自分のものじゃない。己の運命も未来も、自分の努力で掴んでこそ意味を成す。故に、伊織は神頼みなんかしない。直感を信じて、ただ勝つことに自分の誇りを賭けて爆炎を裂いて進む。

一瞬、ぶわっ！　と空気が弾けて、爆発の境界を抜けた。果たして、賭けは　。

目の前、“標的を見失って無防備となった”ヒドルンの姿がある。

「勝った！！」

勝ち鬨をあげて両腕を広げるネーブラに、少し遅れてヒドルンが反応する。だがもう間に合わない。速度を落とさずヒドルンに突撃した伊織は、ネーブラの装甲が軋む音を聴きながらも、ジェットノ

ズルを全力噴射。敵を抱きかかえたまま、地面に向かって急降下する。

雪に覆われた大地が見る見る内に迫った。それでも決して怯みはしない。視界に広がる大地と接触する数秒前、伊織とやよいは、衝撃に備えて歯を食い縛り、次の瞬間。

積雪を巻き上げながら鈍音を響かせて、二機は白い地上へ落下した。

わずかな空白。最初に動いたのは、ネーブラだ。ヒドルンを下にして激突したため、衝撃はあちらの方が絶大的に大きい。ヒドルンを上から踏みつける形でマウントポジションを取ったネーブラは、慣性制御を右腕に集中。IDOLが持つ一撃必殺の技法「トリークハイトブレッツヒャー」を放たんと狙いを定めた。

ヒドルンは墜落の衝撃と、ネーブラに踏みつけられていることでもともに動けない。右腕のガトリング砲もさることながら、ミサイルポッドもここまで密接した状況では諸刃の剣だ。

これで勝利。伊織はそう確信した。そして。

『胸部装甲、開放』

情緒の欠片もない機械的な音声と共に、まさに狙いを定めていたヒドルンの胸部装甲が変形、スライドし、その奥から四角い“銃口”を覗かせた。

伊織はそれを知っている。だって、これは。

それは銃口周辺を歪ませると、無色の重力塊を生み出して、

「嘘っ……アルツアヒール!？」

刹那、滅びの雷が地から天に向かって落ち、二機を飲み込んで周囲が爆散した。

第十二話 ヒエムス争奪大決戦／三騎士の強襲

第十二話 ヒエムス争奪大決戦／三騎士の強襲

第三防衛ライン。グリムス山の麓が一望できるこの場所は、すでに無数のエピメテウスと新型人工IDOLによって崩されつつあった。敵の一部は防衛ラインを抜けており、先行するインベルに追いつかんとしているだろう。インベルと敵部隊が接触するのも、もはや時間も問題だ。

ここを死守しているのは、赤き装甲を身に纏うIDOLテンペスターである。

先に開発された三体のプロメテウスシリーズを元に造られた四番機。様々な新技術を試験的に導入した最新鋭機であり、他の機体に比べて外見も一新されている。

IDOLとしての基本構造に変化はないものの、腕は極厚のプレート状で五指はなく。本来推進器を搭載している脚部も、縦長い噴射口の新型スラスタに変更されていた。

特筆すべきは、浮遊する形で付随する二門のレーザー砲台だ。慣性制御を利用してテンペスターの周りに浮かび、ドロップ迎撃の際に邪魔な破片やデブリを破壊するために用いられる。威力は申し分なく、重力殻を中和できる距離ならば、IDOLに対してダメージを与えることも可能である。

現在のマスターは星井美希と秋月律子。

群れを成して襲いかかるエピメテウスに、メインパイロットを務める美希は鋭い眼差しで一瞥。フットペダルを蹴り込み、操縦桿を振り回すように後ろへ回すと、応じてテンペスターが背後に迫った敵を裏拳で吹き飛ばし、二機の砲台を操る律子がそこに照準を定め、これを撃破する。

「数が減らない……！」

戦況は芳しくなかった。単純な戦闘能力だけならば、最新鋭機であるテンペスタースはそれこそずば抜けている。しかし相手は数を武器として強引に押し切ってくるため、翻弄されてしまうのだ。

いや、敵がエピメテウスだけならばこつても悪い展開にはならなかっただろう。問題は、

「美希、上からまた“あいつ”が来る！」

「もう！ 本当にしつこいの！」

上方、太陽の逆光を受けて飛来するのは金色の影。

明らかに軽量化を目的とした細身のボディを、背中と両肩に設けられた大型の高出力バーニアが常識を超えた速度で押し出す。その手に持つのは全長を優に超える巨大で分厚い鉄板。否、それは片刃の刀剣だ。あらゆるものを一刀両断する刃は、刀身に仕込まれたブースターを噴かせて音速を超える斬撃を放つ。

「斬」

ただ一言、抑揚のない機械音声。

ぶおんっ！ という空間を薙ぎ払う豪快な一太刀。間一髪で逃れたテンペスタースのいた場所は、大気が切り裂かれて突風が巻き起こり、重力異常が起こっているのか景色が歪んでいる。まるで縦一文に切り裂かれたような青空が、その威力を十二分に物語っていた。「……あの武器、何か細工が施してあるわね」

ただの斬撃が重力異常を起こすわけがない。慣性制御を転用した、対IDOL用の兵器であると律子は踏んでいた。

「新型の人工IDOL、だね」

美希が言って、二人は眼前の機体を注視した。既存のIDOLとはかけ離れた、掴んだだけで折れてしまいそうな華奢なボディは滑らかな曲線を描き、どこか女性的だ。異種的な姿のそれは、しかし間違いなくIDOLである。

「第二防衛ラインを突破して来たということは、ネーブラはやっぱり……」

「律子、悪い方向に考えたら駄目なの！ やよいとデコちゃんは無事なの！」

「“さん”を付けなさい！ “さん”を！ 私の方が入社暦も歳の上なんだから。でもそうね、皆無事なはずよね」

「そうだよ律子……さん。ハニーの通信って、こいつのことを知らせようとしたのかな？」

「そうかもしれないわね。今となっては通信不良で連絡も取れないし、確認のしようもないけど。せめて春香達の負担を減らすために、数を減らさないと！」

ここから火山の頂上はすぐだ。突破された数がそのまま、インベルが対峙する相手の数に直結する。ヒエムスの回収という繊細な作業を任されているインベルに、多数との戦闘は困難だ。これ以上、千早達の負担を増やすわけにはいかない。

それにはまず、敵の新型が邪魔だ。金色のIDOL。戦いの手応えから察するに、エピメテウスより数倍高い性能を有している。IDOLが本来持つことのない戦闘用の装備を有している点も凶悪だ。そして、

『我が斬撃を避けるか。なかなかやりおる。この“ヒスバルト”の相手には相応しい』

この人工IDOLは喋るのだ。搭乗者の反応がないことは調査済み。まるでオリジナルコアを持つIDOL達のように、自らの意思を持っていると言うのか。

「喋るIDOLなんて、あんた一体何者よ」

『貴公に語る口はもたぬ。ただ我は、強者にのみ従順する。更なる高み、強さを求める我は強き者に敬意を表する。騎士とはそういうものだ。貴公達が敬意を持つに値するのかどうか、我を打倒し、証明してみせよ！』

「騎士とか何とか、ずいぶん偉そうな奴ね！」

剣を上段に構え背部のバーニアを閃かせたヒスバルトに、テンペスタースもレーザー砲台で威嚇射撃を慣行。重力殻相手に効果が薄

いのは分かっているけど、近接距離ならば脅威にもなる。相手も理解しているのか、肩のバーニアを利用し三次元的な動きでこれを回避。姿勢制御が上手く、速い。まるで雷のような機動だ。

見た限り武器はあの刀剣のみ。驚異的な機動力による揺さ振りと接近、瞬間加速による音速に等しい斬撃がヒスバルトの戦闘スタイルだと思われる。周囲に群れるエピメテウスとの連携は怖いけど、テンペスターとてモンデンキントの最新鋭機。そう簡単に負けるようではアイドルマスターを名乗る資格はない。

律子はエピメテウスの位置関係を確認、把握。ヒスバルトを中心に陣形を布いた敵機の数はざっと十数体。

ここを突破して行った数を差し引けば、おそらくトゥリアビータの残存勢力はこれで全部だろう。ネーブラが奮戦してくれたのか、大いにその数を減らしたとはいえ、逆に言えば、

……私達は残存勢力の全てを相手にしなくちゃいけない、ってことよね。

気が重い。緊張の重圧が身体を苛む。だがしかし、やらねばならないのだ。

「律子……さん。緊張してたら身体が動かないの。もっとリラックスだよ？」

「そんなこと百も承知よ。……でもあんたは何とも思わない？ 通信の繋がらない宙達のこと。謎の騎士かぶれだって邪魔をしてくる。不安じゃないの？」

思わず口走ったネガティブな本音。けれど美希は、
「美希は平気だもん！ だってハニーがヌービウムと戦ってるの！ 辛いだろうけど、それでもハニーは戦ってるの。だから美希もがんばる！」

そう言っただけ、胸元で手の平をぎゅっと握った。不安に打ち負かされそうな自分が、馬鹿馬鹿しく思えてくるほど純粋な気持ちで。宙の姿を活力に変えて。

おそらく美希は、負けたらどうなるかだなんて考えていない。宙

ががんばっている。宙がヌービウムに勝とうとしているのなら自分も勝つのだ、と。好きな人の隣に立つには、それくらいの気概でないといけないのだということを、星井美希という少女はよく理解しているに違いない。

……千早、あなたのライバルは強敵よ？

ふう、と一息。眼鏡のフレームを指先で押し上げ、

「そうね、弱気な私が馬鹿だったわ。やるわよ、美希。サポートは任せなさい。私達の勝利条件は目の前の敵を全滅させること。いけるわね！」

「OKなの、律子！」

律子さん、でしょ！ という咎めの声と同時に、テンペスターは眼前のヒスバルトに向けて空を蹴った。突貫。瞬間加速は大気を破り、両者の距離を瞬時にゼロとする。特異な形状の腕部をヒスバルトに突き入れたテンペスターは、しかし構えた剣の腹で受け止められることになる。

ヒスバルトの反撃。ぱんっ、と小気味の良い音を鳴らして攻撃を弾くと、動かした腕の軌道を利用して剣を振り上げ、上段から真一門に振り下ろす。

律子の脳裏に選択肢が浮かぶ。受けるか、避けるか。

視界から得られる情報の中に、妖しく光るヒスバルトの刀身が、ふと過ぎった。

決断は即座。

「美希、重力殻で受けてはだめ！ 避けて！」

「えっ!？」

疑問の声とは裏腹に、美希はほぼ反射でフットペダルを蹴倒し、テンペスターは身を逸らすように後退する。その行為と、

『ぬん!』

剣の切っ先がテンペスターの胸先を掠るのは、わずか一秒と差はなかった。

機械のくせに気合の一声を込めた斬撃。重力殻に受け止められる

はずの一撃は、その防御圏に触れた途端、何事もないように通過した。壮絶な切断力は衰えることなく。避けていなければ、テンペスターは頭から真つ二つだったに違いない。

「やっぱりあの剣は重力殻に干渉する！」

振り下ろした剣を、ヒスバルトは流れる動作で刃を上。返す刃で振り上げる。切り裂かれた大気が突風となつて剣筋を描き、青空に三日月の軌道を映し出していた。その太刀筋の、なんと流麗なところか。間一髪、眼前を通り過ぎた三日月に、美希は汗が頬を伝って落ちるのを感じた。

あらゆる一撃が紙一重。わずかでも気を抜けば、斬られる。

再び、間合いを取る。迂闊に間合いに入れば危険だ。

剣を腰だめに構えたヒスバルトは、

『如何にも。この剣はIDOLを狩るための物。我のみに与えられた尊き誇りなり。刀身に高密度の重力場を形成し、我が俊足と慣性制御にて、あらゆる物を断ち切る無敵の剣よ。貴公達の脆弱な鎧など、紙切れ同然に切り裂いて見せようぞ』

種明かしすら厭わない。原理が理解できたところで防ぐこと敵わぬ、と。暗黙の自信が見え隠れしているようだった。

『だが、なかなかどうして』

ところがヒスバルトは思いもしない行動を取った。左の無手を軽く掲げると、周囲に取り巻いていたエピメテウスが、波のようにすつと後退したではないか。テンペスターとヒスバルトを囲み、まるでリングを思わせる陣形を形成する。

目を白黒させる律子達に、ヒスバルトは感情のない声で言う。

『貴公達は、量で攻め落とすには惜しい』

騎士の誇りが疼くのだ。故に、

『一騎打ちを申し込む！ 構えよ、赤き戦士よ！』

テンペスタース

「……な、なんですって？」

エピメテウス達が観客と化した中。さあ、いざ！ という様子のヒスバルトに、正直驚きを隠せなかった。畏だろつか。何らかの策

略があるに違いない。そう勘繰った律子に、痺れを切らしたヒスバルトは心中を明かす。

『案ずることはない。我は強さの果てを志す騎士。強者が相手となれば、一対一の決闘を望むのは自然な道理。そうでなければ、勝利の栄光は霞んでしまうものだからな。自らの力のみで貴公達に勝つ。それ以外の思惑など有りはしない』

「……ねえ、美希、なんだかこの人（？）が悪い人には思えないの……」

「あんた、よく生真面目とか頑固だつて言われない？」

ぬぬ、と言葉に詰まるヒスバルト。人間の表情ならば、きっと顔をしかめていることだろう。

『確かに、主人には堅物と呼ばれることも珍しくない。だが、それは我が決闘に関わることか。否だ。我が望むのは、死力を尽くし、互いに極限の状態で勝敗を決する戦。無用な詮索など意味はなし。さあ、炎の如く赤き戦士よ、よく聴け。我が名はヒスバルト、トゥリアビータが誇る無双の剣にして、最強の騎士。互いの誇りを賭け、いざ尋常に勝負！』

妙に熱苦しい口上を終え、ヒスバルトはテンペスターズに剣先を向ける。うわあ、古臭い。そんなこと言ったら怒るだろうなあ、と思った律子は、あれ、でも相手は人工IDOLだし？ うん、でもやっぱり怒るわよねえ。などと考えて、首を振った。いけないいけない、今は戦いに集中しなければ。

「その勝負、受けたなの！」

『よく言った赤き戦士よ！』

「なんで美希は乗り気なのよ！ あんた状況分かってる！？」

駄目だ、これ以上この雰囲気が続けたら場が締まらなくなる。本気で頭を抱えた律子に、美希は首を傾げて疑問する。あんたのせいよ！ と突っ込む気力すら惜しい。

けれど思いは杞憂だった。わずかな沈黙の後、背部のバーニアを噴かしたヒスバルトは、上空に向かって飛翔した。すぐに目で追う

が、そこに金色騎士の姿はなく。どこへ!? レーダーに飛びついた律子は、結果、敵がテンペスターの背後へ回りこんでいるのを知る。

なんとという速度。なんとという加速。一瞬にして敵の死角に回り込むその様は、まさしく一陣の風そのものだ。美希が操縦桿を動かすのより早く、律子はコンソールを操作。両肩に待機したレーザー砲台をヒスバルトにロック。

二門の砲台から放つ音は三度。間を置かず連続で放たれた光線は一直線に伸び、接近コースを塞いで交差する。高出力のレーザーは、アルツアヒールに及ばないまでも強力だ。重力殻があるとはいえ、装甲の薄いヒスバルトならばひとたまりもないだろう。

故にヒスバルトは一度距離を取らなくてはならない、はず。

『この程度で我を止めることができるものかつ!』

それでも騎士は止まらない。ヒスバルトは自分の正面で交差するレーザーの檻を、後退ではなく前進にて対応した。背部のバーニア出力を限界まで引き上げ、肩のバーニアで姿勢制御、左右高速スライドを可能とする。元来、三次元的な機動を得意とするIDOLが、更にその要素を強くすればどうなるか。想像に難くない。

ゴオンツ、と。大気の破裂する音を律子は聞いた。

加速したかと思えば次の瞬間墜落さながらに下へ避け、円を描いて天へと昇る。人が乗っていたのなら臓物を破裂させてもおかしくない。

ボデイをくねらせ、回転させ。まるで海を泳ぐイルカを連想させる、しなやかかつ豪快な軌道を描いて、ヒスバルトはレーザーを掻い潜る。否、あれはイルカなどではない。凶悪な牙を持った、獲物を狙う大鯨だ。

速度はまだ上昇する。全てのレーザーを回避すると、それまで軌道修正に使用していた肩のバーニアを後方へと向ける。極めつけには、ヒスバルトの誇る刀剣に内臓されたブースターが火を噴いた。加速に次ぐ加速。加速×加速×加速。

刹那、音は置き去りにされて。ついに大気の壁を越えた鮫は、音速となつてテンペスターズに襲い掛かった。

「っ！」

コックピット内、美希と律子に言葉の交換はない。そんな暇などなかった。音速に達した一閃だ。回避など、できるはずもない。残された道は防御のみ。だが重力殻を無効化する剣に対し、防御は「敗北に他ならない。反射的行動。身体の一部を斬らせて剣筋を逸らさせる。」

……腕一本犠牲にするだけで済むなら御の字だけど！

両腕を掲げ、重力殻を最大限に。南無三！ 腹を括つて呟く。

果たして斬撃は、来ない。

来たのは蹴りだ。

「フエイントなの!？」

驚く美希の声を踏み潰すかのように、加速体勢から強引に捻られたヒスバルトの脚部が重力殻にぶち込まれた。鉄と鉄を叩き合わせたかのような甲高い音が響き、衝撃と共にテンペスターズは蹴り飛ばされる。

斬撃が来る、と思っていた。斬り捨てられる最悪の可能性すら思い浮かべて、腕を差し出すつもりでいたのに。

だが予想に反して来たのは蹴り。打撃。斬られることを前提に防御体勢に入っていたため、打撃の衝撃は想定していない事態だった。足など壊れてしまえ、と言わんばかりの全力蹴撃。止めることも叶わず、ただ受けてしまった打撃は、十二分に衝撃を伝播する。結果、テンペスターズは体勢を崩すことになる。

ヒスバルトの狙いはこれだった。

斬撃に並々ならぬ自信を持っているヒスバルトは、必ず剣で攻撃してくると美希と律子は読んでいた。しかしそれは罠。斬撃にのみ向けられた意識外からの打撃によって、体勢を崩し、防御も回避もできない完全無防備な状態を狙うことこそ、ヒスバルトの策。

それらは全て、一撃必殺を誇る斬撃を確実にするための布石。と

もすれば、律子達の読みは外れていない。ヒスバルトは確かに、自らの剣に自信を持っていたのだから。ただヒスバルトの自信が、剣単体ではなく、己の剣術、技術そのものに対する自信であっただけのこと。

『その首もらいうける!!』

青空を遮って、剣を振り被るヒスバルトの姿を美希は見ていた。ひどくスローとなった世界に、美希は戸惑いを覚えた。何故ならば、時間の概念が擦れたこの世界を、美希は二週間前に体験していたのだから。

暗い闇を覗かせる銃口。白濁する意識。死への秒読み。恐怖で震え上がった美希を、しかし救ってくれた宙。銃で撃たれることも厭わず、ただ美希を守るために盾にならんとした青年。ああ、そうだ。自分はその姿に恋をしたのだ。自分を守ろうとしてくれた勇姿に。

宙はまだ戦っている。ヌービウムを相手に、必死に食らいついているはずだ。だから自分もこんなところで負けられない。今この瞬間、振り下ろされようとしている剣が敗北を決定付ける証明ならば、星井美希はそれを殴り飛ばしてでも勝利しなければならぬ。

……テンペスターズ、やきもち焼いてる？ でもね、美希、どうしても勝ちたいの。ハニーに振り向いてほしいの。あずささんにも、千早さんにも、美希は負けたくない。だから目の前のヒスバルトにも負けたくない、誰にも負けたくないの！

だからテンペスターズ、力を貸して。

願う心はテンペスターズとシンクロする。出力上昇、唸りを上げる駆動音。例えこの状況でも負けることはない、己の力を誇示するかのよう。

「ありがとうテンペスターズ！ 絶対勝とうなの!!」

美希の表情は輝いていた。操縦桿を押し込み、テンペスターズは掲げた両腕をわずかにずらした。振り下ろされようとしている一閃。それを受け止めようとする行動である。

不可能だ。加速と慣性制御、二つの要素で強化されたヒスバルト

の斬撃は、もはや防ぎようがない。下手に受け止めようものならば、重力殻すら切り裂く刃が装甲ごとテンペスターを真っ二つにすることだろう。

そうだ、“このままでは”無理だ。

それならば。現状を打開する要素を加えればいいだけの話。

ヒスバルトの刀剣が頭上に影を作ったのと同時、その変化は現れた。頭上に掲げた腕部、特異な形状をした腕が、先端から割れたのだ。いや、正確には開いたのだった。形状の変化は、例えるならば蟹のハサミ。開いた口は、中から黒い凹凸を見せる。

ブレード状の特異な腕部は、実はバイスとして装備されている。バイス、つまりは万力だ。通常のIDOLは“殴る”ことを主体としているが、様々な試験的要素を組み込まれたテンペスターは大型バイスを装備することで、殴る以外に“砕く”ことが可能になったIDOLでもあった。周囲に慣性制御を張り巡らせたバイスの威力は絶大の一言。

タイミングを合わせるの。美希は呟いて、空間を切り裂いて振り下ろされる剣を、掴んだ。掴んだ先からギヤリギヤリと歪な摩擦音と火花を散らして接触する武器と武器。

だが刀身を両手のバイスで挟まれた剣は、あまりの圧力にそれ以上刃を進めることができない。

『馬鹿なっ!?! 我が一撃を!?!』

ヒスバルトの声に動揺が走る。それは受け止めた美希だって同じだ。背中に嫌な汗が滲むくらい、悲鳴をあげてもおかしくないくらい博打的な賭けだった。まさにデッドオアアライブの精神で望んだ行為は、ほぼ奇跡の産物と言ってもいい。

音速を超えてくる一撃を受け止めようと言うのだから、命知らずにもほどがあるだろう。律子なんて、眼鏡がずり落ちて口元が引きつっている。

だが何はともあれ、事実受け止めて見せた。にやりとした美希は、「これぞ、秘技・真剣白羽取り、なの!」

『なんと！』

「別にそんな技名ついちゃいないわ！　だけど美希、よくやったわ！」

掴んだ剣を離すわけがない。軋みをあげる剣に対し、美希は操縦桿のトリガーを力一杯引き絞り、応じてバイスが少しずつ剣に食い込んで行き、そして。

真ん中からバラバラに、ヒスバルト自慢の剣を見るも無様に粉碎した。

『おおつ、我が剣が……！』

「よそ見してる暇は、ないと思うな！！」

もはや恐れるものは何もない。武器を失って戦闘力が半減したヒスバルトに、美希は容赦なくパンチを叩き込み、律子の操るレーザ砲台が連続で光の線を描く。怒涛の反撃とはこのことか、連打される猛撃がヒスバルトを追い込んでいく。

『よもや、ここまでとは！』

「これで美希達の勝ちなの！　とどめっ！」

打ち付けられ、サンドバック状態となった眼前の敵にとどめを刺すべく、テンペスタースはトリークハイトブレッツヒヤーを放とうと拳を溜めた。完全勝利。その言葉を具現するべく集中する慣性制御は、一撃の下にヒスバルトを砕くだろう。

勝った！　確信した次の瞬間、

『詰めが甘いつ！』

ジャツ！　という鋭く風を風ぐ音。それがヒスバルトの五指だと気づいた時、テンペスタースの胸部に五本の亀裂が奔った。稲妻を描いたようなその傷は、装甲を深々と斬り付けて。よろめいたテンペスタースの隙を突いて、金色の騎士は後方へと難を逃れていた。

こと速さに関してならば、ヒスバルトの方が数段上手である。隙さえあれば、相手の間合いから離脱することなど造作もないだろう。『我が剣は折れた。我が誇りは折れた。認めよう、貴公達は強い！』

だが、まだ膝を屈するわけにはいかぬ。我にも主人から授か

った命がある。貴公達をここで倒すことだ。そしてなにより、強者との戦いを楽しむ自分がいるのだ。この愉悦感、そろそろ手放せるものではない……!」

朗々と語る金色の騎士は、自らの五指を目の前で広げてみせる。指に装備された長い爪は、慣性制御によって切断力を増し、厚さ一メートルの鉄板でさえ優に切り裂く。加速剣ほどの威力はないが、先程の奇襲でテンペスターも手負い。十分に対抗できる。

「本性は戦闘凶、ね。なんて人間臭い……」

「うつつ、美希ちよつと疲れたかも。でもがんばるの！ここで負けたら八二一に褒めてもらえないもん！」

結局、美希を突き動かす原動力はそこであり、宙への恋心が尽きぬ限り美希は諦めない。律子は思う。これくらい素直さが千早にもあればなあ、と。そんなこと考えても仕方がないかと自己完結し、宙がやって来てからのアイドルマスター達の変化を思う。

……先輩の私へこたれてたら、威厳も何も無いわ。威張れなくなるわね。

一息、深呼吸。それだけで意識を切り替え。眼前、向かい合う敵へと集中する。

さあ、戦いはまだまだこれからだ。テンペスターとヒスバルトは、再び激突した。

グリムス山の頂、火口直上。円形の口の中で紅蓮に煮え滾るマグマは、まるで目玉のようにも見える。生命の存命を許さない灼熱地獄。そこから噴き上がる灰色の黒煙が、硫黄と大地が焦げる異臭を充満させていた。無論、インベルの中で保護された春香と千早はその臭いを嗅ぐことはない。

極寒と極熱。反した二つの状況が、目の前に広がっている。

インベルは皆と別れてからほどなくして火口に到着した。ヴェル

ツールと別れ、ネーブラと別れ、テンペスターと別れ、背後から追いかけるトゥリアビータの全てを仲間に任せて。自分達は、仲間の決死の想いを背負ってここに居るのだと、千早は再認。

「皆、無事かな？」

「愚問よ、春香。私達は私達のやるべきことをするだけ」

「うん……」

春香の心配はもつともだ。グリムス山に向かう途中、宙から届いた通信も、すぐに聞こえなくなってしまった。管制室や他の仲間との連絡も取れない。トゥリアビータの通信妨害か。それともまさか。きつと前者だと思い込んで、千早は胸の鼓動を抑えていた。

もし宙に何かあったら、それは殿を譲った自分の責任だ。自分が宙を止めていたら。

いや、過ぎたことを考えても意味はない。時間が惜しい、急がなくては。千早は一応管制室に通信を試みるが、荒れたノイズが聞こえてくるだけだ。連絡は取れない。本来なら亜美と真美のバックアップの下、万全の体勢で行われるべきだった回収作業だが、こうなったら自分達の判断だけでやるしかあるまい。

「行くわよ、春香」

一声かけて、千早はインベルの出力を最大まで上昇させる。あまりの高出力故に周囲の黒煙が吹き飛び、それはあらゆるものを拒む殻となってインベルを包み込む。そのままゆっくりと火口に向かって、インベルは降下を開始した。

マグマの表面は、ごぼごぼと泡が噴き、不規則に波打っている。まるで生き物のような脈動を感じさせる灼熱の海に、インベルは足を踏み入れた。重力殻とマグマ表面が接触。球状の重力殻は波紋を浮かばせながら機体を守り、マグマを押し退けて火口内へと侵入。降下速度はそのままだ。

「うわ……、モニターが全部真っ赤だ」

「光学センサーはどうやら駄目みたい。有効範囲は数メートル程度。計器だけが頼りね」

春香の言う通り、モニターは赤黒い色に覆われている。それ以外一切の存在を感じさせない空間は、やはり生命が踏み入ってはいけない領域なのだろう。深さ数千メートルの位置にあるヒエムスの回収とはすなわち、人が触れてはいけない禁忌への道のりなのかもしれない。

インベルは黙々と潜行を続ける。重力殻で守られているとはいえ、もし何かしらの問題で重力殻内にマグマが進入したら、一〇〇〇度に達する熱が装甲を焼くことになるだろう。例えインベル自体は無事でも、コックピット内の温度は急激に上昇し、蒸されて死ぬか、下手をすれば燃え死ぬことになる。

そんな“もしも”が分かっているからか、春香と千早は互いに無言。静寂が支配する。

深度一二〇〇……、一二五〇……、一三〇〇……。重力殻^{レイヤー}フィード形成指数、最大を維持。外装温度三五七度。圧力限界まであと三〇〇〇。フレーム、内部機関共に正常に稼働中。千早は計器を注視してあらゆる異常も見逃さない。

「暑いね、さすがに。やっぱりマグマの中だからかなあ、空調ほとんど利かないし」

沈黙の中、口を開いた春香の一声は暑さに対する抗議だった。千早もその意見には賛同せざるを得ない。コックピット内温度は三二度を超えたところだ。外は一〇〇〇度以上の灼熱だということを考えれば、文句は言えないのだけだ。

蒸し暑いコックピット内はほとんどサウナ状態で、真夏の太陽すら生易しく、汗がだらだらと肌を伝う。もう下着にまで汗が染みて酷く不快だ。息苦しくなって、堪らず深く息を吐き出した千早は、こんな姿を宙に見られたくないな、と思った。

……こんな時に、また宙のことなんて。

集中しなさい、如月千早。ヒエムスのことだけを考えるの。自分に言い聞かせ、計器が表示するコックピット内温度が三十八度に達したのを見て視界がぐらりと揺れる。早くヒエムスを回収しなければ

ば。

「……目標推定位置まで、およそ三〇〇。もう少しよ春香、がんばりましょう」

「あはは、帰ったらすぐにシャワー浴びたいね」

苦笑いを春香が浮かべた時である。

突如、不自然な揺れがインベルを襲った。

「えっ、なに!？」

「くっ、周囲にIDOLらしき反応複数! 追いつかれたの!？」

光学センサーではほとんど捉え切れていないが、前方にぼんやりと人型が見える。それは黄色のモノアイを光らせると、一気にインベルへ肉薄した。春香は直感的に防御行動、インベルが腕部をクロスして攻撃に備える。

衝撃。重くぶつかり合う重力殻と重力殻。接触面から閃光が迸り、そこでもうやく敵の全貌を確認することができた。同時に、接触回線から聞こえてくる少女の声。

『ふっふっふっ、驚いた? あんまり遅いから、リファ追いついちやっただよ?』

「人工IDOLに、女の子が乗ってるの?」

春香は眼前の機体を見てそう言った。エピメテウスではない。翠色をした、今まで見たこともないIDOLだ。

インベルとほぼ同等のサイズ。脚部はくの字に曲がった太い逆関節で、不吉な違和感を醸し出す。過剰に膨れ上がった両肩が、その異質ぶりに拍車をかけていた。とてもIDOLとは思えない、怪物さながらの形状。

……トウリアビータの新型機? でも、この雰囲気は……。

ヴェルトールによく似ている。既存のIDOLから外れた外見は、断片的な情報と憶測も相まって、戦闘用IDOLであることは容易に予測できた。

自らをリファと名乗る少女は、

『ヒエムスはあ、リファがもらっちゃうからねー! 行くよ、ヒ

クリオン”！」

翠色の怪物ヒクリオンは、突き出した拳をインベルの重力殻に力強く押しつける。無色の光が火花のように散り、防御姿勢のインベルはこれを受け止めて動けない。なんとということだろう、ヒエムスまであと少しだというのに。

このままでは駄目だ。春香はそう思っ、フットペダルを踏み込んだ。両腕の代わりに、足蹴りでヒクリオンを蹴飛ばそうというのだ。あっちへ行っ！ 叫んで、インベルは脚部を後ろに引いて勢いをつけると、一気に前へ。

蹴り、出せない。

コックピットに伝う更なる振動に息を呑む。何か脚部を掴んで、インベルの動きを封じようとしているのだ。しかも、衝撃は一度だけにあらず。二度、三度と続いた振動。何かと計器を確認する千早は、

「エピメテウス！？ 足だけじゃない、背中にも！」

「う、動けない……！」

ヒクリオンの指揮下である複数のエピメテウスが、身体中に取り付いていた。振り解こうにも一斉に張り付かれては、さすがのインベルもパワー負けしてしまう。加えて前にはヒクリオン。

まさに八方塞がりの状況下、危険状態を知らせるレッドアラートを耳障りに感じて、千早は思わず舌打ちした。千早ちゃん、どうする！？ ちよつと待って、考えているから！

苛立ちが、逆に思考を鈍らせていく。複数の人工IDOLを相手にするのに、怖いのはこういう状況に陥ることだった。一体一体の能力は低くても、複数ともなれば数に圧倒される。ましてや新型機が存在もあるのだ、普段より何倍も未知数の危険に溢れている。せめて、もう少し早く接近に気づいていれば。

ヒクリオンの攻撃がインベルを抉る、髷る、削る。だがこちらとて最大出力で重力殻を張っている。そう簡単には破れはしない。

防御できている間に、反撃の糸口を見つけなくては。そう思った

時。

「その腕、邪魔だなあ。……もいじゃおつか」

ヒクリオンに動きがあった。リファの声を合図に、膨れ上がった両肩の装甲、六角形ダイスにも似た形状のそれから大蛇が飛び出したではないか。否、蛇ではない。上二本、下一本で組み合わさる爪を携えた、長い長い腕である。隠し腕。蛇に見間違えるのもおかしくない、奇妙な腕だ。

怪物的な外見を更に強くしたヒスバルトは、蛇が牙を剥くのに見紛おう、両爪を広げてインベルの腕を掴み、捻り、爪痕を装甲に刻みつけた。十字に腕部を重ねて固めていた守りが破られていく。

遂に両腕は捻り挙げられ、十字架に貼りつけられた聖人さながらの格好となったインベルに、春香と千早は悲鳴をあげそうになった。リファはコックピットの中で邪悪な笑みを浮かべていたことだろう。宣言通り、邪魔な腕はもいでしまおう。やり方は至極、簡潔的だ。

つまり、握る。

……装甲強度が！

千早の声にならない悲鳴と同時に、みしみしと軋むインベルの腕。四本の腕を駆使されれば、丸太のように太く、岩のように硬いインベルの装甲でも堪らない。やがて、装甲の限界がやってくる。

先に根をあげたのは左腕だった。バコンッ！ と左腕が折れ曲がって、痛みには震えるかのように赤い表示がモニターを埋め尽くした。「重力殻貫通！ 五番から十二番までのアクチュエーターが圧壊、セカンドアーム損傷！」

「だ、大丈夫。壊れたセカンドアームを切り離せば！」
「馬鹿、ダメよ春香！！！」

行動を咎める声は、しかしわずかに遅い。春香の判断で切り離されたセカンドアームは、紫電を奔らせながら腕部から離れ。インベルの重力殻内を爆発で紅に染めた。

機体の慣性制御から開放されたセカンドアームが、攻撃を受けて

不安定な重力の影響を受けて、重力殻内部で爆発したのだ。重力殻という密閉空間内で爆発したため、被害は全てインベルへと跳ね返ってくる。

強い。エピメテウスよりも遙かに強い敵が、雑兵を連れて襲いかかって来る。

『あはは、弱い弱い。モンデンキント最強って言うインベルもこの程度だもんねえ。やっぱりヒクリオンはすごいね！ さあ、インベルなんか放っておいてヒエムスのとこ行こ！』

勝利を確信し、あとはエピメテウスに任せて、リファはヒクリオンを反転させた。目標はヒエムス。ここからならば、すでに目と鼻の先だ。

光学センサーで見える範囲からヒクリオンの姿はすぐに消えた。反応はマグマの奥底へと。先を越されてしまった事実には、千早は歯を食い縛った。仲間が敵部隊を引き付けてくれていたというのに、なんたる失態。なんたる無様。

重力殻形成率は軒並み低下。マグマの圧力に耐えうる最低限の出力しか出ていない。エピメテウスを引き剥がそうにも出力が不足だ。絶望的。

……宙、私はどうしたら？

泣き言を言える状況でないのは理解している。けれど、どうしても口から漏れてしまうのだ。いつも自分の実力を信じてきた。春香と一緒にがんばって来た。それなのに、少しでも心が痛いと思うと考えるのは決まって宙のことだった。自分と似ている彼のこと。甘えだ、そんなものは。弱さだな、と思う。思ってしまう。

悔しさに拳を握り締めた。その時、

「ごめん千早ちゃん、私のミスだよ。ミスばかりでごめん。……でもね、私は泣かないよ！ 絶対勝つもん！」

春香の声はコックピット内に凜々しく響いた。千早が振り向くと、そこにはまるで衰えぬ闘志を瞳に秘めた、天海春香の姿があった。操縦桿を握り、必須にエピメテウスを引き剥がそうと足掻く姿は滑

稽かもしれない。無駄な足掻きだという人もいるだろう。それでも、春香は絶対に諦めない。

「宙は約束したんだよ、絶対に勝つて！ だったら私達だって、こんな簡単に諦めちゃダメだよ千早ちゃん。さあ、前を見て！」

「春香、あなた……」

表面温度は七〇〇度を突破。機体の損傷も甚大だ。下手をすれば、インベルはマグマの溶解炉でドロドロに溶けて、ただの鉄の塊となってしまうかもしれない。

だがしかし、諦めない。

今この瞬間、アイドルマスターの誰しもが苦しみながら戦っている。例え苦しくても、辛くても、決して負けぬと逃げずに戦っている。自分達もそうであらねばならない。皆が作ってくれた時間、減らしてくれた敵の数だけ、春香と千早はその想いに応える必要がある。故にここで立ち止まることなど許されない。

天海春香と如月千早のコンビは、モンデンキント最強のアイドルマスターなのだから。

……甘えが弱さなんじゃない。そのことを弱さだと思ってしまう私の心が弱さなんだ。誰だって人に頼りたくなる。支えて欲しいと思うこともある。だったらその甘えを、私は強さに変えるべきだったんだ。

「ごめんなさい、少し弱気になっていたみたい。春香、あなたの言う通り、私達は負けられない。いえ、負けない！」

「千早ちゃん！」

「力を貸して、インベル！」

想いを具現する担い手は、純白の巨人。瞬間、インベルの出力が急激に上昇した。傷を負いながらもなお、マスターの想いに応えようとすするインベルに、千早は礼を言う。ありがとうインベル、もう少しだけがんばって。

ある青年は、男は度胸だと言った。だが時と場合によっては、

「女も、度胸……！」

墜落。

ヴェルトールは成す術もなく雪原に倒れ込んだ。

「こ、この野郎……！」

『調子に乗って殺されに来るから、こういう結果になるのよ』
リコリスの声には憐憫の色すら含まれている。その程度で私を倒そうなど絵空事もいいところだ、と。

本気を出す、と宣言したりコリスの言葉に嘘偽りも誇張もなかった。為虎添翼の様相を呈したヌービウムは、ヴェルトールを完全に手玉に取り、猛攻の末に雪原に叩きつけた。驕っていたつもりはない。けれど成す術もなかった。

右腕をボロボロにして、装甲を焼き焦がせ、赤いカメラアイを獯猛に光らせるヌービウムの姿。煉獄の悪魔と言われても疑わないだろう。

『遊べて楽しかったわ。やっぱり、私達は同じだからなのかしら』

「おまえと一緒になんか」
その時、だった。

宙は思わず空を仰いだ。今まさに自分の命が絶たれようとしている、この瞬間に。それでも反射的に空を見上げていた。半ば強迫観念的な思考が強制的に空を仰がせたと言っても過言ではない、意識の内側からの暗示。

それはどうやらリコリスも同じだったようだった。つい先程まで息をすることすら躊躇う高速戦闘を繰り返して、命の賭け合いをしたのが、嘘のように静まり返って。時が止まってしまったかのような、無音の世界が出来上がっていた。何がヴェルトールとヌービウムの動きを止めているのか。この恐ろしいほどの静寂は何事なのか。

「来る」

宙が呟いた時。

空気が、変わった。

大気が変わる。景色が変わる。空が変わる。大地が変わる。世界が変わる。

肌が鳥肌立ち、吐き気すら込み上げてくる。身体中の細胞がけたたましく警告を響かせている。異常を超えて、空間が異界となるほどの威圧。

空間を蹂躪する“それ”は、人の誰しもが持っているものだ。だがここまで強大な、色と色が交じり合った“それ”は人の物でありえるだろうか？ 応えは否。断じて否。

感情。それが今、空間を支配するものだ。醜くおぞましく、凍てつく感情。尊大で美しく、燃える感情。ああ、駄目だ。この感覚を正確に表す言葉を宙は持ち合わせていない。だがこれだけは分かる。今から現れる“それ”は、世界そのものを恐れ、世界そのものに恐怖されるほどの、此の世ならざる存在。

宙は無意識に身体を抱いていた。世界そのものに押し掛かる感情は、そこにいるだけで人という存在を犯し、侵し、冒し、逃れる術はない。

天が割れた。青空が割れて、神々しく、禍々しい光が降り注ぐ。それはまるで神話の一場面の再現だ。闇を、光を食らい尽くしながら……“それ”は天上より姿を現した。

天使の降臨である。

第十三話 ヒエムス争奪大決戦 / Angel halo

第十三話 ヒエムス争奪大決戦 / Angel halo

双海亜美と真美は珍しく神妙な様子で顔を見合わせた。

作戦の開始から数時間。グリムス山から遠く離れた管制トレーラー内で、バックアップに回ったマスター達とオペレーター数名、そしてジョゼフは不測の事態に対応を迫られていた。

敵部隊に捕捉されないよう後退して、実働部隊である宙達を援護するのが当初の予定だったが、正体不明の通信妨害が宙達との交信を絶ったのである。グリムス山近辺を覆う強力な重力異常が、その原因だとされている。

トウリアビータの妨害 というよりも。どこか自然現象染みた、周囲のあらゆる情報が遮断される、一種の結界が作用しているように思えてならなかった。

そうして通信が途絶えてからしばらく、そして数分前、事態が転じた。双海姉妹の持つIDOLの“音”を聴き取れる能力で、かろうじて位置関係は把握できていたのだが。その音が、突然途切れたのだ。グリムス山の火口から地球の血液＝紅蓮の溶岩が噴き出してくるのと同時に。

双海姉妹が顔を突き合わせている原因はそれだ。

「ねえねえ、今のヒエムスが起きた音だね？ これ、メツチャやばいんじゃない!？」

「……ヒエムス、なんかチョー怖がってた？」

山が燃えている。怒りに叫ぶ憤怒の声のようにも、苦しみに泣き叫ぶ悲鳴のようにも聞こえる噴火の様子が、モニターに大きく映し出されていた。

異常はグリムス山の噴火だけに止まらず、大地に刻まれたクレバ

ス、その谷底に流れる溶岩までもが流れ出すに至り、周囲を赤黒い灼熱色に染め上げている。空が青空ではなく暗雲でも立ち込めていたら、まさしく黙示録的光景になっていただろう。

壊れた楽器が奏でる不協和音。そんなヒエムスの、恐怖を孕んだ声がこの大地を荒れ狂わせたのか。

「音無君、まだ通信は回復しませんか」

頭を抱える双海姉妹の横で、ジョゼフは静やかに確認を取る。

「もう調整が終わります。よし、なんとか繋がりました。皆に呼び掛けます」

小鳥が鍵盤型のキーを叩くと、管制室に響く高低差の激しいノイズ音。しばらく、通信を調整していると、

『こ……ベル……千早……』

「あ、繋がった！こちら管制、応答して！」

『こちらインベル。千早です』

『同じく春香です！はあ、やっと通信が繋がったあ』

「ああ、千早ちゃん！春香ちゃんもよく無事で！」

聞き慣れた仲間の声に、室内がどっと沸き上がった。皆一様に安堵の声を漏らし、雪歩のように胸を撫で下ろす者もいれば、真のようにガッツポーズで喜びを表す者もいる。火山の噴火を目の当たりにする事態だったのだ、誰しもが春香達の無事を喜んだ。

一度良い方向に向かうと、連鎖するように他のマスター達からも次々と連絡が入ってきた。状況を確認すると、各IDOLは離れた場所で立ち往生しているようだ。なんでも、IDOL達が急に動かなくなったらしい。それは戦っていた敵のIDOLも同じだと言う。第二防衛ラインのネーブラは、ヒドルンのアルツアヒールが辺りを吹き飛ばしたものの、戦闘を続行できるだけの余力を持っていた。ネーブラとヒドルン、共に疲弊しつつ戦っていたところに火山の噴火だ。その直後に、突如ネーブラが動かなくなり、ヒドルンやエピメテウスも機能を停止。戦闘が中断されて今に至る。

第三防衛ラインのテンペスターも、火口内で戦っていたインベ

ルも、ほぼ似たような状態だった。

テンペスタースは機能停止した際、クレバスから盛り上がりつつ流れ出た溶岩流に流されてグリムス山から遠ざけられた。噴火した火山内部にいたインベルは、凄まじい勢いで外に投げ出され、大砲の如く空を飛ぶ火山岩と一緒に地上に叩きつけられていた。もし重力殻が保たなかったら、機体ごとマグマの中で溶けていただろう。

『でもどうしてIDOL達は動かなくなっちゃったんだろ。そっちで何か分かります？』

「はるるん、たぶんね、ヒエムスが起きた時の声を聞いて皆びっくりしちゃったんだよ。気絶してるんだと思う。ダイジョーブ、少し眠ったら目を覚ますよ」

亜美の言葉を聞いて、よかったと微笑む春香。千早も同意しつつ、今後どうすればいいのか判断を仰いだ。IDOLが動かない以上ヒエムスの回収もままならないし、それはトゥリアビータ側も一緒だ。とにかく、一度体勢を整える必要がある。

各機体から送信された位置情報を統合させると、ジョゼフは顎に手を当てて、効率的な回収ルートを模索する。

「我々から一番近いのはネーブラですね。では最初にネーブラを回収しつつ、順次他の回収地点へ向かいますよ。それぞれ修理や調整が必要でしょう。……敵部隊とかち合う可能性もありますが、足を竦ませてはられませんね。本部との連絡は取れますか？」

「多少調子を取り戻している今の内ならば」

「では、音無君は本部と通信を繋いでください。各班は移動の準備を。気を抜けませんよ！がんばってください！」

全員が応と言葉を返し、IDOLチームはその場での待機を命じられた。ヒエムスはいまだにマグマの底。どちらかの陣営がヒエムスを手に入れない限り、この戦いに終わりはない。

忙しなく動き始めた面々の中、

『ねえ、そういえば八二一は？ 八二一は無事なの？』

美希は不安そうな面持ちで問いかけてきた。そういえば宙はどう

したんですか？ あずささんは？ 今の通信に宙達が参加していないのに気づいて、皆が疑問を口にする。失念していたのは管制トリーラーの面々も例外ではなかった。春香達と連絡が取れたことで、気持ちも緩んでいたせいもあるだろう。

この状況下、敵も味方も動けなくなつた状態で宙達だけ音沙汰がないのはおかしい。ジョゼフは嫌な予感を覚えて、すぐにヴェルトールの反応を探索させた。宙達が残つた戦闘区域は、ネーブラの回収位置からやや離れていたはずで、場合によっては回収コースを改めることも視野に入れなければならない。

だが、オペレーターの返事は期待を裏切る内容だつた。

「ヴェルトールの反応、確認できません。ですが代わりに妙な重力反応が……」

正面モニターに映し出された情報を見て、その場の全員が首を傾げるハメになつた。何故なら画面上に映し出された周辺地図の一角が、ぽつかりと空いていたからだ。まるで地図上に白いペンキを塗つたかのように、何も映し出していない。そこから読み取れる意味は、ただの重力異常ではないことを明確としている。

光波、電磁波、粒子。あらゆる要素を遮断する、グリムス山周辺を覆う結界の中心と思しき、現世から切り離された異界。

ヴェルトールはあの異界の向こうに消えた。

消えてしまった。

「本部との通信、繋がりました。いかがしますか？」

小鳥が振り向いて言う。案の定、小鳥の表情は暗かった。小鳥にとって、宙は一言では言い表せない複雑な関係を持つ人物だ。けれどもなにより、親友の弟であり、昔は自分によく懐いてくれていた青年が、危険な状況にあるのかさえ分からないのは、不安で仕方ないのだろう。

「……本部にこれからの指針を仰ぎます」

告げて、作戦の今後を問うべく本部との通信を繋ぐジョゼフ。彼もまた、一抹の不安を感じながらも、自分の決断が最善だと信じて

やるしか術がなかったのだった。

そしてジョゼフ達は、誰しもが予想し得ない事態が進んでいることを、後になって初めて知ることとなる。

終わりが空から降りて来た。

それが現れたことでヌービウムとの戦いが終了するに至ったのだから、これは比喩的表現でもあるし、事実とも言える。

ヴェルトールとヌービウム、動きを止めた二機の頭上。太陽の光とも違う、黄金の光が大地を照らしていた。オーロラを連想させる光のカーテンが空を遮り、現実と幻想の境界を曖昧にさせる。だから、宙には区別がつかなかったのだ。

煌く天輪を携えて、空より現れた白い人型が、現実なのか否なのか。

「IDOL?」

人型に見入っていたあずさが無意識に言葉を紡ぐ。そう、確かにその人型を自分達の定義に当て嵌めて考えるのなら、それはIDOL以外に有り得ない。巨大な人型という存在を、自分達はIDOLしか知らないのだから。あまりに神々しく、何より禍々しい。筆舌に尽くし難い威容が光を纏って天より降りて来る。

頭の天辺には光の天輪。IDOLでなければ、まるで神話に描かれる天使だ。

外見は完全な人型で、IDOLのそれよりも人に近い。白く透き通ったボディの表面は淡く発光し、四肢はすらりと長く。丸みを帯びた均整なボディライン。よく見ると表面には幾何学模様が浮き上がっては消えていた。そして、それには機械的要素が何一つ見受けられなかった。

巨軀を押し進める推進器類はなく、武器と呼べる物もなく。ひたすらに、ただただ人形で在り続けるそれは、人形の存在によく似ている。人形の四肢を糸で吊るしたらきつとこんな感じだろう。温かみも、冷たさもない無感情的な在り方。

特徴的なのは、尖塔のように尖った頭部だろう。はてしない物語に登場する象牙の塔に近いかもしれない。頭部にはカメラアイもなく“顔がない”。

天使なのか。はたまた道化のピエロなのか。

「なんて……“気持ちの悪い声”」

「宙さん、具合が悪いんですか？ 声が震えていますよ」

並々ならぬ、慄然とした声にあずさは振り向いた。宙の様子は顔面蒼白。操縦桿を握る手は小刻みに震えて、天使の姿を直視することさえ拒否している。身体中の細胞一つ一つに眠る原始的な部分が告げているのだ。そもそも人の相対していいものではないのだと。

くそ、意識が持つていかれる……！ 頭がイカれる！ こんな激烈な敵意を浴びせられたら！

『……不気味な奴。愛想もない。出会いの印象も最悪。嫌いなタイプね』

不意にリコリスが怪訝そうに言った。彼女も天使の放つ敵意を察しているようだ。あずさだけが気づいていない？ そんな馬鹿な。不可解な気持ちになりながらも、

「こんな奴を相手にすることはない！ リコリス、あんたもだ。すぐにこの場から離れる、今すぐだ！」

『……？ 酷い狼狽振りね、坊やらしくもない。まあ、でもそんなところも可愛いじゃない。怖いのならお姉さんの後ろに隠れていてもいいのよ？』

くすくすと喉を鳴らすリコリス。宙は怒声をあげた。

「遊んでる場合じゃないんだよ！ せつかく忠告してやって」

途中で宙は口を噤んだ。否、宙もあずさも、リコリスでさえ言葉を失った。

天使は咆哮したのだ。口もないくせに、歌うような旋律で空気を振るわせた。あまりにも美麗な音色が故に、咆哮と呼ぶには些か語彙があるかもしれない。だがそれは間違いなく咆哮だった。獲物をしとめる猛獣の合図は咆哮に他ならないのだから。

瞬きをする。たったそれだけの行為。次の瞬間、天使はヌービームの背後に回っていた。

瞬間移動。

『後ろっ！？』

音速という域ではない。超越している。推進器すら備えていない人型が、何を持って瞬間移動などという芸当をこなせるのか。疑問を抱く暇すら与えず、天使はヌービームに肉薄。細く透き通ったその腕で、ヌービームの両腕を捻り上げた。

『私と戦う気！』

軋むヌービームの装甲。細腕に似つかわしくない桁違いの怪力は尋常じゃない。ヌービームは天使を引き剥がすべくもがくが、出力では完全に力負けしている。

『力任せに押し倒す！ この私に！ 調子に乗るものいい加減になさいな！』

悪態はもはや悲鳴だ。得体の知れない相手に恐怖と怒りを覚えながらも、リコリスは拘束から脱出しようとする。頭突き、蹴り、体当たり。腕を封じられている以上、機体のあらゆる箇所を使って攻撃を慣行する。

だがしかし、重力殻の出力を上げて弾き飛ばそうとしたその瞬間、損傷を負っていた右腕がついに耐え切れず握り潰された。

なんだ、この圧倒的な展開は。衝撃に、唇をわなわな震わせるリコリス。このままでは左腕もやられてしまう、早く離れなければ。

「リコリス！ ちくしょう、だから言ったんだ！！」

宙は衝動的に操縦桿を動かしていた。アルツアヒールの照準を天に定め二度引き金を引く。放たれた強力無比な稲妻は天使にヒット、最小出力に設定されているとはいえ威力は絶大だ。無色光が散

る。

天使は見た限りは無傷。警戒したのか、天使はヌービウムから離れて後退。再び距離を置いて対峙する。

「今のは重力殻でしょうか？ あの機体も、やっぱりIDOLなのかしら？」

あずさは天使の情報を解析しながら言った。

アルツアヒールが当たった際、光弾は天使の手前で拡散した。波紋を浮かばせる特徴的な反応は、重力殻で間違いないだろう。少なくとも、アルツアヒールを防ぐには慣性制御を使用するしかない。そして、慣性制御を扱えるのはIDOLだけだ。

「あずささん、いいな、逃げるぞ！ リコリス、あんたもそいつから離れる！ 人が親切にも助けてやったんだぞ！」

『傲慢な言い方ね。別に助けてなんて言った覚えはないけど？』

「うっさいな、無我夢中つて奴だ。文句あるのか！」

『呆れた……。私と坊やは敵同士でしょうに』

溜息を吐かれて、確かにそうだと言葉に詰まる。思わず助けてしまったけれど、リコリスは何度も苦渋を舐めさせられた相手に、美希に銃を向けもした。決して相容れるような関係では、ない。これは天宇宙としての優しさなのか、それとも甘さなのか。悪い意味とはいえ、深い関係にある相手を見捨てられなかったのか。

どちらにせよ、宙には自分自身の行動が納得できなかった。あえて、何かしらの理由をこじつけるとするならば、

「……あんたを倒すのは俺なんだ。ぽつと出の野郎に倒されたんじや、困るだろ」

我ながら古典的な台詞だと思う。一昔前のスポ根漫画でさえ古臭い台詞が、しかし一番しっくりくるような気がした。

そう、納得。と、リコリスもすんなり受け入れたようだ。まったく、奇妙な関係である。

ヴェルトールとヌービウム。本来竜虎の如く相克すべき二機が、どんな天の気紛れか、同じ“敵”を目標としている。糸に吊るされ

た不気味な天使人形は、相変わらず直立不動。

「繰り返しただけど、言うぞ。急いで逃げろ」

『臆病者、とは言えないわね。坊やの言う通り、私もあれの相手をするのは遠慮したいけれど……。おいそれと逃がしてくれる気もないみたいよ』

「えっ？」

「エネルギーの集束を確認、取り囲まれています！ 数多数！」
『来るわよ！』

あずさの報告を受け、力任せに操縦感を引いた。ヴェルトールは右へ、ヌービウムは左へ。全ての推進器を噴射し、全力で回避行動を開始する。

一拍遅れて宙は視認した。機体を囲んで環状に生じた空間の歪みを。そこから射出された無色の閃光が無数。空間を貪って飛来する攻撃はまさにアルツアヒールのそれと同等だった。重力塊。回避、交錯。

高速スライドそしてターン。死角は肩のバインダーを可動させて盾で防ぐ。すると、重力塊の一つが眼下の山に接触。ゴボリツ、とスプーンでアイスを掬うかのように山がごっさり削られるのを目撃して、宙は声にならない悲鳴を噛み殺す。

直撃すれば被害は免れないだろう。迎撃、回避を最優先だと判断。一足早く回避行動に移ったヌービウムが接近した重力塊を殴り飛ばしている。重力殻を手足に集中することで密度を上げ、纏い、攻撃しているのだ。

あのように方法はある。対抗できるか。

「なら撃ち落す！」

二挺のアルツアヒールを重力塊へ。高速で飛来してくるそれに狙いを定める暇もなく、“数撃ちや当たる”の精神でトリガーを絞る。高速機動。目まぐるしく変わる視界、モニターが大地を大写しにしたかと思えば、次には青い空が広がっている。逆さになった山々が、縦横無尽に駆け巡る機体のそれを象徴していた。

「……っ！ 機体直上、大きいのが来ます！ このタイミング、駄目、避けられない！」

取られた！ 上を！ 舌打ちして怒りを顕わにしても事實は変わらない。地を抉り取った威力にヴェルツールはどこまで耐えられるだろう。ぐつと歯を食い縛った時。

『不注意よ、坊や。もっと全体を見切る視野を持ちなさい』

真上、回し蹴りで重力塊を蹴り飛ばしたのは他でもないヌービームだった。霧散する重力塊を見届けることもなく、ヴェルツールに視線を投げる。勝ち誇ったりリコリスの表情がまざまざと想像できるのが悔しい。

『これで、さつき助けられた貸し借りは無しね。注意力が散漫よ？』

「不注意はあんたもだろ？」

悔しいので、ヌービームの背後から落ちてくる重力塊を撃ち落ちてやる。

「これでまた貸し一つ」

『……やってくれるじゃない』

互いの表情は見えないが、この時の二人はまったく同じ表情をしていた。にやりと口元を吊り上げたのだ。背中を任せる形で滞空する二機。

「どうする？ あんたでも離脱は難しいのか」

『坊や達を囮に使用してもいいのなら疾く逃げさせてもらうのだけど』

「素直に無理だって言えよ……。囮なんかに使われる気はないからな」

『そう、残念。救援を呼ぼうにも通信妨害で繋がらないのではねえ』

「妨害は全部トウリアビータの仕業だろうが！」

『お馬鹿さんね、よく考えて御覧なさい。味方の通信も邪魔していたら本末転倒でしょうが。こいつのせいよ、こ、い、つ、の』

リコリスの言葉をあずさが継ぐ。

「リコリスさんの言う通りかもしれません。通信、レーダーも含めてジャミングのレベルが一番高いのはこの一帯です。あの天使を中

心にして……」

『ほら、嘘は言っていないでしょう？』

「……逃げられない、救援も期待できない。度胸を見せる時かな」

静謐とした天使はこちらの存在を捉えて逃さない。まるで泥の沼が段々と迫って来るようなイメージ。すでに足元は吞まれてしまっている。目的も行動も何一つ理解できない異分子について、唯一はつきりしているのは、戦闘は避けられないということだけだった。

凶敵。重力殻の波状攻撃は脅威の一言に尽きる。ヴェルトール単体では、最悪敵わないことぐらい、宙も承知していた。だから状況を打開するために最も効率的で確実な方法も、また。

あずさをちらりと盗み見ると、彼女は絶妙なタイミングで振り向き、頷いて、

「私は賛成ですよ、宙さん」

「俺はたまにあんたが読心術の使い手じゃないかと疑うよ」

「パートナーですから。宙さんの考えてることは、お見通しです。

それに複雑な心境なのは、宙さんの方ですよ？ 宙さんは、自分が正しいと思うことをやってください。私はそれを全力でサポートしますから」

にっこり微笑むあずさに、心臓がどきりと弾む。邪念が洗い流されていくような清々しい気持ちになって、気恥ずかしく頭を掻く。

感謝してるよ。うふふ、がんばりましょう。ささやかな会話を区切り、宙はリコリスに言った。

「リコリス、非常に不本意だけれど、提案がある」

『奇遇ね、私も提案があるわ』

一瞬の空白。それだけで、二人の間に契約が交わされた。最強の敵は。

今この時だけ、最強のタッグとなる。

「一時休戦！ 今は目の前の意味不明野郎を！！」

『叩き潰す！！』

がつんと機体の拳を打ち付け合うところ契約の証。なんだ、同じことを考えてやがったか。私と同じ意見だなんて、少しは頭を使ったようね。互いに応酬する皮肉。それは言外に相手を認めるような口振りを秘めていた。

さあ、条件は整った。宙とリコリスの間に合図はない。だが予定調和の如く、二人は同時にフットペダルを蹴った。ドンツ、という空気を裂いて進む破裂音。それを契機に反撃が開始された。

白透の天使はするりと人差し指を天に向ける。天を突く指先の一点を中心に重力が急激な勢いで循環を開始、それを天使が軽く弾くと、球状の重力塊が放射状に放たれた。まるでピアノの鍵盤を叩くような繊細さでありながら、差し向けられた重力塊は凶悪の権化そのものだ。

蜘蛛の糸よろしく放射状に連続される重力塊を無力化するならば、本体を撃破するより手立てはない。故に、ヴェルトールとヌービームは推進器をフル稼働。爆発的な加速力が機体を押し進める。目指すは同じ、あの天使へと。

『先に先行するわ、坊や達は援護を！』

「そうさせてもらうよ。ヌービームこそ、片腕を失くしてるんだから調子に乗って前に出過ぎるなよ！」

『あら、私を誰だと思ってるの？』

実力的にはリコリスの方が数段上だ。損傷があるとはいえ、宙達を圧倒して見せた戦闘力は衰える気配がない。少なくとも、近づくとつれ激しさを増す攻撃の只中に突っ込んでいく芸当は、宙にはできない。

だから宙達は援護に回るべきだ。アルツアヒールという高威力遠距離武装を頼りに、ヌービームに集る重力塊を蹴散らして進路を作ることこそ最善。

宙とリコリスの考えた作戦は奇しくも同じだった。

「あずささん、重力塊の軌道パターン計算を！」

「はい！　最初は上方四時の方向、数二です！」

迷いなく銃撃。稲妻が奔り、ヌービウムを狙って急降下した重力塊を粉碎。進行方向を前方の一点に絞ったヌービウムは、援護の及ばない範囲の攻撃を回避するだけで、ただ一直線に天使への道を辿っていた。その姿、瞬きの間に吹き抜ける疾風そのもの。

……リコリスの思考が手に取るように分かる。理解できる！

次にヌービウムが移動する位置、回避するタイミング。こちらの援護と、噛み合った歯車のように連動するが故に必然と導かれる答え。言うなれば一対の翼。比翼の鳥、共に羽ばたく翼そのものだ。

そんなことが可能なのか。陣形もコンビネーションも、一度とて試したことがないものなのに。多くを共に戦い抜いてきた戦友のような、思考を共有した、一糸乱れぬ脅威の連携。相手の癖すら考慮に入れるような連携が、自分達に果たして可能なのだろうか。

いや、今考えるべきことではない。確かなのは、それが天使を撃破することに繋がっているということだけだ。それで十分ではないか、天川宙。自分に言い聞かせ、ヌービウムの進行方向から迫る重力塊をまた撃ち落す。

気づけばすでに、ヌービウムはトリークハイトブレッツヒャーを発動できる間合いへと詰めていた。

『まずはその重力殻を、壊すわ！』

攻撃地帯を、抜ける！

突き込んだのは残った左腕。だがそれだけで十分だ。最大出力で穿たれた拳が天使を保護する重力殻に深々と突き刺さり、侵食していく様は豪快の一言。天使は、オペラ歌手が謳うかのような鳴き声で、甲高い悲鳴をあげる。美しい音色の中に含まれるのは恐怖か、痛みか。

それでもまだまだ。その程度でヌービウムを貶めた贖罪にはなりもしない。重力殻の表面に指先を突っ込ませ、ガリガリと抉るように捻り開く……！

瞬間、天使の咆哮が新たな重力塊を召喚。天使を中心に集束した重力塊は上方、下方、右方、左方。四方を埋め尽くす破壊の具現が

間断なく射出された。舌打ち一つ、重力塊の一つを蹴り込むことで足場とし、咄嗟に直撃を免れる。

ヌービアムの後退は、すなわち重力殻を修復する時間を与えてしまうことと同義。一度体勢を立て直す機会を与えてしまえば、特攻が全て無駄になるだろう。再び重力塊の嵐を突破するのは、至難の業だ。

天使から遠ざかるヌービアム。裂かれた重力殻は閉じようとして、『よく合わせたわね。このタイミングなら文句はないわ』

リコリスの、微笑を浮かべての一言。天使はその意味が分かるだろうか。否、知ろうとするだろうか。どちらにせよ知ることとなるだろうが。その微笑みは、勝利への確信から生まれるものであることを。

ヌービアムの背後、その一直線上より。

ヴェルトールはアルツァヒールを手に天使の前へと躍り出た。

これこそが連携の真髄。片腕を失ったヌービアムが、援護があるとはいえ、重力殻の破壊と本体への攻撃、二重の手順を踏んで天使を撃破するのは難しい。単機では不可能。だからこそ、ヌービアムの攻撃はブラフ。

派手な攻撃はヌービアムに注意を惹きつける演出であり、わずかな意識外を狙って本体を叩くのはヴェルトールの役目であった。

天使との間を隔てる邪魔なものは、何も無い。

「抉じ開けた防御の一点をおー！」

極小の傷、それだけの隙間があれば十分。

まさに閉じようとしていた重力殻の隙間に、アルツァヒールの銃口を捻じ込んだ。ガゴソツ！ という鋼の歪む音。閉じようとする隙間の圧力に無理矢理突っ込んだせいで、銃口が今にも壊れそうな鈍い音で抗議している。

だがそんな音も、何もかも、わずかな時間のこと。

「天使は雲の上に降りやがれ」

銃口の奥に宿した光が瞬間的に膨れ上がって、爆発。

鼓膜を揺さぶる規格外の砲撃音が威力の絶大さを証明した。空気を入れ過ぎた風船は破裂するしかない。空気は閃光、風船は天使そのもの。

黙示録的爆発。彩るのは白と黒のち紅蓮。青空のキャンパスに赤い華が咲き誇る。

黒い二機のIDOLは素早く戦線を離脱。遠巻きに爆発を見届けると、黒煙の向こうに天使の欠片一つ残っていないのを確認し、安堵した。

『最後は呆気ないものね。てこずらされた割には』

流れた空気が勝利の愉悦ではなく、生存への感動である点を考えれば、如何に緊張を強いる戦いだっただのか思い知る。

「アルツァヒール着弾地点に反応はありません。ふう、やりましたね。」

ほお、と胸を撫で下ろすあずさ。暴力的な重力塊の嵐を潜り抜けたのだから、生きた心地がしないのも無理はない。

『なかなかやるじゃない坊や』

「宙さんはすごいんですよ？　ねえ、宙さん。……宙さん？」

返事のない宙に振り返ってみれば、宙の表情は曇ったままだ。どうしたんですか？　あずさの問いに答えることができない。せつかく危機を脱したというのに素直に喜べないほど、何かを、大事な何かを見落としているような気がしてならないのだ。一体何を見落としているのだろうか。

宙は画面の映像を拡大した。綺麗さっぱり跡形もなく天使は消滅していた。痕跡の一つも残さずに。破片すら残さずに。

刹那、身体を奔り抜けた感覚に宙は叫んでいた。

「上だ！！」

宙達の遙か上空、そこには、まるで最初から二機を観察していたかのように天使は君臨していた。

『まったくしぶといわね……！！』

リコリスの怒りを嘲笑って、天使は両手を広げて咆哮した。靈妙

な旋律を起点に変化は生じる。二機のIDOLを中心にぐるりと球状に空間が湾曲。無色の壁が外界との境に生まれ、檻と化して宙達を投獄する。

本能的に危険を察知。アルツアヒールを壁に向けて発射したが、壁はびくともしない。アルツアヒールの影響を受けないとは、なんという規格外強度。

それだけではない。あるうことが、檻は少しずつ萎みつつあるではないか。

天使は空間もろとも宙達を圧死させるつもりだ。いや、圧死なんて生易しい言葉じゃない。収縮する空間は、最終的に米粒にも満たないほどになって、死体すら残さず消滅するのは必然。

「おいおいおい!!」

『はあ、絶体絶命というやつかしら』

「なんであんたはそんな冷静でいられるんだ!？」

『最適な判断を下すためには常に冷静でいることが大事。私の美学なの。そして良い女の条件でもあるわ』

「な、なるほど、参考になります」

『あんたは参考にしなくていい! そのままでいてくれた方が……』
『はいはい、ノロけるのもいいけどこの状態を何とかしてからにしてちょうだい』

誰かノロけているもんか! 顔を赤くして反射的に怒鳴ってしまったが、確かに今はこの牢獄からどう抜け出すのか、考えるのが先だ。

状況整理。

現在、天使は檻の外、宙達の真上にいる。宙達は檻の中心地点だ。彼我の距離は縦一直線でさほどないが、檻に囚われている限り手は出せない。加えて、二挺のアルツアヒールの内、無理をさせた片方にガタが来ていた。最大出力で撃てて一回。残るエネルギーも少なかった。

手札は少ない。これで檻を破壊することができるだろうか。

そう考えていた宙の思考を読み取って、リコリスは難しいと告げた。

『ヌービアムのフレームストレスもそろそろ限界。互いに機体には無理が祟っている。檻の強度を見る限り、トリークハイトブレッヒヤーは論外。最大出力のアルツアヒールでも破れるかどうか、ね』
芳しくない。リコリスは気圧の下がった、ふてた様子で言う。

『でも、機体のダメージが一番大きいのは、坊やとの戦闘かしらね』
「なっ、それならどっこいだろう！」

顎を突き出すように反論すると、やれやれとからかう声が投げられる。事実だもの、坊や。その坊やってやめるよ。可愛くていいじゃない坊や。喧嘩なら買うぞてめえ。

わざわざ機体の頭をぶつけ合いながら口喧嘩する大人気ない二名。そうこうしている内にも檻は縮みつつあるというのに、そんなことは蚊帳の外とばかりにド突き合う二機のIDOLは、端からすればシユール以外の何物でもない。無論、危機的な状況下でわざわざツッコミを入れられる勇者（と書いて常識人と読む）はあずさしかないわけ。

あゝ、と。散々言い合う二人に少々引きながらあずさは手を挙げた。

「計算してみたんですけど、二機の慣性制御で檻を中和すれば、アルツアヒールで穴を開けることができそうです。ほんの数秒、一人分、辛うじてですが」

『あら、坊やのパートナーの割には、よく出来た子じゃない』

おい待て今馬鹿にされたような気がするぞ。さあ、何のことかしら？ いい加減、そろそろ時間がないので、再び険悪な雰囲気に入した二人を嗜める苦勞人のあずさだった。

『つまり、こういうことね。坊や達がリスクを負う必要がある』

あずさは頷いた。重力殻と同様の特性である檻は中和できるとして、肝心の壁を貫くにはアルツアヒールの威力が必要不可欠。必然的に、檻に残るのはヴェルトールの役割だ。宙達が犠牲になるとい

う、単純明確なことだった。ヌービウムが天使を倒せない場合、それは。

「一撃だ……ん？」

「一撃ね……あら」

宙とリコリスの声が重なった。両者ともに考えることは同じ。脱出したとして、待っているのはあの重力塊の嵐だ。機を逸すればチャンスを逃す。一撃。一撃だ。脱出と同時に一撃で天使を倒すしか、“お互い”に助かる方法はない。

「あんたが裏切らなければ、の話だけだな」

「坊やがしくじらなければ、だけどね」

互いが生き残らなければ契約の意味がないだろう。自分だけが助かるうなんて愚考は、両者共に毛頭ない。

「どちらにせよ、何もしなければ全員潰されてゲームオーバーよ。」

わずかでも希望があるのなら、私は命を賭けるわ。……私は、生きる。死ぬなんて真つ平ごめんよ」

リコリスの生きるという言葉には、とてつもない重みがあった。

リコリス自身が生を重んじているが故なのか、人とは違う生きることへの執着を感じ取れた。

宙とて生への渴望は当然。あずさと一緒に、仲間の元へ帰る。そういう意味ならば、リコリスの意思には共感できた。必ず勝って帰る。そのためならば、確立の低い賭けだろうが受けて立ってやる。

「リコリス、やれるのか。片腕で奴を仕留めることなんて、本当に」

「確実なことなんてこの世にないわ。結果を引き寄せるのは自分の力。だから、こう言ってあげる。私を信じなさい」

「……ああ、ちくしょう！ やってやるさ、男は度胸だからな！」

わずかな時間での意見交換、手順の確認。リコリスが提示した最終攻撃手段はなるほど、それならば勝敗はある。それ以外に手段もないだろう。

天の采配に期待しようとして、相手が天使の姿をしているので思い止まった。神頼みなんかするな。リコリスの台詞を思い出せ。伊

織も言っていただろう。最高の結果、その先にある最高の未来は自らの手で掴むものだ。

さあ、最後の足掻きを始めよう。

「目に物見せてやるうぜ、相棒」

二挺の銃口を檻の天辺へ掲げ、一度深呼吸、後に。

撃つ！

刹那、双銃から解き放たれる無色の閃光。あまりの高出力に機体が後方に沈み、反して光は柱のように天に伸びていく。着弾は瞬きの間すら超えて早く。着弾を確認した瞬間、打ち合わせ通り、ヴェルトールとヌービームは慣性制御を最大展開。檻の中和作業と同時に並行で作戦を進行させる。

見る見る内に消耗されるエネルギー残量。にも関わらずまだその形を保つ壁。壁は悶え苦しむように波打ち、波紋が勢い良く広がっていく。

「腕部フレームに負担大……。射撃限界時間まで、あと三〇秒！」

「気張ってくれよお……」

太陽より激しい閃光の照り返しが機体に影を落とさせる。操縦桿のトリガーは絶対に緩めない。仲間の元へ帰る。その想いが宙を鼓舞し、諦めぬ勇気をくれる。

「ブチ……抜け……」

想いを糧に、強大な敵を、凌駕しろ。

「ブチ抜けヴェルトール!!」

射撃限界ゼロ秒。その瞬間、ヴェルトールのコアが出力臨界を突破し、瞬間的にアルツァヒールの威力を限界以上に引き出した。結果、破損したアルツァヒールの片方が爆発して。天に昇った極光は天井の壁を貫いて道を開く。

「今だ！」

ヌービーム、射撃が途切れる寸前に急激上昇。反し、ヴェルトー

ルは一時的なオーバーロードで崩れ落ちていく。

『坊や!』

「構うな、あんたを“信じる”!」

そこから先は一瞬の出来事だった。

外界へ到達。ヌービウムと天使の距離は数十メートル。その距離を、一気に詰める。

対して天使の行動は迎撃。指先をひらりとヌービウムに向けて、放つは重力塊。それをヌービウムは 避けない。回避行動を取ればそれだけ時間にロスが出る。ターゲットはあくまで天使のみ。不転転を心に刻んだりリコリスに迷いはなく。

重力塊とヌービウムが交差する。わずかに頭部を逸らしただけで済ませるヌービウムのすぐ横を、重力塊が突き抜けていく。それだけだ。例えば頭部の半分を抉られても、ほら、十分に攻撃できるじゃないか。瞬時の交差の後、激突。

左拳で重力殻を穿ち、身を振って回転蹴りに繋げるコンビネーション。敵の頭をかち割る蹴撃は 不発に終わる。寸前で、天使は遂に腕を使った。身を守るために。

リコリスはにやりと口元を横に裂いた。

『馬鹿ね、本命はこつちよ』

すると、そのタイミングで。ヌービウムと天使の間に黒い塊が飛び込んできた。ヌービウムが脱出した小さな穴から、閉じられる寸前に、である。

アルツァヒール。

ヴェルトールが最後の力を振り絞って投げ渡した切り札だ。

ヌービウムは手を伸ばし、手中に収まったアルツァヒールを天使の胴体部に突きつけた。重力殻は無効化。腕のガードも抜いた。もう奴を守るものは、何もない。

エネルギー供給良好。最大出力へ。

勝利の絶対的確信と共に、リコリスはトリガーを引き絞る。

轟音を証明に天使を飲み込んでいく無色の極光。史上最強の武装

アルツアヒール。ヒドルンに搭載されたレプリカを上回る威力が発揮され、今度こそ、本当に、天使のボディを蒸発させていく。天使の歌うような悲鳴が心地良い、とリコリスは思った。

ところが不意に、リコリスの視界の端に灼熱色が過ぎった。

それが遠くのグリムス山から噴き上がる炎であることに、遅れて気づく。地鳴りのような衝撃音が耳朶に響き、溢れ出たマグマが地上を染め上げていた。逆に空は雲一つない快晴。天国と地獄を分け隔てたかのような対極世界が視界に広がっている。

その遠くの山より奔った“悲鳴”の波動が、リコリスの頭に杭を打ちつけたような激痛を穿った。同じくして、ヌービアムの全システムが突如としてエラーを発生させたではないか。

慣性制御を失って、自由落下を始めるヌービアム。

「しまった……！」

天使はまだ、焼き尽くされてはいない！

直後、人の感性では捉えきれない未知の不協和音が世界に木霊した。

怒声、悲鳴、奇声。そのどれも当て嵌まらない声。先程までの歌うような鳴き声とは似ても似つかない醜い声で。憐れみすら漂わせる声で。アルツアヒールの閃光から焼き爛れながらも這い出てくる天使が、不協和音を奏でる。

「リコリス、避ける！」

ヌービアムの直下。宙は墜ち行くヴェルトールの中で、天使が右腕を振り上げる瞬間を見逃さなかった。

「っ！？」

宙の声は遅い。天使の右腕が振り下ろされて、追従した重力塊がヌービアムを貫いた。装甲が砕け、拉げる音だけを残して、ヌービアムは地上へと落下していく。

「嘘、だろ！？」

なんという、ことだ。撃墜された。あのヌービアムが。そんな馬鹿な、という思考が駆け巡って。そのせいで、二発目の重力塊がこ

こちらに狙っていることに反応できなかった。

「宙さん！」

あずさの悲鳴と同時に放たれる重力塊。はつとして操縦桿を引くものの、タイミングが悪かったのか、中途半端な回避行動は、重力塊の軌道上にコックピットを剥き出しにしまっていた。IDOLの背部、頭部のすぐ後ろの位置。そこを、凶悪的な破壊力が抉り通って行った。

「きゃあああっ！！」

コックピットの天井が破られて空が垣間見えると、高高度の冷たい空気が突風となって流れ込んできた。慣性制御の保護を超えた衝撃に平衡感覚すらなくなる。瞳から光が失せ、破片を撒き散らしながら墜落するヴェルトール。

突然のG、落下の感覚に気を失いそうになりながらも、宙は自らの視界の中で見た。拉げたコックピット。破損箇所の間隙から覗く青い空。天使は苦しみながら逃げていく。ああ、逃げてしまふ。あれだけ過酷な戦いの結末が、これとは。

けれどそんなものはすぐに頭から吹き飛んだ。宙は目の当たりにする。サブコックピット。そこに座っているあずさを。彼女はそこにいる。そこにいるのに。

彼女からは鮮やかな赤い血が流れていて。あずさは一言も喋らない。

「あずさ、さん？」

冗談だろ、そんな。どうして彼女は傷ついて。自分の目の前で血を流して。

いなくなってしまう。

姉のように。また、自分の前から、大事な人がいなくなってしまう。

宙の脳裏にかつての記憶がフラッシュバックした。姉の葬式の風景。最後に言葉を交わした時の風景。それが、打ち碎かれた硝子のように割れて消えていく。嫌だ。宙は奇声さながらの叫びをあげた。

もう、一人にしないで。

「あずさぁ　　ッ!」

叫びも空しく、宙は地上へと墜ちていく。あずさの傷ついた姿が心を一杯に埋め尽くして。宙は墜ちていく。白い白い奈落の底へと。

第十四話 バスタルト

第十四話 バスタルト

「宙、また泣いているの？ 苛められたのね？」

優しく慰める、それでいて咎めるような声に宙は黙り込んだ。

天川マツリはいつもこんな感じだ。傷の痛みを優しく包み込みながらも、心の弱さを弾劾する意思も持ち合わせている。ただ困ったことに、まだ幼い宙にはその意図がよく分かっておらず、叱られているような気分になっていつも目を伏せるのだ。

俯いた宙に呆れ、マツリは腰に手を当てて溜息。宙より高い身長が屈み込み、上目遣いで視線を合わせてくる。均整の取れた輪郭に涼しげな目元が凜々しかった。そこに叱るような雰囲気はない。透明感のある力強い瞳が天川宙という弟を映している。

「どうして苛められたの？」

理由など毎度同じものだ。孤児であることを揶揄されてのものだった。

またなのね。いい加減聞き飽きたとばかりに嘆息するマツリ。捨てられっ子。親なし。何がおもしろいのか、特に取り得もないくせに調子に乗った連中は大抵そう言っただけでマツリ達をからかった。もっとも、マツリはそんな奴らを実力で屈服させてきたわけだが。

「何度も言っているでしょう、そんなことくらいで泣いているから馬鹿にされるのよ。親のいることがそんなに偉い？ 捨てられた私達は弱者なの？ 貶されるほど哀れ？ 違うでしょ、関係ないわ。それに私達にはおじいちゃんがいるじゃない」

マツリの言うことは少し難しい。カイエンは子供達に色んな知識を披露してくれるものだから、宙も同じ年の子供達より頭の回る方だ。けれどマツリは、学校の教師が舌を巻くほど頭脳明晰だった。

だからマツリの言う意味が少くらい分からなくても仕方がないと思っている。姉が自分を心配してくれていることだけは、感じられたから。

ほら、涙を拭きなさい。マツリが取り出したハンカチで涙を拭いてくれると、くしゃくしゃに歪んだ視界が元通りになって、彼女の綺麗な顔がよく見えた。長く伸ばした黒髪を結いでポニーテールにするのが、最近のお気に入りらしい。宙を見据える表情は、やはりその歳にしては大人びていた。

「もう大丈夫ね。さあ、家に帰りましょう」

屈んだ状態のマツリは、そのまま半回転して宙に背中を向ける。

「ほら、おんぶしてあげる」

頷き、マツリの首に手を回して背中に引付くと、軽々と宙をおぶってみせる。暖かい背中。誰よりも大きく見える、誇らしいまでの姿。

「少し重たくなったわね。宙もそれだけ成長したのか、お姉ちゃん
は嬉しいぞ」

「……うん」

「ん、元気がないわね。もしかしてまだ気にしているの？」

「なんだか眠い」

「いいよ、寝ても。そうね、子守唄も歌ってあげよう」

そう言っただけマツリは歌い出した。孤児院への帰り道、宙を背負う少女の歌声はどこまでも透き通って響き、数年後には日本中を虜にするカリスマ性の片鱗が垣間見えていた。心地良い歌声に包まれながら、宙は目蓋を閉じる。

懐かしい、今は遠い思い出。けれどもう、愛する彼女はどこにもいない。

「姉さん……」

意識が覚醒する。目を覚ます。

薄っすらと目蓋を開けると、最初に見たのは灰色のごつごつとした壁だった。それが岩の天井だと気づくまで時間がかかったのは、

まだ完全に眠りから覚めていないからだろう。横たえられた身体にはいつの間にか毛布までかかっている。

ここはどこだろう。ぼんやりと考えて、とりあえず起き上がろうと身体を動かした。が、身体は鉛のように重く、筋肉という筋肉が、動き方を忘れてしまったかのようなようだった。緩慢な動作で、なんとか上半身を起こすことに成功する。

周りを見渡すと、視界の範囲は全て岩だ。どうやら洞窟の中らしい。焚き火がぱちぱちと弾けており、暖色の炎が宙の顔を照らし出していた。

段々と左から右へ視界を移動させていくと、そこに人の姿を確認した。

長くて白い髪の女性。座り込んで何かをしているようだが、背中を向けているので顔を窺うことはできない。その後姿に、宙は自然と眩きを漏らしていた。

「マツリ姉さん？」

ぴたり、と。女性は動きを止めて振り返った。奇妙なバイザーで顔を隠したその人物に、宙は見覚えがある。彼女は気分が害したのか、不満気に眉根を吊り上げて宙を睨んだ。バイザーに隠れて見えなくとも、その視線には言い知れぬ重さがあった。

「残念だけど、私は坊やの姉じゃないわ。……ようやく起きたのね」「リコリス。あんた、なんで？」

そこではっとした。霞がかつた思考が急に晴れて、意識を手放す直前の記憶が脳裏を奔る。ヌービウムとの戦い。謎の天使の介入。共闘、死闘、撃破、撃墜。そして、血に塗れた大事な女性^{ひと}。

重たい身体を無視して、ぱっ！と毛布を払い除けて勢い良く立ち上がり、

「あずささんは！？ どうしてあんたがここにいる！」

手を振るって吐き散らした宙は、しかし全身を苛む痛みに呻くことになった。岩壁に身体を任せつつもリコリスからは目を離さない。睨まれたリコリスは立ち上がると、そんなに警戒しなくても大丈

夫よ、と両手を挙げてみせる。武器の類を持っていないようなので、宙は少し安心した。

この状況はどういうことだ。記憶を掘り返してみると、覚えているのは撃墜直後のことまで。ヴェルトールは、大地に刻まれた巨大なクレバスに墜落したのである。半ば慣性制御を失った状態での急速落下と地面に打ち付けられた衝撃で、宙は意識を刈り取られたのだ。

そこから先の記憶は欠如していて、如何せん、何故洞窟で寝ていたのは不明だった。どれほどの時間が経過しているのか。ヴェルトールはどうなったのか。不明な点が多過ぎて混乱してしまう。

「それはそうと、君は女性の前なのにその格好でいるわけ？」

なんてことをリコリスが言うので、首を傾げて自分の姿をよく見してみた。黄色を基調としたモンデンキントの耐寒服を着ていたはずなのに、目に映るのは肌色一色。ん？ と生まれたままの一糸纏わぬ自分の姿に疑問が駆け巡って止まなかったり。

簡潔に言うと言った。

「……なんで!？」

素直な感想は宙の心情を見事に表していた。笑いを堪えているリコリスの視線に気づき、見ないでー! と甲高い悲鳴をあげながら身体を抱く乙女な宙であった。

「悲鳴をあげるのは女である私の方じゃないかしら」

「うるさいうるさいうるさい! なんて俺は裸なんだ! 服は、服はどこに!？」

リコリスが指差す先に服が綺麗に畳まれている。先程まで宙が寝ていた場所のすぐ横だ。それくらいすぐに気づきなさい、とまで言われ顔まで真っ赤にして服を着る。

……散々な目に遭ってしまった。

「ケガがないか確認しただけよ。軽い打ち身で済んだのは幸いだっただね。……だけど彼女の方は少し危険な状態よ」

リコリスの足元には、もう一人のケガ人が横たわっている。頭に

包帯を巻いて、苦しそうな息遣いで眠りについているのは三浦あずさだ。その様子を見るなり宙は彼女の元に駆け、膝を着いて名前を呼ぶ。返事はない。

「運が悪かったのね、計器の破片が肩を刺し貫いていたわ。頭部にも裂傷がある。内臓が傷ついてもおかしくないわ。応急処置を施したとはいえ、私も素人だからね。今は鎮静剤で誤魔化しているけれど、予断を許さない状況よ」

「……俺達を助けてくれたのか？」

顔を上げてリコリスと視線を交わす。灰色を基調としたパイロツトスーツに身を包んでいるリコリスは、岩壁にもたれかかって腕を組んだ。どこから話せばいいかしら、とリコリスは思考して、

「あの天使に撃墜されて、私達はクレバスの裂け目に落下した。見れば分かるけれど、このクレバス、なかなか深いのよ。自力では上がれそうになくってね。ヌービウムもダメージが激しくて、現在機能停止中。再起動には時間がかかりそうだったから、仕方がなく外に探索しに出たの」

そこで墜落したヴェルトールを発見したのだ、とリコリスは言う。ヴェルトールも酷い損傷を負っていて、機能は停止していた。ふとリコリスは思い至った。これがヴェルトールを奪還する好機であると。

「まあ、私は生身で戦う訓練も受けていたし、素人の青臭い坊やと女相手なら、捻り潰すことなんて造作もないことだった」

「じゃあなんでそうしなかったんだ」

「……破壊されたコックピットには、意識のないマスターが二人。一人は明らかに重傷だった。私が何をするまでもなく、放っておけば勝手に死んだでしょうね。私はそう判断した。ええ、そう思ったわ」

リコリスの言葉が止まる。バイザーに隠された瞳は天井を仰ぎ見て、自分でもよく分からないといった様子で首を振った。自嘲気味に吊り上げた唇は何故か切なそうで、寂しそうにも思える。その物

憂げな表情は一体何を表しているのだろう。

「殺そうと思つたのにね。少なくとも、私は人殺しに躊躇いなんてないと思つていた。私は“生まれた時から”IDOLで戦うことを求められていたのだから。……何を言っているのかしら、私。饒舌過ぎるわ、話し過ぎ。関係ないことまで話している」

「リコリス？」

「何故助けたか、よね。素直に言うならば“分からない”かしら。傷だらけの坊や達を見て、気づけば助けようとコックピットから引つ張り上げていたの。そこでこの洞窟に運び込んだ。焚き火や毛布、それに包帯などはヌービウムとヴェルトールの収納スペースにあつた緊急用キットから拝借したわ」

言われてみれば、焚き火の元になつているのは枯れ枝ではなく発火ジェルだ。使つていた毛布もモンデンキントのロゴ入り。考えてもみれば、この雪の降り積もつたクレバスの奥底で枯れ枝なんか見つかるはずもないし、焚き火だけでは寒さに耐えることはできないだろう。リコリスの計らいは素直にありがたかつた。

しかしリコリスは敵だ。共闘したとはいえ、その関係が変わつたわけではない。もしかしたら理由もなく助けたというのは嘘で、何らかの意図があるのではないかと疑つてしまう。故に宙はリコリスの表情を細かに観察した。

己の行動に疑問を覚えている女性。東京で対峙した際にも感じた余裕や冷酷さが今は鳴りを潜め、代わりに表れているのは迷い。自問自答すればするほど深く嵌つて行くような疑問の沼だ。

観察眼に自信があるわけではないが、悩んでいる姿に偽りはないように思えた。もし、そうなのだとしたら、

「理由なんていらんじゃないか」

「それはどういう意味？」

「俺が、天使からあんたを助けた時の気持ちと同じだ。理由なんてない。なくても、結果、あんたは俺達を助けてくれた。少なくとも、気絶した俺達を目の当たりにした時、あんたは俺達を救おうとして

くれたんだ。心情がどうであれ。そのことに、俺は感謝してる。感謝してるんだ。それだけじゃだめなのか？」

「……まさか坊やに礼を言われるだなんてね」

「勘違いするなよ、別に和解しようとか考えているわけじゃない。ただ俺がそう感じたただけだから」

「素直じゃないのね」

「どうしても納得いかないのなら、借りを返したと思えばいい。又ービームを助けた借りが残っているからな」

「あら、それなら重力塊からヴェルトールを庇ったのでチャラではない？」

「その後にもう一度助けてやった。忘れるなよな」

そうだったかしら？ とわざとらしく微笑を浮かべるリコリスに、宙は癪に障ると思いつつも、内心どこかで安堵した。リコリスには飄々とした態度の方がイメージに合っている。あの又ービームのマスターがしおらしくなっているなんて、調子が狂うことこの上ない。

リコリスは吐息し、

「確かに理由なんてそれで十分ね。私も人間だもの、気紛れの一つや二つ起こすわ。そう、“私は人間だから”。その方が人間らしい」
くくつ、と喉を鳴らす笑いを漏らして、壁に預けた背を起こすリコリス。隅に置いてあった緊急用キットの中から携帯食料を宙に投げて寄越す。坊やも寝ていたんだから少し食べなさい。気を使われているのは悔しかったが、空腹には勝てないので素直に受け取っておいた。

「これ、あんまりおいしくないんだよな」

「栄養補給に重点を置いた代物だもの。味に期待するのはナンセンス」

リコリスはあずさの容態を確認。多少熱はあるが、悪化した様子はないと彼女は告げる。それなりに気をかけてくれているのかな、
と思ひ。宙は残った固形食をリコリスに差し出した。彼女はそれを

断る。

「私はスタンダードなタイプの“バスタルト”だからね。多少の空腹では苦にならないの。気にしなくて結構よ」

ふーん、と何気なく流した話題にバスタルトという知らない単語があつて、意味もなく頭に引っかけた。質問したのは、別段、理由もなかった。

「バスタルトってなんだ」

「……なんですって？」

途端、鋭い声で疑問が飛んだ。リコリスの姿に驚愕の様子が透けて見えて、その信じられないといった雰囲気、宙は思わずたじろぐ。何事だ。

「まさか、全て納得した上でモンデンキントに協力していると思っ
ていたのだけど。知らされていないの？」

「だ、だから何をだよ」

「……そう、そういうこと」

考え込む仕草を取ったリコリスは、無言をしばし続けた。妙な沈黙の中で、焚き火の燃える静かな音だけが洞窟の中に響いている。

自然では在り得ない病的なまでに白い長髪を背に流し、あずさに負けず劣らず起伏に富んだボディスタイル、素人でも分かる達人めいた身のこなし、そんなリコリスの姿を眺めていると、不意に彼女は口を開いた。

「一つ、確認を取りたいのだけど構わない？」

「渋るような内容でなければ」

「坊やはIDOLと話すことができる？」

「今更じゃないか。アイドルマスターなら、そんなの誰だって」

「いえ、違うわ。私が言っているのは“言葉を交わせるか”ということよ」

言葉を？ だからそんなこと、今更以外のなんだと言うのだ。

「もちろん。当たり前のことじゃないか」

携帯食料を最後の一欠片を飲み込みながら、宙は平然と応えて見

せた。ヴェルトールの助言には何度も掬われたし、基地での待機中もよく話す機会がある。でもそれは、アイドルマスターならば誰でもできることではないか。

そう、なるほど。平坦な口調で返すリコリスは、

「ちなみに私を含めて、他のマスターにはそんな芸当できないと思うわよ」

「……？」

首を傾げた宙に二の句を次がせず、リコリスはこう切り出した。

バスタルトについて何も知らないのだったわよね。

「いいわ、救難信号が仲間が届くまで時間がかかりそうだし。説明してあげる」

淡々と過ぎていく時間を潰すには、打ってつけの暗い話だ。

「バスタルトが如何に呪われた存在なのかを、ね」

如月千早の表情は優れない。

宙からプレゼントされた例の指輪を首から提げて、胸元で弄りながら、管制トレーラー内の壁に寄りかかっていた。不安だというオーラを撒き散らしながら。千早だけではない。ようやく合流を果たしたアイドルマスター達も皆、同様だった。

宙とあずさの行方が分からない。

グリムス山の麓、第三防衛ラインにアイドルマスター課の面々は集結している。テンペスタースを回収し終え、残すはヴェルトールのみとなったわけだが、依然宙達の話は不明のまま。無事の再会を素直に喜ぶこともできない。壮絶な戦いを繰り広げ、傷跡を刻んだIDOLを窓に臨みながら、千早は胸の苦しみに唇を噛んだ。

問題は山積みである。ヒエムスは未だ火山の底。噴火は収まり、IDOL達も再起動を開始したが、それは同時にトゥリアビータ側も行動可能になったという意味だ。しばらくすれば、また戦闘が始

まる。そして、

「ですから先程の噴火や地震でも分かるように、地下プレートはヒエムスの慣性制御によって抑えられているのです。ヒエムスが覚醒した今、それを無闇に回収するのは危険とリスクを伴います。

ええ、ですがこの国を見捨てるというのはあまりにも……。了解しました。……ではそのように」

沈痛な面持ちで本部との通信を切ったジョゼフ。本部から、これからの行動について言い渡されたはずである。彼の様子を伺う限り、良い回答が得られたとは思えない。ジョゼフが口を開くのを待っていると、眼鏡の位置を直しながら、彼は全員に向き直った。本部からの通達を伝えます。

「さて、少々厄介なことになりました。こちらを見てください」

モニターに表示されたのはアイスランド国土と関連するデータ群。アイスランドの状態を示すグラフのどれもが上昇と減少を繰り返し、安定していないのが印象的だった。特に、地下を通る海洋プレートのグラフの揺らめきが早急を不安にさせる。

案の定、ジョゼフが口にしたのは悪い報告であった。

「このグラフは現在の海洋プレートを表わしたものです。ご覧の通り、状態がとも不安定な状態で、ヒエムスが覚醒した影響だと推測されます。そして、それを踏まえた上でシミュレーションをした結果、最悪の事態が判明しました」

「最悪の事態？」

「二十年間、アイスランドでは地震が発生していない。と、いうことは説明してましたね。その長い間に抑えられていた莫大なエネルギーが、ヒエムス覚醒の影響で暴走を始めたのです。このままヒエムスを回収してしまうと、歯止めを失ったアイスランドは海に沈みます。私達と共に」

「ちよ、ちよっと待ってよ。コアの回収自体が問題って……。私達がここに来たのはそもそも無駄足だったって言うの？ どうしろってのよ！」

伊織の文句にジョゼフは、

「沈没を防ぐ手立てはありません。全IDOLのトリックハイトブリッヒャーで、慣性エネルギーをプレートとの接点にぶつけるのです。上手くいけば、暴走を阻止できるはず」

「本当に大丈夫なんでしょうね」

「あくまで確立の上ですが……」

それでもトウリアビータの行動が懸念される以上、ヒエムスの回収を最優先すべきだと言うのが本部の意向らしい。すでにアイスランド全島には避難勧告を発令済み。そして然る後にヒエムスを回収せよ、と。

「アイスランドを犠牲にしるってことですか？」

コアを手に入れるためならば島の一つや二つどうなっても構わないのか。いや、もしかしたら人が死ぬかもしれないのに。

そんなにコアが大事か。命を天秤に架けてまで。

「本部の命令である以上、残念ながら我々に拒否権はありません。ですが、被害を最小限に抑える努力はできます。それを全力でやりましょう」

全員を見渡しながらジョゼフは力強く言った。それしかない。自分達にできることは、コアを手に入れ、同時にアイスランドも救う、二つの結果を手に入れることしかない。それだけが唯一。

「では、ヴェルトルの搜索とヒエムスの回収、二組に分けることにします。インベルにはヴェルトルの搜索に向かっていただきませう。アイスランドの沈没を防ぐにはヴェルトルの力も必要不可欠です」

「はい！」

「了解しました」

「ネーブラとテンペスターは、マスターの疲労を考慮してパイロットを交代。ヒエムスの回収をお願いします」

さあ、正念場ですよ！ とジョゼフに促され、マスター達は各々のIDOLへと向かった。各々が本部の意向にわずかな疑問と反発

を覚えながらも、だが。

インベルのコックピットに乗り込みながら、千早は胸元で揺れる指輪の感触を確かめた。

「宙、大丈夫よね……」

「きつと大丈夫だよ。あずさんも一緒だもん」

本当にそうだろうか。春香に言葉を返すこともできず、息の詰まった現状に嘆息したまさにその時。小鳥からの通信が千早達の耳朶を売った。

『トウリアビータの機体反応を確認。残存部隊が、グリムス山に向けて進行を再開したわ。各IDOLは発進準備を！』

それは戦いへの号令。ヒエムスを巡る戦いに決着をつける時が来た。春香はその手にアイを持ち、千早と頷き合ってスロットに差し込む。起きてインベル、私達に力を貸して。動力の制限を解除され、コックピットの計器が次々と点灯を開始した。光を宿すインベルのカメラアイ。静まり返っていた駆動音が、生命の鼓動の如く唸りをあげる。

「インベル、起動完了！」

声は高らかに。千早は周辺の地図をモニターに表示すると、ヴェルトールが消えた区域をチェック。何も映さなかった部分が、今では段々と現れつつある。小鳥曰く、重力異常が収まりつつあるらしい。

「宙、待ってて」

告げ、果たすと誓い、インベルは雪を巻き上げながら発進した。脚部推進器の出力を可能な限り上げ、全速でポイントへ急行する。

ヴェルトールが消えた重力異常の中心点、結界。その境界内は、爆砕し抉られた大地が戦闘の形跡として残されていた。そしてわずかに計測される重力異常の残滓。コップの水の中に一滴落とされた濁りのように残る異常は、IDOLの慣性制御のそれに似ていた。この違和感、ヒエムスの影響だけではないはずだ。

「……ん、何か反応がある」

「あ、本当だ。これって救難信号？」

ばつと顔を見合わせる二人。この状況で救難信号を出すような人物は彼ら以外他にいない。

宙だ！ 宙ね！ 二人は笑顔を浮かべて言い合って、すぐにその信号の位置を特定する。信号が発信されているのは眼下に伺えるクレバス。その奥からだ。戦闘の際に墜落したのか。いや、考えるのは後回しにしよう。

二人はインベルを、クレバスに侵入させようとして 止まる。もう一つのIDOLの反応が、自分達と同様にクレバスへ進入しようとしていからだ。

「敵？ 光学センサーで！」

反応のある方向へカメラを向ける。発見する機影。くの字に曲がった逆間接の脚部に、六角形の両肩装甲。翠色の怪物的スタイル。間違いない、グリムス山の中で相対した新型の人工IDOLヒクリオン。

相手もこちらに気づいたのか、正面から対峙する形で二機は遭遇した。

『タイミング悪いなあ！ リファは忙しいの、遊ぶのはまた今度！』
あの時と同じ少女の声。ヒクリオンは戦闘態勢でインベルを威嚇しておきながら、次の瞬間クレバスに向かって垂直降下。どうやら戦うつもりはないらしい。

遊ぶのはまた今度。その物言いに、ふと思いつく。ヴェルトールが消えたのなら、戦っていたはずのヌービウムが行方不明になっ
ていてもおかしくない。

「まさか……！ 春香、行くわよ！」

同意はフットペダルを踏み倒すことで。ヒクリオンの後を追って、インベルもまた、クレバスの中へと飛び込んで行った。

宙は肌寒さを感じながら周囲を見渡した。岩壁と氷雪に囲まれた、太陽の光も薄れさせる谷底。地面は雪が積もり、城壁のようにそびえる岩壁で空がこんなにも小さくて遠い。まるで牢屋の鉄格子から空を見上げる囚人の心情。もしくは井の中の蛙だ。

脱出できないという意味では同じ、か。救助が来るのを待つしかないなと自己完結して、宙はヴェルトールの装甲をまた一步踏み締めた。

コックピットにある救急キットを取るため洞窟を抜け出した宙は、果たしてリコリスとあずさを二人きりにして平気だろうかと、ふと不安になった。休戦状態とはいえ敵対関係。しかし、宙が寝ている間も看病を続けてくれていたことや、そもそもあずさのために救急キットが必要とあらば断るわけにいかなかったのも事実。

だから宙はこうして、洞窟の近くで倒れていたヴェルトールの元まで来たのだ。

装甲は傷だらけ。コアも一時的な機能停止状態。人間が心臓なしでは生きられないように、IDOLもまたコアなしでは動くことができないのである。

「ごめんな、相棒」

こんなことになったのも自分の力不足だ。痛いほど冷たくなった装甲に触れて、宙は申し訳ない気持ちで一杯になった。自然に下がった視線が、地上を見下ろす。

高い。ヴェルトールの肩までロッククライミングよろしく這い上がってきた宙だったが、それは機体が倒れているからこそその芸当だ。そう、そうだ。この高さを、気絶した人間二人を抱えて降りることなど普通は無理。不可能なことだろう。

でも、リコリスはそれをやってのけた。バスタルトだから。

宙はリコリスとの会話を回想した。

「改造、人間？」

「チープな言い回しだけれど意味は間違っていないわね」

焚き火が宙とリコリスの顔を照らし出して影を作る。真剣な表情

だった。

昔話をしよう。かつてまだモンデンキントの一部門だったトゥリアビータに、二人の天才科学者がいた。その頃トゥリアビータが研究していたのは、空より飛来した謎の構造体。今で言うIDOLのコアだ。コアは、現在の科学技術を持つてしても解析の難しい未知の力を秘めた存在だった。

結果としてコアはIDOLという人型インターフェイスとなってドロップ迎撃という役割を与えられているが、コアの可能性は未だ未知数。その力に目をつけたトゥリアビータはコアをIDOLとして完成させるのとは別に、複数のプロジェクトを同時進行していた。「その一つがミシユリンク・プラン」

「聞いたことがある。あんた達が欲しがっているものの名前だ」
以前、月見島でジョゼフから聞いた事柄を思い出す。リコリスはうんと頷いて見せた。

「コアを解析していく初期段階で、それには無限に近いエネルギーが内包されていることをトゥリアビータは発見した」

それがIDOLを動かす永久機関の動力源となっているわけだが。同時に、コアが果たして如何様な存在なのか、その一端が判明したのだった。

この地球上に育まれている生命はカーボン生命体と呼ばれている。地球の生命体は大部分がカーボン^{II}炭素を中心に構築されており、これは炭素の持つ原子価が四つであり、多様な結合ができるからとされている。しかし、もう一つ炭素と同じ生命のようなものができるのではないか、と思われている物質がある。

それが珪素^{II}シリコンだ。だが元々それは想像の域を出ないものであり、シリコン生命体とは、使い古されたSF作品などに登場する架空の生命体として扱われるものであった。生命でありながら電子的な側面も併せ持ち、コンピューターに介入することもできるユニークな存在。それがシリコン生命体の想像図。

だが、ユニークをリアルに置き換える発見こそコアの存在であっ

た。地球を覆うオービタルリングから飛来したコアは、まさしくシリコン生命体と呼ばれるに相応しい特徴を有していることが分かったのだ。

地球上には存在しなかった要素ファクターが加わったことにより、新たな可能性がこの世に誕生した。

ミシユリンク・プラン。

二人の天才の一人“テル・ロウ”が人類の未来とコアの可能性を広げるために提唱し、オービタルリングに囲まれ宇宙への新たな可能性の追求を閉ざされた人類が、更なる“進化”を持って地球という枷を捨て、宇宙へと進出するための計画。

ミシユリンクとはすなわち、カーボン生命体である人類とシリコン生命体であるコアを融合させることで、あらゆる環境に対応できる新人類を誕生させることであった。それこそがテル・ロウの考え出した生命の可能性の探求であり。

今のトウリアビータが求める最終目標だ。

だが計画は失敗している。結局、人類は新たな段階に昇華することができなかつたのである。

「そうして残されたのはミシユリンクの失敗作だけだつた。私のような」

「……まさか失敗作つて」

「そうよ。バスタルトとは、ミシユリンクを目指して届かなかつた出来損ないのこと。あなたの言う改造人間。人間にもIDOLにもなれない、そのどちらでもないハイブリット。いえ、ただの中途半端なだけの哀れでどうしようもない、人の成れの果てよ」

「在り得ない、そんな馬鹿な話！」

生命の創造。自然の摂理レイルを離れた人工的な進化など、そんなものは人間のやつて良いことではない。

「そんなの、神の領域だ」

「だからこそ失敗したのよ。所詮、人間は人間だから。それ以上にそれ以下にもなれない。そのツケが私の身体に押し掛かつてはい

るけれど」

バスタルトは人間に比べて遥かに高い身体能力と、細胞の特殊化による不老を得ている。東京でリコリスが見せたIDOLの腕を走り上るといった芸当や、瞬間的な反応の速さは、全てバスタルトであるが故に為せる業だ。

けれど失敗作であることに代わりはない。驚異的な身体能力と不老の身体を得る代わり、大きな欠陥を身体に抱えている。それは

「……そろそろ戻らないと」

顔に吹きつけられた冷風に身体が震え、宙はいそいそとヴェルトールのコックピットに入り込んだ。

機体自体の損傷も酷いけれど、コックピットもなかなかだ。機器は衝撃とオーバードで焼き焦げているし、あちこちで配線が顔を覗かせている。動いてくれたら御の字だろう。これでよく生き残れたものだな。思つて、宙はぞつと背筋を振るわせた。

思考停止。今は救急キット最優先。

収納スペースがある場所に視線を向けると、すでにいくつか持ち出された形跡がある。リコリスだ。目的の救急キットはそのまま残されていた。それなりに大きいので、一緒に持ち出せなかったのだろう。

外に持ち出そうとすると、不意に目に入ったのは、あずさの座っていたサブパイロット席にこびりついた赤黒い汚れだった。苦虫を噛み潰したような表情になってしまつて、ちくしょう、と悪態を吐いて早々に飛び出す。

今度は下を見ながら下りるといふ恐怖を味わいながらなんとか地面に降り立って、深呼吸。そうして洞窟に歩き出したところで、リコリスが中から出て来るのが見えた。

「リコリス？」

何事だろうかと疑問を覚えた瞬間。

リコリスが力なく雪の上に倒れ伏した。

驚きに身体を硬直させるのもわずか。弾かれるように雪を後ろへ蹴り出して宙はリコリスの元に駆け寄った。白を通り越して青くなつた肌やだらりと投げ出された腕を見て只事ではないとすぐに分かった。今にも消え入りそうな彼女を抱き起こすと、

「……なんだ、坊やか。救急キットは取ってきた？」

「馬鹿野郎、自分の心配しろよ！ どうしちまったんだよ！」

身体は氷のように冷たくて、意識は朦朧とした感じなのに、救急キットは取ってきた？ なんて暢気なことを言う。その声でさえ、かろつじて搾り出したような蚊の鳴くような細さだ。起き上がろうとして起き上がれない、自分の異常に溜息を漏らしたりリコリス。

「相変わらず欠陥品はダメね。もう少しくらい、平気だと思つたのに」

「バスタルトの欠陥、かよ」

そう聞いていた。出来損ないであるバスタルトは代謝機能に大きな欠陥を抱えており、環境の変化に対応することができない。定期的に活性化剤を投与しなければ機能不全を引き起こし死に至る。

ミシュリンクとはあらゆる環境に対応できる新人類の雛形。環境に対応できないバスタルトとは真逆の存在。ミシュリンクに至ろうとして、失敗し、人類ともIDOLともなれない曖昧な存在となつてしまったバスタルトは、果たして人間と言えるのだろうか。リコリスの答えはノーだった。バスタルトは人間ではない。

このno bodyノーボディやan birthアンバースとも言える身体はね、意外と便利よ。銃で撃たれても簡単に死なないし、驚異的な性能は他者を圧倒できるしね。

そうは言うけれど。彼女はそう言うけれど。でもこんなところを見せられて便利も何もあるものか。

「馬鹿だよ。つくづく馬鹿だよ」

こんな状態になってまで飄々とした態度を続けようとするリコリスも。

敵なのに。心底心配をしている自分も。

「死ぬなよ。目の前で死なれたら後味が悪い」

「……心配してくれているの？」

びつくりだわ、と薄く笑うリコリスはこのままでは本当に死んでしまいそうだった。

「そんな身体。あんた達トウリアビータは、命を弄繰り回してまで、そんなにミシユリンクが欲しいのかよ。なんで俺にあんな話をしたんだ」

あんな怖い話。震える拳がリコリスの冷たい手に触れた。

「……坊やが無関係ではないからよ」

「えっ」

「トウリアビータはモンデンキントの一部門だった。考えて御覧なさい」

全ては繋がっている。ここに天川宙という人間がいるのも全ては必然なのだ、と。リコリスは掠れる声で何かを伝えようとしている。

「坊やはモンデンキントに騙されている。本当は」

言葉の途中で、リコリスが苦しげに身を擦った。抱き上げる宙には何もできない。バスタルトの欠陥とやらが致命的なものであるならば、このままでは間違いなくリコリスの命はない。活性化剤が必要だった。

「薬あんだろ、活性化剤。それどこだよ！」

「無駄……よ。ヌービウムが墜落した時に……ダメになったもの」だからこうなる危険を冒して外に出た。助かる糸口を探して、生き残るために。でも逆に宙達を助けようとして余計に体力を使ってしまった。これはリコリス自身の責任だ。それを承知で宙達を助けたのだから。

「じゃあどうすればいいんだよ！」

衰弱した彼女はもう反応を返してこない。荒れた吐息のリズムは、必死に生きようとする彼女の心臓の鼓動そのものだった。死にたくない。宙には確かにそう聞こえたのだった。

命の灯火を小さくするリコリスに、宙は言い知れない感情を覚え

た。どうして彼女を助けようとしているのか。天使との戦闘の時も、ヌービームを庇う理由なんてなかった。適当な理由のこじつけで自分を納得させていたのだ。真つ当な理由ではない。

おかしい話だ。宙もリコリスも、お互いを助けようとする理由が分からないなんて。

……いいはずだ、理由がなくても。人間はそういう生き物だろうが。

行動するためにいちいち道理がなくてはいけないのなら、それは人間ではなく機械だ。人にも善悪、損得勘定があっても、時には心の赴くままにやりたいことをやることだってある。宙にとって、リコリスを助けるといえるのがそれなのだ。

「でもなんにもできないじゃないか！」
自分は無力だ。

ところが、唇を噛み締めた宙の身体は、上から舞い降りてきた突如の強風に煽られた。

「風？ いや、これは……！」

見上げた先で、宙は目撃した。翠色の巨体、膨れ上がった肩、逆関節の足。単眼が睨みつけるような光を放ち、宙の真上に舞い降りて来た。宙が敵の大群の中で目撃した新型人工IDOLの一体だ。

『リコリス、大丈夫なの？ 助けに来たよ、返事して！』

機体から流れる幼い少女の声。一度聞いたことのある声だ。確かヴェルトールに初めて出会った波止場で、エピメテウスに乗っていた少女の声。

「あの時の！」

『お兄ちゃんはヴェルトールのマスターだった人！』

遭遇、再会。このタイミングで救助が来たのは幸か不幸か。リコリスの言っていた救難信号が届いたのだろうか。リコリスの手に握られていた携帯端末の発光がそれを証拠付けていた。きっと仲間の接近を知って洞窟から出て来たのだろう。呻く声を殺しながら、リコリスは宙の腕の中で言葉を紡ぐ。

「どうやら先に、私の仲間が来たみたいね。協力関係もこれでお終いかしら」

「あんまり喋るな。けど良かった、あんた助かるぞ」

「ありがとう。……それと、さようなら」

「……っ！」

疑問と同時、宙はどんつと突き飛ばされた。病人だというのに、その力のなんと強いことか。二回転くらい地面を転がって吹っ飛ばされた宙は雪まみれになって立ち上がった。何しやがる！ 雪を振り払いながら怒鳴った宙の眼前。

鋭く空気を切り裂いて投擲された斧が落ちてきた。

「リコリスに近づくな！」

ばっ、と。直感的に横に転がったのは正解だった。次の瞬間には、追撃で、金髪の変わった髪型をした少女が飛び降りて来たのだから頭ごと踏み潰さんばかりの豪快な着地。大の大人でも竦みそうな威圧の視線を放つ少女は、あんなに高いIDOLのコックピットから飛んできたのか。

バスタルト。この子といいリコリスといい、トウリアビータは万国びつくり人間ショーでも開催しているに違いない。

「斧まで持ち出すのはやりすぎよ。もう少し女の子らしくしなさいな」

「そんなことどうだっていいよ！ リコリスは大丈夫なの？ ねえ、苦しそっだよ」

「ええ、大丈夫よりファ。活性化剤さえ投与すればすぐに……」
リコリスの身体が、またグラリと傾く。思わず支えようとした宙はリファの威嚇にびくりと止まった。首なんて簡単に斬れそうな斧を突きつけられたらいくらなんでも止まるしかない。宙の代わりにリコリスの身体を支えたのはリファだ。

その時、リコリスの着けていたバイザーが外れて雪に刺さる。彼女の長い髪が顔を隠し、病的な姿が余計に酷く映って、もはや死者のようだ。

「おい、リコリスの容態は」

「こつちに来ないで。本当はヴェルトールとあんたにも来てもらいたいけど、今はリコリスの方が大事。だから見逃してあげる！」

見逃す、見逃すと。リコリスもリファも毎回人を見逃すと言う。

少々苛立ちを覚える宙だったが、リファ達の背後に降りてきた翠色のIDOLがそれを邪魔する。雪の上に膝を着き、巨人の手の平が二人を向かい入れる様に差し伸ばされて。

「リファ、ここから少し離れた場所に、ヌービウムが……」

「うん、でも時間がないの。インベルが追って来てて、すぐに逃げなくちゃ」

インベルが来ている。これで自分達も助かる。安堵が身体の凍えを和らげた気がして、何もかも納得する気持ちが強くなった。ここでリコリスを行かせれば、いずれまた、どこかで戦うことになるかもしれないけれど。今はこれで良いように思えた。

坊やはモンデンキントに騙されている。その言葉の真意が小さなしこりとなって釈然としなかったが、だ。

IDOLの手の平に乗るリコリスとリファ。吹く突風、見送る宙。そして、その瞬間だった。

リコリスの髪が風に流されて、その瞳と目が合ったのは。

「
リコリスの素顔は美女という表現に負けなくらい美しかった。

そうではない。自分はその姿を知っていた。知らないはずがない、忘れるわけがない。

瞳は日系離れた赤色なのに、その違和感を感じさせないのはその美貌が故か。 違う、彼女の瞳はそんな色じゃない。いつも宙を見つめていた瞳は、そんな色じゃ。

病的なまでの白い髪に赤い色の瞳。今の蒼白な肌色と相まって、それはこの世のものではない美しさを誇っている。まるで青い薔薇。 そうだ、この世のものではない。だって、だって、だって。

言葉が出ない。思考が麻痺している。この引き伸ばされた時間は

一体なんだ。自分は一体何を見ているのか。見てしまっているんだ。自分は何故“この人”と目を合わせているのか。分からない、判らない、解らない。誰か教えてくれ、これは幻なのか。

不思議だった。何故、初めての共闘であそこまで息が合ったのか。まるでお互いの癖すらも熟知したかのような、完全に呼吸の合った連携。頭の片隅で引っかかりながらも、天使との戦いに集中して無視していた。

些細な引っかかりは以前からあった。特に二週間前の事件の時だ。何気なく話しかけてきたリコリスに、まるで古い知り合いのような親しみを感じた。彼女を無意識に庇おうとしたのだから、もしかしてなんとなく“あの人の雰囲気”を感じ取っていたからではないのか？

突拍子がない。支離滅裂。息が苦しい。

ギシギシと、何かが軋んで壊れていく音がする。

最初に会った時の親近感も、共闘の連携も、理由があつたとしたら。もし、本当に昔から知っている人だったら。もし、互いの些細な癖や思考すらも理解しているような仲だったら。もし、宙がずっと追い続けてきた人だったとしたら！

「嘘だろ？」

目を見開いて、裏返って出た声。彼女は、宙の知っている姿とはだいぶ変わってしまった。白い髪、赤い瞳、日本人離れたそれら。でも意識の奥底にある天川宙という存在そのものが訴えている。彼女は本物だと。

どうして今まで気づかなかったのだろう。そのことに大きなショックを受けて。

嬉しいとか、悲しいとか、そういう感情すら浮かばなくて。

宙は、現れた現実を自分で口にした。

「マツリ姉さん……」

その瞬間、音をたてて宙を形成する何かが砕け散った。

第十五話 フェイクワールド

第十五話 フェイクワールド

刹那、装甲を問答無用で断つ斬撃が迸った。

トゥリアビータが新鋭機ヒスバルトの音速加速による一撃である。本来の得物である刀剣を失っても、五指に装備された鋭爪だけでも十分な切れ味だ。慣性制御によって威力を増大させた爪の一掻きは、硬さを問わずそこに在るものを容赦なく切り裂いてしまう。無論、ネーブラとテンペスターは回避を選択。間一髪のところであり過ぎず。

強張った雪歩の頬に汗が伝った。新型機の実在は聞き及んでいたが、実際に相手取った時の緊張は計り知れないものがある。それが実戦であり、戦場の空気だ。

現在ネーブラとテンペスターに乗ってトゥリアビータの迎撃に回っているのは、雪歩と真、そして双海姉妹のコンビである。

ネーブラとテンペスターは適応するマスターの人数が多いため、疲労を考慮してのパイロット交代という措置が可能なのであった。逆にインベルやヴェルトールはマスターが限定されているので、特定の状況で運用し辛い面がある。

さておき、多数の人工IDOLを相手にしながら雪歩は決意していた。ここは絶対に通さない、と。ここグリムス山の頂を越えられず、とヒエムスまで直行コース。例え一体でも通してしまえば、その隙間に敵が雪崩れ込んで来るだろう。そこでモンデンキントの敗北が決定してしまう。

故に萩原雪歩は頑なに決意を体現し続けている。

彼女はあの夏の日から多くを学んだ。大切なのは自分を信じてあげること。そして、それを支えてくれる仲間が傍に居ることだ。雪

歩に自身の在り方を教えた天川宙は、今はいない。戦いの中、彼とあずさの安否が唯一気がかりだった。

……ううん、今はここを守ることを考えないと。

少しは自信が持てるようになったかな、と。己の胸に問いかける行為の代わりに、もちろんと代弁するネーブラの拳がエピメテウスの顔面を殴り飛ばす。ひゅうつ、と調子の良い口笛を吹く真。かっこいいじゃないか、雪歩。

「あ、ありがとう真ちゃん」

「これは亜美達も負けてられないね！ 真美、あれをやるかね、やつちゃうかね？」

「よろしい！ 見せてやるう、テンペスタースの超ウルトラレンジヤラスーパーゴージャスアトミックな必殺技を！」

うつふつふつ、と奇妙な笑い声をあげて亜美と真美の駆るテンペスタースがネーブラの前に出た。亜美、真美、前に出過ぎだぞ！

真の忠告も右から左へ聞き流し空高く上昇したテンペスタース。そのまま空中で“余計な”一回転の後、片足を眼下に向かって突き出し重力殻を最大展開。瞬間的な停止、そして、

「これぞ必殺！」

「テンペスタースキッタークウ！！」

必殺技を叫ぶのはお約束。上空からライダーキックよろしく急降下を敢行したテンペスタースは、その軌道上に慣性制御で形成した重力波を残しながら敵機を爆散させていく。

一直線に斜め一文字を描く姿は弾丸のそれだ。大仰な技名に負けず劣らず威力も申し分ない、まさに必殺技である。

「どうどう！？ 今の格好良かったでしょ！」

「確かにカッコイイ……じゃない！ 防衛ラインを手薄にしたら意味がないんだつてば！」

真がモニターの双海姉妹に向かって説教を飛ばす。わあ、まこちんが怒った！ 真面目にやれー！ 無数の敵に囲まれてこんな会話ができるのだから三人とも大した度胸である。雪歩なんて、さつき

から敵に集中するだけで精一杯なのだが。

とはいえ、ふざけた調子の亜美と真美も決してエピメテウスに後れを取ったりしない。

ことテンペスターの操縦において双海姉妹は群を抜いている。サブウェポンとしてレーザー砲台を装備するテンペスターは火器管制と機体操作の役割分担が顕著であり、マスター同士の連携の真価が問われる。その点、双子である彼女達のシンクロはアイドルマスター随一だ。完全な阿吽の呼吸を可能とする。

今まさに左右同時から襲い掛かってきたエピメテウスを、レーザー砲台と近接格闘で一度に別個撃破して見せたのが良い証拠だろう。二人乗りというモンデンキントのIDOLの特徴をもっとも引き出しているのは、間違いなくこの二人に違いない。

防衛戦はすでに終結へと近づいている。両陣営とも先の戦闘で疲弊し、ほとんど泥沼の消耗戦だ。IDOL達の装甲は傷だらけ。機体の各部で無理が祟ってエラーが絶えない。

トゥリアビータも戦力の大部分が削られその数も残り少ない。ネーブラとテンペスターの壁を突破する余力もないのか、一進一退を繰り返している様子だ。

……本当にもう力が残っていないのかな？

雪歩は小首を傾げた。あれだけヒエムス争奪に全力を挙げていたトゥリアビータが、最後の最後で消極的な戦闘。戦力のほぼ全てが無人なのだから、自爆覚悟の特攻を仕掛けて来てもおかしくないはずなのに、その場に踏み止まるような戦い方。

違和感。

そう、トゥリアビータの戦い方は、まるで時間を稼いでいるようにも思える。

そういえば敵の新型は三機だと聞いている。ここにいるのはヒスバルトのみ。残りの二機の行方が気になった。すでに戦える状態ではないのか、あるいは。。。

まさか陽動？

「いや、それはないよ。火口の周辺は見渡しが良いし、僕達の目を盗めるような障害物もない。別の反応があれば索敵機器が反応するはずだ」

考え過ぎだよ。そうなのかな、と声を小さくする雪歩。それならば何の問題もないだろうが、ささくれのような不安がどうにも拭えなかった。

もし自分が相手の立場ならこの泥沼な状況に臆して逃げているかもしれない。そんな弱気な考えが浮かんで、また悪い方向に考えていると自己嫌悪。穴があつたら入りたい。いや、地面があつたら自ら掘って埋まる。それが雪歩クオリティであり。

そんな些細な自問自答が突然の閃きを呼ぶ結果になるとは誰も思っ
うまい。

……穴を、掘る？

雪歩は眼下に広がる風景に視線を落とした。一面雪に覆われた広く白い大地。無数の亀裂、クレバスと、小規模な山々。その起伏のいくつかはグリムス山と同様の火山だ。それ以外は障害物もなく遠くまで見通せる俯瞰風景。身を隠せるような場所は確かにないように思える。

かちりつ、と。複雑な形状で絡み合うパズルが完全な形となって噛み合った。組み合わせさせたパズルが描き出すのは、トゥリアビータという敵の微笑。

さつと血の気が引いた雪歩は叫んだ。

「小鳥さん、地面の下です！ 下をスキャンできますか!？」

『地面の下? ……まずい、その手がっ!』

飛び込んできた言葉の意味を、管制トレーラーの小鳥は即座に理解した。

してやられた! モニターの向こうで小鳥が表情を歪める。送信されてくる情報は、火山の中に二つの反応を示していた。一つはヒエムスのもの。そしてもう一つは、間違いなく人工IDOLのものだ。機体照合、既存のデータバンクに情報なし。 新規情報と照

合。トゥリアビータ新型機ヒドルンと推定。

表示される文字に視線を走らせて、アイドルマスターの一同は言葉葉を失った。

『どどど、どういうこと！？ 亜美達は一体もここ通してないよ！』
『そうだよそうだよ！ なんで火山の中に敵がいるのさ、意味不明！』

亜美と真美の訴えはもつともである。ただ、この火山地帯の特徴を利用したトゥリアビータが一枚上手だったのだ。

そも、グリムス山は“どこの上に存在しているのか”。無論、大地の“上”にである。では“下”には何があるだろう。

グリムス山を中心とした小規模な火山群は、地下のマグマ貯まりを通じて繋がっているのだった。IDOLの重力殻ならば、マグマにも負けず、そこを通過してグリムス山の中に侵入することもできよう。

迂闊だったと、言わざるを得ない。

『作戦を変更、急いでヒドルンを阻止してください！』

ジョゼフの指示に機体を急ターンさせ、火口に突入するべく加速する二機のIDOL。だが、

『させぬ！』

斬撃一閃。持ち前の高速機動で二機の前に立ち塞がったのは、もちろんヒスバルトに他ならない。やはりヒスバルトとエピメテウスは陽動。まんまと乗せられた悔しさを感じつつ、雪歩はヒスバルトへ突撃した。手の平で踊らされたままだなんて、宙に笑われてしまうではないか。

『お願い、退いてください！』

『退けぬ。貴公達をここで足止めするのが我が役目』

ネーブラの拳を、ヒスバルトは肩のバーニアで平行移動、これを回避。三次元的なアクロバティック機動でネーブラの背後に回り込むと、レイヤーごと装甲を刻まんと爪を振るう。雪歩は瞬間的判断、背後に向かって機体を捻り、遠心力を乗せた裏拳をヒスバルトに叩

き込む。攻撃の交差は互いの装甲を削り火花を散らす。

「急がないといけないのに！」

「隙を見せたのが運の尽き。騙し討ちとは少々無粋ではあるが、な
！」

蹴り。細足から繰り出される、しかし重い一撃だ。防戦から一転、決して進ませぬと不退転の覚悟で攻撃を開始するトウリアビータ。

私だつてがんばればできるんだ！ 自分に言い聞かせて、雪歩はヒスバルトに向かって行く。

負けたくない、思った。勝ち負けなんて決めることさえ苦手で、いつも縮こまっていた自分が、誰かに勝ちたいと強く願っている。

宙ならばそれを成長と呼ぶだろう。一歩ずつ、でも確かに進んでいる。

変われるのだと思う。私は変われるのだと思う。弱気な自分から強い自分へ。だからこの戦い、絶対負けたくない。変化を求め全力を尽くす雪歩は、そう思っていることこそ、すでに変わった証拠だということにも気づかず。道を阻むヒスバルトと死闘を繰り広げるおそらく、この時間は成長した彼女にとって最初の舞台なのだろう。

ただ、残念なことに。それが敗北で終わってしまうという事実が惜しい。

次の瞬間、衝撃を孕んだ光が世界に溢れた。

ヒエムスが、開放される。

「……マツリ姉さん？」

天宇宙の声が震えた。呆然とした表情で一点を見つめる青年の瞳には、たった一人の女性だけが映し出されている。ヒクリオンの手の平に乗ったりコリス、その人が。

彼女の素顔を目撃した瞬間、宙の中で時間が止まった。否、逆行した。凍てつく風の音も、ヒクリオンの駆動音も、全ては意識の外へと排除され。記憶という自己を構成する欠片が脳裏で弾け、最果

での記憶まで　あの日、捨てられた自分に姉ができるその瞬間までの記憶が　走馬灯のように流れた。

宙の姉、天川マツリ。どこまでも気高く、美しく、そして強かった、愛しい人。ああ、そうだ、彼女は死んだ。死んだのだ。死んだ、はずなのに。

どうして彼女は自分の目の前にいるのだろうか。

「姉さん？」

今一度問いかける。確信を得ない空虚な声色。これは幻、夢なんじゃないかと疑ってしまう。死者は決して生き返らない。だから死んだはずのマツリがここにいるはずがないのだと、宙は思った。

だが、敬愛した姉の姿を間違うはずなどない。彼女は間違いなく天川マツリだ。

「なんで、なんで姉さんが生きているの！」

追い続けるように手を伸ばした先、リコリスは振り返った。白い髪と赤い瞳。どちらも非凡なれど、その容姿は天川マツリその人に他ならない。リコリスは手を伸ばす宙を見て、瞳にとっても悲しそうな陰りを見せた。今まで感じていた大切なものが瓦解していくのを目の当たりにしているような、ひどく切なくやり切れない表情。

いまだ肩で息をするリコリスは、

「君も私をそう呼ぶのね……」

落胆とも取れる言葉の中には、ある種の決別を感じさせる雰囲気があった。それだけ言うとりコリスは背を向けて振り返らなかつた。もう未練はないと言わんばかりに。何度呼んでも、叫んでも、もう二度と振り返らない。その場を離れようとするヒクリオンがゆっくりと空中に浮き上がった。

「いいよ、ヒクリオン、行って！　ほら、インベルが来た！」

リファが指差す先には白い巨影。インベルは宙の姿をすぐに認識した。立ち尽くす仲間と膝を着いた敵機。当然、春香と千早はあまり良い状況と思わないだろう。インベルは瞬間加速、突風を撒き散らしながらヒクリオンと宙の間に割って入った。

「宙、無事でよかったわ！」

喜びの色が濃く表れた千早の声。探したんだよ！ と春香。二人は宙が無事だったことを喜んで、生身の宙を守るようにヒクリオンに立ち塞がった。どんっ、と盛大に着地して宙の視界を遮った巨体ところが、

「邪魔すんな、そこを退け！！」

宙を助けようとした二人が浴びたのは、怒りに満ちた宙の叫声だった。それこそ、憎しみの塊を叩きつけるような怒号。思わぬ反応に状況を理解できない当の二人は、顔を見合わせてぽかんと口を開けたまま、硬直した。敵が目の前にいる以上、宙が危険な状況に変わらないはずなのだから。

痺れを切らし、宙は舌打ちと同時にインベルの足元を走り抜けた。危ない？ そんなこと関係ない。宙の心を埋め尽くしていたのは、亡くなったはずの姉の姿だけだったのである。

「ヒクリオン、今の内に逃げて！ リコリスを早く安全な所に！」
「待ってくれ！ 待って！」

リファの命令に従ってヒクリオンは上昇を開始。宙の安全が最優先だと判断し、手を出さないと決めた千早達の判断とは裏腹に、当の本人はヒクリオンを追って行く。悲痛なまでに叫びながら、ひたすら嘆願し、手を伸ばす宙の言葉はリコリスには届かない。いつの間にか宙は泣いていた。

「待ってよ……！！」

もう掠れた声しか出ない。次の瞬間には、足がもつれて雪の上に転がった。情けない。無様だ。でも、こんな無様を晒してでも、亡くなったはずの姉が目の前に現れたら格好なんて明後日の方向だ。幻なんかじゃない。彼女は生きていた。

事實は既存の現実をぶち壊したのだ。故に追う。失った大切な人を。

必死に起き上がって、宙は五指を開いて手を伸ばした。もう点としか映らない遠くのヒクリオンに、リコリスに向かって、くしゃく

しゃに歪めた表情で頬を濡らしながら、叫んだ。待つて、と。

「置いて行かないで、一人にしないで！！」

声は、届かない。彼女は行ってしまった、宙に振り返ることもなく。

無言、静寂。しばらく、虚空を掴んだままじつと動かなかった宙は、やがて手をぶらりと落とした。雪に膝を埋めたまま、嗚咽を漏らしながら天を見上げる。

分らないことが多過ぎて頭が混乱した。最愛の人が生きていたという、漠然とした現実が宙の意識から外界を吹っ飛ばして。だからだろう、自分の肩に手が置かれるまで千早がインベルから降りて来ていたことに気づけなかった。

「如月？」

千早は目尻を下げて心配そうに宙を覗き込んでいる。しゃがみ込み、視線を合わせた。

「心配したわ。ケガはない？」

身を案じてくれる優しい音色。まるで上品な楽器を思わせる綺麗な声に　ふと、言い知れぬ黒い感情が込み上げてきた。灼熱色を帯びたそれはあまりに唐突過ぎて、宙自身それを諫める術も知らず、爆発的な勢いで波紋を広げる感情が制御できない。

キツ、と凄まじい形相で千早を睨む。そのまま彼女の腕を掴むと力任せに地面に押しつけた。短い悲鳴をあげて倒れ込む千早に、宙は言った。

「おまえさえ邪魔しなければあの人と話せたかもしれないのに！もつと顔を見れたかもしれないのに！　邪魔だって言ったじゃないか！」

「い、痛い！　やめて、嫌！！」

それが自分勝手な八つ当たりだという考えにすら及ばなかった。ただ無性にこいつが憎い。涙が千早の頬に落ち、奇声さながらの罵詈雑言を吐いて、終いには千早の首に手を掛けた。ひゅうつ、というか細い呼吸の音。細くて白い女の首など簡単に押し折れるのだ。

ぐつと力を込めれば、それでこの女の耳障りな悲鳴を聞くこともなくなる。

過激な思考が宙を支配しかけた時、宙の身体は突然の衝撃に突き飛ばされた。

千早の後を追って来た春香だ。咄嗟の行動だった。今の宙は正気ではない。故に千早から遠ざける。そうしなければ千早が本当に殺されてしまいそうだったから。目尻に涙を浮かべて、春香は立ち上がろうとする宙をもう一度突き飛ばし、

「バカ宙！ どうしてそんなことするの！ 千早ちゃんがどれだけ宙のこと心配したか知ってる！？ それなのに首を絞めるなんて、普通じゃないよ、どうしちゃったの！？」

普通じゃない。春香の言葉に、尻餅をついたまま千早を見る。ゆつくりと起き上がりながら咳き込む千早はとても苦しそう。首にはうつすらと赤い手形が残っており、その時になって初めて、宙は自分の行動に愕然となった。あと一歩で人の命を奪っていたかもしれないのだから。

血の気が引いてようやく冷静さを取り戻した思考は、怯えた表情の千早を認識した。

「お、俺は人を殺しそうになった？」

心の中に自力では飼い慣らせない何かが棲んでいることに気づいたのは、おそらくこの時が初めてだっただろう。それが顔を出した激昂の刹那で人を殺められる人間なのだ、自分は。こんなもの、姉の命を奪ったトウリアビータよりも質が悪い。己の異常性、復讐を求める天宇宙の本質が顕れた気がして、とても怖くなった。

一度にたくさんのが起こり過ぎる。頭を抱えて身体を丸めた様々な色の混じった現実が宙を押し潰そうとしている。重圧に、もう、堪えられそうにない。息苦しく、深海の中で足掻いているような錯覚すら覚える。

絶望の海に沈みかけた。けれど、それを強引に引き摺り上げる手があった。

胸倉を掴まれて顔を上げたところで頬に面で痛みが来た。
平手だ。

「泣かないで！」

それは如月千早だった。怯えた表情に混じる吊り上げた眉と揺れる瞳が、かろうじて平静さを作っている。

「立って」

「如月……」

「立ちなさい！」

強い口調だ。有無を言わさない。クールな彼女がこんなに感情的になってるのは初めて見る。傍で春香も面食らっていた。意外な一面に気圧されたのか、驚いて素直に立ち上がった宙。二人が向かい合うと、言葉が来た。

「今この瞬間も萩原さん達は戦っている。ヒエムスのコアを回収するために。男は度胸なんですよ？ だったら言葉通り度胸を見せて！」

目を覚ましなさい！ 一喝。

「時間がないの。あなたとあずささんの力が必要なのよ」

「あずささん……。そうだ、あずささんが！」

三浦あずさ。彼女のことが頭に浮かんだ途端、冷水を浴びたように意識が鮮明になった。

あずさはまだ洞窟の中で寝ているはずだ。応急処置をしたとはいえ、重症であることに変わりはない。ぐるぐるとまた疼き出す記憶を気合で打ち消し、重い口を開いて経緯を説明した。正体不明の敵から襲撃を受けたこと。ヌービウムと共にクレバスに墜落したこと。負傷した自分達をリコリスが手当てしてくれていたこと。

自分が見たりリコリスの素顔については詳細を伏せた。今掘り返せばまた頭がややこしくなる。

まずあずさの手当てが必要だ。そう言うと、千早は手を顎に当ててわずかに思考。しばらくして、別行動を取りましよう、と意見を出した。続けて千早の口から現状が説明される。アイスランドが危

ない。

「宙はジョゼフ課長達の所まで戻って。あずさを預けてから合流しましょう。ヴェルトールは動く？」

「まだ眠ってる。インベルのエネルギーを少し分けてくれれば、それを起爆剤に起こせると思う。おまえ達はどうするんだ」

「私に考えがあるの。春香、手伝ってくれる？」

「うん！　じゃあ、善は急げだね。……宙は大丈夫？」

春香の視線を直視はできなかった。平気さ。そう答えるのがやつとの有様だったけれど、あずさの身を案じている内は自分を保っていられた。だから今は大丈夫。今は。

三人は頷き合って駆け出す。宙は洞窟へ、千早と春香はインベルへ。

洞窟に戻ると、鎮静剤を打たれて眠っているあずさの横に膝を着いた。傷つけてしまった心の恩人。虚ろな瞳であずさを眺めると、早くここから出よう、と心が急かした。あずさを抱き上げて寒くないように毛布を巻いてやる。

さつきから涙が止まらない。もしかしたら涙腺が壊れてしまったのかも。

壊れる、壊れたというのなら今の自分そのものが壊れている。心がごちゃごちゃで、呼吸だって苦しい。もしできるのならば、この極寒の地で永遠に氷漬けになってしまいたい。そうすれば何も考えずに済むのだから。

リコリスの正体。たった一つの出来事が宙を狂わせる。生きていてくれた喜び、そして戸惑い。千早を殺そうとさえした自分の狂気本性。いっそ本当にイカれてしまえば苦しむことなどないのだろうか。ああ、涙が止まらない。

と、宙は不意に手の平に温かな感触を得た。見れば、眠っているはずのあずさの手が、包み込むように宙の手を握っていた。無論、あずさに意識はない。それが無意識のもので、どのような意味を持っていたのかは定かではない。ただ理解できたのは、慰めるように

伝わってくる柔肌の感触だけだ。

「俺はどうするべきなんだ……」

復讐の相手が仇を取るべき人だった。こんな茶番があって堪るものか。

胸にぽっかりと空いた穴が 使い古された表現ではあるけれど、使い古されるだけの理由がある。穴は深淵だ。これほど重い表現はない 再び開いた。

洞窟の外に出ればヴェルトールが待っている。宙がすべきことはあずさを安全な場所に送り届け、トゥリアビータとの戦いを終わらせること。理解しているのに、宙はひたすら悩んでいた。進んでいた道の先が崖で途切れていた無慈悲さに嘆きながら。

まだ取り返せる。

だからこそ、聞こえてきた相棒の声は、ひどく魅力的に感じられて仕方がなかった。きつと宙を心配しての慰めだったのだろうが。その一言で、宙は瞳に黒い炎を宿したのだった。黒い黒い底なしに燃え上がる心の炎。

そうだな、その通りだ。取り返せる。奪われた大事なものの全部。

まず確かめなくては。あの人が、本当に天川マツリなのか否なのか。自分の知らない世界の裏側も何もかも。

嘘の世界をぶっ壊して。

必ず取り戻してみせる。

歯車が歪な音を立てた。誓いを胸に秘めた宙の顔には、凄絶な笑みが浮かび上がっている。

「千早ちゃん、無理し過ぎ！」

インベルのコックピットに戻って春香の第一声がそれだった。きよとんと目を丸くして、思い至って、ああ、と首筋を撫でた。首には手形が赤く痛々しく残っている。

「平気よ。私は気にしてない」

「怖かったでしょ!？」

「それは……そうだけど」

千早は眉間にしわを寄せて、うーんと唸る。怖くないはずがない。とても怖かった。押し倒された時の宙はまるで別人のようで、本能的に危機感を覚えたのは確かに事実だった。何故、彼があればほどもでに取り乱したのか。結局状況と経緯を説明してくれただけで、詳しいことは聞いていない。時間はなかったし、正しかったとは思わなければならない。

ガラス細工。千早は宙のことをそのように連想した。触れれば砕けてしまいそうな、ひび割れて歪んだガラス細工。ともすれば、胸倉掴んで説教をかますだなんて、なかなか大胆に出たものだ。如月千早としては。

「よくがんばったよ!」

突然、春香に後ろ抱きにされてきゃあと声が出る。なんのつもりよ、春香。

「好きな人に首絞められたっていうのにちゃんと宙を叱った! 自分だって苦しいはずなのに第一に宙のこと考えた! 偉いよ!」

「でも私そこまで考えてない。咄嗟で」

「怖いのも我慢した。千早ちゃん、ずっと怯えた表情してたもん、分かるよ。だからせめて私の前くらいでは泣いてもいいんだよ?」

春香の優しさに涙が目元まで込み上げてきたけれど、ぐっと堪えた。泣いている場合ではない。自分達にはやるべきことがある。責務で気持ちを切り替えられる自分の性格に、今は感謝したいと思う。「……ありがとう。その気持ちで十分よ」

首筋の痛みも、彼の憤りや不安が証のように刻まれた痕も、後回し。

まずはヴェルトールを起動させる。そして、

「アイデアがある。成功すればアイスランドの沈没も防ぎやすくなるわ」

首を傾げる春香に、自信を覗かせる笑みで頷く。千早は自分の役に集中し。
アイスランドに激震が奔ったのはそれからしばらくしてだった。

タイムリミット。ヒエムス開放の衝撃がアイスランドを揺るがした際、雪歩の思い浮かべた言葉だ。まさに一瞬の出来事。波紋の如く広がった揺れはすぐに収まった。だが、逆にこの静寂こそが不気味。嵐の前の静けさに他ならない。

タイムリミット。すなわちヒエムスが敵に奪われ、アイスランドの大地から切り離されたということ。二〇年という歲月、地殻変動のエネルギーを蓄積したアイスランドという核級爆弾の安全装置が消えてしまったら。

嫌な汗が雪歩の背中を撫でた時、グリムス山の中から外へ向かって来るIDOLの反応をセンサーが捉えた。火口へ振り向くと、波打つ溶岩の表面がぼこりと盛り上がり、それを突き破ってくる赤褐色の姿が現れた。膨れ上がった重装甲、複数の凶悪兵器を搭載した人工IDOLヒドルンである。

ヒドルンの腕の中には、どくんどくと脈打つ何かが大事に包み込まれている。神秘的かつ超生命的存在。あれこそがヒエムスのコア。まだ人の手が触れたことのない、機械的改造を加えられる前の天然のコアだ。雪歩は脈打つコアに心が高鳴るのを感じた。なんて純粹で綺麗な存在なのだろう、と。

だが見惚れている場合ではない。あれを奪われてしまったら、モンデンキントとトゥリアビータの勢力比が塗り変わる。モンデンキントがコアを集めるのは、トゥリアビータとの力関係を明確にし、二度と夜明けの紫月のような大きな事件を起こさせないためだ。もし彼らがその力を大きくすれば、手段を選ばない蛮行をしでかす恐れもある。

でも蛮行という点ではモンデンキント上層部も同じ。アイスランドを見捨てると結論した上層部も、トゥリアビータと変わらないのかもしれない。そこに所属する雪歩は複雑な心境に駆り立てられたともあれ、コアを取り返さないと。雪歩はフットペダルを踏み、ヒドルンへと加速する。だが、

『勝負は決した。これ以上の戦いは無用！』

上段から振り下ろされるヒスバルトの斬撃。堪らずネーブラは回避を余儀なくされ、ヒドルンはその間に上空へと離脱して行く。テンペスターも複数のエピメテウスによる自滅覚悟の特攻に追うことができない。

「あなた達は卑怯です！」

『……騎士の心には響く。その言葉、しかと受け止めよう』

「そう思うならどうして」

『騎士とは主人に傳くものである。例え己の意思とは反しても』

すまない、この地を救ってくれ。ヒスバルトから嘆願にも似た言葉が聞こえた。

えっ、と耳を疑う。疑問を遮るように、ヒスバルトは強力な回し蹴りをネーブラに見舞った。下から上にすくう様な一撃。胸部を打ちつけられて、雪歩と真の悲鳴と共に蹴り飛ばされる。

「ぐう！ 雪歩、大丈夫！？」

「う、うん。なんともない。トゥリアビータは……」

雪歩が視線を向けた時には、すでにヒスバルト達は退却を開始していた。

コアを、奪われてしまった。ああ、負けたのだ、と。自分を信じて戦った結果がこれだ。悔しさのあまり噛み締めた唇が切れて、口の中で血の味がした。

「雪歩、追えば間に合うかもしれないよ！ 今すぐにも」

『真ちゃん、それは許可できません』

「小鳥さん！？ どうしてですか、まだ取り返すチャンスだってあるのに！」

『落ち着いて、確かに今追いかければ、あるいはコアを取り返せるかもしれない。でもコアを失った以上、このアイスランドはいつ大地震が起きてもおかしくないのよ。そうなったらアイスランドは沈没してしまう』

小鳥の言うことはもつともだ。現状、アイスランドは非常に危険な状態にある。いつプレートが暴走するか予測できない事態なら、早急に対策を打たなくてはならない。すなわち、四機のIDOLによるプレート接点への慣性攻撃を。

小鳥の言葉を、ジョゼフは引継ぎこう言った。

『我々にとってコアは重要なものです。しかし、この国の人々の命と比べるにはあまりに軽過ぎる。コアを奪われた失敗は挽回できても、失われた命は決して帰って来ない。この国の人々の命が第一なのです。分かりますね、菊地さん』

「……はい」

くそっ！ と真は操縦桿に拳を叩きつけた。真だって人命の方が大事なことぐらい分かっている。ただ雪歩と同じように、彼女も悔しいのだ。すぐに割り切ることができないのは、雪歩も真もまだ未熟だからだろう。若さ故の純粹さか。とはいえ、こうして黙ってばかりもいられない。すぐに行動に移らなくては。

しかし肝心のIDOLはネーブラとテンペスターのみ。残りの二機がいなければ作戦は成り立たない。

『それなら問題ありません。先程インベルから連絡が入りました。天川さんもすでにこちらで再出撃の準備に取り掛かっています。もうすぐ天海さん達が到着するはずですので、先に作戦を開始してください』

「宙さんもあずささんも、無事なんですね？ 良かったあ」

「まったくあの二人は。きつと無茶したんだろうな」

二人の無事に安堵して笑い合う雪歩と真。しかし、ジョゼフはあずさのケガについては何も言わなかった。ここで説明してもマスター達のモチベーションを下げるだけだからだ。隠された事実を騙さ

れて、雪歩は俄然やる気を出した。

……私もがんばらないと！

思い、雪歩は指示に従ってネーブラを火口直上に移動させた。テナペスタースも隣に並び、眼下、燃え滾るマグマを見据える。

作戦はこうだ。いち早くプレートトの暴走を防ぐためには、春香達の到着を待っている間は間に合わない。故に、まずはネーブラとテナペスタースでプレートト接点に慣性エネルギーで“楔”を打ち込む。これによって暴走の時間を遅めるのだ。

もちろん、二機の攻撃だけでは純粹にパワー不足。あくまで時間を稼ぎ、到着した春香達の追加攻撃によって作戦を完遂させる。

ネーブラのステータスはお世辞にも良いとは言えない。各部の損傷は応急処置で誤魔化しているし、それも続く戦闘で限界が来ている。だが、それにも関わらずネーブラの駆動音は勇ましく鳴り響いている。任せろ、と言っているようで、雪歩には不思議と不安がなかった。ネーブラもがんばってくれるのだから、きつと成功する。そう信じて。

「行こうよ、雪歩！」

「うん！ 亜美ちゃん、真美ちゃん、いいね？」

『もちのロン！ 張り切っていつちゃおー！』

『テンションメチャ上げて行くよ！』

言葉を契機に、ネーブラとテナペスタースの重力殻を最大展開。

亜美と真美は言う。自分達アイドルマスターとIDOLとの信頼関係。絆の強さが奏でるハーモニーこそが力になる、と。だからもつと強く信じる。信じて、信じ抜いて、それを力に。

「せえーのお！」

合図。次の瞬間、ネーブラとテナペスタースは弾丸の如く急降下した。拳を振り上げて、トリークハイトブレッツヒャーの慣性エネルギーを集中し真下へ設定。雲を吹き飛ばして進む二機のIDOLに迷いはなく。刹那、轟音を連れて火口へと拳をブチかます。

炸裂
！

火口に侵入することなく、その手前で機体が止まったのは、莫大な慣性エネルギーの反動によって機体を押されているためだ。制御できる限界まで高められた高密度の慣性エネルギーは、一瞬でも気を抜けば弾き返されてしまうほど強力。段々とフレームが蝕まれ、各部にレッドアラートの表示が出る。

だが、このままでは引けない。引くわけにはいかない。雪歩は歯を食い縛った。

それでも限界はある。楔を打ち込み、管制トレーラーから送られてくるプレートのデータは暴走を食い止めるに至っている。しかし長くは続かない。徐々に上昇していくプレートエネルギーは、しばらくすれば楔を超えて爆発してしまう。そうなればアイドルマスター課の面々もろとも、アイスランドは海の底だ。

そんなことあってはならない。あつてはならないからこそ、

『春香！』

『もちろん、全力全開でえ！！』

彼女達がいるのである。上空より来たりしは白と黒の陰陽。セカンドアームを装備してすでに最大出力に移行しているインベルと、もう一体は黒のIDOL。ヴェルトールではない。二体は機体ごとぶつかる勢いで、集中した慣性制御をトリークハイトブレッツヒャーとして解き放った。

「インベル！　つと、ヌービウム！？」

黒のIDOLの正体。

それはプロメテウス3・ヌービウム。かつて天川マツリの愛機であり、トゥリアビータの戦士リコリスが乗りアイドルマスター課を苦しめた強敵。

『私よ、真』

如月千早の声がする。ヌービウムからだ。

「ど、どういうこと？」

真が驚くのも無理はない。千早も宙の言葉で咄嗟に思いついた“アイデア”だったのだ。

あの時、宙の話した経緯通りなら、マスターを失ったヌービウムが放置されているはずだと考えたのである。案の定、洞窟から少し離れた場所で岩壁に寄りかかるように倒れていた。千早はヌービウムの力を借りれば、作戦の成功率も高まるだろうと打算していたのだ。ただ、問題もあった。

IDOLは気に入った女性にパイロットを限定する。果たして如月千早という少女が、ヌービウムのお眼鏡にかなうかは博打だった。最初、触れた操縦桿は冷たくて、ヌービウムが傷心しているように千早には思えた。リコリスに置いて行かれたことがショックだったのかもしれない。この子は傷つきやすい子だ。直感的にそう感じた。

けれど心が敏感な子だからこそ、誠意を持って願いを伝えれば必ず応えてくる。だから千早は最初にこう言った。

「はじめまして。私の名前は如月千早と言います」

自己紹介。初めて出会ったのだから、当然だろう。IDOLとマスターの関係は全てそこから始まるのだから。

ヌービウムの瞳が輝きを取り戻したのは、それから間もなくだった。

ヌービウムは強い子だ。

傷つきやすいけれど、強い子だ。

『詳しい話は後で。片付けるわよ!』

「くそ、かっこいい登場してくれるなあ、まったく!」

にやりと笑みを交わす真と千早。インベル達の加勢によって、プレートへの抑止力は更に増大。二〇年という長い歳月を通して溜まったエネルギーを中和していく。

インベルも、ネーブラも、ヌービウムも、テンペスタースも。どのIDOLも満身創痍だというのに。機体のあちこちが歪み、砕け、拉げ、レッドアラートを点滅させているというのに。それでも諦めることを知らない。

アイドルマスター達の想いに応えるべく、全身全霊を持ってその

力を解放するIDOL達。これは大自然との闘いである。元々ヒエムスによって歪められていた摂理が、二〇年越しにアイスランドに襲い掛かっているのを止めようというのだ、生半可なことではない。『そんな、まだ、止められない!?!』

千早の悲痛な叫びは、皆の気持ちを代弁していた。これだけの慣性エネルギーを放出しても、まだ止められないのか。

想いは届かないのか。

管制室でジョセフは眉を吊り上げていた。

傷だらけとはいえ、四機のIDOLを投入してもプレートの上は食い止められないのか。四機の放つ慣性エネルギーの威力は凄まじい値に達しているが、それでもなお、蓄積されたプレートエネルギーは大きい。思った以上に二〇年の壁は厚く険しいものだ。果たして、超えられるかどうか。

「整備長、ヴェルトールは出せないのですか」

外でヴェルトールの発進準備を進めている整備班に通信を繋ぐ。ヴェルトールが戻ってきた後、重症のあずさをすぐさま医療班に任せ、宙はヴェルトールのコックピットで待機状態だ。ヴェルトールの応急処置が終わればすぐにでも再出撃できる。戻ってきた宙に、ジョセフは得体の知れない違和感を感じたが、今は追及すべき時ではない。

整備長からはすぐに返答が帰ってきた。その内容は、

『本体の応急処置は終わってますが、肝心のアルツァヒールがボロボロで、正直使えそうにないですわ。二挺とも砲身が完全にやられるし、処置のしようが……』

無理です、という返答。

高威力のアルツァヒールがないのでは、作戦の成功率は坂を転げ落ちるように激減する。元々繊細な慣性制御に向いていないヴェル

ツールでは、トリックハイトブレッヒャーを放つこともできない。下手な慣性制御で他のIDOLの邪魔をしては一大事だ。つまりヴェルツールは使えない、ということ。

どうする。四機のIDOLだけで果たして止められるだろうか。

楽観的な計算でも、成功率は極めて低い。だがそれでも。

『っ！ 宙、何をしとるんや！』

「どうしたのですか!？」

『課長、何とかしてえな！ 宙が勝手にヴェルツールを動かしとる』！

「なんですと!？ 宙さん、まだ出撃を許可したわけではありませんせんよ！ 宙さん！」

呼びかけても宙からの返答はない。ただ、通信の向こうでおかしな言葉を、管制室の面々は聞いてしまった。

『俺は取り返す』

千早がついとモニターに目を向けた時、ついに右腕部にもレッドアラートが表示された。ヌービアムの機体全体で、もはや正常な部位を探す方が難しい。片腕を失くしたヌービアムは、最初から損傷が激しかった。ここまで保ってくれただけでも御の字か。

だからといって、ここで操縦桿から手を離すことはできない。四機でかろうじて暴走を食い止めている状況なのだ。ここでヌービアムが戦線を離脱すれば、その瞬間プレート側のエネルギーに押し負けてしまうだろう。

万事休すか。そう、誰しもが思ってしまった瞬間。

『食い荒らすぞ、ヴェルツール』

怒号、否。咆哮、否。荒れ狂った猛獣がその野生を極限まで研ぎ澄ましたもの、それ以上の狂気を孕んだ声が、静かに、上空から降ってきた。なんだろう、この重圧は。一線を越えてしまった何かを

感じずにはいられない、深くどす黒い心の叫び。知らず、千早は背筋が震えたってしまった。

全員が、その声の主へと目を向けた。そこにいるのは、黒きIDOLヴェルツール。重力殻を最大展開しているせいか、周囲の雲が流動して機体の周囲を渦巻いている。すでに限界出力を叩き出しているヴェルツールだったが、千早はモニターに映し出される情報に目を疑った。上昇が、続いているのだ。

限界値を超えて、数値はまだまだ跳ね上がる。在り得ない。いくら無限のエネルギーを内包するコアでも、IDOLが人の造り出した機械である以上、弾き出す出力には限界がある。限界値以上の出力が開放されれば、フレームはそれに耐え切れず、内側から瓦解してしまうのだらう。このままではヴェルツールも例に漏れず空中分解だ。

だが、しかし。皆は気づいているだろうか。

ヴェルツールのカメラアイが、緑光色から血のような緋色に変わっているのを。

それだけではない。機体の装甲各部がひび割れている。否、それは亀裂ではなく、装甲上を綺麗に走る“継ぎ目”だ。

胴体に、脚部に、両肩に、頭部に。複数の継ぎ目が走っているのだ。その隙間から垣間見える黄昏色の光。その様は、まるでドアを無理矢理抉じ開けようとしているような、起きたばかりの眼をゆっくり開こうとしているような、そんな印象を受ける。特に、ヴェルツールの顎部の継ぎ目は、そのまま“口”が開こうとしているようだ。

各部の継ぎ目から漏れる黄昏色の光は、やがて粒子となってヴェルツールを取り巻く。初めて遭遇する謎の現象に、千早は何を言うわけでもなく、黙って見ていた。そう、黙って見ていることしかできなかつたのだ。

それもすぐに終わる。何故ならば、

『地面の中で……おとしなくしているお!!』

刹那、紅い閃光となってヴェルツールは発進した。

その速さは文字通り閃光だった。最大瞬間速度秒速九〇〇メートル超過。時速にして三二四〇キロメートルにも及ぶ音速すら遙かに超えた閃光に相応しい急速降下だ。その速度は不可視。千早にはヴェルツールが火山に激突して停止する瞬間まで目視することなど到底不可能だった。

全長四〇メートル以上の巨大な人型という質量体がそんな速度で地上にぶつかっただらどうなるか。慣性制御による攻撃地点への指向性を精密操作の上で、だ。

無論、答えは一つ。

音という音すら消し飛ばしながら、ヴェルツールは火山に突き刺さった。

トリークハイトブレッヒャー。四機のIDOLの放出した慣性エネルギーに相当するデタラメな威力を發揮するヴェルツールを中心として、衝撃が余波となって波紋状に世界へ浸透していく。衝撃波に手加減という言葉はなく、通り過ぎた全ての物体を問答無用で根こそぎ破壊する様は、ドロップが地上に落下した時の光景さながらである。

山は抉られ、ドロドロの溶岩でさえ無理矢理火口の奥へと押し込まれて。砂塵を巻き上げる破壊の波は、まずインベル達に襲い掛かった。その場に止まることすら許されず、火口から弾かれて吹き飛ばされて、千早は目の回るほど揺れるコックピットの中で悲鳴をあげた。他のマスターも同様に何の抵抗すらできず。

波紋となって広がる衝撃は空へと。まるで天へと伸びる巨大な柱を生んで、火口付近だけを綺麗に食い荒らした破壊は、やがて静かに、少しずつ収束して終わっていく。

その中心に、極熱の溶岩すら押し退けてヴェルツールが存在していた。

いつの間にか機体の継ぎ目もなくなり、カメラアイも通常の緑光色へと鳴りを潜めている。出力の上昇も消え、いつもと何ら変わらない姿がそこにあった。

けれど溶岩の中で整然とするヴェルトールの姿は、誰から見ても悪魔染みたイメージを彷彿とさせたのだった。

悪魔は眠る。覚醒のその時まで。

目覚めの時が近い、と。遠い所で誰かが言った。

遠い遠いどこか。たぶん、人の到達することの許されないどこか。

誰かは言った。

いずれ。

閉ざされた世界の命運を荷うその刹那の時にて君を待つ。

第十六話 r e l a t i o n s (前編)

第十六話 r e l a t i o n s (前編)

「 ついに現れたか」

「 アイオーン ”。月よりの尖兵か。アウリンは思った以上に執念深いと見える。先人達の失敗で我々がこつも苦勞を強いられるとは、ままならぬものよ。トゥリアビータの件も片付いていないというのに」

「 そう言うな。元々モンデンキントを設立したのは奴らへの対策も兼ねてだ。規格外の敵とはいえ、抗えないわけではない。準備は進めている。大事な“籠”を壊されたのでは堪らないからな」

「 して、ヴェルトールの状況はどうなっている。報告によれば一時的な覚醒を引き起こしたと聞いているが？」

「 ええ、すでに兆候は鳴りを潜めているようですけどね。気分屋にも程がある」

「 あれのフレームは元々ロウ夫妻が考案した次世代型だったな。当時の技術力では完成に至らず、机上の空論で終わっていたものが完全な形で造られているのだとすれば、我々の予測を超える現象を引き起こす可能性もある。そんなものを駒として使えるかね」

「 心配は無用。コアがマスターに従っている内は従順な僕も当然です。そして彼の能力は例外なくIDOLに有効だ。お分かりでしょう」

「 そのマスターが問題なのだ」

「 左様。ロウが手塩に掛けた“試験体”とはいえ、所詮は失敗作。我々に矛先を向けない可能性がどこにある」

「 どちらにせよ、今はアイオーンの存在が最優先事項だ。他のIDOLでは役不足。月の尖兵に対抗するために造られたその力、

振るってもらわねば意味がない。玩具も与えてやったのだからな。人形風情、後でどうとでもなる」

「そういうことです」

「……ふんっ、青二才が」

「正義は我々にある。このグランドロッジの猫に、な」

地下基地のとある一室。そこはアイドルマスター課責任者であるジョゼフ・真月の趣味でしつらえられた課長室である。

どこぞの高級な茶室にしか見えない和一色の部屋は書院造風のおしらえで、どこからともなく水のせせらぎと、かこんっ、という獅子落としの音まで聞こえてくる。それに相反して、壁を丸く切り抜いた部分には近代的なモニターが収まっていた。

与えられた部屋とはいえ、仮にも世界の安全を担うドロップ迎撃企業の課長として、仕事場に趣味趣向を投影し過ぎるのもどうかと疑問を抱いてしまうわけだが、集った当の本人達は気にした様子もないわけで。というより、基地を設計する段階で建築を許しているのだから言うのも無駄だ。

部屋に集ったメンバーは三人。モンデンキントJ.Pの総責任者であり765プロ社長でもある高木順一郎を始めとして、ジョゼフ、小鳥が名を連ねており、アイドルマスター課における重鎮が一同に介している。

皆、畳の上に座布団を敷いて正座中。ちょこんと置かれた湯飲みからは湯気が立っており、小鳥のものには茶柱が立っていたりするのだが、そんなことはお構い無しに全員真剣な表情で話し合っていた。

アイスランドでのあらましを伝え聞いた高木はまず一言。驚嘆を交えて深く吐き出した。

「信じられんな」

無理もありません。ジョゼフも表情を苦くして呟くように言う。

「ヴェルトールの、IDOL四機分に相当するパワーの放出。それがアイスランドの沈没を防いだ決定的な要因であることは間違いありません」

「それが事実ならば、我々はあの機体に関する認識を改めなければならぬ」

重々しく頷いた高木は手元の資料に視線を移した。

ヴェルトールが引き起こした原因不明の出力上昇。既存値を遥かに越えたそれに付随して観測されたフレームの変形。通常のIDOLとは一線を画した能力の発現に、高木は戦慄にも似た感情を抱かざるを得なかった。例え、アイスランドを救ったのがその力だったとしても。畏怖を覚えずにはいられない。

懸案事項が増えたな、と頭を悩ませる高木であった。

「ともあれ、アイスランドの沈没を防げたのは君達のおかげだ。よくがんばってくれたね」

「いえ、全てはマスター達が努力した結果です」

「そうだな。……ところで、IDOLの状態はどうなっている？」

アイスランドの沈没を防いだ際、合計五機のIDOL全てが致命的なダメージを負っていた。コアへの被害は少なかったものの、フレームは全交換する必要があり、特にヴェルトールはブラックボックスが絡んでいることもあって迂闊に修理できない状態だった。完全な状態を取り戻すにはあと数日はかかると予想されている。

「鹵獲したヌービウムに関しては月見島でパーツの生産を急がせています。他の機体も修理が完了次第ドロップ迎撃のローテーションに戻るでしょう」

「やっぱり一番厄介なのはヴェルトールですね。本部の送りつけてきた“あれ”の件もありますし」

そこで小鳥が、珍しく忌々しげな表情を見せて資料を捲った。同じくジョゼフが壁に埋め込まれたモニターを操作すると、格納庫で整備を受けるヴェルトールの姿が映し出される。しかし、その姿に

以前の面影はほとんどない。

頭部を除く全ての部位に設けられた新装備。重量など度外視で、詰め込めるだけ、過剰なまでに追加された装甲は、分厚い鎧を連想させるほど重厚だ。

数日前本部から輸送されてきた“鎧”は、今や黒の機体と合致している。

肉厚の装甲を纏った機体は本来の駆動部位を犯されつつも、極限まで強化された剛性と耐久性を手に入れた。それどころか脚部には追加の推進器が付与され、更には全身の装甲下に埋め込まれたバーニアが、機体の速度を底上げする。

両肩にも同様の強化装甲が装備され、多重装甲バインダーの大型化が図られている。少し角度を変えると腕部が隠れてしまうほどの巨大な代物。

胴体は特に顕著で、大幅な装甲増加によって本来露出しているコアもその下だ。機体中枢であるコアを保護する目的だが、おかげで機体は一回りも二回りも膨れ上がって、隣に並ぶインベルが心なしか小さくなったような錯覚すらさせる。

増設されたバックパックには縦長のスタビライザーが一对。手に握られているのは、アルツアヒールを簡素化し使い易く設計し直した新型ライフル。

鬼に金棒、とはよく言ったものである。まるで鷹の速さを得た亀だ。

“コラプサー”と通称されるこれら強化ユニットは、モンデンキント本部が開発した対IDOL戦闘の切り札という話だった。試験的な代物ではあるが、鹵獲したエピメテウスの人工コアを複数搭載し、出力の爆発的増大と慣性制御の精密化を実現したそれは、高火力、高機動、重装甲の矛盾をクリアしている。

装備群を総称し、名を“アルタスク”。対IDOL兵器としてはトゥリビータに先を越される形になりはしたが、その性能は本部のお墨付きだ。

「最近、本部からブラックボックスに関する解析情報が遅れていると思つたら、こんなものを作っていただなんて……」

激変を遂げ、真に兵器として洗礼されたヴェルトールの姿は、見る者に威圧を与え、恐怖心を煽る。その場の全員が深い溜息を吐いた。

手元の資料を見直していると、不意に、小鳥が遠くの誰かを見据えるように言った。

「これ、宙君が望んだことなんですよね」

自分を落ち着かせるように、一息。高木は顔をしかめながらも頷いた。最初にコラボサーが届いた時、装備を使いたいと即座に申し入れてきたのは、他でもない宙である。

東京に戻って来てからの宙はどこか狂気的な雰囲気を滲ませていた。内面から溢れる重い決意、とでも言うのか。とにかくそういうものが彼にあり、隠しきれerようなものでもなかった。最近では訓練室に籠って模擬戦闘ばかり繰り返していて、その不穏さが、余計に不安を煽るのだ。

アイスランドで彼に何かが起こつたのは明白で、その原因に関与しているであろう問題が三人の頭に浮かび上がる。

高木は別の資料を手に取った。本部からの情報とアイスランドで入手した画像を織り込んだ“アンノウン＜アイオーン＞目撃報告書”と書かれたものだ。

「さて、本題に移ろうか。もっとも懸案すべき事項。アイスランドに出現し、宙君と交戦した謎のアンノウンについてだ」

重苦しい空気が室内を支配した。高木が言葉を切ると、誰一人として言葉を発することなく黙って資料を読み取っている。あずさに重症を負わせた戦いの元凶。資料に記載されている写真には、人形然とした不気味さを持った姿が、確かに写っている。

もう三度も資料を読み繰り返したジヨゼフは、首を振って沈黙を破った。まず現在で分かっていることですが、と前置きし、

「詳しいことは目下解析中ですが、ヴェルトールの記憶領域に残っ

ていた映像と宙さんの証言から鑑みるに、トゥリアビータとは別の第三勢力である可能性が極めて高いと思われる。整備班長の話では、用いられている技術も既存のものとは遥かに異なり、かなり未知の相手であることが伺えます」

我々の知るに及ばない高水準の技術、とジョゼフは評した。

謎の素材で作られた装甲を纏い、推進器に相当するものがなく、強力な慣性制御のみで推進する謎めいた技術も、常識で推し量れない部分が多過ぎる。

本部はこれに対し、今後も現れる見通しが高いとして、対策と研究を各国モンデンキント支部に依頼。以後、このアンノウンを“アイオーン”と呼称することが採用された。過去に得ていた情報を含め頭の片隅に何かが残ったが、今は気にするべきではないと高木は自己完結。モニターに再生される戦闘映像を見つつ、

「再度出現する可能性。ジョゼフ君、君は本部の見解をどう見る？」

「私も同意見ですね。アイスランドの戦いには、ヒエムスを含めた五つのオリジナルコアが揃っていました。そしてブラックボックスを抱えたヴェルトールの存在。地球上のオーパーツ的存在が一同に集結していたところに現れたのは、決して偶然ではないでしょう。

アイオーンはIDOLを狙って現れる可能性が高い」

「激突は避けられないか」

「本部もそれを見越してコラプサーを送りつけてきたのでしよう。

……対応が早過ぎて不気味ではありませんが」

確かに、アイオーンに対する本部の行動は迅速だった。悪いことではない。しかし、IDOLに対して否定的な意見を持つ支部や派閥を無視してまで新装備を開発していたのも、何かしら裏があると見て間違いない。不安は残る。

もつとも、まるまる今回の件に対して一番心揺れているのはアイドルマスター達のはずだ。元来、彼女達はアイドルであり。モンデンキントに所属しているのはドロップを迎撃するためであって。未知の敵と“戦争”するためでない。お門違いなのである。

……トウリアビータとの戦いを強要している私の言えた義理ではないな。

彼女達に戦いを求めてしまう己の無力に良心が傷つけられるのを感じながら、高木は深呼吸を一つして、弱気な気持ちを追い払った。全ての責任者である自分が弱音を吐いている場合ではないのだ、と。「社長はあまりご心配なさらずに。マスターの皆さんに対するケアは怠りません」

「……ありがとう」

こちらの気持ちを察してかけられた言葉に、ふっと頬が緩んだ。有り難いなと感心し、彼の有能さに改めて感謝する。頼りがいのあるとはまったく彼のためにあるような言葉だな、と思い。高木は今回の事柄について思案した。

何か大きな意思が働いている。高木は半ば確信するように目を細めた。

モンデンキント本部を上から支配するあの組織、“グランドロツジの猫”の存在が脳裏を過ぎった。過去、高木がモンデンキントJPの総責任者になる以前の、組織の後ろめたい暗部にいた頃の記憶。それを思い出すのに付随して必ず浮き上がって来るのは、決まってグランドロツジの猫についてである。

奴らのことだ。まだ開示されていない情報が必ずあるに違いない。そして、裏で各地に働きかけているのもまた明白。

そう考えると、宙の“存在”を表向きにしたのはやはり間違いだった。“宙の秘密”。それを知った時には、すでに宙はアイドルマスターとして活躍を続けていたのだから、後の祭りではないのだ。これに関しても、隠された真実があると高木は踏んでいた。“彼”はまだ何か隠している。もう一度、彼の元へ出向く必要があるかもしれない。

さて、どうしたものか。問題は山積みであるし、

……千早君のこともどうにかしなくてはならないな。

ふう、と疲れを吐き出した高木は、かこんつ、という獅子落とし

の音を静かに聞いた。

沈んでしまったビル群。過去にお台場と呼ばれ、今は東京湾の一部になってしまった海を望める場所に、その病院はあった。

日本中から有名な医師を集めた私立病院で、施設も医療体勢も申し分ないものである。まだ駆け出しで、最近ようやくローカルの深夜番組やラジオに出られるようになった程度のアイドルが入院するにはあまりに不釣り合いではあるけれど。

三浦あずさはふとそんなことを考えながら、入院費が馬鹿高いこの病院の中でも最も見晴らしが良い個室（おそらく入院費はあずさのアイドルとしての月収よりも高い）から海を眺めていた。開け放たれた窓から、カーテンを揺らして吹き込んでくる風が心地良い。そろそろ冬になるうかという冷たい海風は、あずさの気分を開放的にしてくれる。

……少しだけ、頭の傷に染みますけど。

あずさの額には包帯が巻かれており、シンプルな色合いのパジャマの下にも同じように包帯が巻かれている。つい一週間前に負った傷の深さを物語っているのだった。

自分のケガは見た目以上に酷かったらしい。額と肩の裂傷もさることながら、肋骨も二本ほど折れていた。傷は最新の治療によって残らず、幸い内臓を傷つけることもなかったが、出血多量による体温の低下等も含めて、もう少し治療が遅れていたらどうなっていたか分からないと言われた。意識を失っていた間のことを考えるとぞつとしてしまう。

となれば、このように大きな病院で万全な医療体勢の元、しっかりと療養させてくれるアイドルマスター課の好意には甘えさせてもらおうと思う。好意というよりかは、マスターの重要性に基づく、あくまで組織的な思惑の範疇ではあるのだが。好意と表すところは

三浦あずさらしいと言えるだろう。

病院生活は、素直に言えばとてもつまらないものだった。静かな時間を過ごすのも嫌いではないが、それが何日も続くとうちも手持ち無沙汰になってしまっただけ。

自分がいない間、同じユニットの千早はどうしているだろうかとか。アイスランドの件は一体どういう進展を見せたのだろうかとか。色々考えてしまうのだ。

うーん、どうでしょう？ と人差し指を頬に当てて首を傾げたあずさ。春香達が暇潰しにと買って来てくれた本はあらかた読んでしまったし、亜美と真美が貸してくれたゲーム機も、あずさにしてみれば異様に難易度の高いソフト（というか世間では無理ゲーと称される類である）しかなくて、本人達には悪いが暇潰しにもならなかった。

本気でやることがないなあ、と困り果てたあずさは、何気もなく壁に懸かったデジタル時計に視線を投げた。時刻はそろそろ三時になる。三時といえば午後のブレイクタイムが定番であるが、あずさは別の意味で心を躍らせた。急いで手鏡を取り出して髪型などをチェックする様は実に女性らしい。

そんなことをしていると、こんこんとドアを叩く音。

「俺だけど。入っていいかな？」

「あ、はい、どうぞ！」

少し声の上擦ってしまっただろうか。変に思われないだろうか、と細かいことをあずさは考えたが、そんなことは気にもしていない様子で、天川宙は病室に入ってきた。

スーツ姿の宙を見る限り、プロデューサーとしての研修を受けてきた後なのだろう。手にはあずさ御用達のスイーツ店の箱を持っていて、相変わらず慣れない笑顔で箱を掲げてみせる。

「いつもありがとございます。ここのケーキ、少し高いでしょう？」

「あんたの気にすることじゃない。男の一人暮らしなんて、大して

金も使わないんだ。趣味に使うこともそうそうないしな。趣味って言えば、こうしてあんたの見舞いに来ることくらいだよ。もう、ほとんど日課だ」

そうなのだ。宙はあずさが入院してから毎日、こうして三時頃になると土産を持って見舞いに来てくれるのだ。暇を持って余したあずさにとつて、この時間は一日でもっとも楽しみな時間になっていた。主に、宙に会えるということを楽しみ喜びとして。

アイスランドでの一件以来、なんとなく宙との関係が縮んだような気がした。愛の告白みたいですね、と。思い出せば顔から火が出るような恥ずかしい台詞を言いもしたが、それに答えてくれた宙を嬉しくも思う。もうヴェルトールのアイドルマスター同士という関係以上に、あずさは男と女として宙を意識するようになっていた。

それはつい最近の話で、自覚したのはアイスランドに赴く直前の話である。美希の積極的なアプローチにもややもやする胸中を考えていたら、自然と宙に恋心を抱いているのだという結果に辿り着いたのだ。驚きはなく、なんだ、そうだったんだ、という気持ちですとんと胸に落ちてすぐに納得に至ったわけで。

だからこうやって宙が顔を見せに来てくれるのは喜ばしいけれど、そうすると宙は自分のことをどう思っているのか想像してしまう。宙さんって鈍そうだし、と自分のことは棚に上げて心中で呟いたあずさ。

あの時彼が吐露した言葉の数々は、あずさを含めたアイドルマスター課全員に対する気持ちが強いだろうし、決して自分一人だけということではないだろう。

見舞いに来るのもパートナーとしての義務みたいなものでしょうし、と。他の人間が聞いたら、いやいやあんたも十分過ぎるくらい鈍いですから、とご指摘を食らいそうな考えを思い浮かばせるが、本人は気にするどころか気づいてすらいない。少し考え込んでいると、あずささん？ との宙の声ではっと現実に引き戻される。

宙はいつものように見舞い客用の折り畳み椅子を隅から引っ張り

出して座ると、横の簡易テーブルで箱を広げて見せた。イチゴのショートケーキ、大きな栗の乗ったモンブラン、明るい色合いをしたレモンチーズケーキなどなど。二人で食べるには多過ぎるくらい色とりどりのケーキが並んでいるではないか。

「三時のおやつにはちょうどいいな。一応、あんたの気に入りそうな物を選んできたつもりだけど。どう？」

「みんな私の好みばかりです。でも、二人じゃ食べきれませんね」「む……。まあ、冷蔵庫にでも突っ込んでおけば数日は保つさ。誰が見舞い客が来た時に振舞えるし、な？」

「はは、と誤魔化そうとする宙が可笑しくてつい笑ってしまつと、わ、笑うことないだろうが！ と恥ずかしそうに頬を赤らめて宙が言う。そんなところが可愛らしくて仕様がな。他愛もない会話が、傷を負ったあずさにとって一番の薬であった。

ただ、心配なこともある。

あずさは宙の顔をついと上目遣いで覗き込んだ。わずかな表情の陰り。頬も少しこけているようだし、疲れているのを隠している節があるのを、あずさは見抜いていた。

「な、なに？」

「少し働き過ぎじゃないですか？ 千早ちゃん達から聞きましたけど、最近は模擬戦闘ばかりしてるって話じゃないですか。無理をして身体を壊したりしたらだめですよ！」

「……あいつら、余計なことを」

小さく舌打ちした宙は、指摘された疲れを取り繕うかのように表情を改め笑った。それが、まるで柳の下に立つ幽霊のような不気味さを含んでいて、あずさは不可解な悪寒が背筋を伝うのを感じた。ひどく、歪んだ脆い笑み。

あずさは焦燥のようなものに掻き立てられて、宙に聞く。何故そんな無理をするのか、と。

宙の回答至極単純だった。

「強くなるために」

それ以外に何も無い。宙は続ける。

「今が一番大変な時なんだ。ヒエムスは奪われたけれど、こっちはヌービウムを手に入れた。戦力比は五対一。ヒエムスがIDOLとして完成するのももう少し先になるだろう。トウリアビータとの決着をつける、またとないチャンスだ。近い内、何かしらの作戦があると俺は踏んでる。だから、そのために」

「強くないと、いけないんですか……？」

「俺には戦うことしかできないから」

「そんなことはありません！」

思わず大声をあげたあずさに、宙はきよとんとなって目を丸くする。それもどこかわざとらしく思えて、あずさは胸騒ぎを覚えた。

この人はこんなにも脆そうな人だっただろうか？ 以前から不安定でどこか見ていられない危うさはあつたけれど、今の宙はそれとも違う。

不安定どころか、確固たる決意で裏付けられた意思の強さを思わせる反面、ひび割れたガラス細工のように突けば壊れてしまう脆さと、どうしようもない歪みを兼ね備えているように思える。

誰にも本心を明かさずに、仮面で素顔を隠した哀れな道化師^{クラウン}。

この人はまだ孤独なんだ。彼の寂しさを埋めてあげられた、と。そんな風に考えていた自分が恥ずかしかった。

もしかしたら彼は、ちよつとした拍子にいなくなってしまうのではないか。根拠のない曖昧な胸の動悸に苦しめられ、自分でも気づかぬ内に彼の手を握り締めていた。手の平の温かさが、不安という名の氷を溶かし、零れ出た水滴が目の縁から、流れる。

「なんで、泣く？」

「……あなたが泣かないから」

「強い人間はきつと泣かないんだ。そう信じてる」

自分と過ごすこの時間は彼の心を癒しているだろうか。そうであれば良いと願い、あずさはもつと強く彼の手を握り続けた。

どれほどの間そうしていただろう。もう行かないと。宙はあずさ

の手を外した。あつ、と口から声が漏れてしまったのは、この時間が終わってしまうのが惜しいと思ったからに他ならない。昨日も、そしておそらく明日も、毎度宙と離れ離れになる瞬間が寂しくて堪らない。宙の心情を考えてしまった今日は尚更だった。

「それじゃあ、また明日」

「ええ……。また明日」

他愛もない別れの挨拶。立ち去り際に宙は一度だけ振り向いて、
「……いや、なんでもない」

どうして言葉を止めるんですか。言って、くださいよ。私はもつとあなたの言葉を聞いて、あなたを知りたいのに。

「それじゃ」

「あつ」

言葉を返す前に、宙は笑顔を投げかけて扉の向こうに消えた。たぶん、笑顔だったと思う。笑顔だった、はずなのに。

それが阿修羅のような凄まじい形相に見えて、あずさは震え上がってしまった。

「宙、さん？」

答えは返って来ない。この時あずさは、言い知れぬ恐怖に眩暈すら感じて。本当に宙が、自分の目の前から消えてしまう予感がしてならなかった。

案の定。

次の日、宙が病室に訪れることはなかった。

水瀬伊織は視界から目標が消えたのを認識するまで、時間にしてたつぷり二秒を要した。

つい一瞬前まで王手をかけたのはこちらだったはずなのに、蓋を開けてみれば、ネーブラの拳は空を切っている。何故、という疑問が作り出す二秒間は天川宙「ヴェルトール」にとって長過ぎる刹那だ

った。

一対のスタビライザーを広げた姿は禍々しく、黒色の装甲は冷徹な威圧を嫌でも相手の心に叩きつける。そんな化け物染みた外見だからこそ、伊織の“消えた”という非現実的な表現はあながち間違っていないのかもしれない。如何なる手段によって成されたのかも理解できぬまま、とにかく、伊織はヴェルツールを見失った。

やよいがサブパイロット席で叫ぶのと同時、重たい衝撃が振動となってコックピットを揺らし、そこで戦いは終了した。

モニターに映る敗北の二文字に、伊織は悔しがって金切り声を絶叫させ、やよいが伊織を落ち着かせるまでに更に三分を費やすこととなった。

そう、これはシミュレーションだ。訓練室に配置されたIDOLシミュレーターによる模擬戦闘訓練。

いつも定期的に行われる訓練では、伊織とやよいのコンビは常に一、二位争いに参加しているほどの手だれだ。万年ビリの称号を欲しいがままにしていた宙のヴェルツールに敗れたことは、一度たりともなかったのに。今日、そのヴェルツールはネーブラを撃墜して見せたのだ。

本部が送りつけてきたコラプサー・アルタスク。ネーブラを圧倒して見せたパワーの源はこれにある。理論上では他のIDOLを遙かに上回る性能強化を約束するそれを身に着けたヴェルツールは、確かに、依然とは比べ物にならない化け物に進化していた。万全な状態で望んだネーブラを返り討ちにする程度には、確実に。

予想された戦闘力を超えた数値が叩き出され、模擬戦闘に立ち会っていた全員が、少なからず驚きの声をあげていた。

伊織は擬似コックピットから飛び出すと、一目散に隣の擬似コックピットにぎらついた視線を向ける。そこにいるのは、無表情で佇むヴェルトールのマスターが一人。

「ちよつと、宙！ なんなのよ最後の動き！ 反則っていうか、なんていうかその……！」

負けは負けだ。それを自分でもよく分かっているが故、消化しきれない怒りを持って余しているのである。結果、伊織はくうくつ！と声を押し殺して足早に立ち去ってしまった。この伊織ちゃんがある馬鹿なんかに……！ 小さな叫びで悔しがる伊織を追いかけようとして、やよいはおろおろと視線を漂わせ、

「あ、あの、伊織ちゃんも本気で怒ってるわけじゃなくて、えつと……」

伊織の行動が気分を悪くさせたのではないかと、宙に対するやよいなりのフォローだろう。そんなやよいに、宙は一瞥して告げた。「気にしなくいい、早く伊織を追いかけろって」

「え、あ、はい……」

素っ気ない宙の物言いに表情を苦くしながら、やよいは訓練室を出て行った。その流れで出口に目を向けると、こちらに手を上げているおさげの女性を確認する。秋月律子だ。腕を組んで壁に寄りかかっていた彼女は、その手に持った紙束を掲げて見せる。

「今、行く。場所を変えよう」

そう言っただけ移動した先は、休憩室脇のベンチだ。この時間帯は閑散としたもので、宙と律子以外には誰もいない。話をするには打つてつけである。自販機で適当な飲み物を二つ購入して、片方を律子に投げた。

両手でキャッチした律子は、プルタブを開けようとしている宙に向かつて、

「最近、ちよつと皆に冷たいんじゃない？」

「そんなことないさ。それより、頼んだものは」

「さっきの」

言葉を強くして宙の言葉を遮った律子は、眼鏡の奥に瞳を光らせた。咎めているというより、腑に落ちないという意味合いが強い。少しずつ理解し始めていた天川宙という人間が、昔の、取っ掛かりのない壁のある青年に戻ったよう気がして仕様がなかったのである。律子は心中を落ち着かせようと吐息混じりに言葉を吐き出した。

「さっきの素っ気ない態度もそうだけどさ。アイスランドから帰って来て以来、あんたちよつと変よ。皆、あんたのこと気に掛けるわ」

「どうもしない」

断じ切った宙の口調は強かった。指先で微かに缶飲料の縁を弾いたりして、言外にこの話題を嫌がっているのが透けて見える。これ以上問い詰めても無駄だろうな、と判断した律子は、用意してきた紙束を宙に差し出した。

それは資料である。数日前に宙から頼まれ、突貫作業で入手したとある機密文章。

ハツカーの真似事なんて二度とするものじゃない、と依頼主である宙に文句を垂れた律子はその過程を思い出す。

侵入したのはモンデキントJPのデータベース。八月頃、ジヨゼフ達が古いデータベースの奥底から、夜明けの柴月事件の際に破壊された機密情報をサルベージしていたのは聞き及んでいた。目的はその情報の一部。閲覧するためには、少なくともモンデキントJP層責任者である高木順一郎レベルのIDがなくてはならない。

正直危険な賭けではあったが、バックアップをテンペスターに協力してもらうことでどうにか切り抜けることに成功したのであった。無論、吸い上げた情報はその都合上断片的なもので、詳しいものではない。

バスタルト。実験。真性異言能力。そんな単語がずらりと並んでいるだけ。正確な意味は解読することもできないだろう。

「……で、こんなのを見てどうするつもり？ 結構やばい代物よ。大きな声じゃ言えないけど、これって」

「人体実験だろ。所々は憶測を入れていくしかないけれど、かつてモンデキントでIDOLに関する実験が行われていたのは確かだったみたいだ」

「昔の話だけどね。トゥリアビータが離反する前の話。さすがに今も行われているとは考えられないけれど 世間一般に公にできな

いようなことではある。深入りし過ぎるととんでもないことになるわよ」

「悪いな、危ない綱渡りさせて」

「もう二度としないからね。代わりに私が出した約束、守ってよね」
ああ、分かっているよ。そう言いながらも資料を捲る横顔は硬い。

律子は缶飲料をぐつと飲み干し、ゴミ箱に向かってひょいと投げた。左手は添えるだけ。どこその漫画で見た文句に乗って弧を描いた缶はすつとゴミ箱の中に消えた。

その時である。休憩室の扉が開いて人影が入って来た。

「げっ、まずい……」

よりにもよって、現れたのは高木順一郎であった。律子は慌てて宙から資料を引く手繰り背中に隠す。むっと膨れ面になった宙は、それでようやく高木の存在に気づいたらしく、彼に対して冷たい視線を送った。相変わらず一方的な不仲は解消されていないのか、と考えていると、高木が大仰に笑って手を振ってきた。

「やあ、休憩中かね」

「は、はい。模擬訓練の途中です……」

少々上擦った声で答えた律子。だったが。その隣で突然宙がベ
ンチから立ち上がり、高木に向き直ってこう言った。

「あんたは俺を騙しているか？」

空気が、凍ったような気がする。驚きを飲み込んで宙を伺うと、彼の表情は歪んでいた。溺れそうな感情で突発的に揺り動かされ、思わず発した言葉が引く込みもつかず、吐き出してしまったのが見て取れた。その証拠に、宙は唇を噛み締めて、泣くのを我慢している子供のようだ。

不躰な言動の真意は？ 考えも及ばないまま、揺らいだ視線を注ぎ続ける宙に倣って、高木に目を向ける。対して高木は真剣な顔付きになっていた。

沈黙は長く続かない。

「私は君を裏切るような真似はしないよ、二度とね」

「その言葉、忘れないからな」

ついと視線を外し、薄暗い情念を忍ばせた言葉を放った宙は、無表情のまま高木の脇を抜けて歩き出した。ちよ、ちよとどこ行くのよ！ あんたとの約束を果たしに行く。そう言い残す宙の背中を見送って、律子は目をしばたかせる。なんなのよ。どつと押し寄せた疲れに肩を押されるようにしてベンチに腰掛ける。

いけない、まだこの人がいるんだった。慌てて姿勢を正すと、構わないと手で制する高木が自嘲気味に笑った。一度失った信用を取り戻すのは難しい、そう漏らしながら。

宙と高木の間は何があつたのかは知っている。高木が宙を実の息子のように思っていることも。宙はそれを受け入れられないような様子ではあつたけれど。

二人してベンチに腰を並べると、

「先日データベースに侵入したのは律子君だね」

いきなり、確信を突いてきた。嘘を吐いても無駄かな。高木の断定口調に降参の意を表した律子は、最悪クビを覚悟で首肯した。

「……やっぱりバレてましたか」

そもそも、テンペスターズの協力があつたとはいえ、ただの一社員扱いであるアイドルマスターが簡単に侵入できるほどこのセキュリティは甘くない。ましてや、トウリアビータのハッキングがあつてまだ日も浅い。侵入を試みている時も、どこか“通されている” 感覚を感じてはいたのだ。

となれば、何故高木が自分を見逃したのか謎である。律子の疑問を先読みするように、高木は口の端を歪めた。

あ、嫌な予感。素直に直感を信じた律子は即座にその場から逃げ出したかったが、ぼんと両肩に置かれた高木の手が逃げる選択肢を奪つたのだつた。ああ、交換条件とはいえ、首を突っ込むんじやなかつたなあ。

後悔も後の祭りであつた。

第十七話 relations (後編)

第十七話 relations (後編)

歌は、如月千早の生涯とは切り離せないものであり、生き甲斐であり、命だ。

歌がなかったら、たぶん自分はここにいないし、人並みの感情を取り戻して、笑ってもいなかったら。如月千早という人間を構成する重要な欠片である歌。

そして歌は絆だ。歌が繋げた絆は数多ある。それは旋律に乗せて無数に交差する流れ星のように世界を駆け、一つ一つの星を結んで星座となる。絆とは、そういうもの。千早を世界に繋ぎ止める命綱こそ歌なのだ。

大事な大事な私の絆。皆との絆。そして、今は亡き弟との絆。辛い時、悲しい時、歌えば勇気が出た。楽しい時、嬉しい時、自然と歌を口ずさむ。

だから歌い続ける。よく響く声で、彼が褒めてくれた自慢の歌声で。どこまでも遠くまで聞こえるように、自分の歌を。天国の果てまでも届くように。

けれども、歌えど歌えど悲しみは増す一方だった。気分は晴れず、薄暗い灰色の雨空の下を歩いているような心境。抜け出せない、と。千早は心のどこかで呟いた。

765プロ本社ビルの屋上。新宿の中でも一際大きいビルの頂上ともなれば、見晴らす景色も悪くない。新宿、ひいては東京という街並みが視界一杯に飛び込み、上空には暗くなった冬空が広がっている。

吹く風は冷たく、フェンスに寄りかかった千早は突き刺すような寒さを肌で感じた。もう秋から冬へ様相を変えた空気を大きく吸い

込んで、胸に溜まったどうしようもない気持ちを一緒に吐き出し。自分は一体何をしているのだろうか、と自問して。

歌わなくては。

半ば脅迫的な観念に突き動かされて、千早は歌うことを決して止めない。

泣くことなら容易いけれど、悲しみには流されない。

「嘔吐け。おまえ、泣いてるし、流されてるくせに」

背後で弾けた声に驚いて振り返ると、屋上の入り口に天川宙が立っていた。反射的に口を閉じて、夜に流れる旋律は寒空の下に溶ける。虚を突かれたような表情の千早に、邪魔する、と言って屋上に足を踏み入れる宙。

「宙、どうしてここに？」

「秋月に頼まれた」

正直に答える。機密情報の入手と引き換えに約束したのは、千早と話をしてほしいという単純なものだった。もともと、事はそう簡単ではないと宙は理解していた。

笑みもなく、無表情に近づいて来る宙に千早は身を引いた。

最近の宙は様子がおかしい。昔に戻ったよう。誰も彼をも疑っているようで。それでいて、時折浮かべる搾り出すような薄笑いが不気味で、今の宙は苦手だ。それに、アイスランドで首を絞められたことを思うと少し怖いのも事実だ。

そのことを宙も理解しているのか、少し遠い位置で足を止めた。向かい合う宙と千早。星の光もコンペイトウスノーもなく、ビル群の明滅するネオンがわずかに二人を照らし出して、逆しまの星空に浮いているような心持ちになる。

おまえ、泣いてる。もう一度同じ言葉を投げかけられて、千早は目元を拭った。目元に残る湿っぽさがその証拠か。しかし、自分が何を悲しんでいるかよく分からない。確かに煩わしく思っていた色々なことに方がついた。家庭の事情、と一括りにできる事柄だ。正直、清々した思いの方が強いし、こうなって正解だったのだと。

「両親、離婚したんだってな」

「……っ！」

何も言えなかった、声が出なかった。

自分以外の誰かに、明確にそれを指摘されることがこんなに苦しいとは思ひもしなかった。渦巻いていたものが一瞬で吹き飛んで、両親の離婚、という事実だけがはつきり認識されるのを感じる。家族という絆が音をたてて壊れる切なさ、哀しさ。知りたくなかった気持ち、今になってようやく現実味を帯びて。

ふふっ、と。千早は吐息するような微笑を漏らした。

「別にどうってわけでもないのだけどね。こうなるって、決まっていたようなものだし」

「ずいぶん淡泊な物言いだな。どういう意味？」

「宙に話したことなかったわね。春香達には、一度だけ話したことがあるのだけど」

古いアルバムを開くように思い出を辿る。

如月家は四大家族だった。父と母と千早と、弟が一人。どこにもあるような家庭で、休日は家族で遊びにも行ったし、夜はテーブルを囲んで団欒もした。歳の近い弟は千早によく懐いていて、本当に平凡な幸せの形だったと思う。少なくとも、今のような状態になるなんて想像もできない位には。

弟は千早の歌う歌が好きで、転んだりして泣いた弟を慰めるためによく歌ったものだ。まだ音程も強弱も考えない稚拙な歌。そんな歌でも、千早は喜んで歌って見せた。弟の笑顔が、たぶん歌い手を目指そうと思った最初のきっかけだった。些細な理由なのだ。些細でも、とても大きい理由。

「けれど、全て壊れてしまった。当たり前だと思っていた日常も、全て」

事故だった。母と散歩に行った弟は 亡くなった。

事故死の言葉だけで片付けられるものではない。家族が、死んだのだ。大きな衝撃だった。味わったことのない感覚だった。できれ

ば一生味わいたくない痛みを、千早は幼くして経験してしまったのだ。世界が変わる、というのはああいうことなのだろう。

あの時、もし“彼”との出会いがなければ、如月千早は潰れていたらかもしれない。

「両親がいがみ合いを始めたのは、その頃から。大事なお葬式だつて言うのにあの人達は……！ 父は母を責めた。おまえがしっかり見ていないから。おまえがしっかり面倒を見ていれば。泣いて反論する母と、怒鳴る父。あの子の前で、両親は喧嘩しかなかった！ 死んだあの子が無念でしようがなかった！」

「如月……」

「それから今日まで、私の家庭はずっとそんな調子。だから、いつかこうなるんだつて目に見えていたわ。驚きもなければ悲しくもない。必然として起こつた出来事だもの。今更なんとも思わない。悲しくなんか、ないもの」

告げて、千早は吐息。当たり前のことを、ただ当たり前と受け止める。千早がしようとしているのはそれだけのことだ。

しかし、

「おまえはそれで満足か」

「ええ、もちろんよ」

「取り戻したいとは思わないのか」

「無駄よ」

「馬鹿野郎っ！ それは捨てて良いものじゃないだろうが！！」
視線の先、怖いくらい真剣な宙の表情がある。曇った瞳から漏れ出す彼本来の輝きが獯猛に発せられ、千早にぶつけられ、弾けて。

宙は千早に詰め寄った。一步、二歩、床を砕くような迫力で靴を踏み鳴らしながら近寄る宙の瞳に滲むのは、言い知れない怒りだ。フェンスに背を預ける千早の顔の横に、ばんっ！ と手の平を叩きつけ、視界に宙の荒々しい炎を宿した瞳が大きく映し出された。納得できない、と。声ならぬ声が微かに零れた。

「おまえはそれでいいのかよ！」

千早は恐怖を顔に滲ませたが、心の底で宙に対する泥のようなものが剥がれ落ちて、不思議と安心した。今の彼は本音だ。心で生まれたものを直接吐き出しているのだ。

搾り出すような薄笑いとは無表情よりもこっちの方が宙らしい。嘘偽りのない天川宙の姿が千早の存在を安定させる。

同時に思考した。宙の感情を滾らせている理由はなんだ？

五秒と考え込めぬ内に、千早には宙の生まれてこの方の背景が思い出された。

宙は親に捨てられた。彼の人生はまず喪失することから始まり、そして手に入れた大事な家族との絆も否応なく奪われた。

だからだろう。天川宙という人間は誰よりも絆＝人との関係に敏感だ。ましてや一度裏切られた経験がある分、余計に。好きという絆も、憎いという絆も、宙にとって全てが掛け替えのないたった一つの大事な絆なのである。

それに引き換え、千早は両親との絆に意味を見出していない。それは関係を捨てるということだから、宙はそれが許せないのだろう。「家族なんて簡単に手に入れられるものじゃない。ましてや、捨てていいものでもない！ 手放しちゃダメなんんだよ、それは！」
「私は今に満足しているわ。これ以上は欲しくない」
「取り戻したいとは思わないのか」

「私にとっては、今がAのカードなのよ」
例えば、トランプを一枚ずつ配られたとして、千早の手元にあるのはAのカードだとする。Aの絵柄に反射するようにして映る春香達。これを捨ててもっと良いカードを引こうとする勇気が千早にはない。そして端からそのつもりもない。

「そんなの逃げてるだけじゃないか！」

「それを言うならあなただって、高木社長や音無さん達を恨んでいないじゃない！」

「だからだよ。あとになって必ず後悔する。胸に空いた穴は簡単には塞がらないのを、俺は嫌というほど思い知ってる。一人になるの

は怖いことだつて、肌で感じてる。如月だつて本当はAより良いカードが欲しいんじゃないのかよ！」

「私には765プロという家族がいる、私には一人にはならない！あんな両親との関係よりも、私には春香達との絆の方こそ大事なものの。ここには皆がいて……私にとつての歌う理由がある」

そう、歌う理由がある。自分の夢と、そして弟との約束。ここにはそれを叶えるための大事なものがたくさんある。千早には765プロとモンデンキントという絆さえあれば、何もいらないのだ。

「死んだ弟と約束したの。またお歌聞かせてね、つて。あの子は死んでしまつたけれど、それでも歌い続けていけば天国まで届くんだつて信じている。あの子に届くんだった」

それは“彼”が教えてくれたことでもある。

会えなくなつても、君が歌い続けていればいつか必ず届く。その言葉があるからこそ、如月千早は今日まで歌い続けて来れた。遠い所にいる弟に自分の歌声が届くように。それが如月千早の夢。そうよ、夢を追いかけ続けるためには、こんなことで悲しんで、歩みを止めるわけにはいかないのよ、如月千早。

「宙は人との繋がりを大事に思っている。だから、今の私を許せないのも理解できるの。でも私は、残された私の絆を大切に生きていく。過去に取り残されたものまで手に入れようとするのはただのエゴよ。私は、弟に私の歌が届くように歌い続ける。そして、あの子の夢も、これからずっと叶え続ける」

「弟の、夢？」

「私がIDOLのマスターになろうとしたのは、弟がIDOLに憧れていたから。私が夢を継いだの。いつかIDOLに乗ってドロップからお姉ちゃん達を守るんだ。そう言つて目を輝かせていたあの子の夢。ほら、私には765プロとモンデンキントだけがあればいいの。ここだけが、私にとつての樂園なのだから」

今に縋つて生きていく。それが千早の答えである。

千早は宙の瞳を見据えた。ほんの少し離れた場所に、宙の顔があ

る。微かに顔を動かすだけで唇が触れ合いそんな至近距離。互いの気持ちをしめ合い、互いを理解できる距離。千早は頬が染まるのをなんとなく感じた。例えば宙の瞳が冷たくも、彼と視線を交えているのだと思うと、やはり胸が締め付けられる思いだ。

私達はよく似ている。千早は訴えた。

大事なものを失って、心を閉ざして生きてきた。そしてアイドルマスター課の仲間達が地獄の底から手を差し伸べてくれた。

荒んだ家庭と亡くなった弟の影響で他人との触れ合いを恐れていた千早は、春香達の心触れて熱を取り戻した。

最愛の姉を失って高木や小鳥を憎み続けていた宙は、皆の気持ちに触れることで高木や小鳥も苦しんでいたことを知った。

二人はよく似ている。ひどく繊細で、壊れやすく、誰かに救われたいという経験を持っているが故に。まるで合わせ鏡のように、よく似ている。

唯一、現在に拘るか過去に拘るかの違いを除いて。

ふと、宙はフェンスから身体を起こして千早から離れた。俯いていて、表情は何えない。けれども髪の間隙から放たれる黒い情念染みた何かが千早に纏わりついた。思わず、息を呑む。

「冷たいんだ」

微かに動いた唇が言葉を紡いだ。

「この世界は冷たいんだよ」

熱を感じないんだ。宙は寒さに凍えるかのように、両腕で身体を抱く。震えている。どうしようもなく身体が震えてしまう。

理屈はいい。熱が必要なのだ。暗くて冷たい世界と拮抗するだけの熱。千早はそれを失っているから、自分の望むことへ向かって行けない。でも自分は違うのだと宙は暗示のように呟いて、千早を両の目で捉えた。

まるで黒い炎を宿しているかのよう。

「俺は認めない。失くしても、取り戻してみせる。諦めない」

「何を言ってる」

いるの、と。言えず、言い澀んだ。この雰囲気。今の宙は嫌いな宙だった。暗い情念を仮面で隠した無表情。

「おまえは元通りにならなかつた時が怖いだけだ」

人は過去を捨て去れない。人は過去の蓄積で生きているのだから。俺とおまえが似ているだつて？ ああ、そうかもしれない。けど、今はもう違う。おまえは弱い。

「この手の中にあるのがAだろうがなんだろうが、俺はジョーカーを取りに行くんだ」

俺は強くなる。宙は言う。何一つ欠けていない現実を、笑顔に溢れていたあの頃を、本当は訪れるはずだった今を取り返す。じつと千早を見つめた宙は、そう告げて背を向けた。

知らず内に、千早はその背中に手を伸ばしていた。でも、届かなくて。言葉だけが夜気にそよいで先走る。

「宙は、変わったわね」

「人は変わるよ。強くなるために」

そんな意味じゃない。立ち去る宙の背に、千早は内心で呟いた。あなたは変わってしまった。孤独な雰囲気を漂わせる宙の背中にひどい切なさを感じる。胸に手を当てた千早は、宙を追いかけるべきが一瞬悩んで、しかしその足が動くことはなかった。どうやら自分は思った以上にショックを受けているらしい。だって、千早の今の思いは。

「本当に、変わってしまった。今を生きろというのは、あなたが教えてくれた答えなのに」

弟の葬式の時、言い争う両親が嫌になって、千早は逃げ出した。泣いて、ひたすら泣いて辿り着いたのはとある高台。夕陽が神々しいほど綺麗な黄昏時の話である。

そこで千早は“彼”と出会った。

トゥリアビータ基地内にある医療室。その部屋の薬臭さと潔癖なほどの白さがリコリスは嫌いだった。

薬物の臭いは自然からかけ離れた故の不快感を覚えるし、眩過ぎる白は目に毒だ。ここにいると、生きている実感が極度に薄れてしまふ。だからこそ、治療用のベッドに横たわっている間、リコリスは終止不機嫌な表情であつた。

ベッドで仰向けになつたりリコリスの身体には複数の電極が貼り付けられており、横の機械が身体から心拍などの情報を読み取って表示している。

そろそろ寝ているのが苦痛に思えてくると、しばらくして、検査結果を記し並べているパネル片手にカラスが現われた。相も変わらず冷たい微笑の男はリコリスの隣に立つと、もういいですよ、と告げた。

「検査結果は問題ないようですね。アイスランドでの身体の異常は、ヌービアムのコックピットから出たことによる気温の急激な変化に、あなたの身体が耐えられなかったのでしょうか。迂闊ですよ、リコリス」

「もつと心配そうな表情でもしてくれたいのにな。嫌味にしか聞こえないわ」

「もちろん、嫌味ですから」

カラスは表情を崩さず笑みのまま言った。その瞳は笑っておらず、むしろ失敗を咎める鋭さがある。電極を外しながら視線を受け流すリコリスは、その理由がヌービアムについてのことだと適当に決め付けた。いや、それ以外に文句なんてないだろう。遠回しな言い方をしなくてもそれくらいは察しがつく。

一週間前のアイスランドにおいて、リコリスはヌービアムを置き去りにした。

モンデンキントに回収されるのはできたことだったが、案の定ヌービアムは回収され、現在の調査によると、すでにパーツの生産が始まっているとのことだ。

これでモンデンキントにはオリジナルコアが四つ、ヴェルトールのブラックボックス・コアを含めれば五つ揃ったことになる。人工IDOLによる戦力増強の目安が立っているとはいえ、これはトウリアビータにとって大きな痛手であった。

ヒエムスの回収にこそ成功したものの、人型機械IDOLとして完成させるにはまだ時間がかかる。コアの改造、フレームと装甲の製造。新型人工IDOL生産計画の派生によって設計などの手間はさほどかからないが、それでも戦力として配備するのはもう少し先になる予定だった。

そもそも、本来ヒエムスを手に入れたことによって二つのオリジナルコアを有するはずだったものが、ヌービウムを失ったことで収穫はゼロになったと言える。いや、どちらかと言えばマイナスだ。

そんなものだから、カラスはリコリスに文句があるのだろう。はつきり言えばいいのに、と思う反面、自分の犯した問題の大きさを理解しているのでもう口に出せないしているのであるが。己の身体の件も、自分の不注意が招いた結果なのだから。

「とりあえず、もう自由に動いて問題ないでしょう。戦闘行為も支障ないとのことです。しかし、わずかに代謝が下降気味との結果も出ています。念のため活性化剤も投与しておきましょうか」

「……所詮私達はバスタルトだものね。出来損ないの、偽者」

「おや、あなたにしては弱気な物言いですね」

意外だ、という風に肩を竦めて、カラスはトリガータイプの注射器を取り出す。

透明感のある琥珀色の液体。リコリスは、下ろした髪を手で持ち上げると、綺麗な肌をしたうなじをカラスに向けた。注射器が当てられ活性化剤が投与されるのは一瞬。針を刺すわずかな痛みが首筋を走り、それでようやくリコリスは検査という名の苦痛から開放された。

検査とは言っても、通常の人間のそれとは異なるものだ。バスタルトたるリコリスの身体は、人間と構造は同じでも体組織的に大き

な違いを持つ。

トウリアビータでさえ確固とした情報がないバスタルトは、それ故様々な検証が必要なのである。今回の検査だって必要以上に長引いたのは、そういうことが理由だったりするのだろう。

全てはミシユリンク完成のため。出来損ないであるバスタルトが完全な一個体の存在として認められるためには、ミシユリンクとなる以外方法はない。そうでなければ、結局リコリスは己の存在価値を持たないことになってしまう。

……だから、私は戦うのよ。

思い、そこでふと考えたのは天川宙のことだ。彼はきつと己について何も理解していない。いや、理解することを妨げられている様子もあつた。可哀想に、と胸に堪ったわだかまりを溜息として吐き出したリコリスは、

「カラス、天川宙についての報告だけ……」

「そういえば接触したのでしたね。何か聞き出せたのですか？」

「ええ、やはり彼はIDOLと会話することができるみたい。本人はその意味に気づいていないけれど、まず間違いなくあの子は“真性異言能力者”よ。ねえ、カラス。本当に天川宙はカイエンの計画の……」

「諜報部がモンデンキント本部の機密データバンクから盗み出した極秘資料と、天川宙の生い立ち、経歴、その元を調べたものを組み合わせると、必然とそのような結果になります。疑いようはないでしょう」

アイスランドへ出撃する前に聞かされた話はこれで現実味を帯びたことになる。どんな運命の悪戯だろうか。リコリスは言い知れぬ落胆に拳を握り締め、それは幻だと首を振った。結局は宙も自分も世界という強大な有象無象の手の平で踊らされる存在だということだ。宙はそれにすら気づかず、ただ天川マツリの幻影を追うだろう。

本当に哀れな子。

そしてもう一つ、リコリスには知っておかなければならない事柄

があった。

「カラス、私がアイスランドで遭遇したあれはなんなの？ 報告ではアイオンと言っていたわね。私達の想像を超えた超然的な力を扱う、得体の知れないIDOLもどき。あなた、詳しいことを知っているのでしょうか？」

少なくともヌービラムとヴェルトールの二機を相手にして、あれほどまで傍若無人な戦闘力を発揮したのだ。アイオンが尋常ならざる存在であることは嫌でも分かる。

IDOLに似たIDOLではないもの。

身を持って“力”を体験したりコリスとしては、その正体が非常に気になる場所である。どうせこの男のことだ、ある程度の情報は掴んでいるだろう。

案の定、カラスはにやりと口元を歪めて見せた。瘤に障る嫌な笑い方だ、と内心で吐露し、リコリスはカラスが二の句を紡ぐのを待つ。

「そうですね、話しておきましょうか。あなたにはアイオンの捕獲という大役を担っていただくのですから」

「捕獲！？ あれを！？」

馬鹿なこと言わないで、と言い放つたりコリスは眼前の男を疑った。彼の視線に嘘偽りの色はなく、馬鹿な、と再び言葉を落としたりあんな出鱈目な奴を相手に、ましてや捕らえるだなんて。想像しただけで身体の芯に冷たいものが奔った。

「全てはミシユリンクのためですよ。もしかしたら、あれを解析することで五つのコアを集めるより早く“アウリン”への道が開けるかもしれないのです。ほら、そう聞けば無茶をするにも十分な理由でしょう？」

カラスは邪悪な笑みを深くして語る。アイオン「IDOL」とも一線を画す謎の存在。トウリアビータが欲するミシユリンク、その完成のために必要とされるアウリン。この二つの存在に、果たして如何様な関係があるというのだろうか。

世界が遠くなるような錯覚と共に情報が耳から頭に流れってくる。リコリスはその説明に愕然とした。カラスの情報が正しければ、アイオーンの異常性も納得がいく。IDOLと同等以上の慣性制御を操れることも含めた全ての疑問点が解消されるのだ。そうか、アイオーンの正体は。。

「理解していただけましたか？」

「……カラス、あなたはその話をどこから手に入れたの？ その話が本当なら、例の猫どもしか真相を知らないはずよね」

こんな復興歴という時代の根底を揺るがしかねない事実を、何故この男は知っている？

「ふふ、ちよつとした過去の置き土産ということですよ」

それ以上は話す気がないということか。まあ、いいわ。そう言つて、リコリスも深く詮索するのを止めた。

トゥリアビータの構成員は、モンデンキントに恨みを持った人間がほとんどを占める。そうでなければ、絶大な科学力を誇るとはいえ、世界に喧嘩を売る大それたテロ組織に参加するはずがない。大方カラスもその例に漏れないというわけだ。若くしてトゥリアビータを統括する存在ともなれば、並々ならぬ過去があつたとしても不思議ではない。

「把握したわ。そういうことなら、私も全力を尽くす。ヌービアムの件もあるからね、失態は取り返す。……もつとも失態以前に、人材不足という問題がなければ今頃私の命はないでしょうけど」

「結構。自分の立場を弁えているのなら働いていただきますよ。ヌービアムの代わりは“サイーデ”を使ってください」

「ヴェルトールの予備フレームで造った急造品か。武装は？」

「対IDOL仕様の物をいくつか。詳しい情報は後ほどお渡ししますよ」

「そう。それじゃあ、私は出撃まで少し仮眠をとるわ。 次の戦いが私の最後にならないように祈りながらね」

皮肉つたのは自分に対してだ。なにせヌービアムより劣る人工

DOLでアイオンと対峙しなければならぬのだから、リコリスとて不安にもなる。

医療室から出たリコリスは自室へ戻るために足を動かした。だが、「あの、リコリス？」

「……リファ、どうしたの？」

医療室の入り口に立っていたリファに呼び止められ、リコリスは振り返った。床に届きそうなほど長い金髪を下ろしているのは、おそらくもう寝るところだったからだろう。可愛らしいパステル調のパジャマは実に子供らしく、上目遣いで見上げてくる彼女に、リコリスは思わず笑みを零した。

ただ、彼女にはいつものような元気がなく、申し訳なさそうな表情なのが気にかかる。

どうしたの？ と再度問うと、リファは見上げる視線を下へ。俯いて影になった彼女の口が、ごめんなさいと言葉を紡いだ。

「リファがリコリスを無理やり連れて帰ったから、ヌービウム取られちゃって……。カラスにすごく怒られたんでしょ？ だから、その、ごめんなさい……」

消え入りそうな声で謝るリファ。リコリスは考えもしなかったが、この子は自分のせいでリコリスが怒られたと思っていたのだ。

それは違うだろう。確かにリファはリコリスの救出を優先したが、けれどもそのおかげでリコリスは九死に一生を得たし、そもそもそんな状況を招いたことにリファは一切責任などないのだから。

不意にリコリスは疑問を抱く。どうしてリファは自分を助けに来たのだろうか、と。

あの時、救難信号を出していたとはいえ、戦況的に不利だった状態で戦力の要であるリファとヒクリオンが救出に向かうのは愚策であろう。エピメテウスの一体でも送ってくれば、それでよかったものを。

それについて何故と質問すると、回答はひどく単純明快なものだった。

「だって、リコリスが心配だったから……」

心配だったから。リコリスは胸を締め付けられるような錯覚を覚えた。驚きと言ってもいい。

リコリスに家族はいない。そんなものはなく、だからこそ天川宙のことを自分と似て非なる人物だと決定付けていた。姉や養父の愛を知り育った宙と、ただ気づいた時にはヌービアムのマスターとしてトウリアビータに参加していたリコリス。それこそが決定的な違いだと思ひ込んでいた。

だがしかし、リファの言葉は、行動は。損得勘定を感じさせないその在り方は家族のそれとしか思えない。否、家族がどんなものかさえ分らないくせに、ただ知識だけでそのようだと感じているに過ぎない。思い込みだと思っても、けれどリファの存在にリコリスは暖かさを抱いた。懐かしいような、泡のような儂いものが込み上げる。

「ねえ、リファ？　今から私も寝るのだけど……一緒に寝る？」

咄嗟にそんなことを言った自分を意外にも思うが、とても心地の良いものだと思う。

例え天川マツリという存在に惑わされたとしても。リコリスとして自分を慕ってくれる人がいることがひたすらに嬉しいのだと、リコリスは心情を分析した。悪い癖だ、人間として生きるのにわざわざ心情を考える必要などないのに。ただ心の赴くがままに。

リファは顔を上げると、大きな瞳を輝かせて、

「うん！　リファ、リコリスと一緒に寝る！」

互いの手を握り、笑みを携えて歩む。

この時、自分の存在だけを考え続けてきたリコリスの胸に。

ふと、誰かと一緒に生きていくという意識が、ひよいと首をもたげた。

第十八話 スレチガイラプソディー

第十八話 スレチガイラプソディー

早朝。いや、まだ真夜中と言っていい。

段々と夜の闇も褪せてくるだろう、人々が眠りの中にある時間。一切の遮蔽物がない海上では、暗がりにより一層強調されて見えてしまうものだ。

ましてや季節は冬。この時期の朝は夏に比べて格段に遅い。日の出が顔を覗かせるまでもう少し時間がかかりそうだな、と。如月千早はコックピットの中で、高速で流れる代わり映えのない景色に微かな感想を抱く。

千早はヌービアムのコックピットにいた。

インベルの時と違ってサブパイロット席ではなく、操縦の主となるメインパイロット席に腰掛けて、普段と少し違う操縦感覚に落ち着かないと感じながら外界の景色に意識を向けている。

ヌービアムのツインアイカメラを通してモニターに映し出されているのは、延々と広がる海とその彼方の地平線。空は人工の光がない分、東京の空より星が多くて綺麗だ。

ふと、自分の定位置だったサブパイロット席に視線を投げる。メインパイロット席より少し低い場所に、金髪の少女が寝息をたてて睡眠中。首をかくかくさせながらも一向に起きる様子がない星井美希に呆れて嘆息しつつ、仕方がないとも頬を掻く。本来なら千早共々夢の中にいる時間帯だ。

現在、東京から海上を横断するヌービアムはその目的地を月見島に定めていた。

トウリアビータから鹵獲 否、取り戻したヌービアムの予備パーツやその他IDOL関連の装備を受け取りに行くのが今回の任務

である。

IDOLに関する部品の生産は、機密度の都合上、月見島含む世界数箇所のみ限定されている。アイスランドの戦いで大きな損傷を受けたIDOL達の修理が急を要するため、こうして千早が受け取りを任されたのだ。下手な輸送機よりIDOLの方が断然早い。

……それにしても、私がメインパイロットを任せられるなんて。二人乗り用に換装されたばかりで真新しい席の座り心地は、悪くない。補佐を重視して機器が雑多なサブパイロット席に比べるとシンプルだし、その分、機体の操縦を任される責任＝重みが増したような気さえする。操縦桿を握る手に力を込め、千早はヌービアムの鼓動にも似た駆動音を聞いた。

プロメテウス3・ヌービアム。ヴェルトールと同じ黒い装甲を纏ったIDOLは、新たなマスターとして如月千早を選んだ。現時点におけるハーモナイズで最も優秀な成績を叩き出したのは彼女であり、また、次点の美希がパートナーとして選出されたのはつい昨日のことである。

千早と美希が抜けたことによる各コンビの穴はあずさの負傷もあって保留状態だが、結果、アイドルマスター課はこれで五体のIDOLを同時運用可能となった。新型人工IDOLがその姿を現したとはいえ、これは大きなアドバンテージだ。ドロップ迎撃はさることながら、五体のオリジナルIDOLという戦力は牽制にもなる。

とはいえ、それだけで問題が解決したわけではない。そうでなければ、今の今まで戦いが長引くこともなかっただろう。

ましてやアイオンという第三勢力のこともある。問題は減るところが増えたといってもいい。

そして千早には、もう一つ不安に思うことがある。

昨夜。あれから半日も経っていない、屋上での宙との会話。

あの後、もう一度話がたくて宙を探したのだが、結局見つからなかった。自宅の荒み具合が頭を過ぎる。今は父しかいないはずのあの家に、戻りたくない一心で、昨晚はそのまま基地の仮眠室

で目を閉じた。

「俺は取り返す、か……」

あの時、宙の瞳に、言葉では表せない感情に、心が震えた。まるで死に急いでいるようにも思えて、とにかく宙と話がしたかったのだと思う。だから彼を探そうとした。

そうしなければ、もう二度と、話せないような気がしてならずに。

考え過ぎかな、と。千早はそれ以上思考するのをやめた。自分は不幸だと思いつもりなどない。しかし宙が言ったように、両親の離婚は少なからず自分に影響を与えているようだ。色んな事を考えてしまうのは気持ちが悪く、ごちゃごちゃしているせい。きつとそう。

頭を振ってモニターに映る海を見る。黒いという表現が当てはまるブラックホール染みた引力を感じる深い色。それが不気味に波打つ様は、まるで自分の心象のようだ。千早は自嘲して、ふと、そろそろ整備島との距離が縮まってきたことに気づいた。

「美希、そろそろ着くわよ。起きて」

「うーん、もうおにぎり食べられないよ……」

「なんてベタな……！」

肩を揺さぶろうと手を伸ばしたその時である。

ヌービアムのセンサーが、高速で飛来する複数の機影を捉えたのは。

センサーが返してくる情報は戦闘機のそれではない。この時間帯に、この空域で鉢合わせするような話も聞いてはいない。千早は素早く機影の認証を行った。指でパネルを弾くとももの数秒で結果が表示される。

アンノウナー機。加えてエピメテウス多数。

トゥリアビータ。

千早は美希の頭を全力で殴って叩き起こした。

「いったーい！ な、なにになに！？」

「敵襲！」

言つて、焦る視線をモニターに投げた。ヌービウムを戦闘態勢に移行させると同時、肉眼で捉えられる距離にトゥリアビータが侵入する。地平戦の向こうにぼつんと浮かんだ影複数。おまけに、ご丁寧にも宣戦布告まで飛んできたのだった。

『あら、おはよう。奇遇ね。過激な朝の目覚ましはいかが？』

真夜中、電話で叩き起こされた宙は人気のない街中を自転車で突っ切ると、辿り着いた765プロのエレベーターに飛び乗った。階数のボタンは押さず、モンデンキント職員だけが持つっているカードキーを使って地下基地へと向かう。エレベーターの下へと向かう重力を感じつつ、宙は嫌な予感がする、と呟いた。

屋上で千早と話した後、一旦自宅へ戻った宙は倒れるように眠りについてた。自分で思っていた以上に疲れが溜まっていたらしく、電話がかかってこなければ朝まで熟睡コースだっただろう。それを、こうして汗だくになって暗い夜道を走り抜けて来たのは、小鳥との電話の内容がまどろんだ思考を吹き飛ばしたからだ。

つまり、ヌービウムとトゥリアビータが交戦に入ったという内容が。

……機会が巡って来たかもしれない。

エレベーターが止まり、ドアが開くと同時に走り出す。その足で真っ直ぐ向かったのは管制室。横にスライドする自動扉を通り抜けると、部屋は慌しい様子でオペレーター達の声が飛び交っていた。

ざっと見渡すと、春香がジョゼフと話している。春香はドロップ迎撃の当直だったはずだ。ジョゼフの一言一言に顔をしかめていく様子から察するに、あまり良い状況でないのだろう。

「課長、天海、状況は？」

「天川さん、早かったですね。あまり芳しい状況ではありません。ヌービウム一機に対し、トゥリアビータは新型機を投入して

きています。おそらくヌービラムの奪還が目的でしょう。どうやら動きが勘付かれていたようです」

振り返ったジョゼフの視線の先、大型モニターには海上で繰り広げられる戦闘の様子が映し出されていた。エピメテウス数機に見たことのない灰色の新型。いや、そのフォームは明らかにヴェルトーとの互換性を秘めている。偽者が……！ 吐き出した宙は舌打ちをして、しかし心臓を跳ね上げた。

あの新型機の動きは間違いない、“彼女”だ。

どくんっ。心臓が跳ねる。どくんっ。ほら、また跳ねた。心臓が、思考が、過熱してレースカーみたいに凄まじい勢いで加速を開始している。脳内から分泌されるアドレナリンが心拍数を上昇させていく様を、宙は身を持って感じた。機会が巡ってきたんだ。口端が吊り上がるのを抑えながら、宙は告げる。

「新装備が役に立つ時だ。ヴェルトールで出る」

コラプサーを装備したヴェルトールと、かるうじて修理の間に合っているインベルの二機ならば出撃は可能だ。インベルは千早を欠き万全な状態ではないが、文句を言っていられる状況ではないだろう。千早と美希の援護が最優先である。

行くぞ天海。そう言っ、走り出そうとすると、

「我々もそうしたいのは山々なのですが……」

ジョゼフは言葉の端に漏れた憤りを噛み殺し、

「許可、することはできません」

「な、何を言ってるんだよ！？ 今にも如月達は」

「本部からIDOLの発進命令が下りないので。こちらから何度も要請を繰り返しているのですが、本部は返答を“待て”の一点張りで……」

そんなもん！ と怒鳴った宙は、しかし首を振るジョゼフを睨み付けた。

これが組織だ。モンデンキントという名の。どれほどの正義感や義務感があるうとも、それを押し潰ぶすのがこの組織なのかもしれ

ない。騙されている。湧き上がる不安と不信感がリコリスの言葉を反芻させた。何が悪くて、何が正しくて、何が嘘で、何が本当だ？ この自問自答の意味は。

だが、明確なこともある。今この瞬間も事態は動き続けているということ。

このチャンス逃すわけにはいかない。

「落ち着いてよ、宙。私だって二人を助けに行きたいよ。でも、でも……！」

春香は目尻に涙を浮かべて、宙の服の裾を握ったまま今にも泣き出してしまうそうだった。思い至る。春香は宙よりも先に、出撃を進言していたはずだ。大事な友達を助けるために、何度も何度も。

手の平に痛みが走る。見ると、握り締めた拳の中で爪が食い込んでいた。じわりと滲んだ血を見て、妙な興奮が宙を苛んだのと同時に、すつと身体から力が抜けるのを感じる。脱力。次いで、眼球がじろりと管制室を見渡す。

忙しくコンソールに向き合う小鳥達も、発進の許可を出せないジョゼフも、ただ無事を願うことしかできない春香も、皆行動できずにいる。動かなければいけない時に何もできない苦しみを全員が共有している。それは宙とて同じだった。皆、ルールという鎖に縛られているからだ。

無視すればペナルティが課せられる。それ故に動けないでいる。だから、その鎖を千切るのは自分の役目だ。

宙はそつと管制室を後にした。事態の収拾に忙しいジョゼフ達はそれに気づくこともなく、唯一春香だけがその背中を見て、閉じる扉の向こうに消えた宙に呼びかけた。声は届かず、宙はひたすら前だけを見つめて足を進める。ヴェルトールのいる格納庫へと。

道中、勢い良く鼓動する心臓の音を聴いて、これから自分のしよつとしていることを再度確認。千早達の救援とそして。できるか？ と疑問する。同時に、できるさ、とも肯定する。弱い自分を殺せ。過去の弱い自分を凌駕して見せる。何度も自問自答し、荒ぶ

る鼓動は成すべきことを成すための高揚だと首肯。

やるんだ、と。自分でも驚くほど低い声で宙は言った。

格納庫への扉をくぐると、すぐの場所にヴェルツールは鎮座していた。

以前とは比べ物にならないほど凶悪な外見に変貌しても、緑光色の優しい瞳は、宙の存在に気づくと明るく点滅する。引き締めた表情から、思わず頬を緩めてしまったのは、ヴェルツールからの信頼を肌で感じたからだろう。どこまでも心強い相棒を、自分のわがままにつき合わせてもいいのか少し迷ってしまう。

大丈夫、こいつだって分かってくれるさ。身勝手な結論を無理矢理納得させて、整備員が作業する間を何気ない表情で素通りした。

非常時なのはこちら側にも伝わっているので、宙が入って来ても誰も咎めるものはない。何人かが、大変なことになったね、と話しかけてきたのを如何にも難しそうな顔で頷いて見せて、宙はヴェルツールのコックピットに繋がるタラップに足を掛けた。

と、不意に背後から、

「ん？ 宙、そんなところで何をしとるんや？ まだ発進許可は下りてないやろ」

キャットウォークから宙の存在に気づいたのは整備班長だ。アイドルマスター課で長い間IDOLに関わってきた彼女は、他の若い整備員に比べて意識の切り替えがよくできている。まだマスター搭乗の連絡が来ていない中で、コックピット乗り込もうとした宙を不審に思ったのだろう。

よりにもよって面倒臭い人物に当たったな。舌打ち、歪んだ表情をおくびにも出さず、そのまま、

「コックピットで待機命令、連絡来てないの！？ じきに発進命令も来る、しっかりしてよね！」

「何やて？ ホンマか」

ばつの悪そうに、すまん、と告げた整備班長は、管制室に確認を取るため宙の視界から消えて行く。

まずい、あんな即席の嘘すぐばれる。思い立ったが吉日の行き当たりばつたりな強行策とはいえ、失敗しては全てが台無しになる。急げ、と身体に命令を飛ばし、コックピットに滑り込んだ。起動していないコックピットの中は暗い。

メインパイロット席に腰を下ろすと、モニターがぱつと明かりを灯した。

「相棒、頼みがある。基地のシステムに介入して、少しの間だけ時間を稼いでくれないか。二、三分でいい。……発進できるだけの時間が稼げればそれでいいんだ」

例のハッキング事件でIDOL達が活躍したという話は聞き及んでいた。ヴェルトールならば基地のシステムに介入し、発進力タパルトのコントロールも奪えるだろう。そして、基地が混乱している間にヴェルトールで発進する。宙の考えた作戦はとてもシンプルなものだった。

博打要素が大きい上、成功するかも五分五分。大胆な方法だが、宙にはこれくらいしか思いつかなかったのもまた事実。

それでもこの状況で手を拱いているわけにはいかないのだから。

実行に移す価値は大いに、ある。

ぴこっ！ と電子音を鳴かせたヴェルトールのそれを肯定と受け取る。起動キーであるアイを挿入すると、命を吹き込まれていくかのように点灯していく機器。操縦桿を握る手に確かな暖かさを感じ、宙は大きく深呼吸して、目を伏せる。ただ黙ってその時を待つ。

しばらくして、外部集音器から拾われてくる音の中に整備長の声を聞いた。

『宙、やっぱり発進許可なんて出てないやないか。いい加減に……っ！?』

言葉は最後まで紡がれない。理由は分かっている。宙は口端をにやりと歪めて、ヴェルトールに礼の言葉を送った。

外の職員達は驚いたであろう。突如、基地のあらゆる箇所が電力が落ちただけだから。それだけではない。主電源だけに止まらず、基

地の管制システムまで混乱に貶めたヴェルトールは、更には地上へ出るためのルートを確認した上で、カタパルトのコントロールをこちら側に奪ってみせたのだ。

迅速にも程がある電撃作戦的介入は、電子的にもIDOLが優れているのを証明して見せたと言っている。おそらく、部屋に閉じ込められた職員もいるだろうし、一時的とはいえ外の状況が掴めなくなった管制室の一同は混乱しているだろう。迷惑をかけてしまったな、と思う一方、それだけの価値があると自分を納得させる。

伏せた目を、ゆっくりと開く。

「行くぞ、ヴェルトール」

“行こう”。

宙が操縦桿を倒すと、モニターに表示されるアクトオンの文字。黒い重装甲が身じろぎし、ヴェルトールの異変に、整備員達が悲鳴をあげてキャットウオークから遠ざかっていく。それと同じくして、予備電源に切り替えた基地全体が赤い照明に照らし出され、格納庫の異常を察知した管制室から小鳥の声が響いた。

『宙くん、そこで何をしているの!? まだ発進許可は下りていないのよ!』

止めても無駄だ。小鳥の声に耳を貸さず、

「ほら、退けよ! ケガしても知らないんだからな!」

強引な物言いで整備員達を退去させると、奪ったコントロールでキャットウオークを移動。カタパルトへの道が開くと同時、ヴェルトールを吊るしていたハンガーがレール上を滑り始めた。火花を散らして超重量の機体をカタパルトハッチまで運ぶと、フックが外れてカタパルト上に機体が滞空する。

管制制御、及びコラプサー各部人工コア良好に作動中。 いける。

『天川さん、聞こえていますか! これは命令違反ですよ!』

「分かってるさ、頭では理解できてる。けど、感情ってものはそ
うもいかないだろう!」

「感情論で組織は動きませんよ！」

「感情で動いて何が悪い」

宙は手を振り、

「人間なんだから、当然だ！」

発進を止めてください！ ダメです、間に合いません！ ジョゼフと小鳥のやり取りを無視して、宙はフットペダルを踏み込んだ。

「ヴェルトール、アクトオン！」

瞬間、増設されたバーニアが怒涛の勢いで噴出しヴェルトールの巨体を押し進める。カタパルトを数秒で駆け抜けけると、黒いIDOLは真夜中の東京上空に舞った。星も見えない大空を、影も落とさぬ暗い闇の中を飛翔する宙の目に、ふとモニターの端に映った病院が飛び込んできた。あずさが入院している病院だ。

あずさはきつと夢の中だろう。彼女はどんな夢を見ているだろうか。心地よく寝ているだろうか。いや、それは明日話せばいい。千早と美希を救って帰って来て、自分の中の問題を片付けて、夜中にこんなことがあったんですよと驚かせてあげよう。

うん、それがいいな。いつもと何も変わりなく、あずさが笑顔でいられるような話題を持ち込んであげるのだ。

もう他のことに気を散らしてはいけない。視線を逸らした宙は、向かうべき場所へと意識を傾けた。振り返らず、自身の成すべきことだけを信じて。

それは、もう二度と戻れない暖かな場所との別れだった。

「……ヴェルトールが発進した？ こちらは許可を出した覚えなどないが？」

「マスターの独断行動か。困ったものだな、カイエンの玩具にも」

「止むを得まい。“クチバシ”の試射はまた次の機会とする。あれは我々にとっての隠し玉だ。隠しておくに越したことはない」

「どちらにせよ“月”と戦う前にトウリアビータは片付けなければならん。コラプサーの実証実験にもなるう。下手にクチバシを使つて、ヴェルトールを傷つけては本末転倒だ」

「あれは他のIDOL以上に重要な存在ですからね」

“シカンダ”。敵に対抗するための剣。カイエンはどこまでアレのことを把握していたのだろうか。奴が一線を退いてからはその手の研究が進まなくて困る。近々、再びこちらに引き戻すことも検討しなくては」

「どちらにせよ、今は現状の解決が最優先だ。アイドルマスター課にIDOLの発進許可を出せ。こうなつては、動いてもらわねば困る」

銃口が閃く。

連続される銃撃音が海上に響き、千早は呼吸すら忘れてフットペダルを蹴り倒した。応じてヌービウムが横ロールすると同時、三発の弾丸が、回避コースを塞ぐ絶妙な弾道で襲い掛かる。動悸は加速。咄嗟の判断で蹴り上げた脚部が弾丸を消し飛ばし、辛うじて危機的状況を脱する。

動きが間に合っていない。ヌービウムは今、完全に敵の手の内にあった。

「千早さん、どうするの!？」

「なんとか耐える!　ここで墜とされるわけには……!」

突如の襲撃は、千早と美希に焦りを植え付けるのは十分過ぎる出来事であった。エピメテウス数機に加えて灰色の新型機。その新型の姿に、ヴェルトールが重なる。

おそらくヴェルトールの同系機。灰の色は、むしろ塗装前の未完成さを醸し出していて、ヴェルトールを象徴する肩のバインダーもなければ、アルツァヒールを装備している様子もない。代わりにミ

サイルポッドやレールガンなど、対IDOL兵器を多数装備したその機体に、ヌービウムは圧されつつあった。

逃げ惑うヌービウムをエピメテウスが追従し、灰の新型がレールガンで狙い澄ます。まるで、猟犬に追わせた獲物へ狙いをつける狩人そのもの。無理矢理な機動とランダム回避を駆使しても、必ず銃弾が飛び込んでくる。

無人の動きではない。もっと熟練した人間　　エースだ。

上方から降り注ぐ無数の銃弾に唇を噛み締めた千早へ、

『動きが鈍いわね。せつかくの機体が台無しじゃない』
くすくすと笑うその声は、

『私からその子を奪ったのなら、それに相応しいだけの働きをしてご覧なさいな！　この“サイーデ”と同等の働きをね！』

自信に満ちた威圧。灰色の狩猟者　サイーデから女の声がした。奪う。相手の言葉を反芻した千早は言った。

「あなたもしかして、リコリスって人ね！」

『あら、ご存知？　私も有名になったものね』

「ううっ、この人嫌いなもの！　東京で会った時すごく怖い思いましたもん！」

あつかんべと舌を出した美希。銃を突きつけられるという、強烈なトラウマを刻んだ相手を、精神的にも受け付けられるはずもない。美希はふてくされた表情になりながらも、間断なく撃ち出される弾丸の軌道予測を千早に伝え続けている。彼女の心中には、ここを耐えれば宙が助けに来てくれるという想いがあったのだ。

「持ち堪えればハニーが助けに来てくれる。そしたらあんなにかけっちょんけっちょんなんだから！」

ちくり、と。千早の胸中に痛みが走る。先程、宙がこちらに向かったと連絡があった。ここを持ち堪えれば彼が助けに来てくれるだろう。だが、つい数時間前のやり取りが頭を過ぎり、失望された、見限られた、そんな風なイメージが如月千早を殴りつけ、胸が苦しいと軋みをあげる。

……くっ！　こんな思考は邪魔なだけなのに！

宙への信頼が裏返って不安に変貌する。千早の中で、宙はもうかけがえのないほど大事な存在となっていた。

幼い日の憧れではなく、対等な位置に立つ男性として。宙は千早にとつての支えとなっていたのだ。そのことを理解していながらも認める勇気が足りない。拒絶されたら、否定されたら、如月千早は一人ぼっちになってしまうから。そんなことは嫌だ。

……それは弱い私！　私はそんなんじゃない！

不安を振り払うように、千早はフットペダルを踏み込み、ヌービームの脚部バーニアを噴かせた。空気の壁を突き破って前方へ加速する巨体が、破壊の意を持って飛来する弾丸を、上下左右の豪快にスライドするアクロバティック飛行で回避していく。

ただ逃げるだけではない。サイーデが次弾を装填するわずかな隙を突き、拳の届く近接距離へと潜り込んだ。カメラを通じて千早とリコリスの視線が交差。

瞬間的激突。繰り出した右拳は、しかし身体を逸らしたサイーデの顔先を掠るに止まった。惜しい！　美希の残念がる声を聞きつつ、千早は即座に次の行動を開始。回避、回避、回避。相手の懐で無防備になるのは撃墜と同義だ。

カウンターで突き出された膝が胸部を擦過し、火花が散る。回避は紙一重だった。脚部を振り上げ、推進器の口を前方に向け、火が吹き出ると同時に機体が後ろへ弾き飛ぶ。

安全圏への退避。千早は深呼吸。瞬時の攻防の緊張から自分を落ち着かせる。

『へえ、やればできるじゃない』

「あなたは何様のつもりですか！　上から目線で人の動きに採点を下して！　それに宙だって、あなたと会ってからおかしくなってしまうた。一体彼に何をしたの？」

『……知らない。勝手に誤解して、勝手に苦しんでいるだけです』

低い声。思わず、ぞつと肌が鳥肌立つ。

『私はリコリス。他の誰でもない……！』

密かな“苦味”が込められた叫びが、電磁加速された弾丸と化してぶつけられる。思わず出た舌打ち。機体を翻したその刹那。

両腕を重ねて振り上げたエピメテウスが、すぐ背後に飛び出してきた。

「しまっ……」

た、と唇が言葉を形作る前に衝撃が走った。容赦なく背部に叩きつけられた拳に、ヌービウムは腰を横に折りながら水面へと落下する。撃たれる……！ 千早の脳裏を翳めた銃弾に貫かれるイメージは、彼女の身体を一瞬で凍えさせる。

それを、まさしく“狩る”側の瞳で狙い済ませたリコリスは、十字の照準をヌービウムに合わせ。

『……っ！』

躊躇いなく引き金を引こうとした瞬間、サイーデの目の前を遮るように光線が迸ったのだった。

如月千早は、息の絶える寸前で水の中から顔を出した時のような酸素と共に生の実感が空っぽの肺の中に入ってくるのを感じた。

眼は、銃口から自分達を救った光線の残滓に向けられている。鼻は、絶え間ない操縦で服に染みた汗臭さを嗅いでいる。肌は、後から実感として湧き上がってきた恐怖で駆け抜けた背筋の悪寒を伝えている。舌は、叫んだ際に思わず噛み切ってしまった口内の血の味を味わっている。耳は、ある機体の接近を知らせるアラームを聞いている。

身体を司るありとあらゆる感覚という感覚、五感が生きていると訴え、千早は荒い息を吐く。直後の行動は、千早も美希も、そしてリコリスも同じ。皆、同じ方向に視線を投げたのである。

目撃する。光線の源。水飛沫をぶちまけながら海面すれすれを飛来する黒い巨影。強化装甲によって肥大化したシルエットから一対のスタビライザーを広げ、手にしたロングライフルをアイオンに

向ける機体を。

誰かが呼んだ、その機体の名は。

「ヴェルトール!!!」

助けに来てくれた。美希は満面の笑みを浮かべ、千早は胸が高鳴った。本当に、姫を救うために颯爽と現われる騎士のようしか思えない登場だ。

腰のウィングスラスターと増加バーニアが更に出力を上げ、威圧を込めて敵を刺し貫くカメラアイを覗かせて、ヴェルトールはサイードに対し両手のライフルを狙いもつけずに連発した。

光弾。直線を描く無色光は、アルツアヒールのそれと酷似している。当然だ。威力では劣るものの、アルツアヒールを解析し、擬似的に再現したそれに類似性がないわけがない。唯一の武装を失ったヴェルトールにとって、これ幸いとばかりに打ってつけの代物に違いなかった。

……けれど、あの機体がそう簡単にやられるわけが……。

千早の想像通り、すでにサイードは新たな状況に適応し終えている。即座に、振り回す勢いでレールガンの先をヴェルトールに固定し、大盤振る舞いに連発。複数の列を成し、針の穴に糸を通す正確さで放たれた弾丸が、ヴェルトールに殺到する。

だがどうしたのか。ヴェルトールは回避行動を見せようともしない。それどころか、一直線に突っ込んで来るではないか。確かにサイードへの最短距離はそのコース。撃墜を覚悟しているとしてもいいのか。自殺行為だ。千早が背筋を冷たくする前で、群れを成す弾丸が愚か者を滅さんと直撃した。爆発。

「ハニー!!」

美希が口を覆いながら言って、

「違う!」

海が炸裂した。轟っ! という雪崩や地響きにも似た大音響が、海を割ることによって拡散する。伸び上がる水柱が雨を生み、爆発で発生した水蒸気から浮かび上がる緑光の瞳。次の瞬間、水上を滑

るように移動していたヴェルトールが、水面から羽ばたく水鳥のように舞い上がった。その姿、己が力を誇示するが如く無傷。

ヴェルトールの両肩。大型化され、人工コアをそれぞれ搭載した多重装甲バインダーが、機体の前面を守るように展開されていた。無傷の理由はそれである。強力な盾としての機能が、機体に纏う重力殻と相まって、二重の堅牢な守備を生み出しているのだ。

……なんて、強力な！

ヴェルトールの進撃は決して止まらない、止められない。飛び上がる黒のIDOLが狙うは、灰の鈍色めいた装甲鎧う敵のみ。両腕のライフルで今度こそ狙いをつけると、吐き出された光線は二発ずつ。当たりは正確だ。光線はサイーデの重力殻を減衰させ、機体をよるめかせる。これ以上ない隙、だった。

そして、そこで初めて、ヴェルトールのマスターは 天川宙は絶叫した。

『この時を、待ち侘びた！！』

絶叫の強さを体言するための攻撃。すなわち、最大出力で展開した重力殻ごとサイーデに突貫すること。または体当たり、とも言う。けれど侮ることなかれ、合計三つのコアによって、既存のIDOLを遥かに凌駕した“ヴェルトール・アルタスク”の重力殻強度はオリジナルIDOLの倍以上に匹敵する。それが秒速三〇〇メートル超過でぶつかったらどうなるか。

結果は、甲高い激突音と共に訪れた。

『考えが、甘い！』

ただの力押しで、リコリスがやられるはずもない。重力殻同士が接触する瞬間、サイーデは躊躇なく右足を蹴り上げた。迎撃のためではなく、蹴撃の反動を利用して機体を避難させるために、だ。

一方向に真っ直ぐ投げられたボールが横からの衝撃に弱いように、ヴェルトールもまた、わずかに方向を逸らされて、その勢いをも利用し、サイーデはヴェルトールの真下を掠る形で安全圏への逃れ落ちた。

『やる……!』

無論、宙とてケリが着くとは考えていない。即座に機体を回転させると、ヌービームを背後に匿うかのような位置に陣取った。

その、攻防の激しい一瞬。圧倒的な光景に声も出なかった千早は、スタビライザーを広げるヴェルツールに魅入ってしまった。空気や音、あらゆるものが、その時だけ絶対的な静寂に満たされて。完全な静寂の中心に、ヴェルツールは存在していた。

最初に沈黙を破ったのは美希だ。

「ハニー？　ねえ、ハニーなの？」

『ああ、二人とも無事か？』

「ハニー！　美希、きつとハニーが助けに来てくれると思ってた！　やっぱりハニーは美希の王子様だね！」

『その調子じゃ、どうやら平気みたいだ。如月もな』

「……助かったわ」

言葉を振られて、千早は簡潔に言った。屋上の件もあるし、あまり堂々と話せるような状況ではなかった。だから視線もすぐに逸らしてしまう。千早の様子から、そう言った細かい心情まで分かってくれたのだろう。宙は千早にそれ以上何も言わず、二人に対して安堵の息を吐き。

ヴェルツールは、ライフルの長い銃身を持ち上げて、真っ直ぐある機体に向けた。剣の切っ先を突きつけるように。

灰色のIDOLサイーデ。リコリスの機体。

寡黙な、緊張という名の電流が空気に走り、相克するヴェルツールとサイーデの視線が、夜の空に交差する。

これはチャンスなんだ。宙は呟く。

ここに、とある男の戦いが始まった。

第十九話 リコリス

第十九話 リコリス

海上を弾丸飛行モードで突き進むインベルの姿があった。

四肢を折りたたみただ直線的な加速を追い求める姿は、もっと速くという天海春香の願いの具現だ。おそらく、すでにヌービウムと接触しているであろうヴェルトール。追加のコラプサーによるかの機体の速度は常軌を逸しており、出遅れた分を取り戻すには至っていない。お願いインベル、もっと急いで！

コアから供給される莫大なエネルギーが全て推進器に回され、噴射口から吐き出される火炎が更に強くなった。春香の想いにインベルが応えている証拠である。

が、春香が危惧しているのはそれだけではない。

出撃の時にジョゼフが言っていたこと。現在の月見島周辺の状況は、先日のアイスランドと状況が酷似しているという忠告。つまり、複数のIDOLが一カ所に集まり戦闘を行っているという事実が春香の心中に焦りを生み出していた。

可能性。危惧しているのは可能性に他ならない。IDOLを狙って現れるあの“異形存在”に対する畏怖。

……みんな、無事でいて……！

フットペダルを更に押し込み、文字通り弾丸の如く春香は飛ぶ。

「如月達は先に行け」

サイーデに照準を合わせたまま、天川宙は平坦な声で言った。同時に周囲を取り巻く状況を密かに確認する。

この場に存在するIDOLは全部で八機。エピメテウス五機に新型機サイーデを投入する敵に対して、こちらはヴェルツールとヌービームのみである。ヌービームとサイーデは互いに対極の位置におり、その間、ヌービームを庇うようにヴェルツールがいる。エピメテウスが周囲を取り囲んでいる以外に、障害になりそうなものはない。

戦力比はやや不利か。目を細め、そういう打算を脳内で展開した宙は、考えた末に言ったのだ。先に行け、と。

「サイーデは俺が引き受ける。その隙に月見島へ行くんだ」

『でも宙を一人にするわけには……』

「如月、自分の役目を思い出せ。心配しなくてもあとで合流する」
『けれど……』

「悪いけど、エピメテウスまでは手が回らない。雑兵はそっちで片付けてもらうことになる。自分の心配をしてくれ」

『ハニー？ なんだか、ちよつと怖いよ？』

「大丈夫だよ。さあ、早く！」

わずかに沈黙が横たわった。やがて、

『……分かったわ。後で会いましょう』

決断した千早はヌービームを反転させ、月見島の方角へと機体に向けた。宙はほつとする。素直に聞き分けてくれるのは有り難いが、若干含みのある返答の裏には、何かしら引っかかりを覚えている節もある。感の良い奴だな。思い、それを最後にサイーデへと意識を集中した。

大きく息を吸い、吐く。身体を走る血流も内を震わして叩く鼓動も、一息というリラックスで落ち着かせる。大丈夫だ、操縦桿を強く握り過ぎて血の気の引いた手も段々と戻りつつあるし、身体を苛んでいた興奮もコントロールできるくらいには収まっている。

今の自分は正常かつ冷静だ。

『勝手に話を進めないでもらえるかしら』

途端、ヌービームの行く手を遮ってエピメテウスが壁を成した。

どうやら、簡単に行かせてくれる気はないらしい。無論、当然と言えは当然だが。

「その機体のマスター。あんたはリコリスで間違いないな」

『イエスよ。しばらく会わない内に……ずいぶんと雰囲気が変わったわね』

宙は、首筋の後ろがちりちりと粟立つのを感じた。あの声を聞いただけで、アイスランドでの出来事がリフレインして、眼が充血して目の前が真っ赤に染まりそうになる。刹那的に荒いだ呼吸を噛み殺し、千早達へ早口に告げる。急げよ、と。

『大人しく従ってくれる気は、ないようね』

優雅とも取れる響きでリコリスが言つて。サイーデが右腕をすつと掲げ、

『それなら、遊びましょうか』

振り下ろす。それを皮切りにエピメテウスはヌービウムへ進撃し、ヌービウムもまた、月見島に向かって脚部推進器から火炎を噴出させた。あつという間に遠のいていく鋼と鋼の打ち合わす不協和音。それすら、宙の意識は遮断している。

『行つてしまつたわよ。……何か私に用事があつたのでしょうか？』

「話が早いよ」

どうやら彼女は、宙の思惑を察していたらしい。千早達を早々に“遠ざけようとしていた”わけに。ようやく本音を話せる開放感に身体が緊張がわずかに弛緩。

状況は整っている。回りくどい言い方はしない。単刀直入に、問う。

「あんたは姉さんなのか？ 天川マツリなのか」

「やっぱり聞きたいのはそういうことか。予想通り過ぎて拍子抜けだわ」

「答えてくれ、あんたは何者なんだ！ あんたの」

その姿はどういう意味を持っているのか。

天川マツリと瓜二つのその姿は、何を意味しているのか。

アイスランド以来、ずっと疑問を抱き続けてきた。支配されていたと言ってもいい。最愛の姉。そして死んだはずの姉。そこに現れた瓜二つの女性。当然の帰結で、誰だって思ってしまうだろう。もしかして姉は生きていたのではないかと。リコリスと名乗っている理由も、トウリアビータに参加している理由も、置き去りにしようとも。

生きていてほしいと願って何が悪い。

宙の切実な願いを聞き届けたリコリスは、頬を緩ませて言葉を紡ぐ。

『反吐が出るわね』

一笑の元に想いを両断する一言。胸が引き裂かれるような痛みを錯覚する。

『私は天川マツリではない。もう一度言う。私は、あの女ではない！』

宙は悲しみに満ちた空虚を。リコリスは殺意に満ちた怒りを。それぞれ真逆の反応を見せて対峙する二機のヴェルツール・タイプ。向けられた銃口をも歯牙にかけず、リコリスは剣呑な雰囲気纏って宙を貫いた。

…… だったらあなたはなんなんだ。

声にすらならない疑問を吐く。一度も忘れたことのない姉の姿と、リコリスの姿はあまりに似過ぎていた。髪の色、目の色が違ってしまっている。天川宙が姉の姿を見間違えるはずなどない。故に疑問が生まれる。リコリスは何者なのかと。

胸の苦しみは吐き出さなくても吐き出せない。

「あんたは姉さんだよ！」

『黙れ！』

憎悪すら滲ませる怒声が響いた。びくりと身体を震わせた宙の動揺を突き、サイーデがレールガンを向け返す。交差する銃口。反射的にトリガーを引きそうになって、慌てて片手で押さえ込む。ダメだ、これはあくまで脅し。“まだ”撃つてはいけない。事の真相を

明らかにするまでは、まだ。

『私はリコリス。トゥリアビータ所属のアイドルマスター。他の誰でもない！ 坊やの求める天川マツリは死んだのよ！』

それが覆ることのない真実。もうこれ以上、

『坊やの幻想を私に押し付けるな……！』

銃口が更に強く向けられる。感情が爆発すれば、その瞬間にヴェルトールを撃ち抜くだろう。死にたくなければ先に撃て、と本能が告げている。身体が震える。震えて、握った操縦桿が小刻みに揺れ動いた。震えは全身に至り。俯いた視線、目を閉じ、宙は自分に問いかけた。撃たなければ殺されるぞ。

けれども。反発する意思が渦巻く。けれども、リコリスの言葉だけが正しいのか。それだけで納得できるのか。マツリとリコリスの関係性。リコリスの過剰な拒否反応から見ても、二人の繋がりは間違いなく存在する。

まだピースは抜け落ちたままなのだ。最後のピースを嵌め込むまで、天川宙は。

「納得がいかない。あんたはまだ何かを隠しているはずだ」

この気持ちに収まりをつけ、結果を手に入れる。そのために必要なものは用意してきた。

「討つ覚悟を、もう一度心に刻んできた！」

『そう、なら最初から実力で聞き出せばいいじゃない』

合図は唐突に。真夜中の海上に、

『やれるものならねっ！』

瞬間、二重の射撃音と共に舞踏の幕が切って落とされた。

回避は経験より引き出された刹那の反応によるもの。二極の銃撃は互いの機体を掠めて後方へ。両者、すぐさま戦闘思考へ移行。

『まずは距離を……！』

「引いたらやられる、攻めろ！」

正反対の決断。それは二人の経験から弾き出された。

リコリスには強者としての余裕がある。故に正攻法。対して宙に

は弱者として知恵を駆使する戦法が必要だ。一度リコリスにペースに吞まれれば苦戦は避けられない。ペースは自分で作り出さなければならぬからこそ、前に出た。

引き下がりはいらない。それは、宙の心を表す行動だったとも言える。

弱気は殺せ。捻じ伏せる！

ヴェルトールとサイーデ。二機は同時に機体を加速させた。どんっ！ という空気を叩く加速音は、一秒も満たずに最大速度へ到達した証。常人には機体の影すら霞んで見えたであろう。二機は上へ、上空に向かって飛び出し、握る武装で相手に狙いを定めた。

発射。

初撃を制したのはサイーデだ。雷音にも似た発射音が耳に届くより先に、サイーデのレールガンがヴェルトールの重力殻に直撃した。なにせ音速の三倍である。肉眼では直視することすらままならならず、プラズマのカーペットを残して威力を発揮。

だが一秒間に三発、それも同じ着弾点をほぼ正確に狙い当てた攻撃は、黒の装甲にダメージを与えること叶わない。

ヴェルトールの防御は二重の鉄壁に守られており、重力殻を貫通しても、その先にある多重装甲バインダーが弾丸を受け付けない。戦慄を覚える脅威の鉄壁を活かし、ヴェルトールは回避を忘れて突進した。

回避はそれだけでひとつ動作を加えることになる。先を読み合い、少しでも多くの攻撃を繰り出し、また相手に隙を与えない攻防において、回避は身を守る代償に手数を失うことにも繋がる。

だから避けない。化け物染みた防御力で攻撃を中和し、回避を捨てた分だけ攻撃する。

宙が勝利を得るために選択した戦法だった。

『機体の性能に助けられてばかりではね！』

レールガンの威力では決定打にはなり得ない。ならば、と。リコリスはサイーデの背部に装備された筒状のミサイルポッドを展開。

ヒドルンの使用していた慣性制御中和型ミサイル弾頭。小型の赤い円筒が一斉に白線を引いて発射され、無数の首を持つヒュドラの如くミサイルが牙を剥く。その間も、牽制としてレールガンの連射は止まらない。

上手い動きだ。単発の威力では群を抜いているこちらの新武装だが、アルツァヒールのように広範囲を薙ぎ払う使い方はできない。数十発のミサイルを一度に迎撃することは不可能である。

アルツァヒールは現在修理中。例え盾を用いたところであればどの物量、爆発の衝撃はヴェルトールごと空に紅蓮の華を咲かす。避けられるかという自問に、無理だ、と素直に返す自分がいる。

……なら別の手を使うまで！

宙は操縦桿横にある単独操縦用の簡易コンソールで、登録しておいた武装選択をワンタッチで発動。機体状況を示すサブモニターの背部スタビライザー部分が点滅。V字展開されていたスタビライザーの表面装甲が割れ、基部に埋め込まれた幾多の電子回路がその役割を果たす。

次の瞬間、ヴェルトールに頭を向けていたミサイル群が、不可視の壁に阻まれたかのようにその向きを変えた。一つは天へ、一つは海へ。制御を失った無数のミサイルは四方へと散っていく。

『ECM!?!』

「これでミサイルは使えまい！」

受動的電子攻撃。チャフ、洩航デコイ、ステルスなどに利用され、敵が使用する電子スペクトラム、簡単に言えば電磁波を妨害、滅殺することができる技術のことだ。

オービタルリングの放つ妨害電波を考慮し、軍事兵器の大半がそれに順応（アクティブホーミング形式等）した昨今でもECMは確かな効力を発揮する。

無力化され、散っていくミサイルなどただのピン同然。恐怖の対象には入らない。今が好機だ。宙はフットペダルを蹴り倒し、ヴェルトールはサイーデへの直線コースに飛び込む。空気の白線が尾を

引いた。

『この追加装備、戦闘仕様で……！』

IDOLは元々ドロップ迎撃用の人型重機。例え優れた戦闘力を誇っていても、決して兵器ではない。それがモンデンキントのIDOLにおける“言い分”だったはずだ。

IDOLを戦闘用として軍事転用したのはトウリアビータが初めてで、武装搭載型が実戦投入されたのはつい先日の話である。だと言うのに、モンデンキントは早々に対策を講じてきた。いくらヴェルトールという戦闘用IDOLの雛形が存在しようとも、このわずかな間に装備を用意できるはずもない。つまり、

……上層部は最初からIDOLの軍事転用を考えていた？

もしくは、近い将来に武装したIDOL同士の戦闘を予期していたのか、どちらかだろう。

考えても答えは導き出せない。理解できるのは、その用意がこうしてヴェルトールの戦闘能力を確固たるものにしたこと。それだけだ。それだけで十分ではないか。

風が裂かれ、真夜中に溶ける黒い巨体がサイーデに迫る。

「武装を破壊して無力化すれば！」

『手を抜いて私に勝てる道理がない！』

ヴェルトールの接近に対し、サイーデも前進することで応えた。

銃撃の応酬を交わしながら、しかしこちらの光線は軽々と避けられ、弾速で勝るレールガンがヴェルトールの重力殻を削っていく。

それでも退かない。退くわけにはいかない。両者の動きは円を描くように一度回り、機動が描く円を銃撃が縦に割る。そして、激突した。

破砕音。鋼が折れ砕け、破片となって消えていき、両機は胸から抱き合うように機体をぶつけ合った。二機の腕は脇を抜けるように背後に流れ、頭部と頭部が見詰め合う至近距離となる。互角か。宙もリコリスも、彼我の戦闘力に舌打ち。

『機体の性能差がこれほどまでとは……！』

リコリスが言い、

「これだけ性能差があっても圧倒し切れない!？」

宙が言った。ヴェルトールとサイーデの性能差は明らかかな差がある。それでも戦闘が互角に止まっているのは、ひとえにアイドルマスターの力量故だ。

やはり強い。圧倒的な実力差を覆すには至らない。

至らないけれど。

だからこそ、超えなければ求めるものは手に入らない。

「だから……!」

宙は機体を動かした。背後に回った腕で、サイーデの首根にあるコックピットを引き剥がす。そうすれば。

『させない!』

しかしリコリスも行動した。腰部にマウントした“柄”を握り、引き抜いたのだ。

刃。黒く塗装された刃である。刀身はさほど長くない。人間サイズで言えば刃渡り十センチほどのファイティングナイフ。突き入れる角度は、下から上にかけてのほぼ九十度。胸部に押し込む形で振るわれるだろう。

切れ味はどれほどのものか。追加装甲により厚みを増した胸部を貫くほどの威力を有しているのか。ただの鋼では役不足だが。

ふと、アイスランドでの戦闘記録を思い出す。テンペスターの交戦した細身の人工IDOLは、慣性制御を利用した斬撃を仕掛けてきたという。楽観的解釈を破棄。わずかな可能性でも潰すしかない。

思考は刹那。サイーデの肩に手をかけて、それを突き飛ばすことで距離を得た。びゅん!と空気を裂く音。一息の間すら置かず、胸部表面を奔った亀裂が結果を証明した。

一命を取り留める代わりに生まれた大きな隙という結果を。

「今のはフェイクかっ」

後方に避けることで生じたわずかな距離。が、敵を狙い打つには

確実な間合いだ。突き出されるレールガンの銃口。いくら鉄壁を誇る二重防衛でも、

「この距離は、拙い……！」

『チエックメイトよ』

弾丸に込められた殺意は確実にヴェルトールを貫くだろう。

さすがだと思つ。

だが、とも思つ。

奥の手を用意していないほど、宙はリコリスを侮ってはいない。

そして弾丸が放たれる直前、ヴェルトールの姿が突如としてリコリスの視界から消えた。響く発射音は何も穿つことなく、閃光を宿して真夜中に溶けたのである。

『っ！ 消え……いや、上ー！』

上空、いつの間にかヴェルトールが頭上を取っている。

心中に生まれた疑問は、リコリスに予想外の焦りを与えた。何かトリックをして見せられたのは間違いない。おそらくこの焦りすら宙の術中だと理解しているものの、暴けなければ無意味も同然。何をした。あの少年は何をしたのだ。

そんなリコリスの疑問を嘲笑うかのように、宙は再びトリックを体現した。

ヴェルトールの、機体の超重量を押し出す脚部推進器。それが、

一度発火して閃いた。ぼおっ！ と闇に映える炎。

一拍置いて、その炎が一気に勢いを増す。二度目の発火である。

直後、炎を宿したヴェルトールは“消える”という表現すら生温い速度を發揮した。瞬間的に音速を突破する超加速。残像すら残しかねない異常な加速だ。

加速は、特徴的であった。何故ならば、その加速は妙に直線的だったのだ。まるで流れ星のように空間を一直線に流れ、そして速い優れた弾速を誇るレールガンでさえ当たることのない超高速機動。銃口を向けた時にはすでに別の方向に移動している。

『この動きは……』

アフターバーナーというものがある。

戦闘機などに装備されている装置で、点火しているエンジンの排気にもう一度燃料を吹きつけることで燃焼させ、膨大な燃料と引き換えに超加速を得るシステムである。空中戦において速度の差は生死に繋がる。速度差という致命的な弱点を補うために装備されるのがアフターバーナーだ。

宙が行っているのはそれとよく似た原理である。脚部推進器のエンジンに多大な負担をかけて、その代償に超加速を得るアフターバーナーを再現しているのだ。

本来アフターバーナーは高推力が必要な場合に限定的に使用するもの。それに倣い、通常時と使い分けることで、瞬時の超加速によって突然“消えたように見える”。過去の模擬戦闘において伊織を打ち破った超機動こそこれだった。

これで、速度において圧倒的な有利が約束された。脚部推進器にかける負担は通常時より大きい。短期決戦の心構え。この技術を持つてして勝負に出る。

……上回れるか!?

奥の手は出した。ジョーカーは切った。これで、果たしてどこまで差を縮めることができるか。

戦闘は、激化の一途を辿る。

「あなたの正体を聞き出すまでは負けられない!」

「それを知ってどうするっていうの? それで還ってくるものなんて何もないのに」

「取り戻せるものだってあるはずだ!」

「傷つくと分かっていても?」

「こんな気持ちを抱えて生きていくよりはいい!」

『……そう』

慣性制御ですら殺しきれない負担に歯を食い縛りながら、宙は操縦桿を引き、機体を反転させる。この速度ならリコリスの裏をかけるはず。死角から死角へと超高速で移動するヴェルトール。タイミ

ングを見計らい、加速が頂点へと達した瞬間。

ヴェルトールが雷光の如く駿足で、サイーデの間合いを詰めに飛んだ。サイーデが振り返るよりも早く突き出すこの銃口が、戦いを決着できるものだ。宙は予感し、確信していた。瞬間的な意識の交錯。そして、

「……………どういつつもりだ」

ヴェルトールは急制動をかけて停止する。ライフルはサイーデに突きつけられはしたが、引き金に指をやる宙は射撃の意を弱めていた。

原因はリコリスにある。

あるうことが、サイーデは、両手を広げて降伏の姿勢を取ったのだから。

訝しげに表情を険しくした宙は、静かに理由を告げる彼女の声を聞いた。

『そんなに知りたいのなら教えてあげる。私の正体』

笑っているのか。苦しんでいるのか。どちらとも取れない妙な色を含んだ言葉が飛んでくる。宙が知りたいと願ったこと。教える。リコリスは言う。

そこで終わらなかつた。リコリスは言葉を続けたのだ。

『私はクローンなのよ』

「……………クローン？」

思わず、眉を歪ませた宙は、今の言葉を反芻する。予想外の単語が上手く飲み込めなかつた。

リコリス。人間とコアのハイブリットであるミシユリンク、その失敗作。バスタルト。天川マツリと瓜二つの容姿を持つ女性。その正体がクローン？ 遺伝子的に同等の人間を複製するという、あの？

誰の？

ああ、聞くまでもない。

そうして宙は、一瞬、心臓が止まったかと思うほど辛く重い痛み

を味わった。瞳孔がだんだんと拡大してくのが、分かる。

トドメはひどく冷徹な温度を持って発せられた。

『リコリスという存在は、天川マツリのDNAマップを元に造られたクローン、ということになるわ。容姿が瓜二つなものもこれで納得いくでしょう?』

淡々と紡がれる声を聞くのは、何故か、心臓を抉られるような痛みを伴った。

『どう? これで満足かしら』

戦いの音が止んだ。攻撃の交差、回避の乱舞を繰り返していた戦いが、今は音すら邪魔者扱いだった。黒と灰。ヴェルトールとサイードは空中で静止して、それ以上動くことはない。牽制、ではなく、告げられた話を前に呆然としているのだ。

自分は天川マツリのクローンだと言う、リコリスの言葉に。

宙の頭はとかく真っ白だった。真っ白で、疑問とかそういうものを蓄えた頭の中が、ブラシでごしごし削られ綺麗に剥がされて、どこかへ投げ捨てられていくようで。ただ口の中がからからに乾いていることだけが、妙に意識させられた。おかしい感覚だ。喉が渴いている。そう、喉が……。

違う。意識するべきはそんなことではない。眼前に現れた現実を認めたくないから、駄々をこねているに過ぎない。

クローン。現実離れしている現実。いや、もっとはつきりと、絶望とさせる簡単な言葉があるだろうに。リコリスは天川マツリではない。ならば?

天川マツリの死は覆らない。

淡い希望ほど脆いものはない。

『そんな馬鹿なことがあってたまるか!』

ようやく吐き出した言葉は全身全霊の否定だ。クローンだなんて。

現実的ではない。暦が復興暦となつてから一世紀という月日が流れたが、いまだ、人間の複製技術が確立されたという話は聞いたことがない。倫理的にも認められないものだからだ。

『忘れたの？ トウリアビータの技術力は世間より遥かに高いものだったこと』

確かにそうだ。クローン技術くらいわけがないと言われれば、納得してしまうほどの技術力が彼らにはある。

けれども認めたくはない。

首を振って否定することで、心の支えを失うまいとする宙の眼前にリコリスの姿が映った。モニターだ。よく見ればサイーデの右腕から細いワイヤーが飛び出して、ヴェルトールの首根に巻きついているではないか。通信用のコネクター。機密性の高いIDOLにパス無しで通信を開くためにはこのような手段を取るしかない。

重要な話だから顔を見ながらにしようか、と言つて意味深に笑つて見せたりリコリス。目はバイザーによつて隠されているが、その奥にあるであろう、“姉と同じ顔”を見せられるのが今は辛かった。あれほどまでに会いたがつていたというのに。

リコリスは告げる。よく聞きなさい、と前置きし、

『教えてあげる、坊や。これから話すことは全て真実。その腐った頭に、真実という力の重みを教えてあげる』

まず何から話そうかしら、と。頬に人差し指を当てて笑うリコリスを、宙は黙つて口を噤むしかなかった。やがて、自分の知識を引き出すように俯いたりリコリスは口を開いた。宙の知らない真実を、教えてやるために。

『天川マツリはね、四年前、確かに死んだわ』

心臓が高鳴る。意識せず漏れた、嘘、という声にリコリスは首を振った。

『天川マツリは死んだ。本当はヌービウムを鹵獲した際、マスタ―として“再利用”しようとしたそうだけれど、コックピットにダメージがあつたらしく、ヌービウムは大気圏に落下して行った。そ

んなことになればどうなるか……言わなくても分かるわよね?」

焼け死ぬどころの話ではない。外側と内側から燃え尽くされ、後に残るのは良くて人の形を留めた“物”だ。生きていることは在り得ない。人の死に方ではない。ドロップという脅威から地球を守ってきた偉大な人物の、尊厳ある死に方では断じてない。摩擦熱の熱さに苦しみ、痛みから解放されることなく、死ぬ。

『嫌な死に方よね』

リコリスは、再び自分の顔をなぞりながら言った。なぞる。指先で爪を立てるような仕草に疑問を抱きつつ、宙は黙ってリコリスが言葉を紡ぐのを待った。否、声が出せなかったのだ。余裕を失っているのが嫌でも思い知らされる。

そんなことを考えていたら、リコリスは突然、爪を頬の肌突き立てた。肌は抉れて、小さな裂傷となり、刻まれる。何をして、という宙の言葉の前に、リコリスは次の説明を始めた。また顔をなぞりながら、行為が狂氣的に見えてくる中で、

『でもね、奇跡的に残っていた人の部分からDNAが採取できたの。トゥリアビータはそのDNAを利用することを決めた。それが、クローン技術』

当時、すでにクローン技術によるミシユリンクの大量生産計画を考案していたトゥリアビータは、実験という名目で優れたアイドルマスターである天川マツリを復活させようとした。もちろんただの蘇生ではない。ミシユリンク・プランによって得られた知識を活用して、ミシユリンクとして生まれ変わった天川マツリを造り出すとしたのだ。

だが、結果はリコリスが証明している。バスタルトたる彼女が。

『ミシユリンクは生まれなかった。生まれてきたのは、所詮不完全なハイブリット』

それこそが、

『この私。天川マツリの姿を真似たクローンよ』

言い、リコリスは目を隠すバイザーに手を当てた。忌々しそうに

縁をなぞり、表情を歪めながらそれを取り外すと、そこには天川マツリの顔があった。髪と目の色は違えど、その顔は間違いなくマツリと同じものだ。

四年前、星空の夜に言葉を交し合った最後の夜、宙の記憶に焼きついた姉。何一つ変わりのない顔がある。苦しい、と思う。左胸に手を当てた宙の域は荒い。心臓の鼓動は宙の思いの強さをそのまま表すように何度も跳ね上がった。信じ難い。モニターの奥で薄笑を浮かべている女性が、本当に姉ではなく、そのクローンだなんて。

驚きの表情が濃くなる宙に、リコリスは、しかし、

『坊やは今、どんな表情をしているのか、私には分からないわ』
だって、

『私にはね、視力がほとんどないの。このバイザーで補強しているけれど、素のままでは盲目と変わらない。私の見ている世界を、坊やは知らないでしょうね。見えないというのは、暗い、ではないの。何もかもが、それが何なのか理解できないほどぼやけて見えてとても、白いのよ。世界そのものが光っているように』

リコリスは触れる。自分の髪に、顔に、身体に。人差し指で顔をなぞり、そのまま下に引いていき、胸元を経て、腹部へ。語りが彼女の身体にほのかな熱を与え、ん、という熱い吐息を漏らして、最後は豊かな左の胸を驚？みにする。胸の奥、心臓を抉るようにして五指が胸に食い込むほど強く掴みあげる。

クローンであるため、リコリスの身体は遺伝子レベルで天川マツリのそれとほぼ同じものだ。それも不老の身体故に、四年前、死ぬ前の最後の姿のまま。髪の色と目の色だけ違ったが、所詮これらは不完全な創造の代償として、遺伝子の欠損のために起きた劣化現象に過ぎない。

身体は他人の真似、それも完璧には至れない劣ったコピー。反旗を翻すのを恐れ、天川マツリとしての記憶は与えず、基礎の知識だけを脳に組み込んだトウリアビータは、結局天川マツリになれなかったリコリスに失敗作の烙印を押した。

人にもIDOLにもなれない出来損ない、バスタルトとして。それが三年前の出来事だ。

この世に生れ落ちてても、幸福とは呼べない人生が待っているだけだった。

失敗作と扱われた最初の一年は、研究員達に蔑まれながらも、トウリアビータの戦力として戦うための知識と技術を覚えさせられるだけの日々。

人としては扱われなかった。“教育”を受ける傍ら、バスタルトとして、ミシユリンク完成のために様々な実験を強行されたのだ。

薬物投与を始めとして、どれだけ肉体が負荷に耐えられるのかを調べるために、地獄のような高重力下での実験すら行われ、血を流し、苦痛に叫んでも、誰も助けしてくれないのは当たり前だった。呻き、苦しむリコリスを見て、研究員達はただ無表情に実験の結果を記録していくだけ。それが、生まれてきたリコリスの常識だった。

彼女の人生に、人としての尊厳など含まれていない。実験動物。そういう扱われ方をしてきたのなら、彼女は自分を何だと思ったのだろうか。人間でもない。IDOLでもない。誰でもない。いてもいけない。

そう、確かにリコリスの存在はno body（存在しないもの）やan birth（生まれてはいけないもの）と言えるだろう。

『それでも、ヌービラムのマスターと認められてからは、そこそこマシになったわ。実験の回数は少なくなり、一般の構成員と同じ生活を送れるようになった。いつの間にか、私はリコリスと呼ばれるようになっていた』

実験動物であった彼女が、それでも人並みの何かが欲しくて自分でつけた名前が広がったのだった。リコリス。花の名前で、花言葉は“悲しい思い出”。案外気に入っているわ、発音が綺麗でしょう？ 彼女は笑う。

が、今でも苦しみは絶えない。定期的な実験は続けられているし、活性化剤を投与しなければ生きていくことすらできない。それに、

『私のこの身体は、天川マツリと同じように女性のもの。でもね、私はね？』

失敗作。

『……子供を産める機能がないの。子宮が駄目なんですって。どんなにがんばっても、私は子供を産むことができない。バスタルトとして生まれ、人並みの尊厳も自由もないのに、世界はまだ追い討ちをかける。女性として生きることすら叶わない……！』

だから、リコリスはバスタルトとして、本当の意味で戦うことしかできないのだ。人として生きること叶わず、それでも人として生きようと努力して。今では小さな幸せを得る程度にはその地位を高くしたものの、それもいつ壊されるか分からない。

トウリアビータのバスタルトであるということは、そういうことだ。

『だから私は、自分の存在理由に命以上の価値を感じるの。天川マツリのクローンではなく、バスタルトとしてでもなく。リコリスという、誰でもない“私”としての存在理由。でも存在理由を感じるためには、生きなくてはいけないわよね？ だから生きるの。私は私でいたいから。それでも坊やが、私を天川マツリであると言いつけるのならば……』

吐き出した苦しみに乗せて糾弾されるのは、こちらの是非を問うものだ。これだけ私の存在を曝け出しても、それでもまだ私を否定できるのか、と。天川マツリという、元になったとはいえ、他人の存在を私に押し付けることができるのか、と。

無論、できるはずもない。

相手の主張を木っ端微塵にするのは簡単だ。認めなければいい。相手の目の前で差し出されたレポートをびりびりに破いてやれば済む話。

宙にはそれができない。リコリスの語った一言一言にある重みが、良心に強く打ち付けられているから。

でも認めてしまったら、天川宙の気持ちはどこへいく。

どこへ消えていく。

結局、宙は何も取り戻すことはできない。今までのように、失った怒りを敵に叩きつけることしかできない。虚しいまでに。こんな酷過ぎる。行き場のない感情。だからと言って何も変わりはない。あるのは現実だ。失ったものは二度と返ってこないという。それでも言わずにはいられなかった。

未熟だからだろうか。わがままを言えば、誰かが叶えてくれると子供のような意識がまだ残っているのだろうか。違う。想いの源泉は、ただただひたすら、願い、だ。

その願いも今となつては。 。
知らず内に宙はライフルを下ろしていた。向けていたところで、指先が震えてとても引き金を引ける調子ではなかったが。機体が少しづつ後方へ流れていく。いつの間にか、通信用コネクターは回収され、リコリスの顔は消えていた。

そんな時、だ。

呆然とした心の際に付け込む声が響いたのは。

『坊や、私と一緒にトウリアビータにいらっしやい』

どんな思惑か知れない誘いに、宙は思わず息を呑んだ。

「トウリアビータは俺から姉さんを奪った張本人だぞ！」

『私は以前言ったはずよ、坊やはモンデンキントに騙されていると。最初から私達が戦う理由なんてどこにもなかったの。そう、“同じ側”として』

「同じ、側……？」

疑問。思考が限界稼動し続ける中で投げられた新たな爆発物は、頭部に熱を持たせるには十分過ぎる代物だ。もう何を考えることもできそうにない。

滲み出る汗を頬で感じた宙は、ふと、計器が妙な反応を示していることに意識を持っていかれた。ちらりと目線を向けた先で、空間の重力場がおかしな値になりつつある。新手のIDOLか。否、それはそんな生易しい代物では、なかった。

次の瞬間、月見島の方角で空間が割れるのを宙は視認した。

比喩ではない。まるでテレビに映し出されていた風景が、画面を殴られてひびが入ったかのように、割れている。その奥は依然として知れない空間が広がっているように見える。

そこから現れた白銀の人型には見覚えがある。

「アイオーンか!？」

アイスランドで死闘を繰り広げた謎の敵。あまりにも強力な力を有する存在。

「このタイミングで現れるなんて、間の悪い奴だ……!」

『いいえ、元よりアイオーンが現れるのは承知の上よ』

リコリスの言葉に、わずかに訝しげな表情を取った宙は、すぐにその真意に辿りつく。アイスランドの時もそう、アイオーンはIDOLに引き寄せられてきたのではという説が有力となっている。今回もそういうことなのだろう。

「まさか、今回ヌービウムを強襲したのは」

『そうよ。ヌービウムの奪還だけが目的ではない。ここにIDOLを集め、アイオーンを誘き寄せるため。坊や達には感謝しているわ。……ほら、またお仲間がやって来るようだしね』

「ん……この反応、インベルか」

リコリスに次ぐ形で宙も接近する反応に気がついた。インベル。遅れて宙を追ってきたのだろう。なるほど、確かにこれだけIDOLが集結すれば、猫の目の前に魚をぶら下げているも同然だ。

なら、トウリアビータはアイオーンを誘き出して何をするつもりなのか。

『アイオーンの捕獲』

端的に告げられた目的。物好きもいいところだなと苦笑いを浮かべたのもわずか、宙はサイーデが動き出すのを見た。アイオーンを追う構えだ。そもそもあの方向は、

「っ! アイオーンの標的はヌービウムか!」

『どうする? これ以上、私は戦うつつもりもないけれど。仲間を

見捨ててもう一ラウンドでも?」

先程から苦い表情が解けないな。宙は自嘲気味に呟き、操縦桿を握り直した。気持ちの整理はできていない。リコリスが姉のクローンであるという事実を受け止めるには、まだ時間がかかるだろう。

「……くそっ!」

仲間は見捨てられない。奪われたものは返らないが、与えてくれた人達を見殺しにはできない。宙の答えに、リコリスはくと笑いを漏らした。

『いいわね、ならついて来なさい!』

「言われなくても……!」

今は心の苦痛を忘れるんだ、天川宙。自分に言い聞かせ、宙はフットペダルを踏みしめた。ヴェルトールは宙の意思に従って機体を加速させる。

だが、この時宙は気づいていなかった。

ヴェルトールが、操作を入力する前に宙の意思を汲み取り、動き出していたことに。

それが何を意味しているのか、宙はまったく気づいていなかった。ヴェルトールだけが、事の真意を知っているということに。

何も気づかぬまま、宙はただがむしゃらに生き足掻こうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5741i/>

Xenoglossia 宙とはてしない物語

2010年10月14日17時42分発行